ヘルヴェチアヒュッテ
八十五周年
ー建設した人々の記録ー

2012 年 2 月

北大山岳館

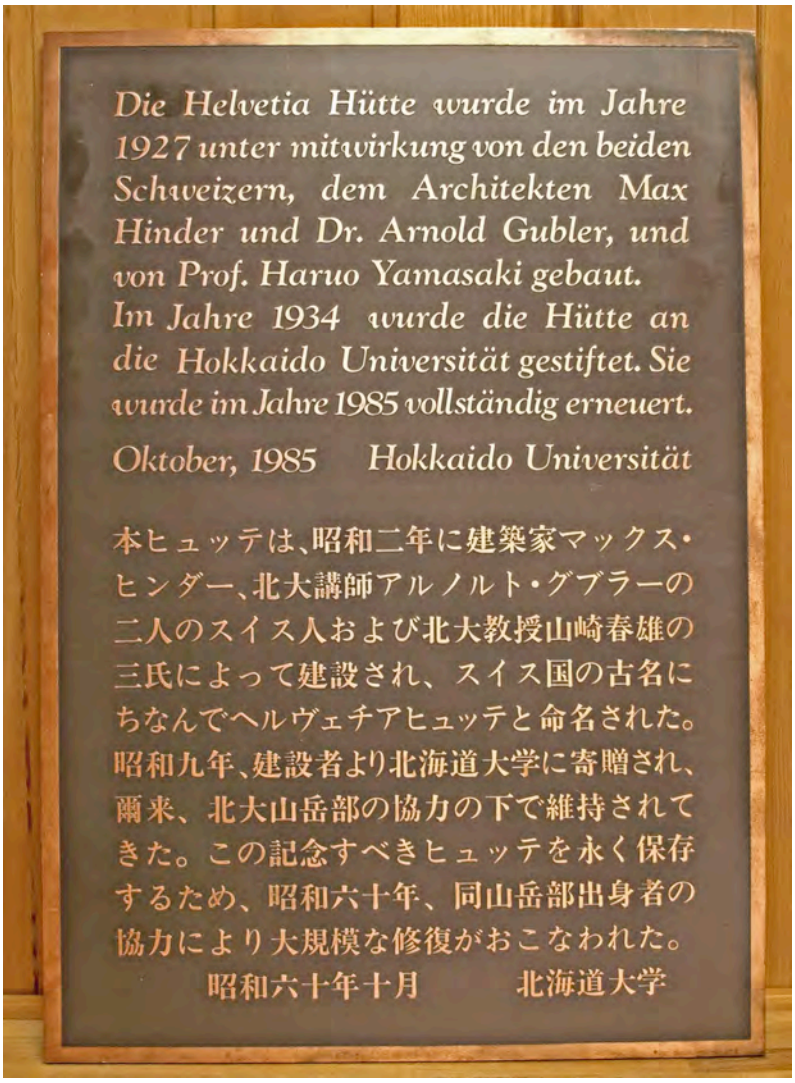
「ヘルヴェチアヒュッテと熊たち」清水啓三画　1928 年

山崎英雄氏蔵

ヒュッテは綺麗な白樺林に立っています。すぐ先には渓流が音を立てて流れていますが、いくらか高いところにあるので洪水氾濫の被害は受けません。子供の時に「ヘンゼルとグレーテル」を読むと何か魔女の小さな家のようなものを思い浮かべますが、ここでも森の熊たちや他の動物達が最も近い隣人です。最初の熱狂的な客の一人、東京の美術学校の学生で清水という名前の人でしたが、彼もそのようにヒュッテの風景を見たのでした。彼は陽光を浴びた冬の絵の中で、ヒュッテの周りの人々に加えて、穏やかに楽しげに踊っている熊たちを描き込みました。実際にはこの地域では、せいぜい一冬に一度くらいそういう動物の痕跡をそこらに見る程度です。しかし、彼は冬の間に魔法にかかった山小屋を取巻く雰囲気を“素晴らしい”と捉えたのでした。

（アーノルド・グブラー著　「Erlebnisse und Gedanken eines Japanfahrers　第 9 章ヘルヴェチアヒュッテ」吉田恵治訳）

ヘルヴェチアヒュッテの正面壁に掲示されている北大山岳部部員章とヒュッテ表札



ヘルヴェチアヒュッテ由来銘板

ヒンデル作　ヒュッテ棟木の彫刻

序

1927（昭和 2）年、建築家マックス・ヒンデル氏、北大予科独逸語講師アーノルド・グブラー先生、医学部教授山崎春雄先生の三氏[注1]によって建てられたヘルヴェチアヒュッテは、自然を愛する多くの人々に支えられて、2012（平成 24））年、建設から八十五年目を迎えた。この記念すべき年に、北大山岳部・山の会はスイスから賓客を迎える。それはアーノルド・グブラー先生の御子息ベルンハルト・グブラーさん御夫婦で、ベルンハルトさんは関西方面へのツアーの途次、4 月 27 日から 29 日、札幌に立ち寄り、父親の思い出の詰まったヒュッテを訪問される。北大山岳館はこの二つの慶事を記念し、同時に素晴らしいヒュッテを残してくれた三氏に感謝し、彼らのことを忘れずに後世に語り継いで行きたいとの思いからこの資料集を編纂した。

ヒュッテ建設の経緯や初期の折々の行事については山崎先生が「山とスキー」、「北大山の会会報」、「日本山岳会会報」に、また山崎英雄氏[注2]がヒュッテの歴史について「北大山の会会報」に書いておられるが、建設に関わった方々の多くはすでに鬼籍に入り、当時を語ることができる人は少なくなった。そのような折、山崎先生と松川五郎氏[注3]のご遺族から、多くの図書や文書類の寄贈を受けた。その中に建設当時のヒュッテに関する貴重な文書が含まれていた。それらはヒュッテを建てた人たちのこと、彼らの当時の考えなどを分りやすく楽しく教えてくれている。本資料集はこれらを元に編纂した。

内容は、グブラー先生の著作と山崎先生の随筆を中心とした。グブラー先生の著作は第二次大戦中に苦戦する日本を見かね、欧米人が日本人のことをもっと理解して欲しいとの思いから執筆し、スイスで出版したものである。山崎先生の随筆は、ヒュッテを訪れて宿帳に署名した人々の思い出を、軽快な筆致で綴ったものである。加えて建設から大改修に至る写真、三氏から松川五郎氏に宛てた多くの書簡の中からヒュッテに関するもの、ヒンデル氏直筆の設計図、北大総長から山崎先生に宛てたヒュッテ寄贈感謝状、入手した資料からまとめたヒュッテを建設した人々の記録、そしてヒュッテ関連資料リストからなる。

この資料集は多くの方々の資料やお力をお借りしたものであり、それらなくしては編纂できなかった。その方々には非礼ではあるけれど、本文を読み進める上での面倒を避けるために、初出の氏名以外は文中の敬称を略させていただいた。

[注1] マックス・ヒンデル、アーノルド・グブラー、山崎春雄：本文 7（1）～（3）参照

[注2] 山崎英雄：（1924-　）札幌生れ、春雄三男。北大医専卒業後、1952 年北大農生卒。北大山岳部時代はナメワッカ岳、イドンナップ岳など冬期初登を果たし、戦後の山岳部建て直しに務めた。日本山岳会マナスル登山隊第 1 次(1953)、第 2 次（1954）隊員、雪男調査隊(1960)隊員。札幌医科大学名誉教授。北大山の会会員、日本山岳会会員

[注3] 松川五郎（1897-1977）東京生れ、父親は松川敏胤陸軍大将で欧州留学から帰国の際（1895 年）スカンジナビア製スキーを持ち帰った人。1925 年北大農農卒、北大スキー部時代は主将を務め、板倉勝宣、加納一郎らとスキーによる道内山岳の数々の初登頂を記録、秩父宮がヘルヴェチアヒュッテご宿泊の際は先導のリーダーを務めた。卒業後、宮城県加美農蚕学校教員、同県南郷村国民学校校長を経て満州移住協会参事。1941 年八垂別に東亜育種会社を設立。戦後は天北庄内開拓農協参事としてサロベツ原野開拓を指導、1955 年より北海道開発局調査員、北海道開発コンサルタント顧問。北大山の会会員

目次

序
梓川渓谷の民家　マックス・ヒンデル画 1
---------- 3
写真
---------- 19

1．書簡
----
(1)　山崎春雄より松川五郎へ 43
(2)　アーノルド・グブラーより松川五郎へ 45
(3)　マックス・ヒンデルより松川五郎へ
2．ヒンデルのヒュッテ設計図 85
---------- 135
3．Erlebnisse und Gedanken eines Japanfahrers

アーノルド・グブラー　吉田恵治訳
4．山小屋の宿帳から　山崎春雄---------- 145
5．ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下 146
----
(1)　松川五郎宛山崎春雄メモーお迎えの準備について
(2)　ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下　山崎春雄　山岳 48
年 159
6．ヒュッテ寄贈感謝状　北大総長より山崎春雄宛

7．ヘルヴェチアヒュッテを建設した人々
----
(1)　アーノルド・グブラー
(2)　マックス・ヒンデル
(3)　山崎春雄
8．関連資料リスト

白樺の秋　-この林の中にヘルヴェチアの小屋はありき-　伊藤秀五郎
あとがき

白樺の秋
―この林の中にヘルヴェチアの小屋はありき―

伊藤秀五郎

一

白樺の林に入れば
秋の陽の斜めにさしぬ
斜めなる光に散りて
むらさきの影とはなりぬ

二

白樺の林に入れば
白樺のささやくきこゆ
ささやきは調となりて
白樺の心つたえぬ

三

白樺の林歩めば
落葉積み苔をつつめり
白樺の林の苔は
色あわく香もあわし

四

白樺の林を行けば
青き陽は木肌ぬらしぬ
青き陽にぬれし木肌は
大理石の柱に似たり

五

白樺の林のそとは
秋の日にまばゆく照れり
白樺の林のうちは
影深くあおく冷えたり

六

白樺の林のそとは
風騒ぎ山の峰鳴る
白樺の林のうちは
音絶えて小鳥も鳴かず

七

白樺の林歩めば
かさこそと落葉のきこゆ
かさこそと落葉のひびき
とつくにの調べに似たり

八

白樺の林を出でて
白樺の調想えり
白樺の林を去りて
白樺の姿想いぬ

山の会会報 28 号(1955 年 9 月)より転載

あとがき

山崎春雄先生並びに松川五郎氏の貴重な資料を永年にわたり大切に保存し、北大山岳館に寄贈していただいた御両家の御遺族に衷心より感謝申し上げます。資料は北大山岳館で大切に保存いたします。

マックス・ヒンデル氏についてご教示をいただき、また資料の掲載を御許可いただいた北大大学院工学研究院建築史意匠学研究室角幸博名誉教授、多くの情報と資料の提供、また編集を進めるにあたり、常に適切な指導をしていただいた山崎英雄氏、木下杢太郎作詞/山田耕作作曲の国民歌謡“むかしの仲間”の採譜をしていただいたピアニストの影山祐子様、出版にあたりご協力をいただいた小泉章夫会長をはじめ北大山の会理事会、印刷・製本の細かい注文に快く応じていただいた（株）ソウトクの桑原社長、以上の方々に厚く御礼申し上げます。

山岳館運営委員会では本資料集の編集から校正までを、さらには経費縮減のために山岳館のプリンターを用いて自らの手で印刷し、表紙印刷と製本のみを業者に発注しました。これに要した費用は、北大山の会主催の “ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年並びにベルンハルト・グブラー夫婦来札記念会”の会計から支出していただきました。資料集は 150 部を製作しましたが、上記記念会の募金に応じていただいた会員に贈呈いたしました。寄付にご協力いただいた会員に厚く御礼申し上げます。

本資料集に使用の写真は、一部提供いただいたものを除き、全て北大山岳館映像アーカイブスより転載しました。

運営委員会は、「山岳館建設の趣意」で東晃会員が述べているように、この施設が“自然を愛する者たちの活動と発想の拠点として、永く利用されること”を願って活動しています。山岳館への会員諸兄のさらなるご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成二十四年二月

北大山岳館運営委員会委員長　中村晴彦

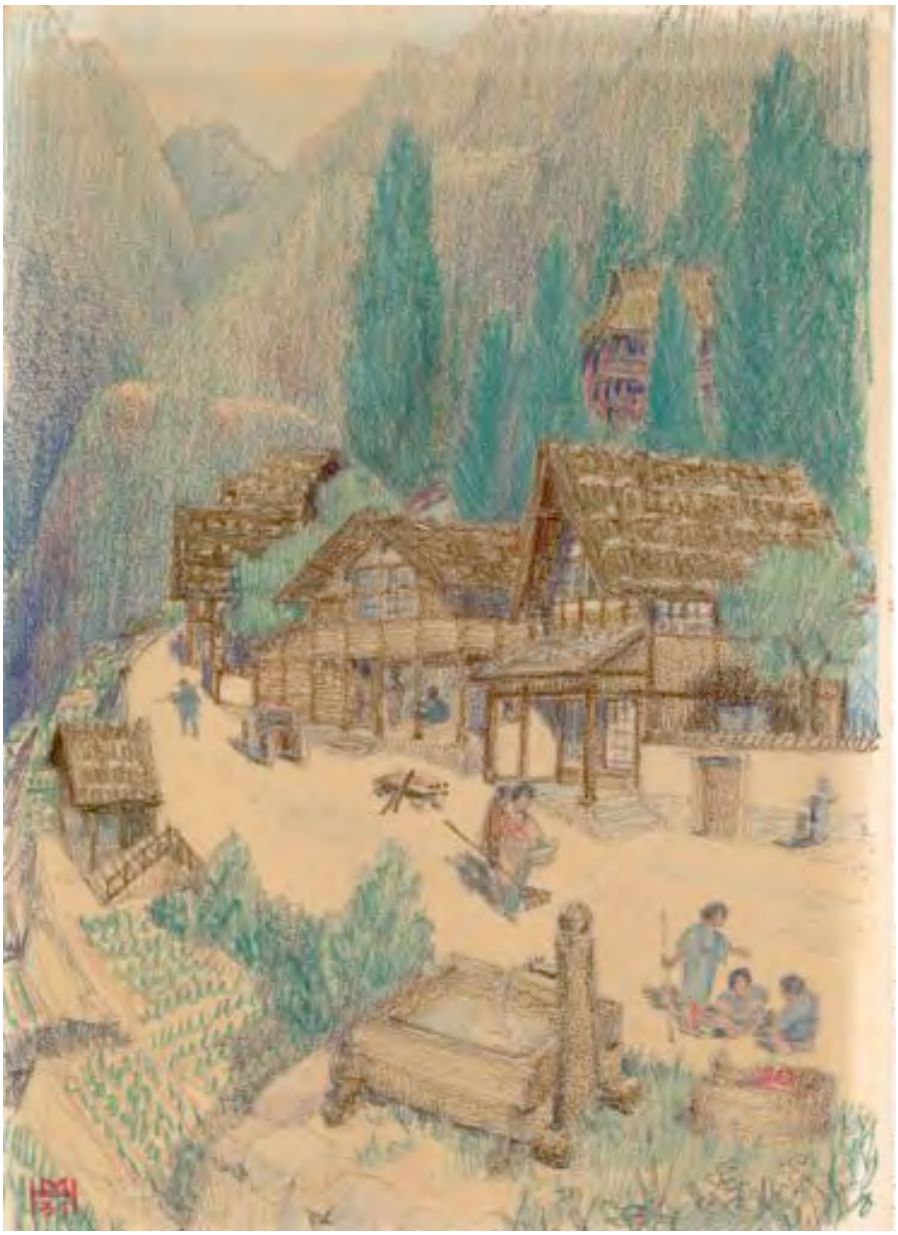
北大山岳館運営委員会委員

中村晴彦、鐙邦芳、安藤久男、石田隆雄

山田知充、松田彊、石島行三、小野寺弘道

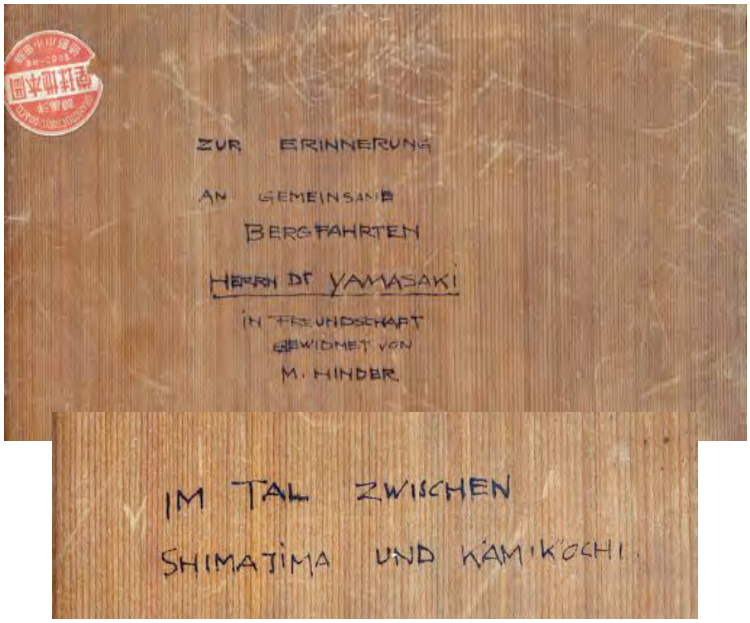
ヘルヴェチアヒュッテ　　八十五周年
—建設した人々の記録—
非売品

平成二十四年二月十五日発行
編集兼発行者　中村晴彦
表紙印刷・製本　（株）ソウトク
発行所　北大山岳館運営委員会
〒060-0018 札幌市北区北 18 条西 13 丁目北大サークル会館内



梓川渓谷の民家　マックス・ヒンデル画（1935 年頃）

額裏



友情のために
山崎先生へ
ともに歩いた山の日を懐かしみ
M.ヒンデル
島々と上高地の間にて

写真

(1)　ヒュッテ建設中の夜の団らん、焚火を囲んで左から、水本小判治、マックス・ヒンデル、オスカー・ワーゼル、山崎春雄

(2) 建設の手を休めて川辺に憩うヒンデルと手伝いの学生

（3）お手伝いのヒンデル夫人(右)と山崎夫人。後の壁に張り付いているのは両夫人が林内から集めてきた苔を丸太の隙間に詰めている部員の井田清

（4）銭函峠にて、ヒュッテ建設現場へ向う（帰る?）山崎夫人(左)とヒンデル夫婦

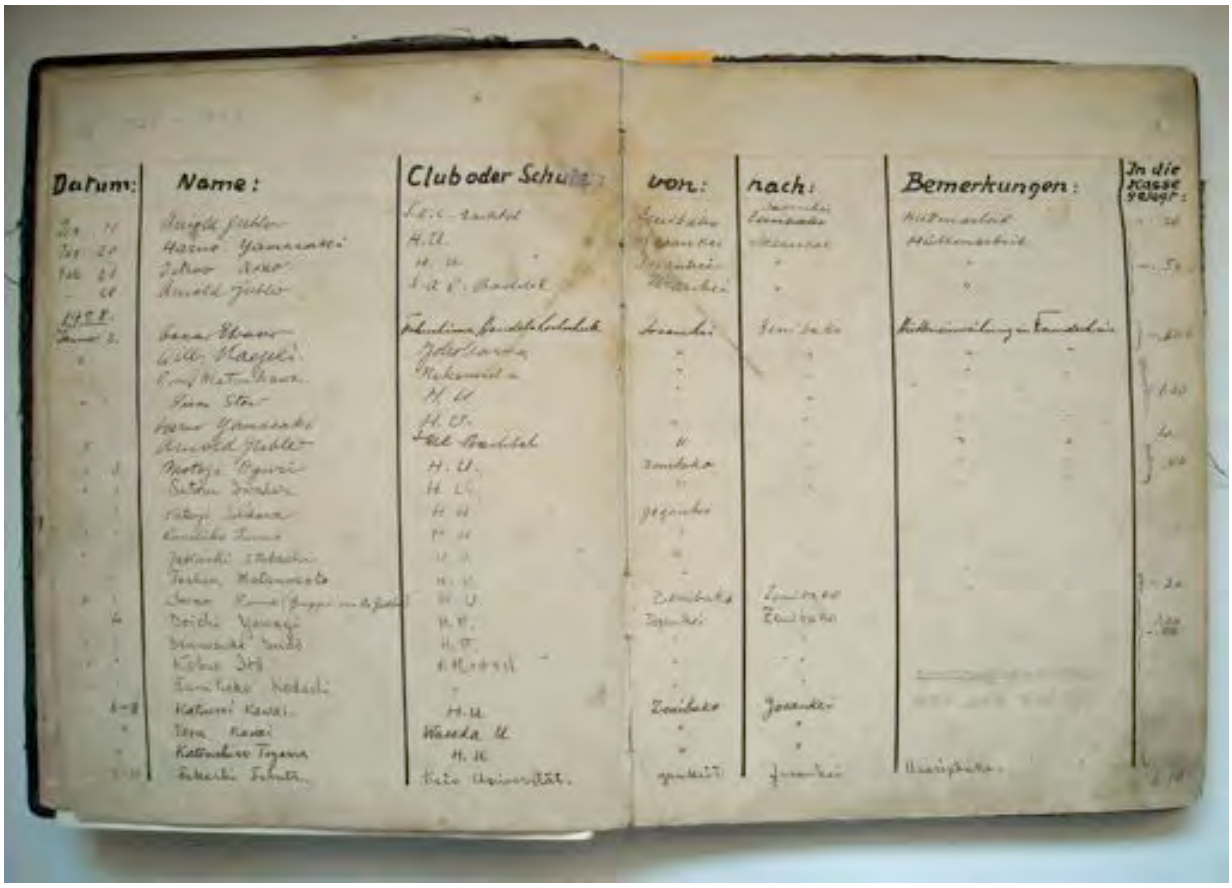
（5）背面より見た完成直後のヒュッテ　　秋の陽光を浴びた白樺林が美しい

（6）完成直後のヒュッテ　　薪を割るのは部員の井田清

（7）正面棟木にヒンデルが彫刻した魔除けの人面彫刻
面貌に特に意味はないとのこと　1927 はヒュッテ建設年

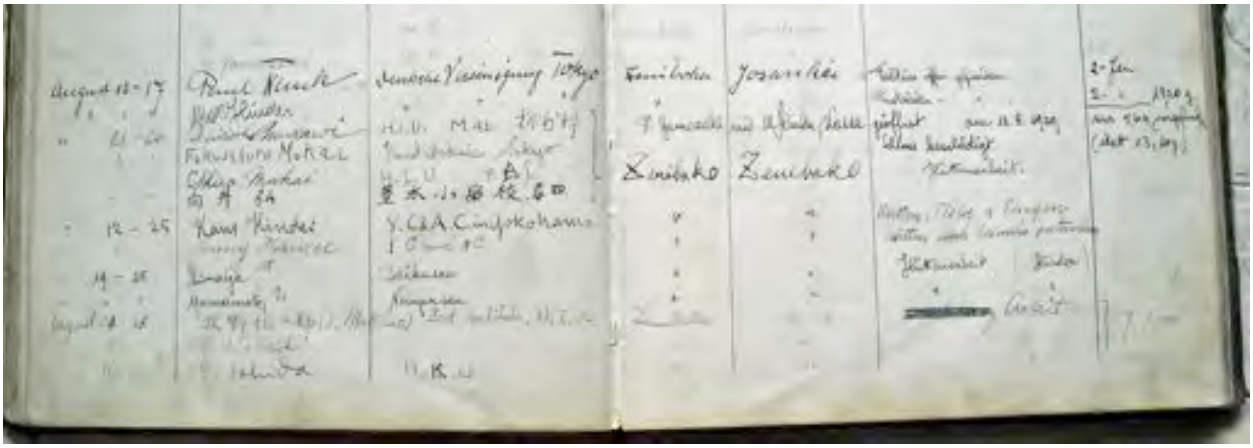
（8）建設の翌年（1928 年）、ヒュッテの外壁に断熱の為に柾が葺かれた。グブラーと山岳部員達（左より荘保忠三郎、徳永芳雄、今村正男、グブラー、坂本正幸）

（9）ヒュッテンブーフ（宿帳）第 1 号（1927/12-1931/6）の表紙と扉。写真はアルプの山小屋か。

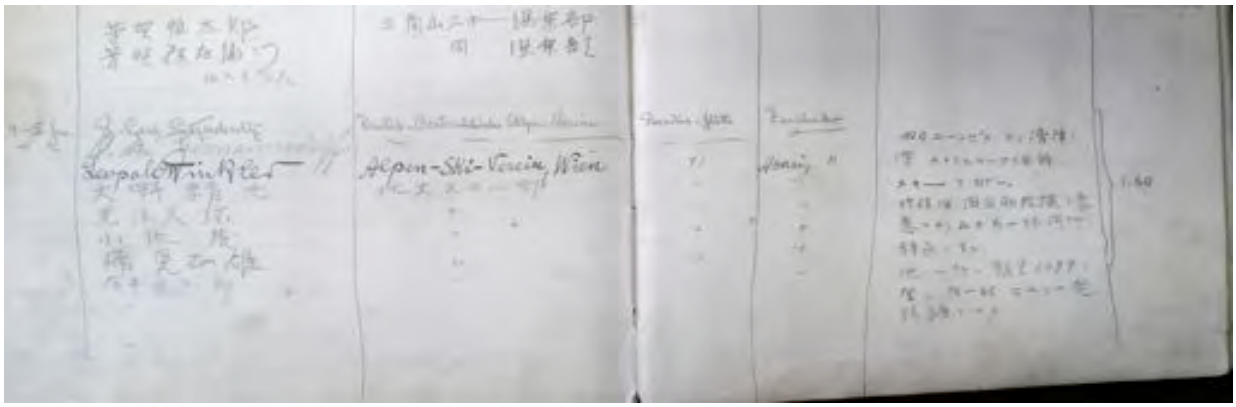


（10）ヒュッテンブーフ 1 頁、最上段に「12 月 11 日/アーノルド・グブラー/SAC バハテル/銭函より定山渓へ/ヒュッテンアルバイト」の署名。その下方、1 月 2 日の署名は小屋開きに集まった人たち

（11）ヒュッテンブーフ 1928 年 2 月 25 日～26 日、秩父宮一行宿泊。上段に秩父宮の署名 “Yasuhito”、下方に随行した松川五郎、伊藤秀五郎、木原均、大野精七ら北大関係者の署名



（12）同上 1929 年 8 月 12 日～17 日、ドイツ・シーメンス社のパウル技師とヒンデル夫婦の署名



（13）同上 1931 年 1 月 4 日～5 日、シュトラハウィッツ伯爵らドイツ人 3 名、案内大野精七らの署名

（14）1928 年 1 月 2 日のヘルヴェチアヒュッテ、この写真は小屋開きの日に撮影されたもので、小屋幹事日誌（1934-1959）に添付されていた「最初の冬」と題された三枚組の写真である。撮影者：

オスカー・ワーゼル（福島高商ドイツ語教師）

（15）指導標　1932,33 年頃。誰の作だろうか、斬新なデザインが印象的

（16）深雪の銭函峠を越えてもうすぐヒュッテ、温かいストーブが待っている。

（17）第 10 回ヘルヴェチャ祭り（1937 年 10 月 2 日～3 日）、ヒュッテは昭和 9 年に建設者より北大に寄贈された。

（18）同上、祭りに出席した予科生たち、左から岡彦一、岩間喜吉、有馬洋、戸倉源次郎。有馬、戸倉は 1940 年 1 月 15 日コイカクシュサツナイ澤にて雪崩により遭難死した。

（19）25 周年記念ヘルヴェチア祭り（1951/10/6-7）、上部中央に山崎先生の顔が見える。

（20）同上、山崎春雄

（21）銭函峠下の小樽内川大合流でヒンデルと山崎一行。1939 年ドイツ帰国を前に山崎の家族、友人らとヒュッテを訪問した。右から山崎春雄、ヒンデル、芳賀恒太郎(円山芳賀スキー)、山崎英雄、中野征紀、山崎武夫、前列の女性は山崎夫人、

（22）　同上、マックス・ヒンデル。仕事の本拠を札幌から横浜へ移してから 10 年振りのヒュッ

テ訪問。“北大山岳部の恩人の面影”と山崎は「山小屋の宿帳より」で述べている(4 章参照)。

（23）付属植物園でグブラーを囲む予科生たち、。1926 年ごろと思われる。後の建物は博物館

（24）1932 年離日前のグブラー夫婦(山崎英雄提供)

（25）昭和 7 年)の北大予科及び医学部校舎付近の鳥瞰図。外国人講師住宅が 4 軒並んでおり、一番右がグブラー宅だった。

（26）1966 年 4 月 6 日、離日してから 34 年ぶりにご夫婦で山崎宅を弔問した。在札時代の親友は 5 年前に亡くなっていた。グブラー夫婦の寂しそうな顔が印象的。（山縣浩撮影）

（27）最晩年(1982 年)のグブラー(ベルンハルト・グブラーさん提供)

（28）グブラーがスイス東部バレンシー湖畔に建てたセカンド・ヘルヴェチア・ヒュッテ(ベルンハルト・グブラーさん提供)

（29）改修工事前のヒュッテ。建設から 60 年、ヒュッテは改修の時期を迎えた。

（30）1985 年、改修工事中のヒュッテ

（31）1985 年、OB らの寄金で改修なったヒュッテ。屋根はアスファルトシングル、水切り銅板葺き、外壁はグラスウールに耐熱ベニア張り、その上に手割り柾張りとし、断熱効果を高めた。改修に当たっては、ヒュッテ当初のイメージを忠実に伝えることに努めた。

（32）第 84 回ヘルヴェチア祭（2011 年 10 月）　（高篠和憲撮影）

1. 書簡

松川五郎の遺品にアーノルド・グブラー、マックス・ヒンデル、山崎春雄からの多くの書簡が含まれていた。松川は北大スキー部に在籍した大正時代に、札幌周辺のスキーツアーコースを開拓し、その素晴らしさをヒンデル、グブラー、山崎らに紹介した。グブラーらはヒュッテを建設しようと決めた時、札幌周辺の山々をよく知る松川にヒュッテの場所についてアドバイスを求めた。ここに掲載したのは、彼らが宮城県加美農蚕学校に赴任中であった松川に宛てた中のヒュッテ建設に関するものである。山崎の昭和初期の仮名遣いではあるが読みやすい文章、グブラーの流れるように美しい筆跡、ヒンデルのひょうきんな絵葉書の合わせて 8 通を紹介する。

(1) 山崎春雄より松川五郎へ

①1927（昭和 2）年 3 月 8 日付

ヒンダーさんとグブラーさんが金を出し合ってヒュッテを建てようと相談しています。

②1927（昭和 2）年 3 月 24 日付

ヒンダーさんとグブラーさんが金主で小屋が出来上がるまではだれにも相談しないで、出来上がったものを大学へ寄付しようというのです。

③1927（昭和 2）年 4 月 6 日付

ヒュッテに関するご意見ありがとう。ヒンデル、グブラー両君の意見と大兄のご意見とは全く愉快に一致します。

④1928（昭和 3）年夏

空沼岳の小屋はいよいよ宮家から決定のご通知が来ました。大学でヒンデル氏に相談して建築するようにという有難いご達しです。

⑤1928（昭和 3）年 11 月 26 日付

ヒュッテの件は着々進行しています。急転直下降とはいきませんがボーゲンぐらいで進んでいます。

(2) アーノルド・グブラーより松川五郎へ

①1927（昭和 2）年 6 月 24 日付

今私はずっとヒュッテ建設のことを考え続けています。山崎先生は一生懸命協力してくださっています。

②1928（昭和 3）年 4 月 13 日付

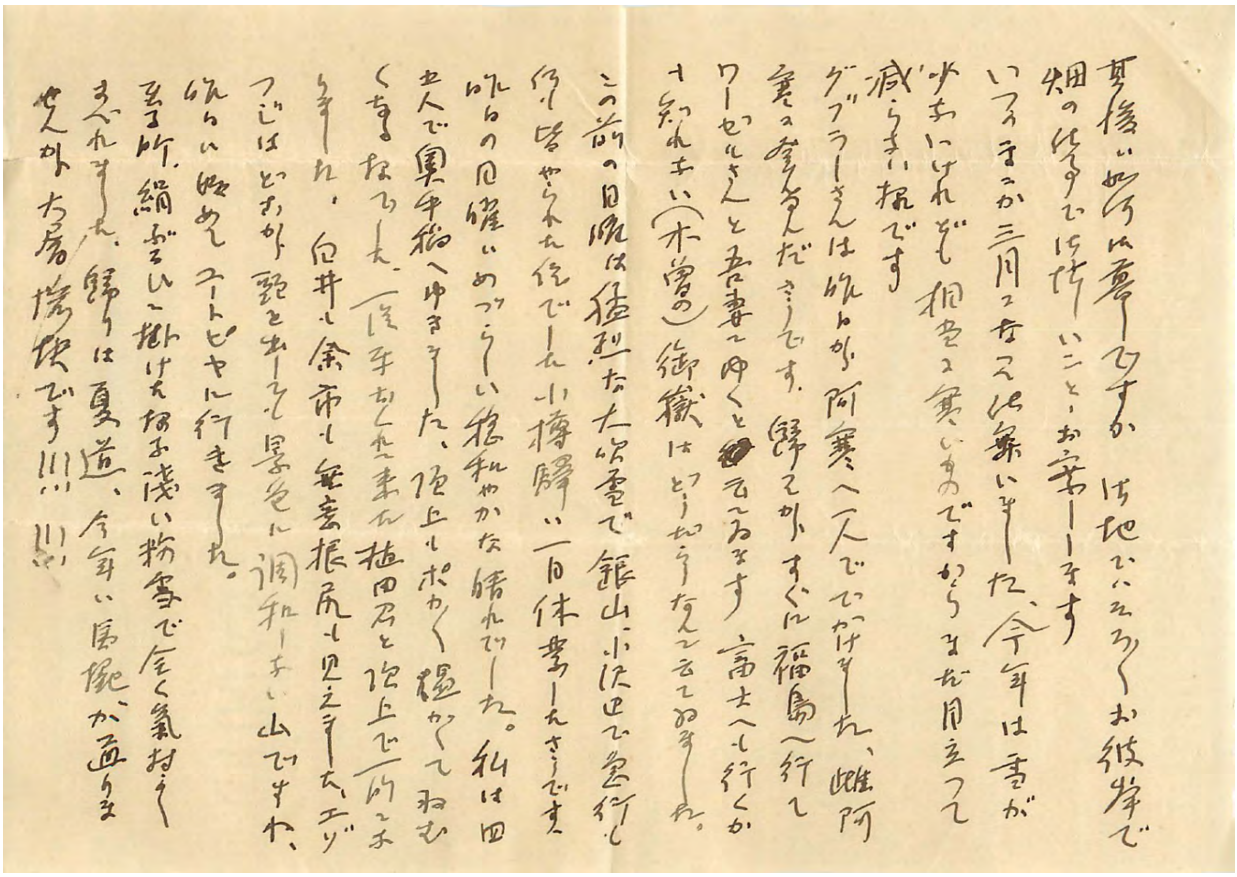
明日は山崎先生、大野先生、私、それに学生数名で秩父宮様の新しいヒュッテの場所を探しに空沼方面に出かけます。

(3) マックス・ヒンデルより松川五郎へ

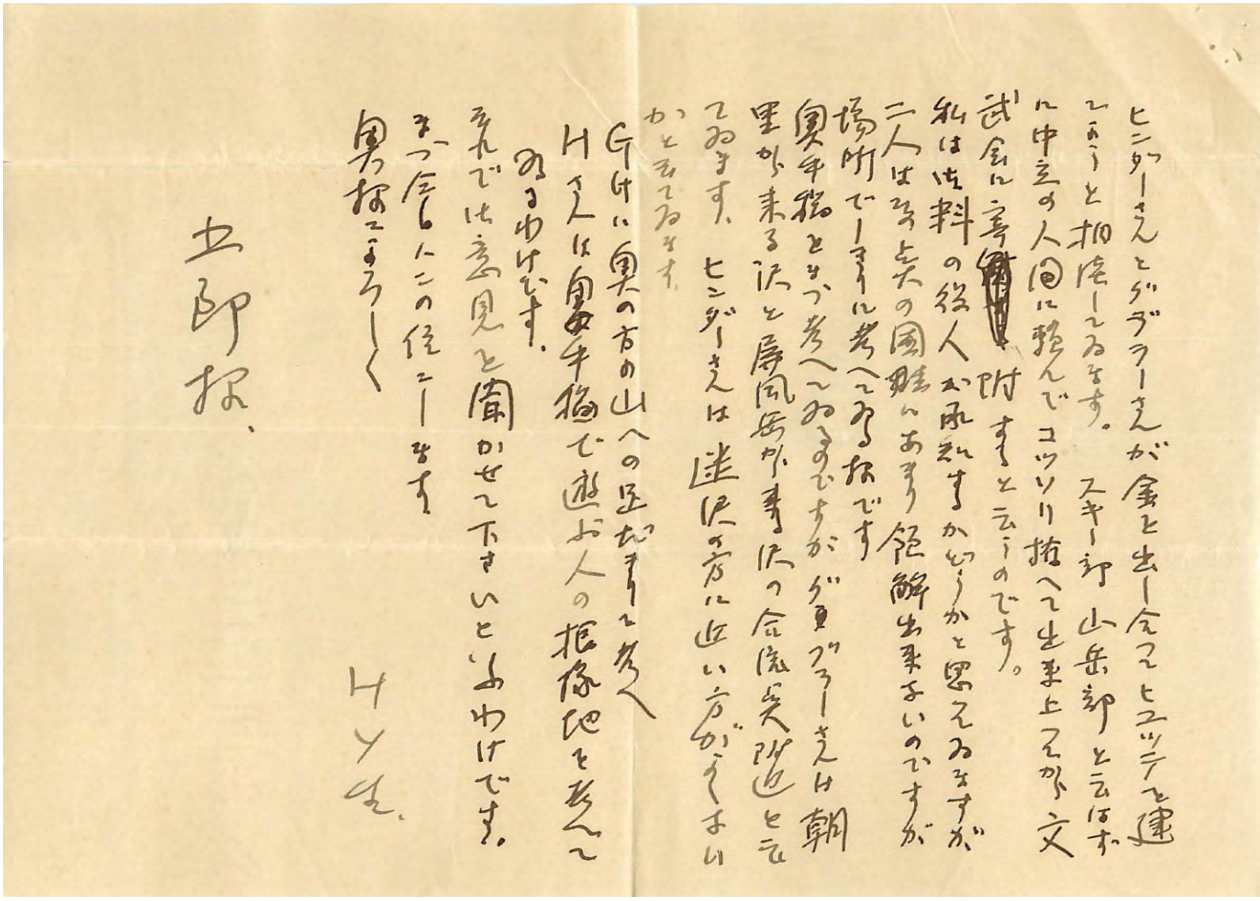
①1927（昭和 2）年、スキーの未来図（日本語）

(1)山崎春雄より松川五郎へ

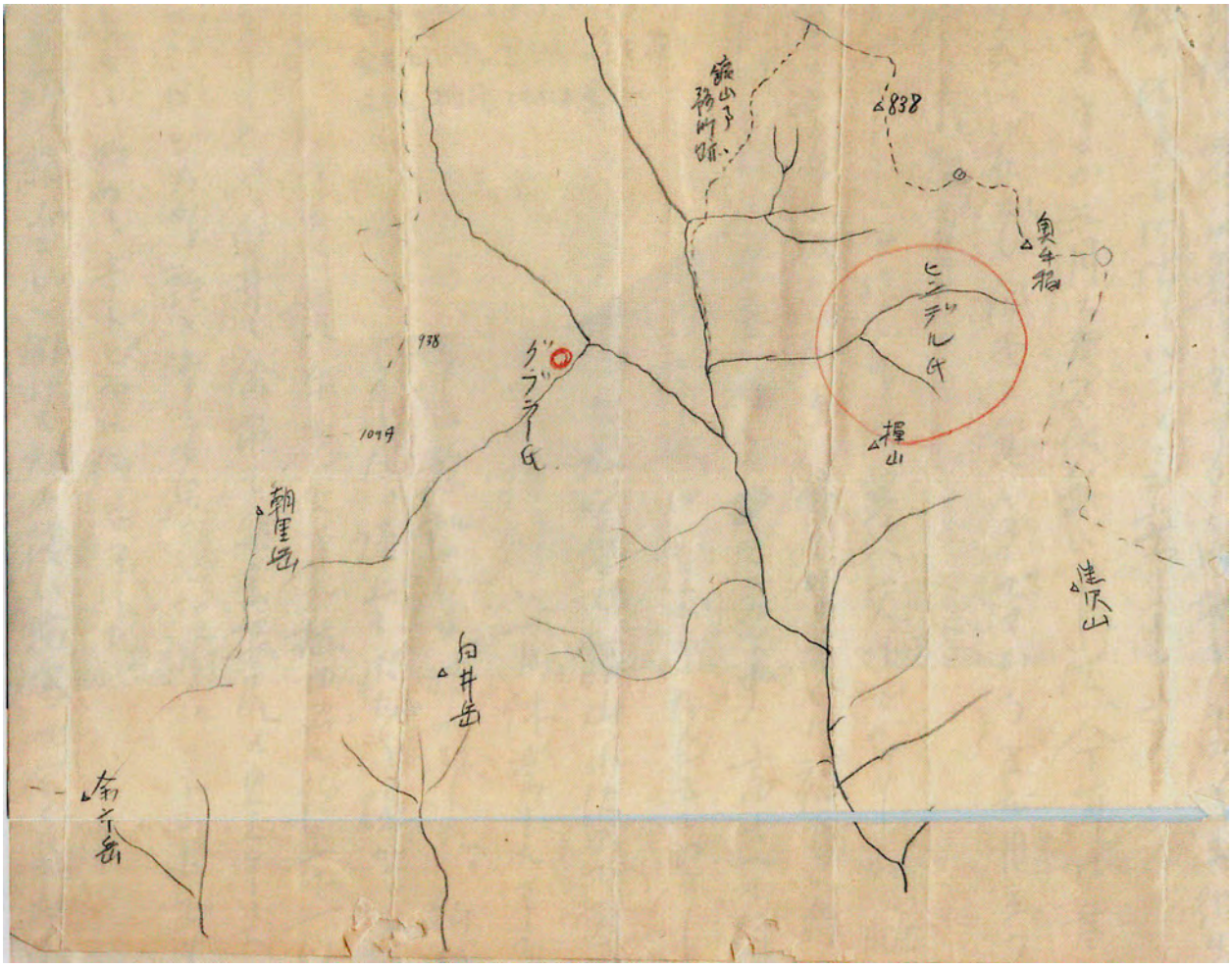
①1927（昭和 2）年 3 月 8 日付



其後、如何お暮らしですか。御地ではそろそろお彼岸で畑の仕事でお忙しいこととお察しします。
いつのまにか三月になってしまいました。今年は雪が少ないけれども相当に寒いものですからまだ目だって減らない様です。
グブラーさんは昨日から阿寒へ一人ででかけました、雌阿寒に登るんだそうです、帰ってからすぐに福島へ行ってワーゼルさんと吾妻へゆくと言っています。富士へも行くかもしれない（木曽）御岳はどうだろうなんて言っていました。
この前の日曜日は猛烈な大吹雪で銀山、小澤辺で急行も何も皆やられた位でした。小樽駅は 1 日休業したそうです。昨日の日曜日はめずらしい穏和やかな晴でした。私は四五人で奥手稲へゆきました。頂上もポカポカ温かくて眠くなるようでした。一汽車おくれてきた植田君と頂上で一緒になりました。白井も余市も無意根尻も見えました。エゾフジはどこから頭を出しても景色と調和しない山ですね。昨日は初めてユートピアへ行きました。
至る所絹ぶるいを掛けた様な浅い粉雪で全く気持ちよくすべれました。帰りは夏道、馬橇が通りませんから大層愉快です。

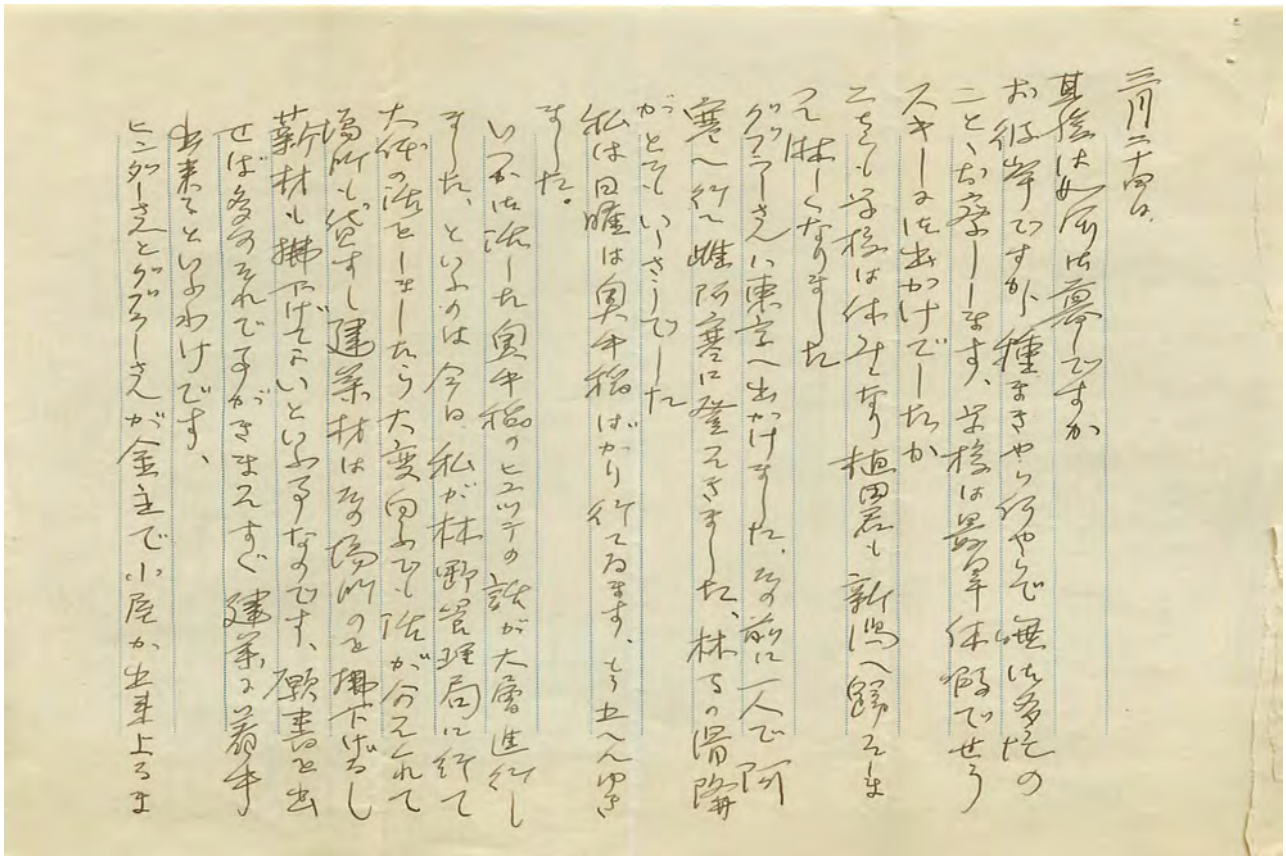


ヒンダーさんとグブラーさんが金を出し合ってヒュッテを建てようと相談しています。スキー部山岳部と言わずに中立の人間に頼んでコッソリ拵えて出来上がってから文武会に寄附するというのです。
私は御料の役人が承知するかどうかと思っていますが、二人はその点の困難はあまり理解出来ないのですが、場所でしきりに考えているようです。
奥手稲をまづ考えているのですが、グブラーさんは朝里から来る沢と屏風岳から来る沢の合流点付近と言っています。ヒンデルさんは迷沢の方に近い方が良くないかと言っています。
Ｇ氏は奥の方の山への足だまりを考え、Ｈさんは奥手稲で遊ぶ人の根拠地を考えているわけです。
それで御意見を聞かせて下さいというわけです。
まず今日はこれくらいにします。
奥様によろしく　　ＨＹ生
五郎さま



(注：候補地の手描き地図)

②1927（昭和 2）年 3 月 24 日付



三月二十四日

其後は如何御暮らしですか。

お彼岸ですから種まきやら何やらでさぞ御多忙のこととお察しします。学校はもはや休暇でしょう、スキーにお出かけでしたか。

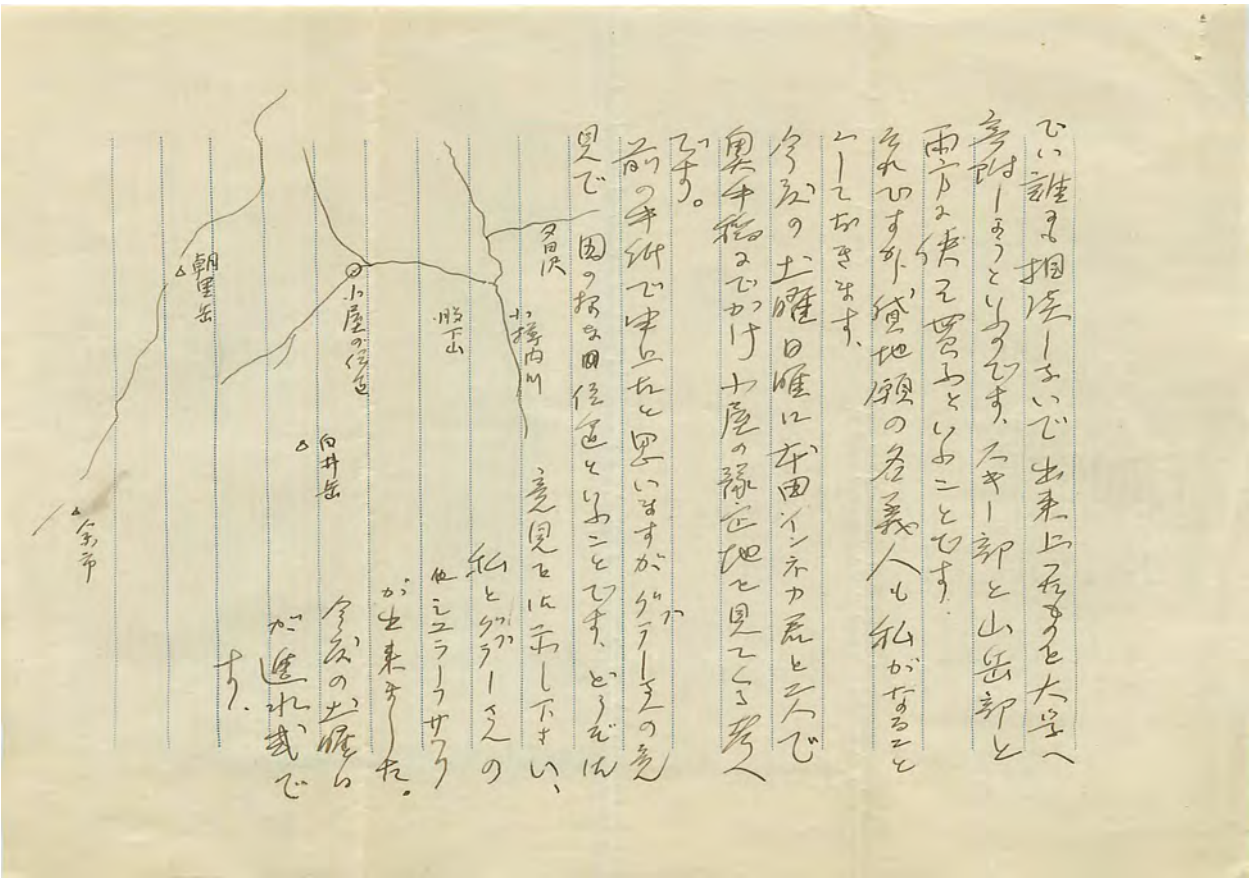
こちらも学校は休みとなり、植田君も新潟へ帰ってしまって淋しくなりました。

グブラーさんは東京へ出かけました。その前に一人で阿寒湖へ行って雌阿寒岳に登ってきました。林間の滑降がとてもいいそうでした。

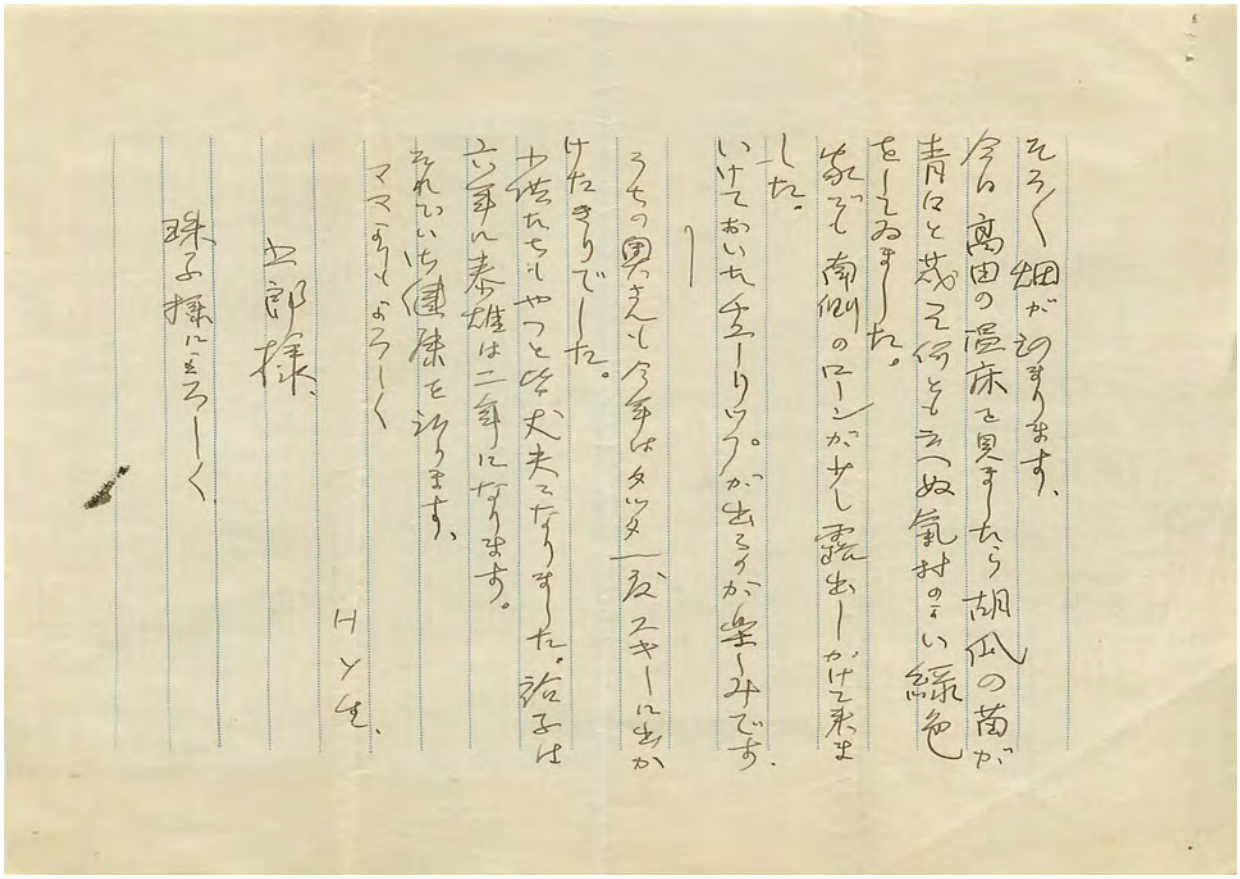
私は日曜日は奥手稲ばかり行っています。もう五へんゆきました。

いつか話した奥手稲のヒュッテの話が大層進行しました。というのは今日私が林野管理局に行って大体の話をしましたら大変向こうでも話が分かってくれて場所も貸すし、建築材はその場所のを払い下げるし、薪材も払下げてもよいという事なのです。願書を出せば多分それで事が決まってすぐ建築に着手出来るというわけです。

ヒンダーさんとグブラーさんが金主で小屋が出来上がるまでは



誰にも相談しないで、出来上がったものを大学へ寄付しようというのです。スキー部と山岳部と両方で使って貰うという事です。
それですから貸地願いの名義人も私がなることにしておきます。
今度の日曜に本田インネカ君と二人で奥手稲にでかけ小屋の予定地を見てくる考えです。
前の手紙で申し上げたと思いますが、グブラーさんの意見で図のような位置という事です。どうぞご意見をお示しください。
私とグブラーさんのシュラーフザックが出来ました。今度の土曜日が進水式です。



そろそろ畑が始まります。
今日高田の温床を見ましたら胡瓜の苗が
青々と茂って何とも言へぬ気持のよい緑色
をしてゐました。
家でも南側のローンが少し露出しかけて来ま
した。
いけておいたチューリップが出るのが楽しみです。

—

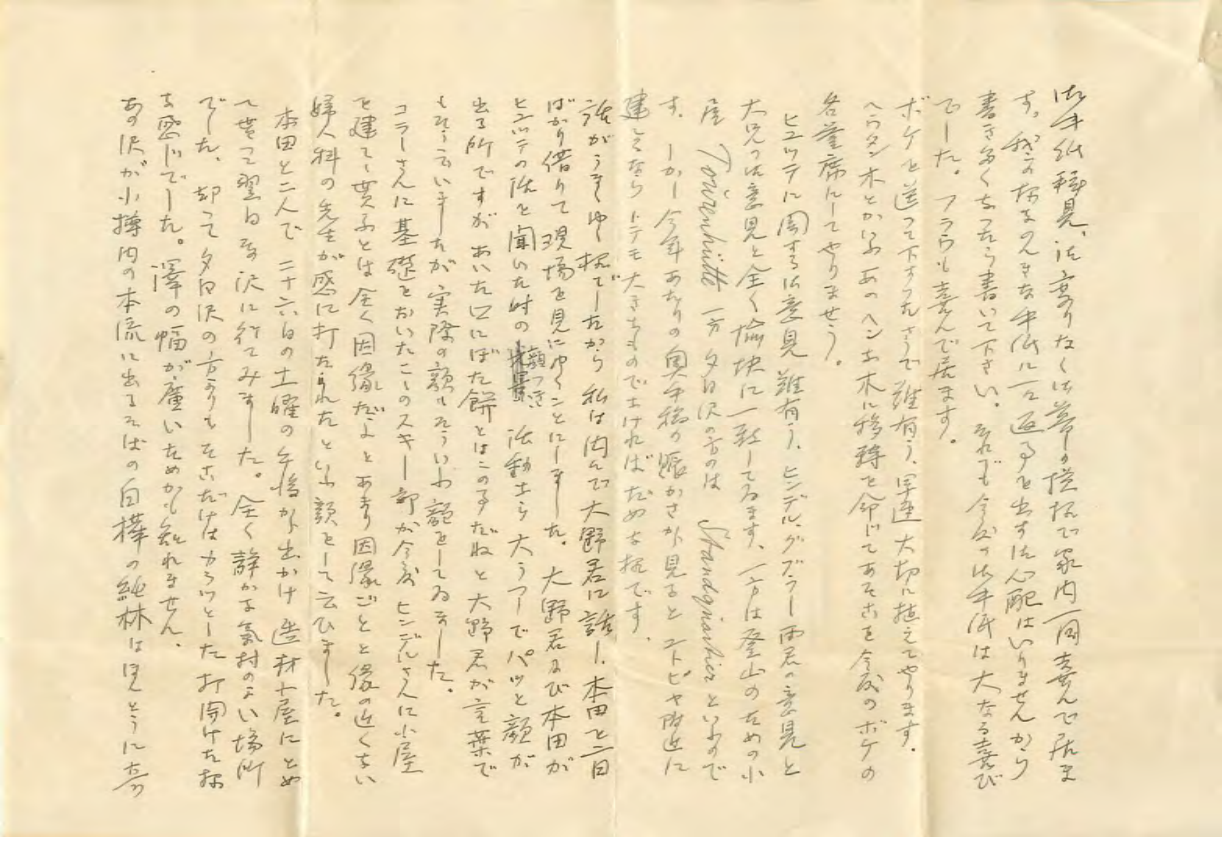
うちの奥さんも今年はタッタ一度スキーに出か
けたきりでした。
子供たちもやっと皆丈夫になりました。裕子は六年に泰雄は二年になります。
それでは御健康を祈ります。
HY生
五郎様
珠子様によろしく。

そろそろ畑が始まります。
今日高田の温床を見ましたら胡瓜の苗が青々と茂って何とも言えぬ気持のよい緑色をしていました。
家でも南側のローンが少し露出しかけて来ました。
いけておいたチューリップが出るのが楽しみです。

—

うちの奥さんも今年はタッタ一度スキーに出かけたきりでした。
子供たちもやっと皆丈夫になりました。裕子は六年に泰雄は二年になります。
それでは御健康を祈ります。
HY生
五郎様
珠子様によろしく。

③1927（昭和 2）年 4 月 6 日付



お手紙拝見、お変わりなくお暮しの模様で家内一同喜んでいます。我このようなのんきな手紙に一々返事を出す御心配はいりませんから書きやすくなったら書いてください。それでも今度のお手紙は大なる喜びでした。（中略）

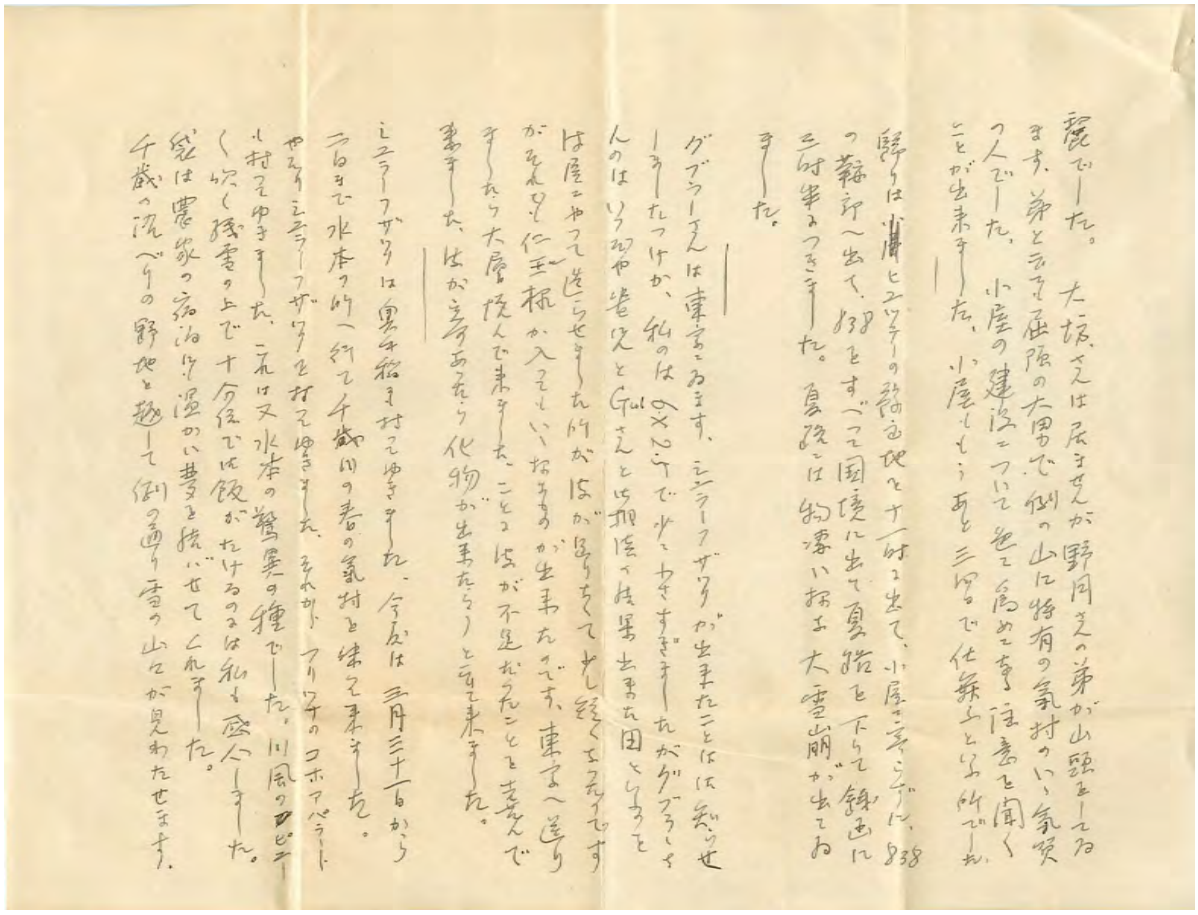
ヒュッテに関する御意見ありがとう。ヒンデル、グブラー両君の意見と大兄の御意見と全く愉快に一致しています。一方は登山のための小屋 Tourenhuette、一方夕日沢の方のは Standquartier というのです。しかし今年あたりの奥手稲の賑やかさから見るとユートピア付近に建てるならトテモ大きなものでなければだめの様です。

話がうまくいく様でしたから私は内々で大野君に話し、本田を二日ばかり借りて現場を見に行くことにしました。大野君と本田がヒュッテの話を聞いた時の顔つき、活動なら大うつしでパッと顔が出るところですが、あいた口のぼた餅とはこの事だねと大野君が言葉でもそういいましたが、実際の顔もそうゆう顔をしていました。

コラーさんに基礎をおいたこのスキー部が今度ヒンデルさんに小屋を建てて貰うとは全く因縁だねとあまり因縁ごとと縁の近くない産婦人科の先生が感に打たれたという顔をして言いました。

本田と二人で二十六日の土曜日の午後から出かけ、造材小屋にとめて貰って翌日その沢に行ってみました。全く静かな気持ちの場所でした。却って夕日の沢の方よりもそこだけはカラッとした打ち開けたような感じでした。沢の幅が広いためかもしれません。

あの沢が小樽内の本流に出るそばの白樺の純林はほんとうに綺麗でした。



大坊さんは居ませんが野月さんの弟が山頭をしています。弟と云っても屈強の大男で例の山に特有の気持ちの良い気質の人でした。小屋の建設について色々為になる注意を聞くことが出来ました。小屋ももうあと三四日で仕舞うと云う所でした。

帰りはヒュッテの予定地を十一時に出て、小屋に寄らずに 838 の鞍部へ出て、838 を滑って国境に出て、夏路を下りて銭函に三時半につきました。夏路は物凄い様な雪崩が出ていました。

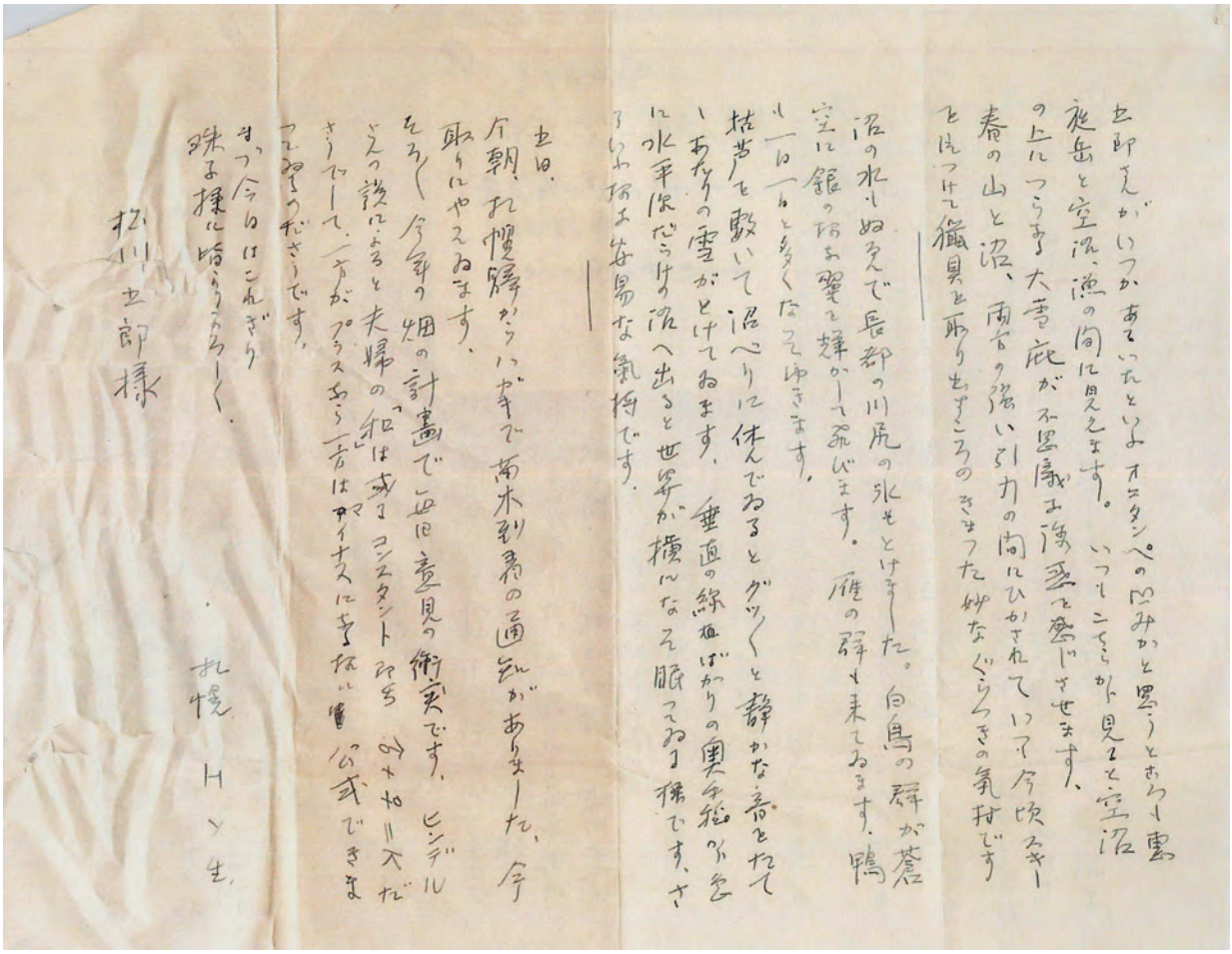
—

グブラーさんは東京にいます。シュラーフザックが出来たことは知らせましたっけが、私のは 6 x 2.5 で少々小さすぎましたが、グブラーさんのはいつぞや貴兄とグブラーさんとご相談の結果出来たというのを皮屋にやって造らせましたところが、皮が足りなくて少し短くなったのですが、それでも仁王様が入ってもいい様なものが出来たのです。東京へ送りましたら大層悦んできました。ことに皮が不足だったことを喜んできました。皮が充分あったら化物が出来たろうと言ってきました。

—

シュラーフザックは奥手稲に持ってゆきました。三月三十一日から二日まで水本の所へ行って千歳川の春の気配を味わって来ました。やはりシュラーフザックを持ってゆきました。それからフリッツのコホアパラートも持っていきました。これはまた水本の驚異の種でした。川風のピューピュー吹く残雪の上で十分位で御飯がたけるのは私も感心しました。袋は農家の宿泊にも温かい夢を結ばせてくれました。

千歳の沼べりの野地を越して例の通り山々が見わたせます。



五郎さんがいつか歩いたというオコタンペの凹みかと思うところも恵庭岳と空沼、漁の間に見えます。
いつもこちらから見ると空沼の上につらなる大雪庇が不思議な誘惑を感じさせます。
春の山と沼、両方の強い引力の間にひかされて、いつも今頃スキーを片つけて漁具を取り出すころのきまった妙なぐらつきの気持ちです。

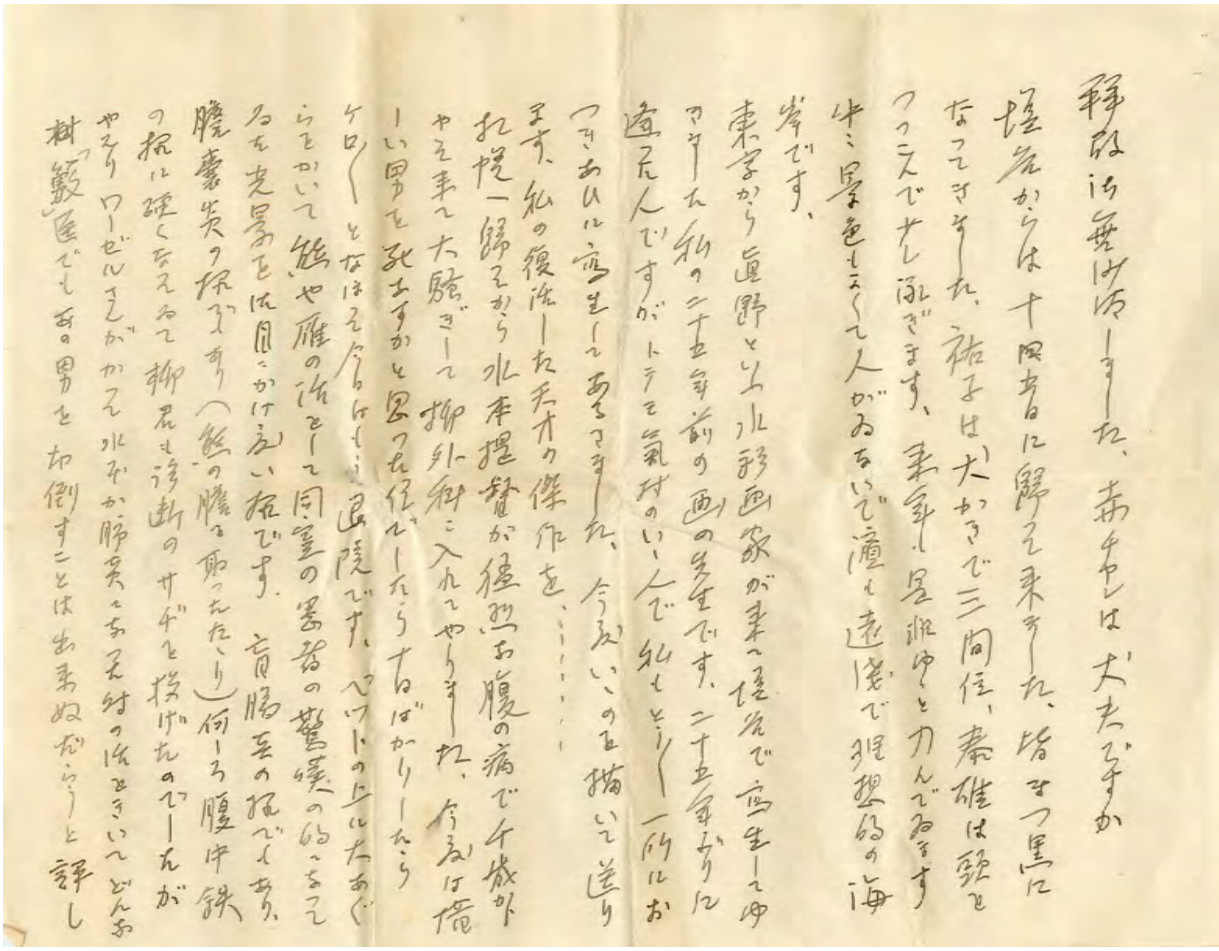
—

沼の水もぬるんで長都の川尻の氷もとけました。白鳥の群が蒼空に銀の様な翼を輝かして飛びます。雁の群も来ています。鴨も一日一日と多くなってゆきます。
枯芦を敷いて沼べりに休んでいると、グッグッと静かな音を立ててあたりの雪がとけています。垂直の線ばかりの奥手稲から急に水平線だらけの沼へ出ると世界が横になって眠っている様です。そうゆう様な安易な気持ちです。

—

今朝、札幌駅からハガキで苗木到着の通知がありました。今取りにやっています。
そろそろ今年の畑の計画で毎日意見の衝突です。ヒンデルさんの説によると夫婦の「和」は或るコンスタント即ち♂+♀＝K だそうでして、一方がプラスなら一方はマイナスになるように公式で決まっているのだそうです。
まず今日はこれぎり
珠子様に皆からよろしく　　札幌 H・Y 生
　松川五郎様

④1928（昭和 3）年夏付(月日不明)

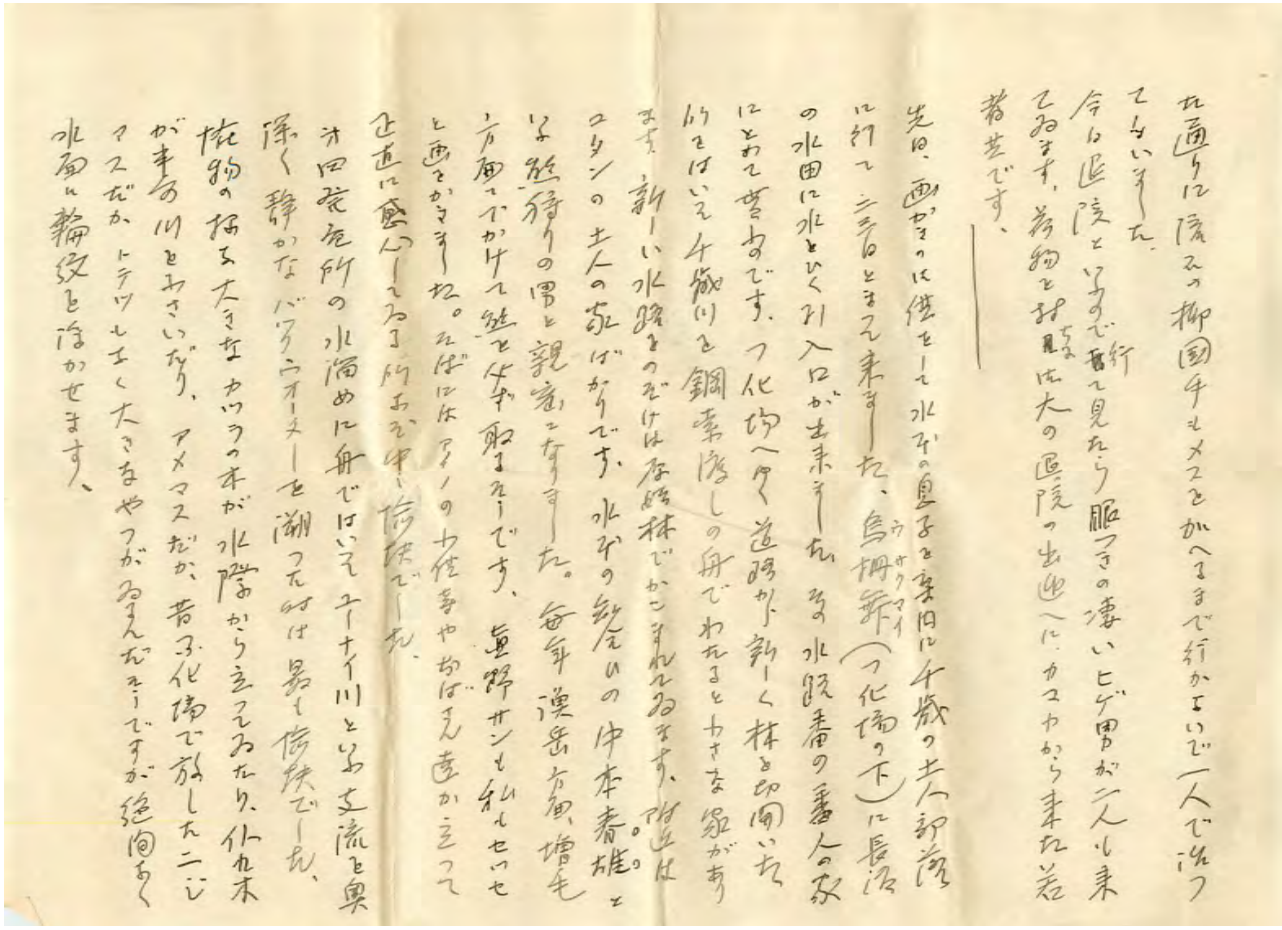


拝復ご無沙汰しました。赤チャンは丈夫ですか。

塩谷から十五日に帰って来ました。皆まっ黒になってきました。裕子は犬かきで三間位、泰雄は頭をつっこんで少し泳ぎます。来年もぜひ行くと力んでいます。なかなか景色もよくて人がいないで浜も遠浅で理想的な海岸です。

東京から真野という水彩画家が来て塩谷で写生してゆきました。私の二十五年前の画の先生です。二十五年ぶりに逢った人ですが、トテモ気持ちのいい人で私もとうとう一所におつきあいに写生をしてあるきました。今度いいのを描いて送ります。私の復活した天才の傑作を----

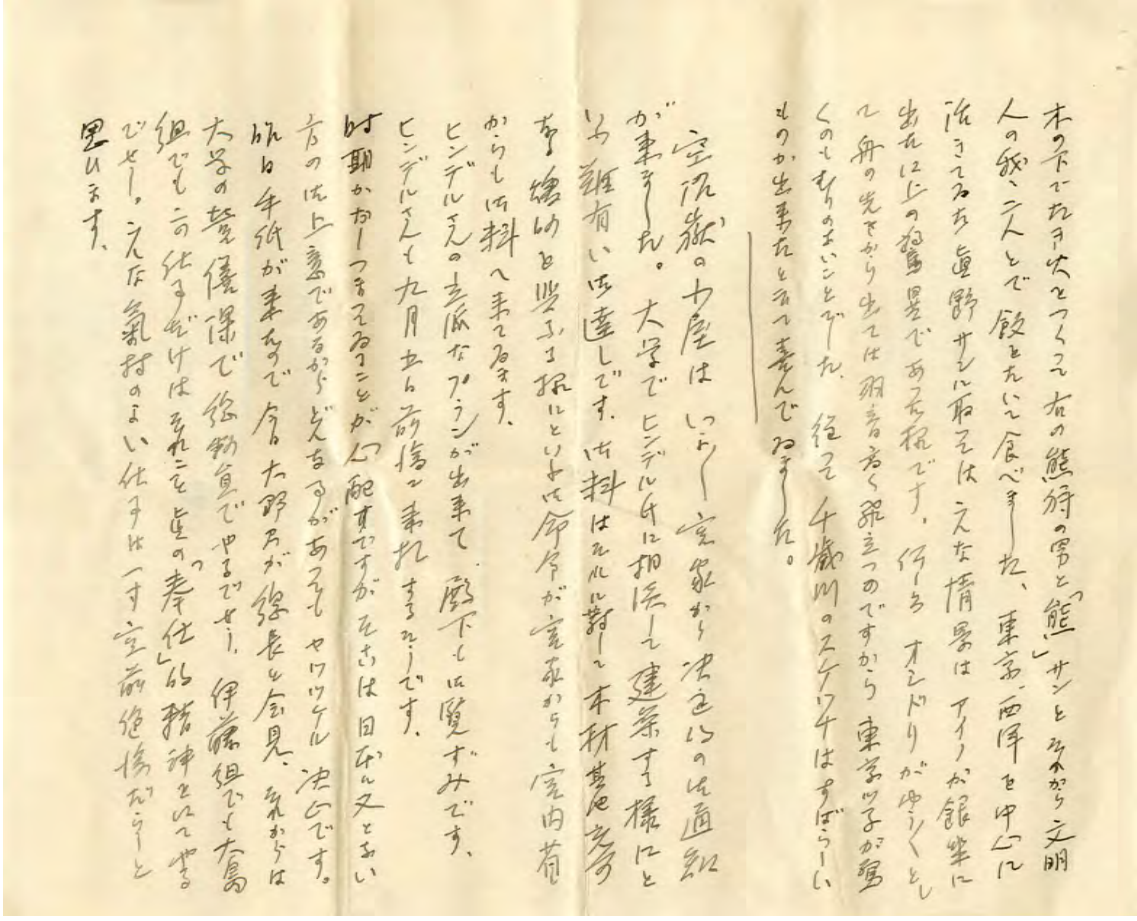
札幌へ帰ってから水本提督が猛烈な腹の病で千歳からやって来て大騒ぎして柳外科に入れてやりました。今度は惜しい男を死なすかと思った位でしたら十日ばかりしたらケロケロと治って今日はもう退院です。ベッドの上に大あぐらを描いて熊や雁の話をして同室の患者の驚嘆の的になっていた光景をお目にかけたい様です。盲腸炎の様でもあり、胆嚢炎の様でもあり（(熊の胆をとったたたり）何しろ腹中鉄の様に固くなっていて、柳君も診断のサジを投げたのでしたが、やはりワーゼルさんがかつて水本が肺炎になった時の話をきいて、どんな「藪」医者でもあの男を切り倒すことは出来ぬだろうと評した通りに



流石の柳国手もメスを加えるまで行かないで、一人で治ってしまいました。
今日退院というので行ってみたら眼つきの凄いひげ男が二人も来ています。荷物を持ちに御大の退院の出迎えにカマカから来た若者共です。

—

先日、画かきの供をして水本の息子を案内に千歳の土人部落に行って二三日とまって来ました。烏柵舞（ウサクマイ、孵化場の下）に長沼の水田に水を引く入口が出来ました。その水路番の番人の家に泊めてもらうのです。ふ化場へ行く道路から新しく林を切り開いたところを入って千歳川を鋼索渡しの船で渡ると小さな家があります。新しい水路を除けば原始林で囲まれています。付近はコタンの土人の家ばかりです。水本の知り合いの中本春雄という熊狩りの男と親密になりました。毎年漁岳方面、増毛方面にでかけて熊を必ず取るそうです。真野さんも私もセッセと画を描きました。そばにはアイノの子供達やおばさん達が立って正直に感心しているところなぞなかなか愉快でした。
第四発電所の水溜めに船で入ってユーナイ川という支流を奥深く静かなバックウォーターを遡った時は最も愉快でした。化物の様な大きなカツラの木が水際から立っていたり、倒木が本河川をふさいだり、アメマスだか、昔ふ化場で話したニジマスだか、とてつもなく大きなやつがいるんだそうですが絶え間なく水面に輪紋を浮かせます。



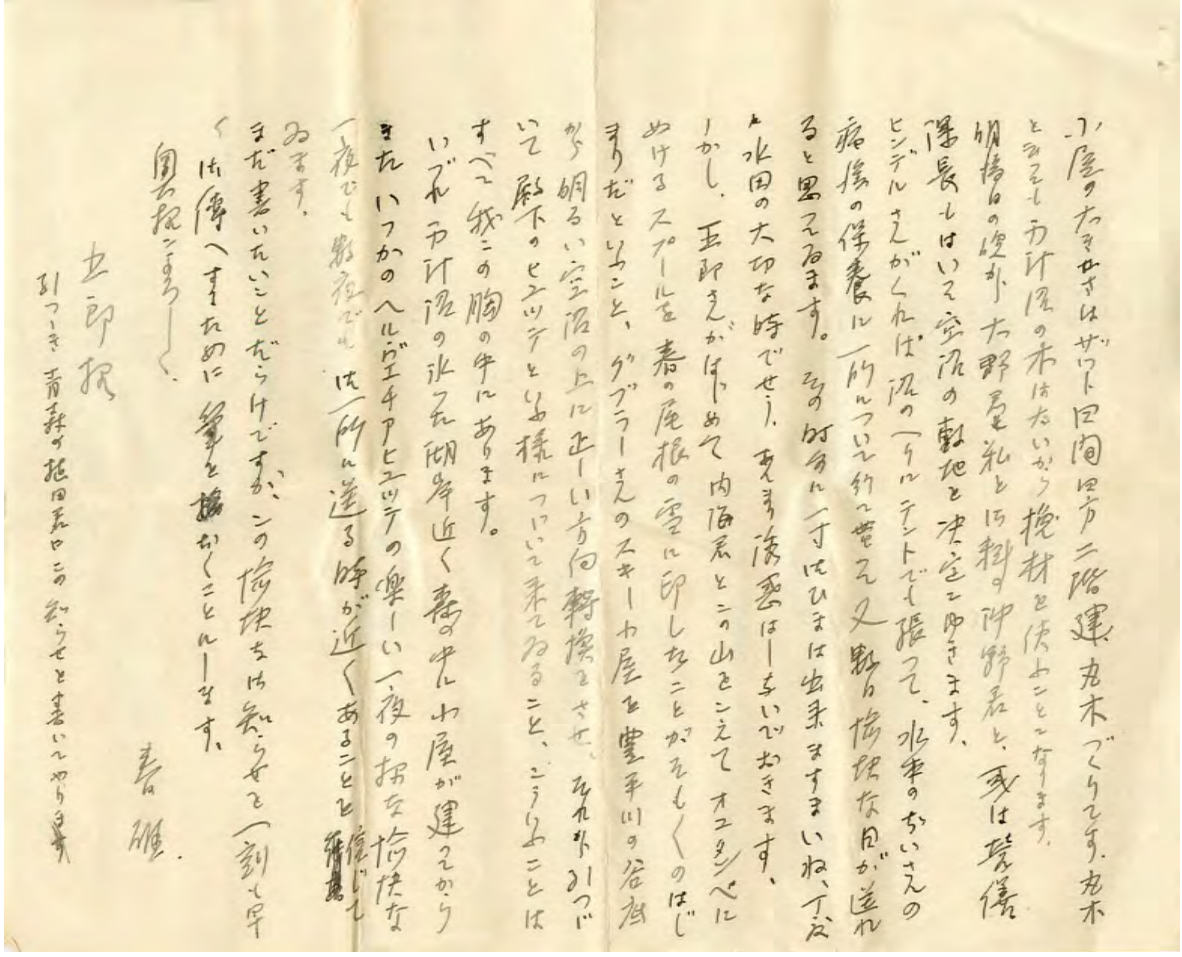
木の下でたき火をつくって右の熊狩りの男と「熊」サンとそれから文明人の我々二人とで飯を炊いて食べました。東京、西洋を中心に生きてきた真野さんに取ってはこんな情景はアイノが銀座に出た以上の驚異であった様です。なにしろオシドリがゆうゆうとして船の先々から出ては羽音高く飛び立つのですから東京っ子が驚くのも無理のないことでした。したがって千歳川のスケッチは素晴らしいものが出来たと喜んでいました。

—

空沼岳の小屋はいよいよ宮家から決定の通知が来ました。大学でヒンデル氏と相談して建築するようにという有難いお達しです。御料はそれに対して木材基地十分なる場所を与える様にという命令が宮家からも宮内省からも御料へ来ています。

ヒンデルさんの立派なプランが出来て殿下も御覧済みです。ヒンデルさんも九月五日前後に来札するそうです。

時期がおしつまっていることが心配ですが、そこは日本にまたとない方の御上意であるからどんな事があってもヤッツケル決心です。昨日手紙が来たので、今日大野君が総長と会見、それからは大学の営繕課で総動員でやるでしょう。伊藤組でも大島組でもこの仕事だけはそれこそ真の「奉仕」的精神を以ってやるでしょう。こんな気持ちの良い仕事は一寸空前絶後だろうと思います。



小屋の大きさはザット四間四方二階建丸木つくりです。丸木と云っても万計沼の木は太いから挽材を使うことになります。明後日の晩から大野君も私と御料の沖野君と或は営繕課長もはいって空沼の敷地を決定に行きます。

ヒンデルさんがくれば沼のヘリにテントでも張って、水本のじいさんの病後の保養に一所について行ってもらってまた数日愉快な日が送れると思っています。その時分に一寸ひまは出来ますまいね。丁度水田の大切なときでしょう。あんまり誘惑はしないでおきます。しかし、五郎さんがはじめて内海君とこの山を越えてオコタンペに抜けるスプールを春の尾根の雪に印したことがそもそものはじまりだということ、グブラーさんのスキー小屋を豊平川の谷底から明るい空沼の上に正しい方向転換をさせ、それから引きつづいて殿下のヒュッテという様に続いてきていること、こうゆうことはすべて我々の胸の中にあります。

いずれ万計沼の氷った湖岸近く森の中に小屋が建ってから、またいつかのヘルヴェチアヒュッテの楽しい一夜の様な愉快な一夜でも数夜でも一緒に送るときが近くあることを信じています

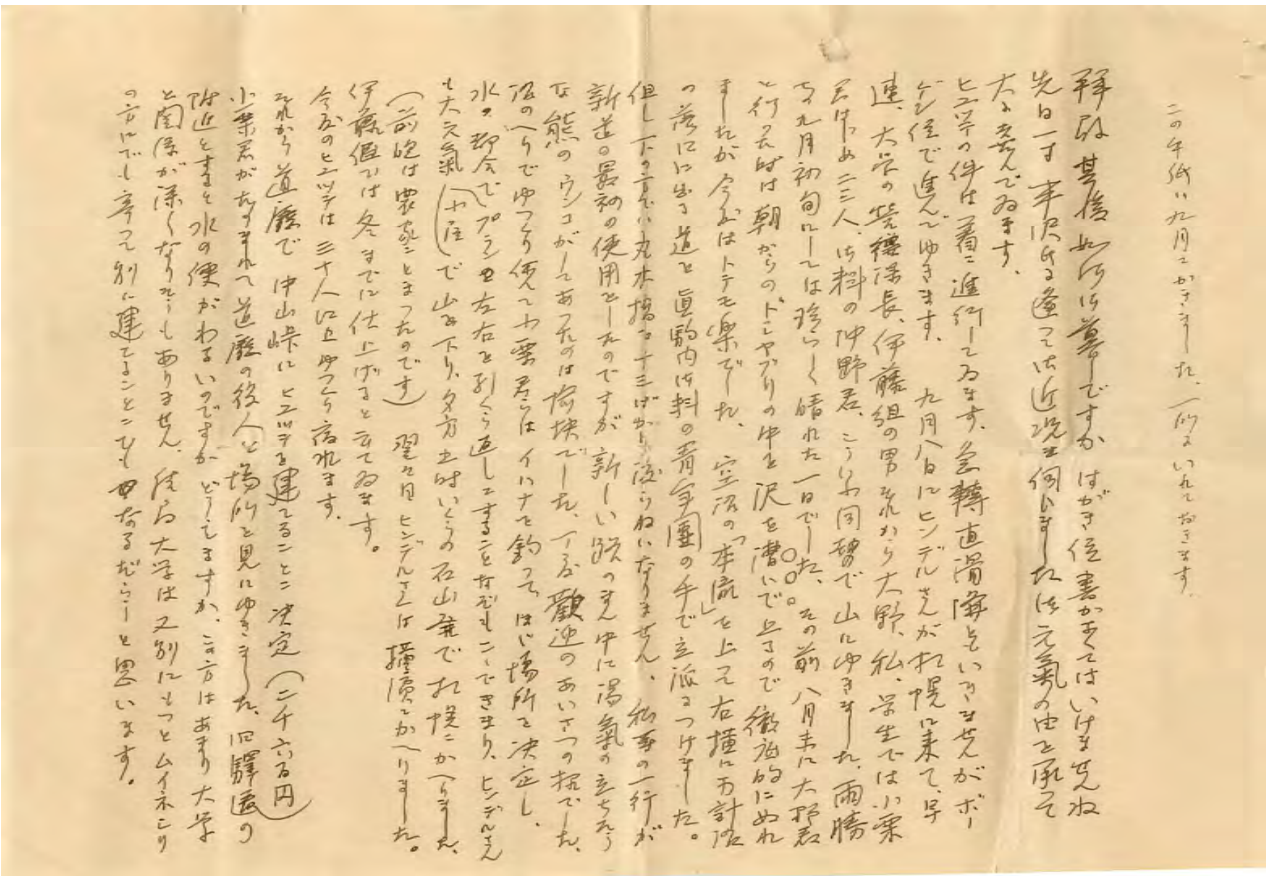
まだ書きたいことだらけですが、この愉快なお知らせを一刻も早くお伝えするために筆をおくことにします。

奥様によろしく。　　春雄

五郎様

引きつづき青森の植田君にこの知らせを書いてやります。

⑤1928（昭和 3）年 11 月 26 日付

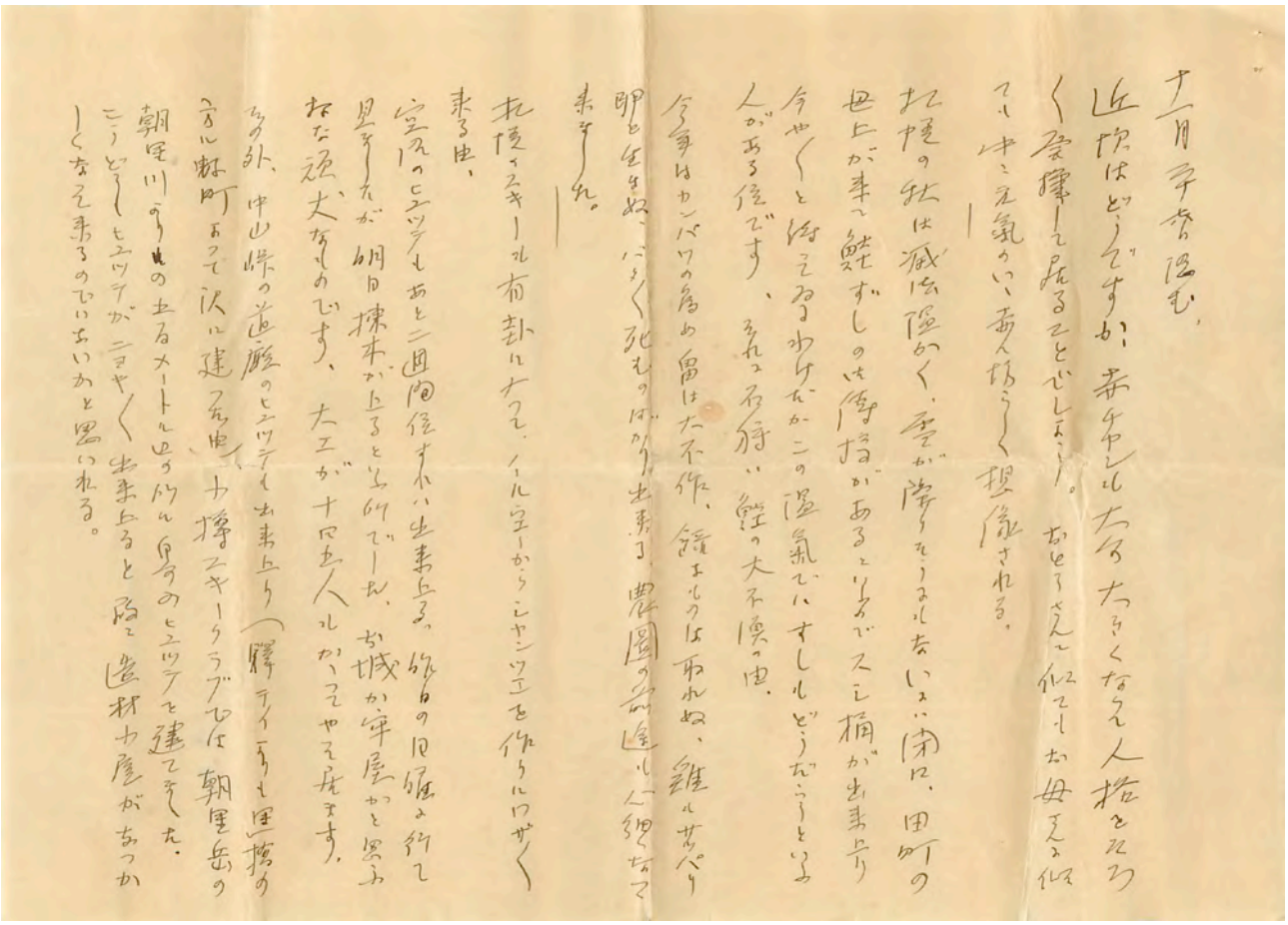


この手紙は九月に書きました、一所に入れておきます。

拝啓　その後如何御暮らしですか。はがき位書かなくてはいけませんね。先日一寸半沢氏と会って御近況を伺いました。お元気の由を承って大いに喜んでいます。

ヒュッテの件は着々進行しています。急転直滑降とはいきませんが、ボーゲンくらいで進んでゆきます。九月八日にヒンデルさんが札幌に来て早速、大学の営繕課長、伊藤組の男それから大野、私、学生では小栗君はじめ二三人、御料の仲野君、こういう同勢で山に行きました。雨勝ちの九月初旬にしては珍しく晴れた一日でした。その前八月末に大野君と行った時は朝からドシャブリの中を沢を漕いで上るので徹底的に濡れましたが、今度はトテモ楽でした。空沼の「本流」を上がって右横に万計沼の落ち口に出る道を真駒内御料の青年団の手で立派につけました。但し下の方では丸木橋を十三ばかり渡らねばなりません。私等の一行が新道の最初の使用をしたのですが、新しい道の真ん中に湯気の立ちそうな熊のウンコがしてあったのは愉快でした。丁度歓迎のあいさつの様でした。沼のヘリでゆっくり休んで小栗君らはイハナを釣って、ほぼ場所を決定し、水の都合で小屋プランの左右をひっくら返しにすることなぞもここで決まり、ヒンデルさんも大元気で山を下り、夕方五時いくらの石山発で札幌へかへりました。(前の晩は農家でとまったのです)翌々日ヒンデルさんは横浜へ帰りました。伊藤組は冬までに仕上げると言っています。

それから道庁で中山峠にヒュッテを立てることを決定（二千六百円)、小栗君が頼まれて道庁の役人と場所を見に行きました。旧駅逓の付近とすると水の便が悪いのですが、どうしますか。この方はあまり大学と関係が深くなりそうもありません。結局大学はまた別にもっとムイネシリの方にでも寄って建てることにでもなるだろうと思います。



十一月二十六日認む

近頃はどうですか。赤チャン大分大きくなって人格をそろそろ発揮していることでしょう。お父さんに似てもお母さんに似ても中々元気のいい赤ん坊らしく想像される。

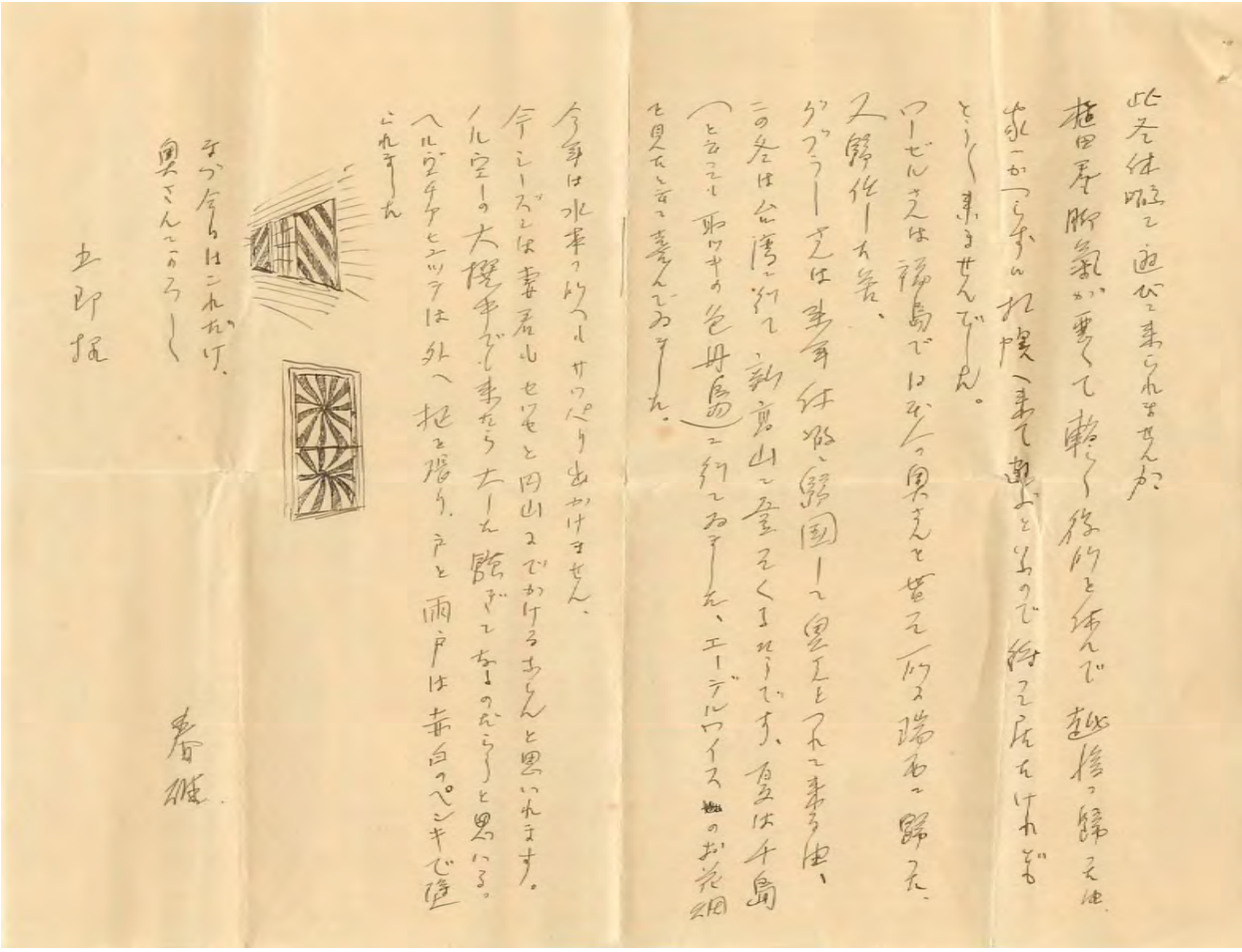
札幌の秋は滅法温かく雪が降りそうもないのに閉口、田町の母上が来て鮭ずしの御伝授があるというのでスシ桶が出来上がり、今か今かと待っているわけだがこの温気ではすしもどうだろうという人がある位です。それに石狩は鮭の大不漁の由。

今年はカンバツの為畠は大不作。鶏もサッパリ卵を産まぬ、バタバタ死ぬものばかり出来る。農園の前途も心細くなってきました。

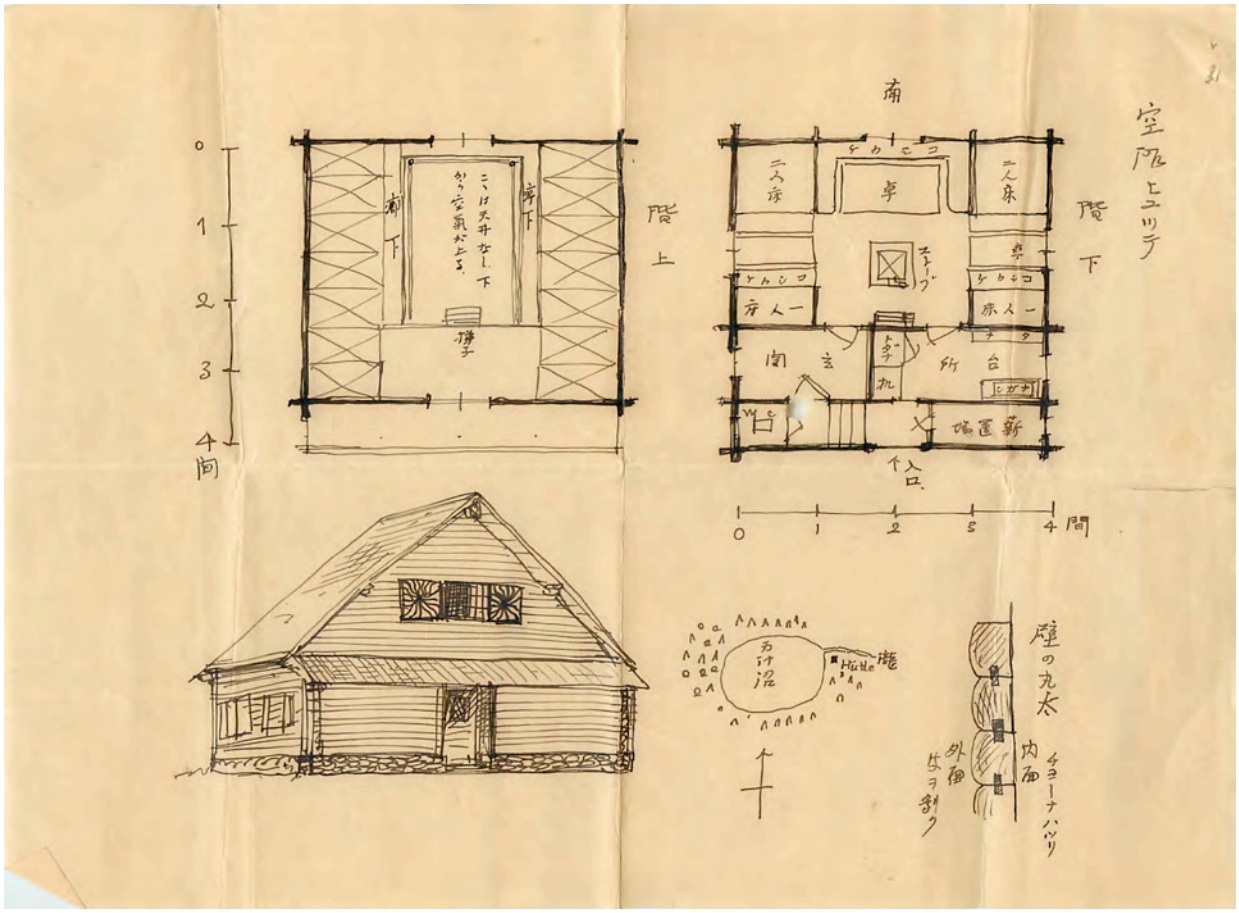
札幌のスキーも有卦に入って、ノールウェーからシャンツェを造りにワザワザ来る由。

空沼のヒュッテもあと二週間位すれば出来上がる。昨日の日曜日に行ってみましたが、明日棟木が上がるという所でした。お城か牢屋かと思うような頑丈なものです。大工が十四五人もかかってやって居ます。

その外、中山峠の道庁のヒュッテも出来上がり（駅ていよりも黒松の方に数町よって沢に建った由）。小樽スキークラブでは朝里岳の朝里川寄りの五百メートル辺の所に自分のヒュッテを建てました。こうどうもヒュッテがニョキニョキと出来上がると段々造材小屋が懐かしくなってなって来るのではないかと思はれる。



この冬休暇で遊びに来られませんか。
植田君脚気が重くて暫らく役所を休んで越後に帰った由。家に帰らずに札幌へ来て遊ぶというので待っていたけれどもとうとう来ませんでした。
ワーゼルさんは来年休暇帰国して奥さんを連れて来る由、この冬は台湾に行って新高山に登って来るそうです。夏は千島（と云っても取っ付きの色丹島）に行っていました。エーデルワイスのお花畑を見たと言って喜んでいました。
今年は水本の所にもサッパリ出かけません。
今シーズンは妻君もセッセと円山まで出かけるならんと思われます。ノルウェーの大選手でも来たら大した騒ぎになるのだろうと思います。
ヘルヴェチアヒュッテは外へ柾を張り、戸と雨戸は赤白のペンキで塗られました。
まず今日はこれだけ、
奥さんによろしく　　春雄
五郎様

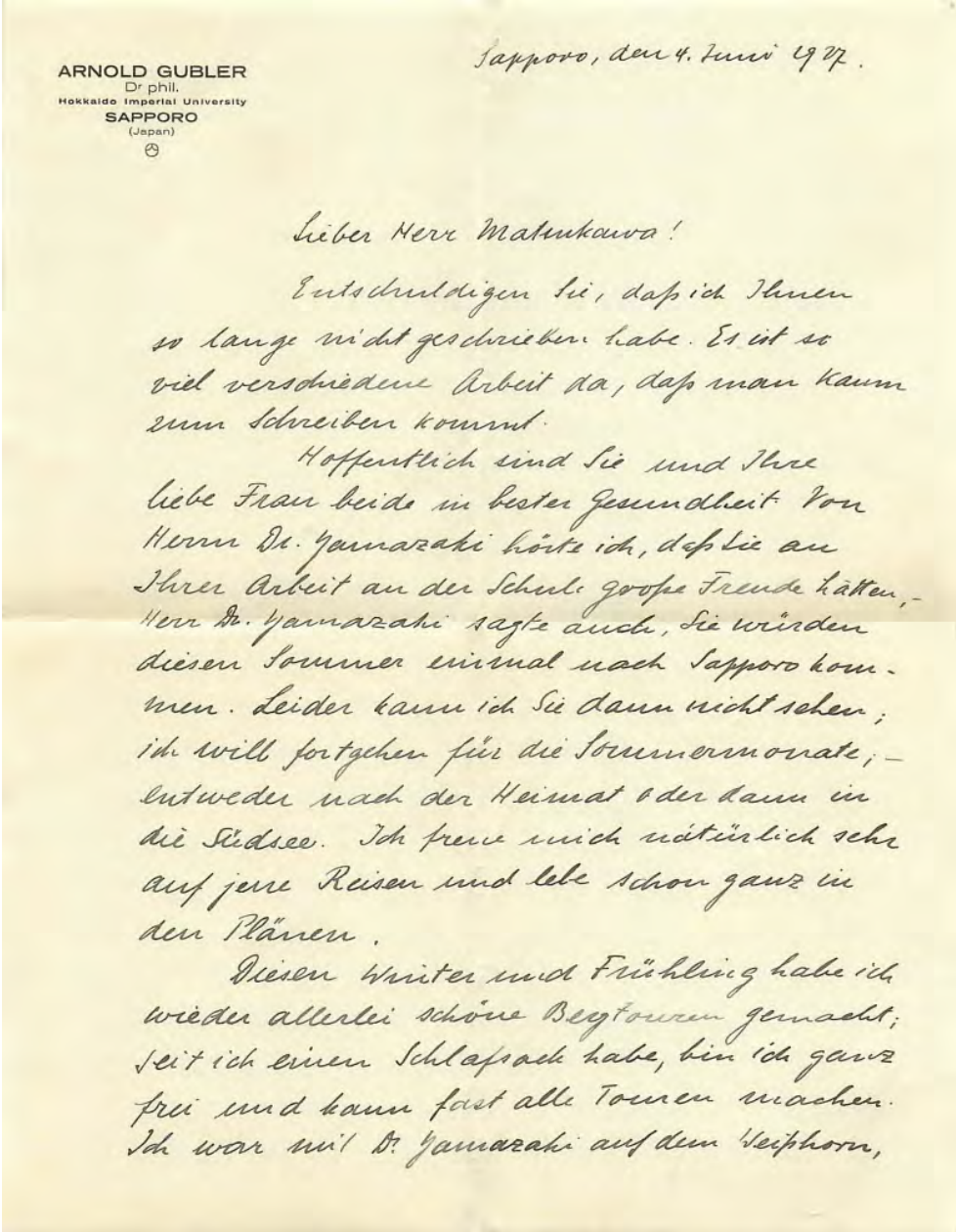


(注：ヒンデル設計図から山崎のスケッチ)

空沼岳からサウス山、サッポロ岳　（1930 年）
撮影　坂本直行

(2)アーノルド・グブラーより松川五郎へ

①1927（昭和 2）年 6 月 4 日付



ARNOLD GUBLER
Dr phil.
Hokkaido Imperial University
SAPPORO
(Japan)

Sapporo, den 4. Juni 1927.

Lieber Herr Matsukawa!

Entschuldigen Sie, daß ich Ihnen so lange nicht geschrieben habe. Es ist so viel verschiedene Arbeit da, daß man kaum zum Schreiben kommt.

Hoffentlich sind Sie und Ihre liebe Frau beide in bester Gesundheit. Von Herrn Dr. Yamazaki hörte ich, daß Sie an Ihrer Arbeit an der Schule große Freude hätten, – Herr Dr. Yamazaki sagte auch, Sie würden diesen Sommer einmal nach Sapporo kommen. Leider kann ich Sie dann nicht sehen; ich will fortgehen für die Sommermonate, – entweder nach der Heimat oder dann in die Südsee. Ich freue mich natürlich sehr auf jene Reisen und lebe schon ganz in den Plänen.

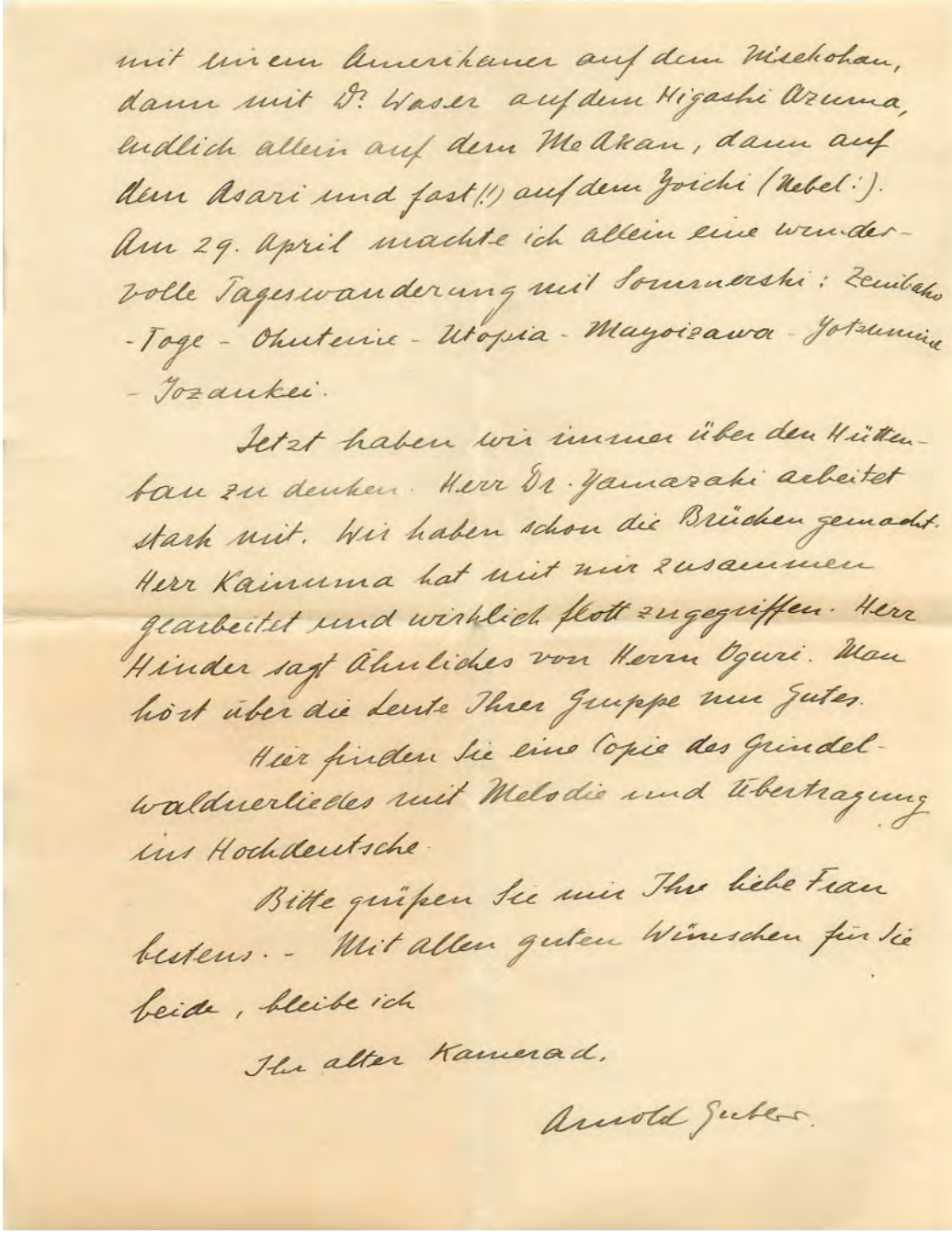
Diesen Winter und Frühling habe ich wieder allerlei schöne Bergtouren gemacht; seit ich einen Schlafsack habe, bin ich ganz frei und kann fast alle Touren machen. Ich war mit Dr. Yamazaki auf dem Weißhorn,

親愛なるマツカワさん

ご無沙汰をお許しください。色々な仕事が沢山あってなかなか書けませんでした。

あなたも奥様も共にお元気のことと思います。山崎先生からあなたが学校でのお仕事を大いに楽しんでいらっしゃると伺いました。先生はまたあなたがこの夏一度札幌へお出でになるとも仰いました。残念ながらその時には私はお会いできません。夏休みには旅行を予定しております。故郷へ帰るか。あるいは南洋に出かけるか。もちろん私はその旅行をとても楽しみにしておりますし、既に計画に余念がありません。

この冬と春、私はまた殊のほか素敵な山歩きをしました。シュラーフザックを持ってからというものは、私は全く自由の身で、殆んどあらゆる旅行ができます。



mit einem Amerikaner auf dem Nisekohan, dann mit Dr. Waser auf dem Higashi Azuma, endlich allein auf dem Me Akan, dann auf dem Asari und fast(!) auf dem Yoichi (Nebel:).
Am 29. April machte ich allein eine wunderbolle Tageswanderung mit Sommerski: Zenibako - Toge - Ohutenie - Utopia - Mayoizawa - Yotsumine - Yozankei.

Jetzt haben wir immer über den Hüttenbau zu denken. Herr Dr. Yamazaki arbeitet stark mit. Wir haben schon die Brücken gemacht. Herr Kainuma hat mit mir zusammen gearbeitet und wirklich flott zugegriffen. Herr Hinder sagt Ähnliches von Herrn Oguri. Man hört über die Leute Ihrer Gruppe nur Gutes.

Hier finden Sie eine Copie des Grindelwaldnerliedes mit Melodie und Übertragung ins Hochdeutsche.

Bitte grüßen Sie mir Ihre liebe Frau bestens. - Mit allen guten Wünschen für Sie beide, bleibe ich

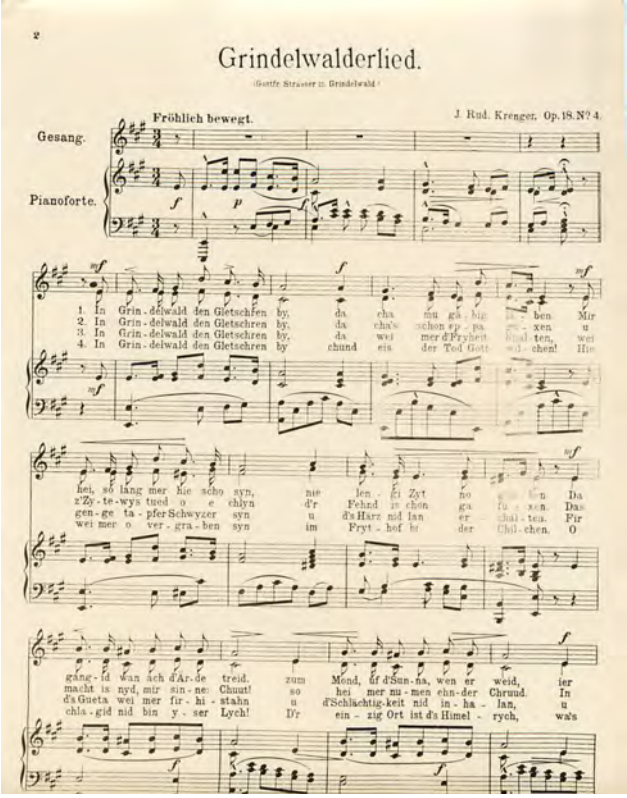
Ihr alter Kamerad.

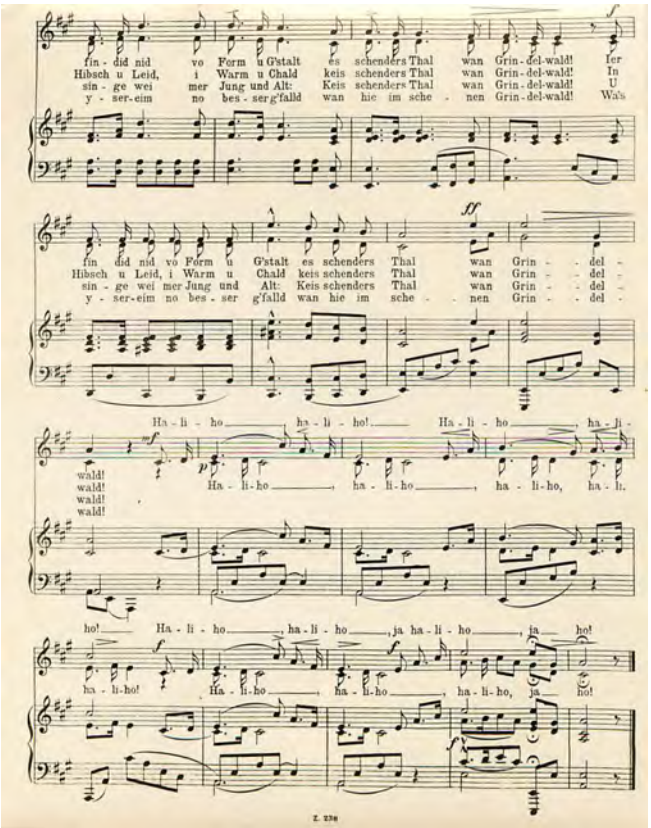
Arnold Gubler.

山崎先生とワイスホルンに行きましたし、あるアメリカ人とニセコに登りました。それからワーゼルさんと東吾妻に、雌阿寒には独りで行きました。朝里岳から余市岳あたり（！）まで登りました(霧)。4 月 29 日には独りで夏スキーを履いて素晴らしい一日旅行をしました。銭函峠―奥手稲―ユートピア―迷沢―四つ峯―定山渓です。

今私はずっとヒュッテ建設のことを考え続けています。山崎先生は一生懸命協力してくださっています。もう橋は作ってしまいました。貝沼君と私は一緒に働きましたが、本当に敏捷に立ち働きました。ヒンダーさんは小栗君についても同じ事を言っています。貴兄のグループの皆さんは好評です。

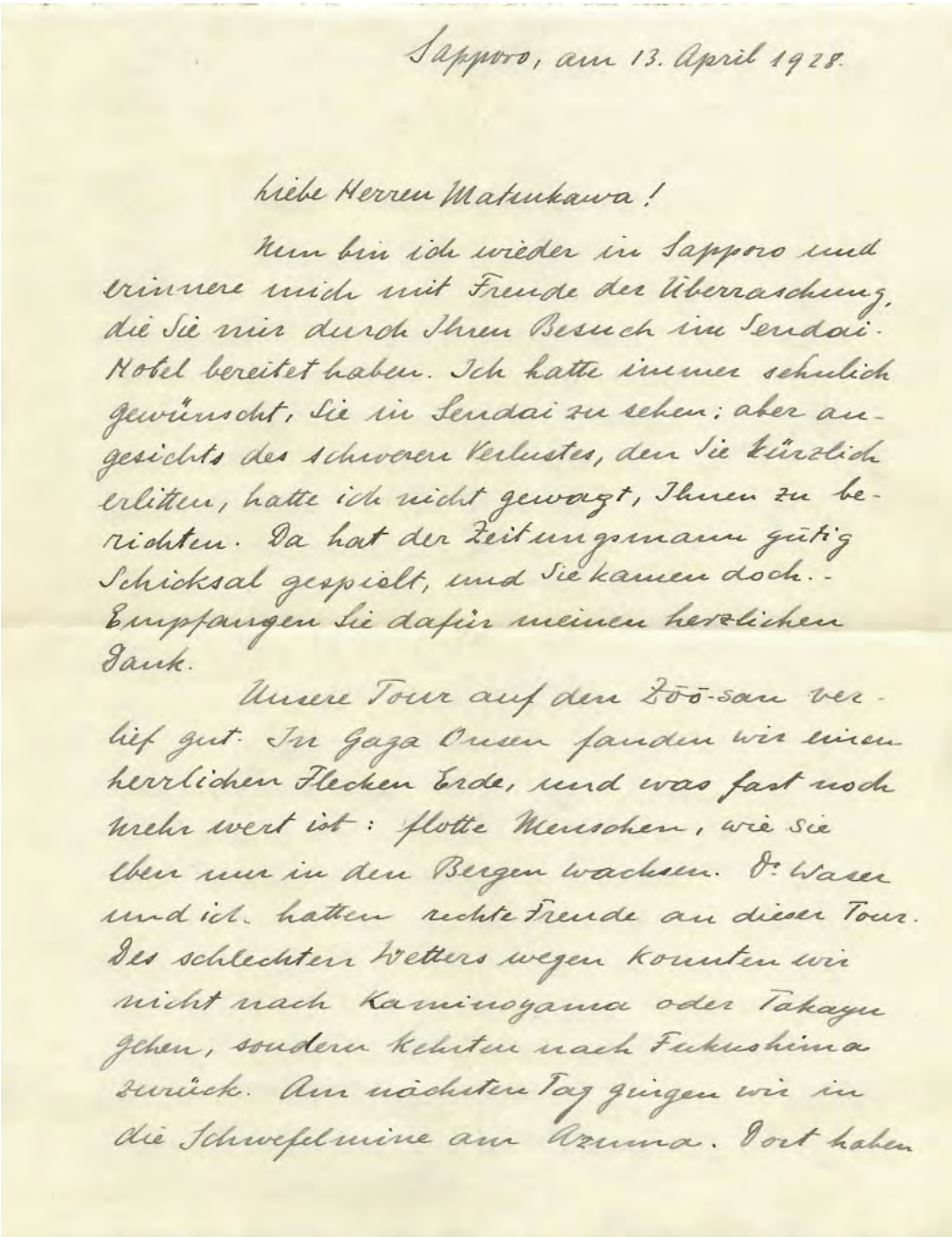
グリンデルワルドの人たちの歌の楽譜とドイツ語の訳詩を同封しました。(注次ページ)　どうか奥様に呉々もよろしくお伝えください。お二人のご多幸を祈ります。　　旧友　アーノルド・グブラーより





＜注＞当時の山岳部員がグブラーから教えてもらったこの「Grindelwalderlied」は、山岳部の愛唱歌となり長く歌い継がれた。

②1928（昭和 3）年 4 月 13 日付



Sapporo, am 13. April 1928.

Liebe Herren Matukawa!

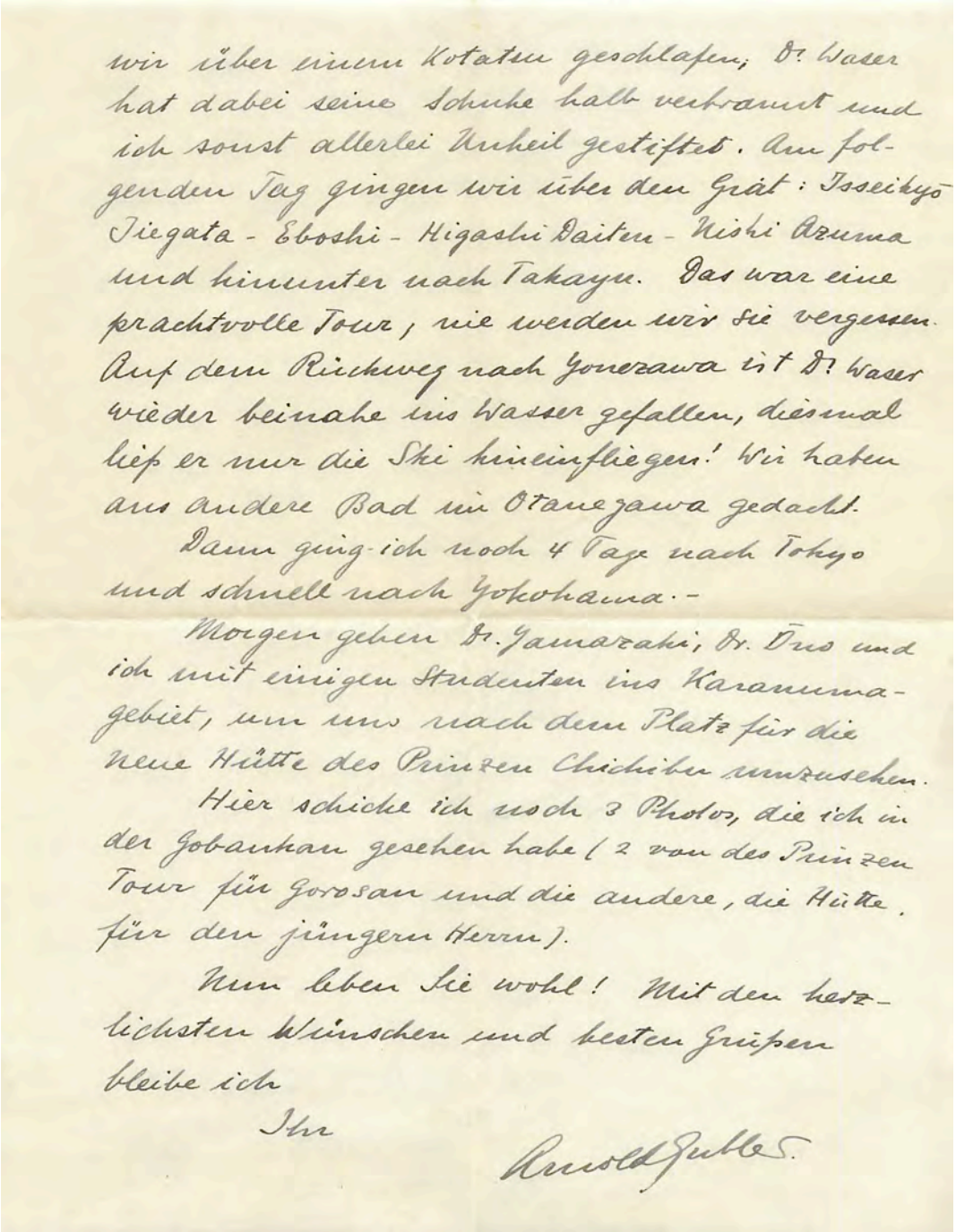
Nun bin ich wieder in Sapporo und erinnere mich mit Freude der Überraschung, die Sie mir durch Ihren Besuch im Sendai-Hotel bereitet haben. Ich hatte immer sehnlich gewünscht, Sie in Sendai zu sehen; aber angesichts des schweren Verlustes, den Sie kürzlich erlitten, hatte ich nicht gewagt, Ihnen zu berichten. Da hat der Zeitungsmann gütig Schicksal gespielt, und Sie kamen doch.- Empfangen Sie dafür meinen herzlichen Dank.

Unsere Tour auf den Zōō-san verlief gut. In Gaga Onsen fanden wir einen herrlichen Flecken Erde, und was fast noch mehr wert ist: flotte Menschen, wie sie eben nur in den Bergen wachsen. Dr. Waser und ich hatten rechte Freude an dieser Tour. Des schlechten Wetters wegen konnten wir nicht nach Kaminogama oder Takayu gehen, sondern kehrten nach Fukushima zurück. Am nächsten Tag gingen wir in die Schwefelmine am Azuma. Dort haben

親愛なる松川御兄弟

また札幌へ戻ってきました。そして仙台ホテルへお訪ねくださった時の驚きを楽しく想起しております。それまで私はいつも仙台で貴兄らにお会いしたいものだと願っておりました。しかし、貴兄らのお邪魔になってはいけないと思い、お知らせしないでおいたのでした。そうしたら新聞記者が親切にも運命の舞台回しを演じたのですね。貴兄らがやって来たではありませんか。本当に有難うございました。

蔵王への旅行は調子よく運びました。峨々温泉では素晴らしい土地を見つけました。そして、もっと価値あるもの、山でのみ育つのんびりした人々をです。ワーゼルさんと私はこの旅行を本当に楽しみました。天気が良くなかったので、上山や高湯には行けず、福島へ戻りました。



wir über einem Kotatsu geschlafen; Dr. Waser hat dabei seine Schuhe halb verbrannt und ich sonst allerlei Unheil gestiftet. Am folgenden Tag gingen wir über den Grat: Isseikyō Tiegata - Eboshi - Higashi Daitsu - Nishi Azuma und hinunter nach Takayu. Das war eine prachtvolle Tour, nie werden wir sie vergessen. Auf dem Rückweg nach Yonezawa ist Dr. Waser wieder beinahe ins Wasser gefallen, diesmal ließ er nur die Ski hineinfliegen! Wir haben ans andere Bad in Otanegawa gedacht.

Dann ging ich noch 4 Tage nach Tokyo und schnell nach Yokohama.-

Morgen gehen Dr. Yamazaki, Dr. Ōno und ich mit einigen Studenten ins Karamuma-gebiet, um uns nach dem Platz für die neue Hütte des Prinzen Chichibu umzusehen.

Hier schicke ich noch 3 Photos, die ich in der Gobankan gesehen habe (2 von des Prinzen Tour für Gorosan und die andere, die Hütte für den jüngern Herrn).

Nun leben Sie wohl! Mit den herzlichsten Wünschen und besten Grüßen bleibe ich

Ihr

Arnold Gubler.

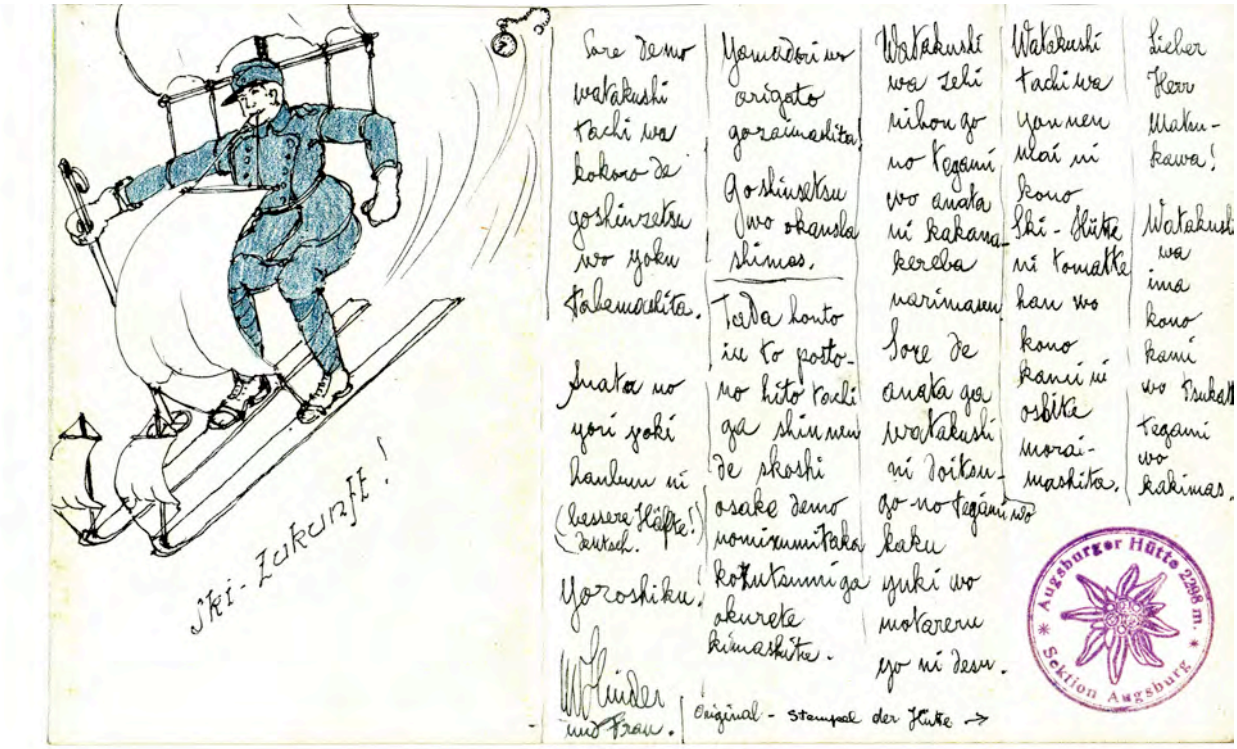
翌日、吾妻の硫黄高山に行きましたが、そこで炬燵で寝込んでしまい、ワーゼルさんは靴を半分燃やしてしまい、私はその他の色々な不都合を起してしまいました。次の日、山登りに出かけました。一切経山―家形山―烏帽子山―東大巓―西吾妻そして高湯へ向けての下り。素晴らしい旅でした。決して忘れないでしょう。米沢への帰途、ワーゼルさんはまた川の中に落ちそうになりました。今度はスキーだけ川の中へ入って行きました。小樽内川の水浴を思い出しました。それから東京へ４日、横浜へちょっと寄りました。

明日は山崎先生、大野先生、私、それに学生数名とで秩父宮様の新しいヒュッテの場所を探しに空沼方面に出かけます。

写真を三枚同封します。五番館で見つけました(宮様のご旅行の２枚は五郎さんに、もう１枚はヒュッテのを弟さんに)。　　それではごきげんよう、さようなら！　　アーノルド・グブラー

(3)マックス・ヒンデルより松川五郎へ

① 1928（昭和 3）年、スキーの未来図(日本語)



親愛なる松川さん

私は今、この紙を使って手紙を書きます。

私たちは 4 年前にこのスキーヒュッテに泊まってこの紙に判を捺してもらいました。

私はぜひ日本語の手紙をあなたに書かなければなりません。それであなたが私にドイツ語の手紙を書く勇気を持たれるようにです。

やまどりをありがとうございました。ご親切を感謝します。ただほんというとポストの人たちが新年で少しお酒でも飲みましたか、小包みが遅れてきました。

それでも私たちは心でご親切を良く食べました。

あなたのより良き伴侶によろしく。

マックスヒンデルと妻

ヒュッテのオリジナルスタンプです→

2. ヒンデルのヒュッテ設計図

マックス・ヒンデルが描いたヘルヴェチアヒュッテの設計図が、山崎春雄の遺品の中から折り畳まれてボロボロになった状態で発見された。それは B2 判程度(46.7x63.0mm)の大きさの方眼紙に描かれており、「SKiZZE FüR DiE HELVETIA HüTTE AM SHiRAIDAKE BEi SAPPORO」、Mai 1927、Max Hinder の署名、「札幌市東光園　円い家　建築家ヒンデル」と彫られた八角形のゴム印が捺されている。日付から建設に着手する 2 ヶ月前の敷地の選定が終った頃に描かれたことが分る。

図はアイデアスケッチと言われるもので(北大大学院工学研究院建築史意匠学研究室　角幸博名誉教授談)、極めて簡単に描かれている。大きさ(3 間 x 2 間 4 尺)や内部のつくりには変わりはないが、煙突はまっすぐと上に出すように設計されている。よく見るとヒュッテ名物の流しは、千歳川の丸木船作りの名人水本小判治と相談したのか、すでに設計図で丸太のくり抜きとなっているのがおもしろい。

工事中、ヒンデルも共に山に暮らし、大工に指示し、時にモデルで説明したという(山崎春雄「山とスキー」79 号)。ヒュッテのカッセー(金庫)の細工や棟木の魔除けの人面彫刻(6 ページ写真(7)参照)は、ヒンデルが自ら腕を振るった。カッセーは宿泊者が自主的に利用料を入れるために設けられたものであるが、心無い者が中の金を盗る為に壊し、長年そのままになっていた。これを昨年(2010 年)、山崎英雄が同じ位置に復元した(山の会会報 102 号「ヒンデル自作の KASSE の復元」山崎英雄)。

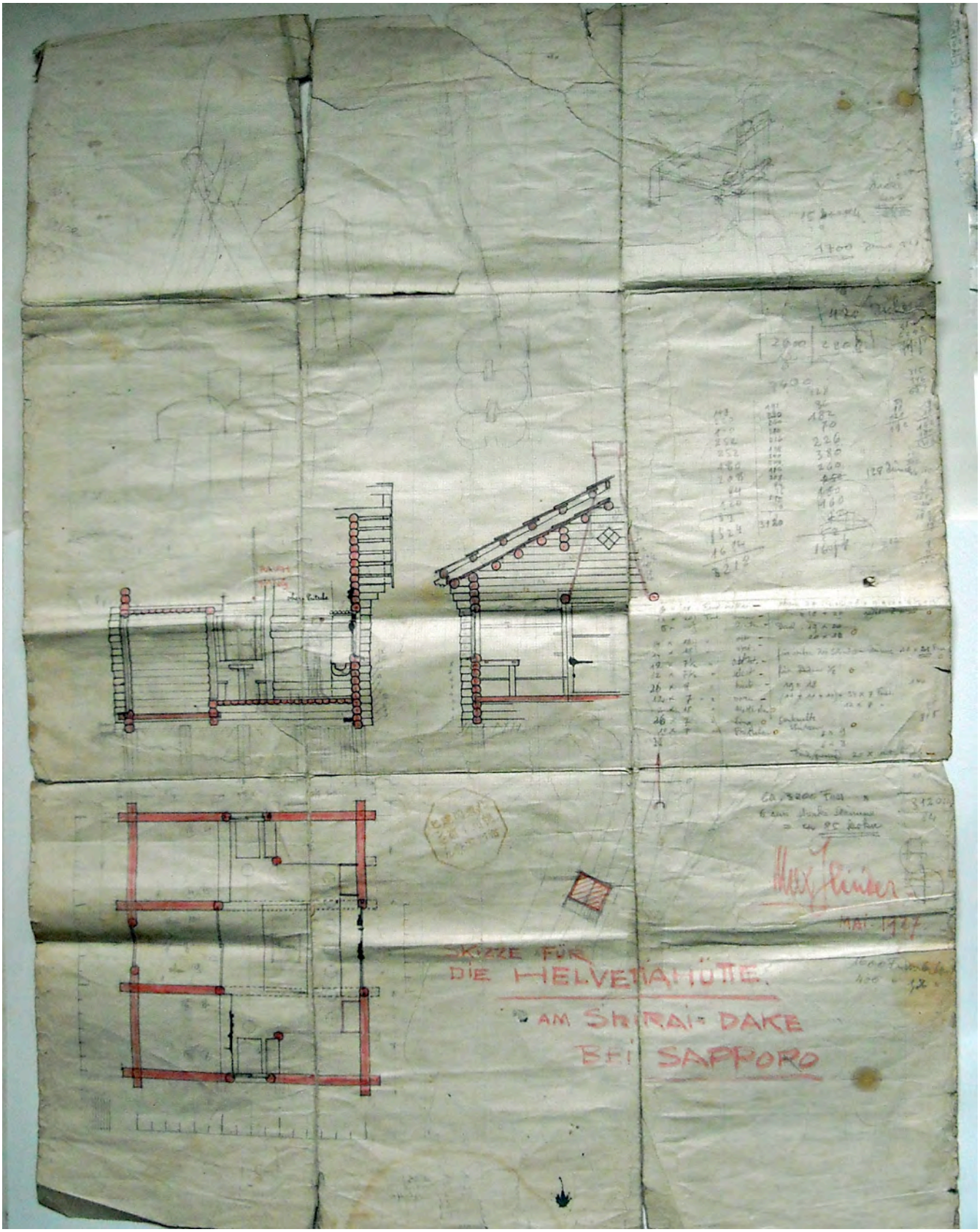
ヒンデルはヒュッテ完成直後の 10 月には横浜に転居しているので、このヒュッテが在札中最後の作品であり、ヒンデルは「王宮を建てたよりも一ヘルヴェチアヒュッテの建設が自分には深い喜悦であった」（山とスキー78 号）と述べるほど、力を注いだ建物であった。

ヒュッテの老朽化が進んだため、北大山の会は 1985 年、会員から寄附を募り、ヒュッテの改修工事を実施した。屋根はアスファルトシングル葺き、外壁はグラスウールによる断熱改修の上、耐水ベニヤ張り、手割り柾で張り替えた。内部床は断熱処理の上、ナラフローリングに張り替えられた。腐って穴の開いていた流しも復元された。改修は当初のイメージに忠実に行なわれ、同年 10 月 6 日、現地で改修完成披露式が行われた。

改修後の 1988 年、ヒュッテは札幌創基 120 周年記念事業“さっぽろ・ふるさと文化百選”で札幌市の貴重な文化遺産の 1 つに選定された。

ヒュッテ模型　山崎英雄作（サイズ 1/15　1940 年）

ヒンデルのヒュッテ設計図



3. Erlebnisse und Gedanken eines Japanfahrers

（日本を旅したものの体験と思い出）

アーノルド・グブラー著、吉田恵治訳

吉田恵治さん（注[1]）は、訳者序言で述べているように松川五郎の女婿（夫人は三女安子さん）で、表題のグブラー著作の出版を意図して翻訳を進めていたが、2008年1月17日、全15章の内8章を翻訳した時点で急逝された。本資料集には吉田さんが翻訳した分の全てを原文のまま収録した。読んでいて文章上疑問に感ずる部分もあるが、それはご本人の推敲がまだ終っていなかったためで、お元気ならもっと素晴らしい日本文になったであろう。

吉田さんは松川の遺品整理を進めるうちに、彼がヘルヴェチアヒュッテの建設に深く関わっていた事を知り、ヒュッテの歴史に興味を持ち、関連する資料の収集を進めていた。たまたま、グブラーが滞日体験を綴った本を大戦中に出版したことを知り、原書をスイスから取り寄せて翻訳を進めた。山崎春雄、英雄が山の会会報などにグブラーについて書いているが、この著書からより詳しくその生い立ち、来日の経緯、札幌での生活、先生方や学生との交流、ヒュッテ建設に至る顛末、何にもまして彼のすばらしい人柄を知ることができる。ヘルヴェチアヒュッテはグブラー、ヒンデル、山崎はじめ北大の先生方、それに山岳部員達との心温まる交流から生れ、現在に至るまで多くの人びとに愛されて来た。そのグブラーの著書を発掘して翻訳を進め、残念ながら完結することはできなかったが、ヘルヴェチアヒュッテを中心とした歴史の大切な記録を、我々に遺してくれた吉田さんに心からお礼を申し上げたい。（原書は山岳館に寄贈していただいた）。

しばしばチューリッヒのグブラーさん宅を訪問し、旧交を温めた故和久田弘一（昭和9年工学部機械卒、1990年没）は、グブラーの著作について次のように述べている（山の会会報55号。）

> *（前略）先生は日本の生活を忘れることができないとみえ、戦争中、スイスで“日本における私の体験”という本を出版されております。当時私はストックホルムにおりましたが、スイスにおりました私の友人で、当時正金銀行に勤務しておった三木邦夫君からその本の話を聞きました。満州事変が始まり、先生が日本各地を歩かれたことが、スパイの疑いを持たれるもとになり、不愉快な思いをされ、日本を去られたのですが、それにも拘らず、本を出されたのですから、心から日本をお好きだったのでしょう。*
> *山岳部の古い連中なら覚えていると思います。スイスのヨーデル“Grindelwalder Lied”をグブラー先生が我々に教えてくだされ、良く山の仲間がそれを愛唱したものです。（後略）*

[1] 吉田恵治（1931-2008）室蘭生れ、1953年北大農生（植物）卒、北海道開発局に入局。1961年欧州へ1年間留学、1981年開発局退職。（株）環境計画開発研究所を経て、1983年（有）ライブ環境計画を設立し社長、1994年同会長。2008年逝去

＜訳者序言＞

グブラー先生とその著書
吉田恵治

（北大予科記念碑建立記念誌（2004年）より転載）

義父松川五郎は大正7年入学の北海道帝国大学予科一期生、私は昭和25年予科農類最後の卒業生です。義父は在学中板倉・加納両氏らとスキー登山で活躍しましたが、農学部卒業後もその経験から本道には何かと縁がありました。当時のスキー部担当の医学部山崎春雄・大野精七両教授もこの新しいスポーツの普及に力を尽されました。

昨秋、子供たちが朝里峠に近いヘルヴェチアヒュッテに集い、亡き両親を偲びました。この山小屋は昭和2年、M・ヒンデル氏の設計で建てられたのですが、小屋開きにはこの小樽内川流域に詳しいため山崎先生から建設地点について意見を求められた東北在住の義父も招かれ、ヒンデル氏と共に建設に携わった予科独語講師A・グブラー博士や山崎教授らと楽しい一時を過ごすなど、思い出多い場所だったからです。

その後、グブラー先生が戦前の滞日体験を綴った本を第二次大戦末期にスイスで出版していたと判り、先生が予科独語講師として札幌に滞在した大正14年～昭和7年の経緯を読みました。博士は同じスイス出身のコラー先生が急逝の後、請われて福島商業高等学校から北大予科に赴任して来たのでした。私たちが独語を学んだヘッカー先生の前任者です。

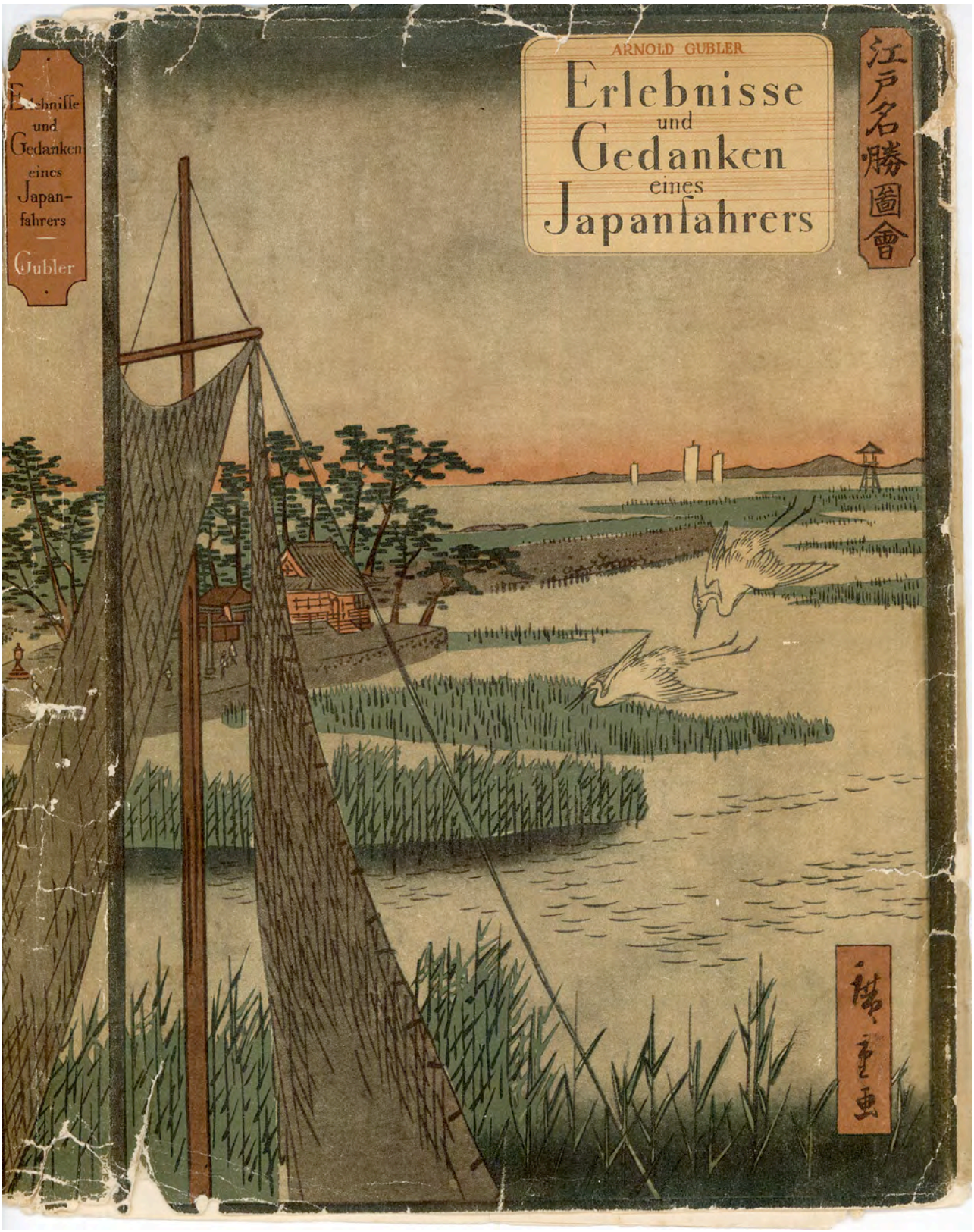
博士も登山とスキーを好み、千島から台湾まで当時の日本各地を巡ったので山岳名勝の紹介もありますが、道内のスキー行記録や北大予科時代の様々な体験が主な内容です。観察眼は鋭く表現はユーモラスです。戦時中に出版を決意したのは、懐かしい日々を過ごした日本が世界の大国相手に苦戦中なのを見かね、自分が受けた好ましい印象など欧米とは異なる日本の一面を世間に正しく伝えたいと考えたからです。最終章では満州事変後離日を決めた経緯のほか、日本が進むべき方向を的確に示しています。人口過剰の解決策を海外移住に求めず、むしろ実績もある工業を興して外貨を獲得、人口を養うに必要な食糧を輸入してはどうか、とも説いています。

昭和41年春、新婚時代を共に札幌で過ごした夫人を同伴、来札しました。義父も数十年ぶりの再会を歓びましたが、博士が最も敬慕していた山崎先生が5年前に他界された後で、先生宅での夫妻の面影にはどことなく寂しさが漂っています。（15ページ写真(26)参照）

Erlebnisse und Gedanken eines Japanfahrers(1944)は旧予科生、特に先生が力を入れていた医類関係の方々がぜひ読むべき本です。離札の際に医類予科生たちから贈られた楠公像の意味を察した先生は「本書を執筆中の今も彼等は軍医として前線で活躍していようが、かかる人たちのいる日本が滅びることはあり得まい」とも書いています。山仲間やお手伝いさんの人情にも心打たれたようです。

このたび、本道出身の外交官の眼にも触れ、両国にとり大切な史料と認められました。今は中央図書館にもありませんが、いずれ常備し、誰もが気軽に閲覧できるようにしたいものです。

＜表紙＞


ARNOLD GUBLER
Erlebnisse
und
Gedanken
eines
Japanfahrers
江戸名勝圖會
Erlebnisse
und
Gedanken
eines
Japan-
fahrers
Gubler

目次（全）

（ **太字** は本資料集に収録の章）

第1章　出　発

決心とその経緯ー別れー「榛名丸」ーポートサイドのロマンー日本音楽との最初の出逢いーコロンボとシンガポールー香港、屋形船の町ー上海、東洋の大パリ、スイスの空気に満ちた鼻

第2章　外国の土地に根を下ろす

神戸､漁村から国際的貿易港に変身ー最初の印象ー私に仕事がありますか？ー谷本教授、日本の大教育者ー大阪高等学校での代用教員ー奈良にてー契約成立ー北海道で休暇をー大正12年9月1日の大地震

第3章　福島商業高等学校の教師として

日本のホテルー学校への採用ー「榛名丸」の旧友ー珍しい家政ー吾妻火山の周辺ー会津地方への新年スキー旅行ー白虎隊の故郷ー「ウイリアム･テル」の上演ー大正12年12月のアメリカ合衆国移民法制定で世論沸騰ー小阪県知事ー雑多な計画と挫折ーコラー教授の死

第4章　日本アルプス

山への巡礼ーアルピニズムの古日本型ー新しい日本のアルピニストたちー北アルプスと南アルプスの発見ー穂高･槍､尾根伝いー南アルプスでの8日間

第5章　北海道、熊の島

気候と地理ーリビエラ地方（伊）ほどの幅の地域に1米余も積雪がーロシア人と日本人の出逢いーー経済的基礎と移民ーー大震災の難民は北方に不適合

第6章　アイヌ、絶滅しつつある日本の原住民族

石器時代が18世紀まで続いた！ーハンマーとカナシキ（ロシア人と日本人）の間でーアイヌの重要な特徴ー独特な習慣ーアイヌ部落を正月に訪問ー（私の）アイヌーこの種族への悲観的な予測

第7章 学校と友人たち

北海道帝国大学に就職ー名高い円い家ー講義の難しさー儀式(天長節、新年、即位式など）ー50年記念祭ー金曜日の夜のオープンハウスー大学総長佐藤男爵ー山崎教授、私よりチューリッヒをよく知っている人ー大野教授、日本におけるスキー行の積極的な推進者ー日本の山仲間たちードイツ人伝道師たちー英米人の同僚、友人たち

第8章　札幌周辺のスキー行適地

原生林に築いたアメリカ式の町ースキーはコラー教授が導入ー札幌のスキー愛好家たちの行動圏ースポーツスキーと登山スキーー札幌地方の山小屋帯ー豊平川渓谷の伐木者たちとー支笏湖の彼方へー日曜日の旅ーまだ新天地が待っている

第9章　ヘルヴェチアヒュッテ

スキー走行者への避難所としての山小屋の意義概論ー北海道における避難所としての山小屋形式についてー場所の選定と建設ー教授よろい戸を撫でるー皇室のアルピニスト､秩父宮殿下の札幌ご訪問とヘルヴェチアヒュッテ、最高に美しい旅：奥手稲、“天狗の鼻山”、朝里岳、余市岳､無意根岳､定山渓を渡り歩く

第10章 北海道内のスキー適地

十勝山系､滅多に近づけない山頂と火山ー孤独な正月休みー阿寒火山群への新たな旅ー計画は計画のままで

第11章 家での喜びと悲しみ

新しいグブラー家ができたー「オバサン」ーひぐまー料理教室が夫たちを結びつけるー長女レネリの誕生ー我々を覆った影：レネリの死

第12章 千島へ

“噴煙を出す島々”とその物語ーアルプスの花々と軍事的防御点ー色丹島と国後島への最初の旅ー北千島への旅日記ー火山アライト富士への登行

第13章 台湾旅行

ジャーナリストたちの首狩人種冒険ー″美しい島“の発見者と住人：マレー人、ポルトガル人（？）、オランダ人、中国人、日本人ー首都台北－3000m高地への樹木伐採者たちの移住ー新高山に登らなくても一次高山（シルビア山）（日本帝国第二の高山）への登山

第14章 愛すべき土地いろいろ

湖沼ー日光とその支配者たちの墓ー寺院と山ー奈良：古代の天皇と修行者の町ー静かな京都の一隅ー松島湾とマツの生えた島々ー自明なこととしての国立公園ー支笏湖岸の熱い泉

第15章 日本の1940年代について、我々の帰国

日本の人口過剰問題-1931年（昭和6年）の政治的事件（満州事変）とその在日外人への影響ー契約延長ならずー新たな国粋主義のうねりを感知－4人の外人教師学校を去るーヘルヴェチアヒュッテへの最後の旅ー別れの時の感謝の雨ー札幌を離れるー日本最後の日ー最も強い体験：よその国での本当の故郷としての体験

第1章 出　発

ロイスタールの奥深く、蒸し暑い12月の夜に、私は座って見張り番、ベルンのキュンマリー＆フライ出版社の親切な勧めに従い、「私の日本の本」を書き始めているところである。地球上の諸民族はいま狂気の沙汰の真っ最中、天皇の国もまたその存立の基盤を揺さぶられている。ここ数週間、私はこの切り立った岩の景観の中で、兵士として暮らし、今のこの霧を漂わせ雪を降らせる雲を追い払っている。太陽が再びロイス川の激流の泡沫の中に、マツの茂る山腹の向こうの滝のしぶきの中に光り輝くのも近いだろう。東洋の山水画家がいつも岩山から流れ落ちる小川を表現しようと思っていたものを、ここでは直接見ることができる。生き生きと活気あるスイスの原景観、永遠の生命の息吹の中で、ゲーテはこう書いている。「人間の魂は水と同じ。天から降りてきて、天に昇っていく」と。

私にとって瀬戸内海は日本での大きな景観体験となった。極東からやってくる日本人の客は、彼らにすれば「この国の四方森に囲まれた湖を見ると、どこか故郷の風景を想い起こさせる」と私に言う。この二つの国の景観は雰囲気がよく似ている。恐らく、この原細胞から生まれてくる民族もまた、似ているのではなかろうかと感じる。

私が再び故郷の地に戻ってから10年になる。初めて東洋に出かけてから今日まで20年の歳月が過ぎた。愉快でない時もたくさんあったが、その記憶は薄れてしまった。しかし、これまで心をうたれたことは、光り輝きながら私の胸の中に深く留まっている。

ずっと以前から、私は旅行熱に浮かされていた。学生の頃、私はイタリアと北アフリカへ初めての小旅行に行かせてもらった。母はいつも、広い世界もまた何か「私の」専門分野であるに違いない、職業を正しく把握するなら、未来の地理学教師を鳩小屋に閉じ込めておくべきではない、と理解していた。一方、父は炉辺の団居に留まり続けるのには、慎重に注意を促していた。

私がどのようにして日本に行ったのか、ここでちょっと説明する必要があろう。博士号試験はその準備や学位請求論文の印刷後の労苦などで、当時は結構な費用がかかった。博士の学位記の中の業績に証明したものなどは、私の学生らしい短絡的な理解によれば、文科高等中学校の教師の試験で、全く同じものをもっと安く示すことができるのだった。それである日、私は父に提案した。父が私の博士学位記取得のためにと考えていた金で私に世界旅行をさせてくれないだろうかと。私はその方がずっと利益になると確信していたのである！答えは賢明だった。イエスかノーか、一つである。「君は博士にならねばならぬ。しかし、なったら世界旅行をしてもいい。」それは勇気ある、また同時に思慮深い父の結論だった。大正11年（1922）の夏に、私は幸いさまざまな試験の障害を切り抜けた。大正12年（1923）春、私は極東への旅立ちの用意ができていた。なぜなら、他の目的地は初めから全く問題にしていなかったのである。

幸い、私は多くの年長者や経験者に私の企画をどう思っているかを尋ねなかった。もしそうしていたら、私の計画は間違いなく多くの全く正当な疑惑、異論に潰されてしまったであろう。「日本へ行くなんて！」この独特の意見を前に、そこかしこで私の知人たちが十字を切るのは自分には当然考えられることであった。ベルンの日本大使館が私の照会に対し、往復の旅費と1,2ヶ月の滞在費で約1万フランという結構な金額がかかるだろうと答えてくれた。ちょうど休暇で日本から帰国していたチューリッヒのある大商人の情報も同じだった。これらの報告を私は次のように解釈した。私は、正規の厳しいヘルマーツウイル出身の、かつてのチューリッヒの高地の農家の坊やだ。もし必要なら、その半分でもやっていけるのは判りきったこと、私の背後にはいつも農場の両親と兄弟がいる、彼らは私を最悪の場面では、何とか「受け

止めて」くれるに違いない。決定的だったのは、ちょうど日本から故郷に帰ってきたある宣教師の情報だった。その人はまず、私の無遠慮な冒険心を喜んでくれたのだが、どことなく憂い顔で、向こうで未完成のままにしてきたらしいことにこだわっている様子だった。

もともと私は自分が日本へ「行く」ことを、かなり以前から心に決めていた。私のチューリッヒ大学の尊敬する教授ハンス・ウェーアリ博士は、海外の滞在経験があれば、スイスでの1,2年後の私の就職の見通しはよくなるに違いないのだがと、私にほのめかしていた。彼は当時既に私を国民高等学校の講演者に向ける可能性について語っていた(チューリッヒの国民高等学校は大正11年（1922）当時は、まずそう簡単には入れない所だった)。それから私はコラー先生夫人(注[2])と知合いになった。彼女は大正12年(1923)の春、3人の子供たちを連れて、再び日本に滞在している夫の所へ旅立とうと思っているところだった。何よりもまず私の両親にとっては、私を他のスイス人に結び付けるべきだと知っていたら、私をその人に引き合わせるのは容易いことだったと思う。奇妙なことに、この糸は後に私をさらに引きよせた。その2年後、私は日本における長年にわたる仕事の最中に亡くなった札幌のコラー先生の後継者になったのである。

大正12年（1923）の正月近くに、私の学位論文は印刷が終わり、引き渡された。スイスでは当時生まれたての歴史学者や地理学者にとって、活動分野を見つけるのは容易なことではなかった。（或いは、おそらく「野性の呼声」に感動し、僅かしか努力しなかったからだろうか？）要するに、年が明けてすぐ私は日本郵船会社の汽船「榛名丸」を予約し、大正12年（1923）の5月1日には日の昇る国の土地に上陸することになったのである。

私には故郷の仲間みんなと別れることは簡単ではなかった。しかし、最初の日から私は感じていたのだが、数千ｋｍの距離も私の愛する人々との結びつきを損なうことはないであろう。恐らく私は既に予感していたのだが、人生において本当に頼りになる家･家族･村･友人仲間・祖国などあらゆる結びつきは､そのような荷重によって初めてより確かなものになるのである。両親や兄弟姉妹たちは、私の思考の中では絶えず近くにいた。母は私を脅かす危険や厄介なことにはそのつど気づいているように見えた。母はしょっちゅう説明しながら、防ぎながら、私を助けてくれた。小さな故郷の村の住民すべてに対して、いつも私の特別の愛情が向けられていた。私は今もなお学校の校舎の小さな銀色の鐘の音をいつでも聴くことができる。この耳に残る特有の余韻は私を快活にし、忠実にどこへでも付いていった。

大正12年（1923）3月のある日、両親と一緒に古い四輪馬車に乗って、グリューテルランクの辺りへでかけた。そして父の家とヘルマーツウイルの小塔の見納めをした。でも私はやはり心の中の古いしこりが痛むのを覚えた。チューリッヒでは私は友人たちとしばらく共にいた。そこではヘルマーツウイルでの別れの辛さはたちまち吹き飛んでしまった。友人たちはそれぞれ私の広い世界への飛翔を羨んだ。嬉しい自慢の感情が蘇った。子供の頃の夢が、そう、本当になるのだ。私がいま思い切ってしようとしている日本の「町」の空しさへの恐れは出てこなかった。後になって初めて、私を外国でそのように早く「居心地よく」させたものがはっきりした（私は既に2年前にシチリアとチュニジアで何かそれらしきことを感じていた)。生活様式の最も原始的な単純性と家柄・地位・資本に対する偏見のなさである。これは外国に行く若いスイス人にとって金で買えない必要条件である。私は父と母の両方に、また堅いヘルマーツウイルの基盤に感謝する。我々兄弟姉妹は、よい心の持ち主である他人はみな、我々と同等の兄弟だということは確かだと感じ取っていた。心の中の親切は、非常に繊細な感情を持つ原始人は最初の挨拶のときに感じ

[2] コラー先生夫人：マックス・ヒンデルの妹。ハンス・コラーはチューリッヒ出身、明治41～大正14年北大予科ドイツ語教師、北海道に初めてスキーを紹介した。

取る。そのような把握については、日本人はまさに第六感を持っている。

技術者としてスペインに行っていた大学学友会の仲良しの友人と一緒に、私はジュネーヴに行き、そこでコラー家の人々に会った。その家族と私は一緒に旅行に出かけることになっていたのであった。我々はまた楽しい半日をジュネーヴに住んでいる学友と過ごした。彼は2年後に私の例にならい、同様に日本へ渡った。

それから夜行列車でマルセーユに行ったが、そこにはもう日本郵船会社の「榛名丸」が着いていた。大正12年（1923）の復活祭直前の日曜日に、私は私たちの旧大陸に別れの挨拶をした。

（後略：船内ではスイス人と同室になり、食卓ではコラー夫人の家族とも一緒になった。日本人の旅行客も多く、コラー夫人の日本語が巧みだったために、航海中日本語を学ぶこともできた。）

第5章 北海道、クマの棲む島（概 況）

我々の地図書や地図では、この日本列島第2の島には、まず例外なくYezoまたはJessoという名がついているが、日本ではこういう名前はもう長いこと使われていない。面積は約78,000平方粁、つまりスイスの二倍の大きさである。しかし、人口は307万人（昭和10年）で、人口密度は平方粁当たり約40人と、日本の平均値181人に比べて非常に低い値（昭和12年）である。

島の地理的な拡がりは北緯約41度から45度の間にあり、これでいえば中部イタリアのナポリからトリノまでに相当する。しかし、気象条件はアペニン半島よりも明らかに厳しく、住む人の数が少ないことも、ある程度それで説明できる。次の表で北海道の首都札幌と、我々がよく知っているチューリッヒとベルリン（これらはほぼ同じ）の気温を比較してみよう。

また、札幌の年平均気温は欧州中部よりも若干低めでさえある。寒暖両極月の平均気温は、欧州中部が札幌よりも最寒月で6℃高く、最暖月で2～3℃低くなっている。さらに北方（旭川）ではこの年平均気温の差はむしろさらに大きくなる。吃驚するほど寒い冬と暑い夏には、何よりもまず二つの原因がある。一つは寒流で、親潮（千島海流）が北海道に沿って北緯40度まで南下してくる。一方、巨大なアジア大陸の影響で両極の値が顕著になる。年間平均降水量は、北海道は1114mm、札幌は1043mm。これはチューリッヒの1070mmとほとんど同じだが、ベルリンの557mmは、ちょうど半分の量である。北海道の降水量のうち、かなりの部分が雪として降ってくる。例えば札幌（ツーロンの緯度）では昭和4年（1929年）に1mの雪が積もったのを確認している。

都市名、緯度	平均値（℃）		
	年	最寒月	最暖月
チューリッヒ、北緯47度23分	8.5	11.4	13.4
ベルリン、北緯52度30分	9.0	10.3	18.8
札幌、北緯43度04分	7.0	16.3	21.0

さらに、最も重要な都市への入植であるが、その人口を記しておこう。（昭和10年（1935）の統計）

函館207,480人　旭川91,021人　札幌196,541人　室蘭65,095人　小樽153,587人

これら5つの都市にこの島の住民のおよそ4分の1が住んでいる。旭川を除き、すべて南西部の都市である。

この島の山岳誌の姿は、長く延びている本州とは異なっている。大きな、南西部が強く延び出した四角形

の中心に2200mの山頂があり、その下に石狩岳、十勝岳、大雪山系が優位を競っている。そこから北西方、南東方、東方へ山脈が走っている。南西の半島（標高1500mの山頂がある）は山地だが、本島とは、わずかに海水面を上回る程度の標高の低地で繋がっている。

活発な火山活動は、特に島の三地域で盛んである。一つは前述の南西半島部、噴火湾の周囲(駒ケ岳・有珠山・登別・樽前山・恵庭岳・蝦夷富士が活動している)、そして島の中央部（十勝岳・旭岳等々）、もう一つは東部（阿寒山群・アトサヌプリ）である。一連の噴火が最近毎年のように発生している。樽前山（大正6年）、十勝岳（大正15年）、駒ケ岳（昭和4年）が鮮明に思い出される。温泉は無数にある。今日なお活動している火山の近くだけでなく、長らく活動を停止した山頂の麓にもある。おそらくいつも強烈な印象を受けたのは登別温泉で、「地獄谷」には沸騰しているような97℃の熱泉がある。

北海道は本州とは津軽海峡で隔てられている。海峡の最も狭いところは20kmしかないが、青森と函館は広く隔たり、それぞれ深く入りこんだ湾に面してよく保護されており、国有鉄道の連絡船が通っている。毎日美しい船が何度も往復し、4時間半で連絡している。北方にはラ・ペルーズ（宗谷）海峡（40～46km）が北海道と樺太の間を隔て、ここも国鉄の連絡船が通っている。北海道の北に延びている部分は樺太と共に日本海をオホーツク海から隔て、北海道の東に延びる部分は千島列島と共にこの海を開けた太平洋から隔てている。

北海道島の歴史は、当然それほど遡らない。気候がよくないことと野性的なアイヌ族のみが住んでいたため、長い間日本人という亜熱帯の民族からは遠ざかったままであった。本土からアイヌを完全に駆逐して、初めてこの島への関心が高まった。そのうえ、他の民族が日本国の北方の境界線はどこなのかと気を配っていた。ロシア人である。これは既にピョートル大帝の時代から始まっており、極東への探検隊を派遣し、アムール川流域やカムチャツカの遊牧民族を支配下に置いていた。その際、ロシアが新しい世界を目指して、ベーリング海やアラスカの方向に突き進もうとしていた時、およそ1720年頃から、ある明らかな傾向が続いていた。それは、カムチャツカから千島を超えて南方の日本に到達しようというものである。日本のことは、ヨーロッパでは既にオランダ人によって知られていた。ピョートル大帝は無駄にオランダに学校を作ったのではないのである！樺太もまたロシアに占領された。それから1800年頃に、彼らは北海道を窺った。既に、たいした抵抗にも逢わず、千島列島を支配下に置いていたのである。クルーゼンシュテルンによる世界大周航が、とりわけこの地域、特に北海道についての新しい知識を得るという目的にも叶っていた。クルーゼンシュテルンはこの島の大部分を明らかにし、目視できる山全部と航行できる湾の全てに、彼の同僚と共に名前を付けた。それも彼の名高いフランスの先駆者であるラ･ペルーズがすでに多くのことを探り出していた。1811年ゴロウニン船長は、この航海を有利に終わらせる筈だったが、国後島への上陸の際に彼のみが投獄され、さらに2年、函館と松前に投獄されていなければならなかった。彼と友人たちはその回想記に、土地と人間について興味あることを詳細に載せている。しかし、それによって日本人は北方が騒がしく危険だと目覚めたが、長崎のオランダ人たちもロシアとその企てについて多くの価値ある情報を日本人に伝えたことであろう。　19世紀になって、北海道には次第に多くの日本人が移住するようになったが、気候の不利なことが、今日でもみられるように、再三政府の計画を妨げた。しかし、19世紀の後半と明治38年（1905）との二度、ロシアの影響が跳ね返された。千島列島はロシアにとられ、さらに南樺太の一時的な損失もあったが、これは明治38年の日露戦争の後に再び確保された。

気候的にあまり有利でないことが、この島の「経済的利用」もまた困難にした。温かい地帯を指向している日本人は、ここで温帯地域の人間がほとんど知らない困難に直面する。何しろ直接の利用可能性ははっきりしているので、彼らはとっくに一般的な興味はあったのである。狩猟や内水面での漁業はあまり収穫

が上らないが、「遠洋漁業」や河口での漁は著しいものがあった。寒流と暖流とがぶつかり合うところは地球上どこでもそうであるが、ここでも親潮区域の南縁にあって素晴らしい量の漁獲ができる（地球上で最良の）基盤があり、熟練した日本人によって漁獲される。ロシアの主権が及ぶ地域であるカムチャツカにさえも、同等の権利をもつ一連の漁業基地が年々増え続けている。主にニシン・タラ・イワシ・サケ・マスであるが、クジラやカニ・イカ等々もまた獲れる。遠洋漁業と沿岸漁業はいずれも重要で、年間5千万円から1億円の漁獲高をあげている。北海道の北部沿岸はすべて漁村で占められ、大きな港からは近代装備の漁船がアリューシャン列島やベーリング海への何か月もの航海に出航する。

もちろん元来北海道の「森林」も大きな価値のあるものであった。しかし、まさに林業経営において二度と回復できない失策が演じられた（注[3]）。しかしこの島の北部や東部にはいまなお広大な立木地があり、現在は大切に保護されている。ヨーロッパトウヒやカラマツ、シラカンバが主な樹種である。一方、どうしようもないササ類が下生えにあり、非常に不利な結果をもたらしている。鉱山業が不幸にも森林にする択伐については、すでに指摘したとおりである。計画的な利用の際には、北海道の森林からは多くを持ち出させる。昭和15年（1940）の戦争までは、北海道に外国の木材輸出企業が立地していたが、次第に日本との競争によって締め出されてしまった。ここ十数年来、非常に生産力の高い製紙工場群がこの島で操業をしている。

「作物栽培」は大きな困難性に当面している。日本人はここさえも米を栄養源とはしないであろう。苦しい労働で開墾しなければならない。強靭なササが開拓者に激しく抵抗する。新墾地では、正規の米の単収をあげるまでに厳しい労働がほぼ8年間は続く。米の生産に適する地域はそう多くはない。石狩南部（苫小牧から札幌・岩見沢まで）の低地とおおむね小河川の沢である。北海道では降水量が少ないから、人工かんがいによって水を補う必要がある。状況は穀物生産の方がより有利であるが、なお集約利用に意を注いでいる日本人の間では、これらは非常に少ないようである。目下のところ、コムギ・ライムギ・オオムギ・アサ・トウキビなどが、比較的狭い範囲に作付けされている。テンサイも研究されている。バレイショは今日北海道では既に一般的な栄養源であるし、インゲンも長いことそうであった。畑作が盛んになる可能性は空間的に非常に少ない。温帯に住む人類であれば、恐らく日本人よりももっとよく土地を利用し尽くすと思われる。

日本人は「家畜飼育」をあまり好まない。特に仏教徒がそうである。理由は宗教の掟で動物質の栄養を遠ざけなければならないからである。それには、厳格に受け取ると、牛乳もバターもチーズも鶏卵等々も含まれるのである。しかし､実際面ではこの厳しい気候が要求するので、既に多くのためらいを克服している。肉・牛乳・バター、そしてかつては嫌われていたチーズでさえも消費量は北海道で著しく伸びている。北海道帝国大学農学部と北海道庁では試験農場における研究によって、かつてはササで覆われていた林地の利用を促進するよう絶えず努力している。しかし、この戦いは厳しいものである。クマイザサが土地の周りで執拗に抵抗する。一世代ではなかなか捗らない。特に大切なのは正しい家畜の選択である。というのは、どの種類もこの飼料に辛抱できるとは限らないからである。しかし、ここでも試験場が非常に有用な仕事をしている。比較的多いのは（概して日本では）馬の数である。軍隊がこれまで有用な品種の育成に大いに力を入れていたからである。羊の飼養はそれほどでない初期の状態のままであるが、道庁ではこれも利益が上るように研究している。

「間接的利用可能性」（注[4]）は北海道では土壌評価により強く決められる。しかし、この存在は悲観

[3]明治末に坑木に利用する為に大規模な森林伐採が行なわれた
[4]地下資源のこと

的である。日本で最も優良とされている夕張と美唄の両炭鉱を除くと、実際上何もなく、中でも鉄がない。それで重工業は問題外である。しかし今日北海道で例えば室蘭のようにそれが存在しているのは、導入の際に国防のような特別な利益が同時に問題になったからである。だが北海道では食糧産業(乳業や水産業を手はじめに)、木材加工業、製紙産業、化学・技術的な産業などを発展させることができると十分に期待できる。というのは石炭のほかに電気も使えるのである。この島の位置は、遠距離交通（中でも小樽港を経由する）の便はわるくない。また、鉄道網は既に充分に行き渡っている。しかし日本の他の地域と同様、道路は遺憾な状態である。

こうして概観すると、北海道への移住の可能性は総じてそう悪くはないということが判る。まじめに考えなければならないのは、日本人の移住者に不向きな気候条件、或いはまた恐らく、住居や衣服、食物などの面における日本人の本来の生活様式への頑固な愛着であろう。北海道ではまだどこでも簡単な木造家屋にひどい暖房装置をつけている。したがって病気になることがしばしばあり、結核もひどく蔓延している。栄養が十分でない身体は抵抗力が小さい。南の島から北海道へ移住者としてやってくる移民の場合にいつも同じことが起こる。一回目か二回目の冬を越した後に、可能な場合はその家族は南に帰って行く。これはほとんど一般的に起こることであるが、もちろん例外はある。

北海道への最後に大移住が起きたのは、大正12年（1923）の関東大震災の後であったが、東京や横浜で家も生計の道も失った無数の家族が北海道に幸福を求めて渡った。自分の手元には引揚者についての公式の統計値を持ち合わせていないが、地震の被害者の半分は再び自分たちの故郷へ戻ってしまったと思う。北海道にいて快適だと感ずるのは、いつもまず日本人の新しい世代である。今日では父親や祖父たちよりも息子や孫の方が北海道で住みやすいと感じていることは確実である。彼らは他の日本人のように東京の吸引力に負けることはあまりない。気候や新しい住宅一食事内容は後の世代の身体の特徴に現れている。北海道人は南方の兄弟よりも逞しく、眼の色や髪の色はむしろいくらか淡い。たしかに国境を越えての移住には長い時間を要するであろう。「人口の重心」は今日石狩平野にあるが、ゆっくりと、北の方、島の中央部に向かって移動して行くであろう。

私たちはここで初めて日本の人口膨張にみられる要点に触れるが、日本人には厳しい気候に適応する可能性がかなり欠けている。朝鮮や本州北部を通って、非常に鋭い気候の境界線が通っている。亜熱帯から温帯や寒帯を区分するものである。その夏と冬の気温の平均値は随分違う。日本における人口圧力が大きいにも拘らず、この境界線の北方には控えめな人口密度しか見られないが、そのことはこの地域は北海道を含めて日本人に適した空間に属し得ないということを示している。

第7章 学校と友人たち

北海道が発展していくにつれ、札幌に北海道帝国大学が設けられた。明治9年（1876）、当時札幌にあった開拓使によって札幌農学校が誕生した。もちろん開拓の仕事に必要だったからである。アメリカ合衆国から幾人もの熟練した教師たちが招かれたが、その中の一人W・クラーク博士は、創立当時における真の指導者であり、農学校の精神的目標であったとされている。この教師のお蔭でプロテスタントのキリスト教が北海道の指導者層の中に入り込むことができたのである。生徒の多くはクラーク博士の信条を受け継いだが、初期の生徒たちの中には、後に大学総長を務めた男爵佐藤昌介博士、日本の指導的な植物学者の一人である宮部金吾博士、国際聯盟の事務局次長を務めた新渡戸稲造、日本特有の無教会を主張し推進した内村鑑三らがいる。

植民地だった北海道は、いずれ完全な主権を持った日本本土の一部になると想定されていた。だから、この国第2の島の最初の学校は、当初から発展する前提で、第5番目の帝国大学になる予定だった。そのような学校は、すでに東京・京都・仙台・福岡にあった。その後、札幌農学校は仙台の東北帝国大学農科大学を経て、大正7年（1918）に北海道帝国大学として独立した。当初は農学部のみだったが、まもなく大正8年（1919）に医学部、大正10年（1921）に工学部、そして大正13年（1924）には理学部が加わった。大学は政府によって充分に整えられ、さらに増設する予算も用意された。急速に発展していた札幌に農場を所有していてその価値は騰り、加えて道内はもとより樺太・台湾にも広大な演習林を持っていた（注[5]）。

特別な組織として、この大学にはいわゆる「予科」があった。北大の後に日本帝国の第6番目の最高学府として創設された台湾帝国大学も同様だった。この予科では全ての学部に進む学生が3年間学ぶことができた。「予科」では、学生たちは将来進むべき主要な学問分野別に分類され、ちょうどアメリカのカレッジのようであった。中学校を終えると、学生たちは予科またはそれと同等で独立の高等学校で11年目から13年目までを学ぶ。外国語の授業は、医類と農類では特にドイツ語の時間を充分に与えられていた。ところで、北海道帝国大学予科では、私はコラー先生のあとを継ぐことになっていたのだった。

札幌に到着した日のことは、スイスへ戻った後もなお、忘れることができない。それは駅で出迎えの儀式があったということよりも、むしろ大きな火事のせいであった。最初の晩に起きた火事のために、木造の家々が並ぶ町の一区画が灰儀に帰してしまったのである。この恐ろしい印象も、まもなく新しい出来事が次々と起きたので、だんだん薄れていった。

学校では毎週一両日の休暇をくれたから、あちこちへ訪問したり、買物をしたりすることができた。住居の問題はすぐ解決した。コラー先生の義理の兄（注[6]）が自分の住んでいる素敵な古い庭の中に、非常に面白い、穏やかな日本ではどこでも通用するような家を一軒建てていた。彼は私にこの家を買わないかと提案し、取引は成立、一両年、私はこの「円い家」（注[7]）に住んだ。基礎は正十六角形で二階建て、屋根は非常に広い三角錐をしていた。家全体が柾張りで、屋根もそうだった。ヒンデル氏こそ日本に柾張り式住宅を導入した人だったのである。しかしその後「円い家」の屋根は、大雪が降った時に滑り易くするため、トタンで葺き直された。一階は非居住区で、収納庫とか、浴室、木工室、作業場で、二階は八角の主室の周りに四角室が四つ、六角室が四つ配置されていた。六角室では壁面に棚が巧みに作りつけられ、平面図は同様に規則的な形をしていた。　これら小さな部屋からの外の眺めはそれぞれ違っていた。古いマツ・カエデ・イチイ、そして特に無数のアヤメが生えている人工の池が椅麗に見えた。後になって大学が外国人講師用の官舎（注[8]）を新築したので、残念ながら、この家を去らねばならなかった。

私の雇用契約が正式に成立し、予科での活動が始まった。私は先輩が遺していった考え方に厳しく制約された。私はあらゆる分野で手助けができなければならなかったのである。
海外では特にそうだが、スイス人は何でも出来ると思われていた。ただ単に外国語を知っているだけではないのである。スキーも滑れるし、岩登りもできる、時計や機械の構造も説明できるし、チョコレートの作り方、コンデンスミルクやチーズやスキーワックスの製法等々も知っているのだ。「若い時に習っていたから何でも知っている」ということになっているのだった。一、二の点で私はこの「期待」に応えられなかったが、概ね学生との間の関係はすぐに福島高等商業時代よりもずっとよくなった（注[9]）。もちろ

[5]朝鮮、和歌山県にもあった。
[6] マックス・ヒンデルのこと
[7] ヒンデルが1924年北11条東1丁目に建設した「東光園円い家」と呼ぶ16角形の木造2階建ての住宅
[8] 北大北13条門を入って左側、医学部基礎教室と向かい合う位置にあった。15ページ写真(25)参照
[9] グブラーは北大へ来る前、福島高商で2年間教鞭をとった。

ん私が教えていた500人の学生の中では、とりわけスキー部や山岳部の仲間との付き合いが深まった。その中の幾人かとは今でも強い友情で結びついている。

ドイツ語の授業、特に医類の授業は熱心にやった。非常に不利な前提の下で多くの成果をあげた。発音の難しさが日本人を悩ました。ＲとＬとを取り違えるので（「唇」は「肋骨」となり、「草」が「ガラス」に聞こえ、「樹皮」と言うべきところを「菩提樹」と）、それらによる最悪の誤解が生じた。作文を初めて作るときは全く表現との格闘である。私は大勢の学生の中で一人、いくら感謝してもたりない若い日本人がいる。初めて試みたドイツ語の作文について語った人である。この場合もまた最初からやる気満々である。まあ、失敗の危険はもちろん大きいが。おおむね、私たちはよく理解しあっていたが、学生たちはいつも私をある程度信用しており、言葉・種族・文化における眼に見える障害を超えてしまったことを私に示してくれた。ここに二十歳前後の青年の自由作文の一例を紹介しよう。彼はたいへん率直に書いている。「・・しかし私はいま思うのだが、彼ら（つまり外国人）に対する私の考えは、少なくともドイツ語を話す人々とは合わないと思う。というのは、おそらくドイツ人よりも日本人によく似た民族はいないからである。. . ある時、秋の散歩の帰り道で、彼らが静かに楽しんでいるのを見た。我々がすれ違った時、彼の後ろにいた夫人が私に会釈したのを見た。そのとき、私にはその家族がドイツ人本来の典型だと思えた。・・着ている服は流行おくれのものだったし、靴もあまり上等ではなかった。その夫人が着ていたチョッキをみて、日本の家族にあるような彼女の家庭での幸福をなんとなく感じた。‥彼らは我々には時折カトリックかピュリタンのように見えた。彼らは喜びとか怒りとかを滅多に面に現わさなかったが、我々に劇や小説を読み聞かせてくれる時には、いつもあらゆる外国人に共通な声や表情を感ずることができた・・・」。

特に印象に残ったのは、いつも短くほとんど儀式といってよい学校式典、例えば新年、天皇誕生日、その他国家的祝祭日であった。全学の教師と学生は約2000人であるが、時々学校の大ホールに集合する。そこには既に天皇・皇后の写真（普段は耐火性の小さな祠状の建物の中に納められている）が飾られている。勲章と制服を身にまとい、きらびやかに外国人教師が燕尾服かフロックコートにシルクハットを手にして現れる。ちょうど一分後、学部長たちに囲まれて、総長が入室する。彼等も同様に階級に応じた金ぴかの制服に勲章と刀を帯びている。全員が起立する。体操教師の指揮で国歌「君が代」が歌われる。斉唱で歌われるこの聖歌のような旋律はとても深い印象を受ける。それが終わると総長は机の前に進み、真白な手袋で天皇の文書を持ちあげ、その巻物を開き、祭りの唄のような声で明治天皇の教育勅語を読み上げる。その間、全員は頭を前に垂れたままである。・・再度号令がかかり、全員の頭が下がる。天皇の御真影の前の幕がおろされ、同様にゆっくりと式典後に再び持ち去られる。この静かな表敬に、新時代様式の声高な表敬が続く。総長が天皇・皇后両陛下に「万歳」を三唱する。全員がそれに和し、式は終わる。この一連の行事は約10分足らずの間続くが、参加者にとっては常に10分間の敬虔な祈りで、めいめいが真に参加するのである。尊敬されるのは天皇個人ではなく、彼は原理を具現化するのであって、天皇はおそらくまさにそのために神聖であったし、神聖であるのだ。この国民の焦点でいつも統一されることは、途方もない力となって表れる。それはこの短い時間の間に私にもはっきりと感じられた。

それから全く特別な出来事の一つとして、我々の学校の創立五十周年記念行事があり、大正15年（1926）に始められた。天皇陛下の弟、高松宮殿下がこの祝典への来賓として札幌に来られ、非常に印象的な準備をした。卒業生の有名人たちがかつての「母校」に迎えられ、その初期の時代に知り、決してその魅力を忘れなかった学校とエルムの町の賞賛を熱烈に受けた。饗宴、祭りの会合の移動は繰り返し行われた。学校の運動部はすべて特別な行事を行った。

記念祭という祭典的な大波がなんとか静まるとすぐ、私たちはもとより、日本中が新しい天皇の即位式

に向けて準備を始めた。現在の昭和天皇は皇太子の時に一、両年の間、病気の父天皇に代わって摂政を務めていたが、いまや一年この方、日本帝国の出来事を彼自身の名で主宰することになったのである。服喪の年は終り、日本中が新しい時代の始まりを祝福した。この機会に私たちの総長（注[10]）は、既に国務大臣級の位階を持っていたが、男爵という世襲の華族階級に列せられ、当然ながら、再び饗宴が開かれた。また、北海道庁長官は我々外国人教師を地方の即位記念行事に招待した。それにはまた、わずかながら領事館の代理人やそのほかの指導的な外国人たちも招かれた。日本人は祝祭の催しについてとてもよく理解している。

すでに私の前任者とそのアメリカ人の仲間が始めていたことであるが、学生たちを相手に「金曜日の夜のオープンハウス」というのがあった。これは、教師たちと学生たちとの接触を促進するのが一つの狙いであるが、また個々の或いはいろいろな状況をドイツ語で会話させるのも狙いであった。皆がそれを私に続けるように願っていると日本側からの示唆があり、私は喜んでこの麗しい真に範とすべき慣例を受け入れた。しかし、会話を軌道に乗せたり、面白いものに仕立て上げたりするのは、そう簡単ではなかった。他方、何度も誤解を正し、あちこちと意思の疎通を図った。

私の最も好きな客人が登山家たちやスキーヤーたちであるのは当然だった。スポーツで喜びを共にし、心配を分かち合った間柄である。この若い人たちは私の故郷が好きだったし私も彼らの故郷が好きだった。とりわけ皆がそれぞれの故郷を好きだった。私たちは新しい経路で一緒に旅行することを考え出し、新たな装備の対象を見出し、地図を修正し、山小屋を計画した。それでまた私は、スイスからシュタイグアイゼンやベルグナーゲル、アイスピッケル、軽いテントなどを持ってこなければならなかった。SAC（スイス・アルプス・クラブ）のUto支部（注[11]）のクラブヒュッテについての市参事会のKruckの資料（注[12]）も日本語に翻訳しなければならなかった。またある人がグリンデルワルドの歌の歌詞と楽譜を欲しがったし、「美しきベルンの高地」のも求められた。指導的な日本の登山家、例えば槙有恒のような人は、故郷でスイスの美についての教科書を配布していたし、私たちのアルプスの熱狂的な賛美を歌っていた。それらの文は最近日本の山岳会で読まれた。

この人たちに比べると、他の日本の山友だちはずっと寡黙であるが、しかし一たび何かを語ると、それはとても価値が高いものであった。医学部解剖学教室の山崎春雄教授はその一人である。彼は第一次世界大戦の時にチューリッヒで医学を学んでおり、彼がチューリッヒの町の細かいことまで知っているので、私はよく当惑したものである。彼は素晴らしいドイツ語を話した。幸いチューリッヒ地方の方言はあまりうまくはなかったけれど。彼が一番熱心だったのは狩猟だった。しかし二番目は登山、とりわけ冬の登山だった。彼とはずいぶん一緒に行動した。共にスキー術を学び、同じ程度にまで上達した。私たちはテレマークをやる若者やスケート様の滑走をするスキーヤーたちを同じように軽んじた。なぜなら、私たちは騒々しいスキー技術をやっていると、景色などはもう眼に入らないと思っていたからである。山崎教授は前述のKruckの文書を翻訳したし（註[13]）、札幌近郊の山小屋の建設に著しい貢献をした。他の人に山や自然への愛情を起こさせ、支援することについては、おそらく惜しみなく実行したといえる。よき友人としての交際は、後になって心からの親友関係に発展し、家族同士がお互い非常によく理解し合った。およそ10年前、山崎教授は再度研究を続けるためにスイスにやってきたが、『あの人は自分の「医学的観察」

---

[10] 佐藤昌介（1856-1939）北海道帝国大学初代総長　東北帝大農科大学から北海道帝国大学への移行期の大正7年～昭和5年に総長在任、日本初の農学博士の１人

[11] ウト支部　チューリッヒ市を中心として組織したSACの中で最も有力な支部

[12] グスターフ・クルック　SACウト支部会員、当時チューリッヒ市の建設部長、長い間ウト支部の小屋監督の任に当たり、多数の山小屋を計画、自ら工事を監督した。

[13] 「山と雪」2号～8号「瑞西山岳会の登山小屋」グスターフ・クルック著

を主にグリンデルワルト周辺の「ブラヴァント療養所（注[14]）」でやったんだよ』と囁かれた。とにかく、彼は当時ふざけて手紙に書いてよこしたように、チューリッヒ大学の「北壁」すら登攀したのだった！

少し性質を異にするのは大学のスキー部長の大野精七博士だった(注[15])。博士は大学の産婦人科の堪能な主任教授だった。レース、ジャンプなどによく関与したが、彼は山小屋の問題にも率直な感覚を備えていた。結局、彼は日本における最も成功したスキースポーツの推進者の一人であると呼んでもよいであろう。反動が現れると彼はそれを容易に取り除くことに長けていた。我々のところでノルウェーの長距離とジャンプ（注[16]）に熱狂的な傾向が、回転競技者たちと余り強烈な対立にならなかったのは、何といっても彼の功績である。ヘルセット大尉の率いるノルウェーチームがノルウェーのスキー滑走の宣伝のために札幌に招かれてやって来たが、一方、我々日本居住のスイス人は、「ヘルヴェチア・カップ」を滑降と回転への持ち回り杯として寄付した。「本当のスキー滑走」から様々な解釈が生まれたが、大野博士はそれらを相互に接近させた。それで人々は意を安んじて昭和15年（1940）の冬季オリンピックの誘致に努めることができたのだった。これが札幌に決まったこともまた大野博士の功績である。しかし戦争が起きたために実施は中止された。札幌での最初の大シャンツェ（「大倉シャンツェ」）の建設は、まったく彼の仕事といってもよいくらいである。彼は出資力のある産業界の有力者に関心を持たせる必要性も理解していた。彼はまたヒュッテも建設し、非常に重要であった秩父宮殿下のご来訪にそれを組み入れ、彼の同僚の山崎教授と共に、冬季スポーツと山岳スポーツの雑誌（注[17]）の発行に尽力した。しかし、人間としてもまた大野教授は高度の資質の持ち主であり、親切さに加えてエネルギッシュであり、目的意識や熟練さも備えていた。

私にとっては全く異なる人、若き医学者が近くにいた。その人は私が初めて札幌へ来た時はまだ勉学中だった。向井一郎氏（註[18]）は現在海軍軍医であり、最後には函館の海軍病院長であった。もちろん彼もまた熱心なスキーヤーだった。いつも快活で、絶対に信頼がおけ、思いやりがあり、感受性が繊細だった。ドイツ語はあまり得意ではなく、最近10年間の彼からの唯一の通信には我々の子供の一人が亡くなった日付が記されていた！私たちは多くの喜びも味わい、悲しみも体験した。しかし私はその全てを感謝しつつ、誠実に分かち合ったと信じている。

学生たちと「OB」の全グループは、幾度もツアーに同行した。後には私の家内もこの仲間に入った。渡辺成三君はあだ名を「ムシャ」と言ったが（注[19]）、この若い人たちの中で私に最も近くにいた。千島の最果ての島までとか多くの旅行をしたが、私たちは「同じ釜の飯を食べ」た。彼とその友人の板橋君とは会津の武家の出身である(註[20])。さわやかな茶目っ気があり、陽気だったが、彼等の父親たちの名誉ある伝統への絶対的な忠実さも備わっていた。あるとき、私は千島へ向けて出発する「ムシャ」を駅でつかまえ、荒れ果てた島に後からやってきた植物学者が、意外な発見ができるよう種子を蒔きたいと願っていた彼に、花の種子の小袋を少々こっそり渡したのだった！このグループ中のもう一人、徳永君（注[21]）は私と一緒に台湾を横断したが、彼は忍耐強く、いろいろ面倒なことを全てはねのけてくれた。彼もまた私にとって

---

[14] サミュエル・ブラバンドのこと　グリンデルヴァルドの山案内人、槙有恒のアイガー東山稜初登攀はじめ、山崎、大野を含む多くの日本人のガイドを務めた。
[15] 大野精七（1885-1982）1912（大正元）年東大医学部卒、1924（大正13）年北大医学部初代産婦人科教授、第5代スキー部長、昭和23年北大定年退職後札幌医大初代学長、日本の競技スキー発展の功労者
[16] 複合競技のこと
[17] 雑誌「山とスキー」
[18] 向井一郎　医学部2期生
[19] 渡辺成三　大正14年予科入学、昭和3年農学部入学、昭和17年満州にて逝去、山の会会員
[20] 板橋敬一　大正14年農畜卒、昭和19年ハルピンにて事故死、山岳部創立時のメンバー、山の会会員
[21] 徳永芳雄　昭和6年農生卒　山岳部創立時のメンバー、平成3年逝去、山の会会員

はよき仲間である。植物学の舘脇先生（注[22]）は、東京の大地震で全家族を失われた方である。私もそうだが、いつも心の動きを広く推し量り、多くの場合に私に価値ある助言をしてくれた。彼はあまり多くの言葉を用いなかったが、小さいことも大きいことも、配慮してくれる場合には、いつも彼の友人の側に立って考えているなと私は感じていた。

札幌には当時かなり大きな「ドイツ人の集落」があったが、ほとんどすべてがフランシスコ会修道士で組織されていた。彼らは病院や女子の学校や司祭の神学校その他を運営していた。札幌の司教もこの教団に属していた。キノルド司教は日本の諸問題についての広い知識や明敏な意見によって傑出していたが、また、寛容な、言葉の真の意味で人情深い態度の方であった。札幌におけるドイツ人の布教活動は、恵まれた働きとして非カトリック教徒たちにも高く評価されている。

「プロテスタントの宣教師たち」の仕事も、カトリックのそれ以上に、より大きく細分化されていた。札幌には10から20ものいろいろな教区があったが、それらはしばしば意見の相違や対抗意識によって分離していた。しかし、プロテスタントの宣教師の下でもまた、いつも私欲のない献身と人情味のある活動をあえて実行していた。サラ・スミス女史は本当にささやかな出だしから50年間熱心に働いてここに学校を建て、小さな女子教室だったものを、北海道におけるこの種の施設としてはおそらく最良のものにまで拡げた。戦争が始まって彼女のアメリカ人の後継者「北星レディ」たちがこの土地を去らねばならなかったとはいえ、彼女の功績には文句なく一定の賞賛が続いている。バチェラー博士夫妻は、前述のように、全生涯をアイヌに捧げた人たちであるが、イギリスの布教団体の最もすぐれた代表者だった。バチェラー夫人は「ヴィクトリア時代」の生きた化身だった。彼女はこの快活な小帽子をかぶるのを決して断念しなかっただろう。その帽子で80歳の貴婦人が「あの古きよき時代」を回想できたのであるから。彼女の夫はいつもすぐに英国とスイスの間のちょっとした辛らつな口論をしたものだった。バチェラー博士の高度の正義感と不屈の精神は特に抜群だった。私は、ベンソン夫妻ともずっと継続して結びついていると感じている。アメリカ人の宣教師で、純粋のピュリタン、どんな時でも隣人に対して援助をする用意ができていた。ベンソン氏と私はとても仲良しだったが、宗教上の問題についてはお互い議論することはなかった。（彼は土曜安息日派の熱心な信奉者だった。）

外国人の同僚たちの中ではカリフォルニア州から来ていたエッテル氏を特に評価する。彼の祖先は恐らくスイス人だっただろう。彼は何も正確なことを知らなかったが、彼の血管にはインディアンの血が流れていると自慢していた。

よい勤め口のおかげで、北海道の拓殖事業の整備に携わった全ての国の代表者たちがこれまでやり遂げてきたよい功労により、札幌での我々外国人たちは非常に尊敬され、私たちの学校の指導はこの繋がりを本当に大切にしていた。

第8章 札幌周辺のスキー適地

札幌市は南西北海道の標高1400米までの高山が、広い石狩川河口平野に移行する地峡に立地している。しかし住宅密集地は交通不便な河口ではなく、海から約20粁離れた海抜15米のところにある。しかし、ここは小樽港にも苫小牧や旭川に通ずる国道にも連絡がよい位置にある。

この島の行政官庁がそのように北方に遠く移転したのは、拓殖事業をなるべく早く内陸部の方に進めようという堅い決意の表れだった。行政の中心は、確かに偶然ではなく、既に知られていたこの島の南西部の半島を跳び超えていった。明治天皇が政治に携わるようになった明治元年（1868）以降、東京ではこの

[22] 館脇操（1899-1976）　植物地理・群落学の権威、北大名誉教授、山岳部創立時の指導者、山の会名誉会員

北方の島を一層真剣に取り扱った。それから、明治3年（1870）に、目的意識が明確かつ視野の広い黒田将軍(後の首相)（注[23]）が北海道開拓使次官に任命されると、拓殖計画とその事業は急速に進んだ。顧問としてアメリカ合衆国のケプロン将軍（注[24]）が招聘され、黒田次官は明治4年（1871）合衆国へ研修旅行にでかけ、同じ年、着想豊かに帰国した。彼はまた大量の種子、農業機具、それに研究用の家畜さえも持ち帰ったが、彼がアメリカでなお気づいたことは「良い学校を設けなければならない」ということだった。開拓使の提言により、明治4年（1871）、政府によって札幌を北海道の新しい首都とすると布告され、行政官庁は当時まだ知られていなかった土地に移転することとなった。

明治8年（1875）には、札幌への移住人口は既に3000人を数え、それ以後急速に伸びていった。町はアメリカ流に計画された。住宅ブロックは直角に交差してどこまでも平地に延びる街路により互に区切られた。明治14年（1881）札幌ー小樽間の鉄道開通式には、天皇自らがテープを切った。札幌と日本本土との往来は、ずっと遠方にある室蘭を通らずに、小樽が北海道の中央部への玄関口となった。その後、函館ー札幌間の直通鉄道が開通し、「エルムの町」札幌は栄えていった。学校では数百人、数千人の若い人々が学んだ。

中でも、これら知識に飢えた教師や学生は、いつも森林がより豊かな内陸部に入り込み、この土地の知見を伝えてくれた。また彼等はスキーを学んだ。コラー先生がおそらく北海道に最初にスキーを持ち込んだのであろう。熱心に、教本を手にしながらこの木片の利用法を研究し始めた。町に隣接する周辺の雪質は、年のうち3ケ月間は理想的であるし、10～20粁西には標高1000米の山々があり、そこでは4～5ヶ月間良質の雪が積もっている。1000米も滑降できる所が、いわゆる市街鉄道区域に接しているのだ。大都市の住民がこれ以上良い状況を望めるだろうか？

札幌にはしかしもっと多くのものがある。この山岳地帯の中に定山渓温泉が湧出しており、スキーヤーたちはスキーを脱いで、雪の中ですぐ森の縁の屋外で大きな浴槽に浸ることができるのだ。小さな鉄道が札幌と、この目立たず、文明にはほんの僅かしか触れないが真に魅力的な小保養地とを結んでいる。

コラー先生の弟子たちは、北海道で最初の大学生のスキーヤーになった。1月には青山温泉（もちろんここにも温かい湧泉がある）の小さな旅館で、休暇を一緒に過ごした。そこでルターやとっくに忘れ去られた創始者たちにしたがって回転や飛躍を習った。同時にはっきりしないながらも、国産の有用なスキーワックスがないか探った。とりわけ、美しい友愛精神が育まれた。二重に重要だったのは、大きなツアーに山小屋が一つもなく、路線もなく、役に立つ情報も使えない土地だからだった。特に後の初代日本スキー連盟会長となった稲田男爵（注[25]）は、このコラー先生の最初の学生グループから輩出したのだった。

軽い緊張も生じたが、別に驚異ではなかった。スキー滑走の純粋な技術者たちは、スキーは冬季の登山という目的への手段であった人たちからは、いくらか斜に見られていた。この山歩きには札幌の便利な「電車区域」は最早充分ではなかった。彼等はもっと遠くに、古い山の森の上に、朝里岳、余市岳、天狗岳、ムイネシリの辺りの区域を開拓し、標高1000～1500米の山頂をあらゆる面から登って見たかったのだった。春先の長い日中のツアーであれば到達できたが、最良の条件の時のみだった。これら若い人々は大きな感激に充たされて頂上に立った。そこには全く新しい自由な世界が現れた。彼等は広く遠方を眺め、深くこの大きな島の内部に入り、新しい山を見出し、ずっとずっと・・・最高峰へ、十勝、石狩地域の噴煙を吐

---

[23] 黒田清輝（1840-1900）薩摩藩出身の政治家、北海道に屯田兵制度を導入。
[24] ホーレス・ケプロン（1804-1885）アメリカ第2代農商務長官、日本政府に乞われて来道、牧畜の導入など北海道開拓に尽力した。
[25] 稲田昌植（1890-1968）北大初代学長佐藤昌介二男、稲田家17代当主、男爵。北大スキー部創立時発起人の１人で初代主任、全日本スキー連盟初代会長

いている山頂へと進んだ。　そのように、スキーヤーたちは二つの特別な集団に集結した。スキーグループは、老練な産婦人科の医長、大野精一教授がその世話人である。また、山グループの会員は、山崎教授と栃内教授（注[26]）の周りに集まった。スキーグループはどちらかといえば長距離走行とかジャンプといったものを、スポーツの訓練として、多く練習した。後には、しぶしぶながら、スラロームとか滑降もやるようになった。もう一つのグループは、冬季の遠方へ「大旅行」をよくやった。テントと寝袋を持って山頂や山稜を極め、数日後には野生状態の体験によって強くなり、豊かになって帰宅した。両グループは明らかに対照的だったが、全体としてはきちんと調和がとれていた。まあこれは、それぞれに古参の教授たちが付き、よい関係を保っていたからであろう。学校の各運動部が教職者を保護者に持つという日本の制度は、私の観察では、まず好ましい結果をもたらしていたようである。

北海道に住んでいる日本人たちが山や森林にあまり好んで行かないせいか、旅行者が避難施設を見かけることは滅多にない。自分自身、つまり非常にかさばる内容を詰め込んだルックザックを頼りにするか、或いはーまもなく私たちは充分に探究するがー避難小屋を建設しなければならなかった。

幸いにも私たちはSAC(スイス・アルプス・クラブ)の部会が計算するようなそれほど高価な現金支出を必要としなかった。簡単な「山小屋」で充分だったのだ。私たちは屋根を葺いた板床の丸太小屋を考えていた。この建築のための材木は、林野当局がこの計画に興味を持つようであれば、小屋を建てるその場所で伐採することができた。私たちの大学を卒業した林務官は非常に大勢いたから、好意ある応対を当てにすることができたし、またそのことで失望することはなかった。コラー先生の義兄である建築技師ヒンデル氏は新しい山を探し求めたり、登ったりするのがとても好きな人だったが、既に軽川の上の最初の山小屋建設の時に、若い人たちに手伝ってもらい、彼らをベテランにしていた。山崎教授はクルック市参事会の文書「SAC Uto部のクラブヒュッテ」を日本語に翻訳し、それを指折の登山家向け雑誌に掲載していたから(注[27])、それを通して彼らの諸計画について若い人たちの理解を充分に得ることができた。大野教授は主に資金面とか他の障害除去のような重要な問題の交渉を担当した。

最初は、パラダイスヒュッテの建設から始めたのだが、これは軽川（注[28]）駅から約500米高い所に建てることにしていた。手稲山（約1025米）には冬でも登ることができたから、このヒュッテは必ずしも必要なものではなかった。登山は一日で楽にできたのである。しかし、このヒュッテはその目的を充分に果たした。多くの人々は、やっとヒュッテまで登り、白いパラダイスへ初めて踏み入ると、二度目の登行は簡単に決心できた。北海道の森林は彼らにとっては驚きではなくなった。神秘的な景観が彼らの上の方に開けたのである。最初の年、ヒュッテは毎日曜日満員だった。今はもっぱら日帰り滞在である。日本のスキー滑走の急速な発展はとっくにヒュッテを通り過ぎてしまった。

スキーグループが自分の山小屋を持った後は、当然山グループもまた自分の「拠点」を持たねばならなかった。それが「ヘルヴェチアヒュッテ」だった。第一に、旅行スキーヤーのための施設であるから、朝里岳一余市岳（標高1500米くらいまで）の広い地域を開放した。ヘルヴェチアヒュッテも、小樽と定山渓とを結ぶ自動車道路が開通し、ほとんどヒュッテの直前を通っているから、今日では不必要なものになってしまった。ヘルヴェチアヒュッテについては、後ほどなお若干書くことにする。

山小屋シリーズ「札幌周辺」、これは1926～1932年の間に完成したのだが、その第三のヒュッテには、他の建築主がいた。それは国鉄職員たちである。彼等はヒュッテの周囲に自分たちの領域を開拓するために奥

---

[26] 栃内吉彦　大正7年農生卒、山岳部初代、3代部長、愛称「閣下」、山岳部創立から10年間を部長として部の発展に尽力した。昭和51年没

[27] 「山と雪」2号～8号

[28] 現手稲駅

手稲にヒュッテを構えた(注[29])。 静かな、人里離れた森林がゆるやかな傾斜で百松沢山(三段)の分水界まで続き、それを上に越えてゆくと定山渓ラインに接がる。3, 4月には、しかし、恐ろしいクマの前足の新鮮な踏み跡によって慌ててはいけない。たいていの場合は、こちらが見つけるより先に、褐色の唸る彼らの方が人間を恐れるのである！

札幌市の南方、海抜900米のところに魅力的な小さな湖がある。周りは疎な樹林に囲まれてはいるものの森林限界に近く、そこに美しいこのヒュッテがある。空沼小屋である。このヒュッテには特別な歴史がある。天皇の弟君、秩父宮殿下が北海道にスキーをしに来たのであるが、殿下は冬の札幌近郊の山々をもっとよく知りたいと思っていた。その際、大野教授は一連の選抜した学生たちとともに、このツアーにはどこへでもお供していた。殿下はそのとき晴れた日を喜び、若い人々にヒュッテを一つ作ることを約束した。殿下は建設に際し、建設費の支払を除いてほとんど全てを彼らに委ねた。彼等は場所を自分たちで選び、主要な計画は自ら作成しなければならなかった。材木は皇室の御料林内には、どこにでも必要なだけある。空沼小屋の真近に美しい山頂が聳えている。ヒュッテの価値を特別に高めたのは、冬季の滑走がさらに南の方へ伸び、支笏湖岸まで達する可能性である。支笏湖は面積78平方粁の湖で、最も奥深い森林の閑寂境に囲まれ、岸には二つの活火山、恵庭岳と樽前山が噴煙を上げている。

似たような目的を二股ヒュッテ(注[30])が果たしている。一方、中山峠の軽施設（注[31]）は洞爺湖への中継点の役割を持っている。ムイネシリの東面に大野教授はヘルヴェチアヒュッテから朝里ー余市ームイネシリを越えて南への山稜渡りを楽にするため、自分の美しいヒュッテを建てた。上部白井川渓谷に小さなヒュッテを建てたのだが、これはおそらく避難所として考えられたもので、登山の入り口としてはそれほど役に立つものではなかったであろう。

私たちの札幌周辺のスキー活動地域図（注[32]）は二、三の傍注が必要である。それには植生区分は示していない。実際上、すべての丘陵、山岳斜面は森林で被われている。一番多いのはトドマツ林とシラカバ林である。それらの林床には、既に述べたようにササが通り抜けられぬほど茂っている。しかし、冬になると1米もの積雪が思いもよらぬ方法でこの面白くない状態を変えてしまう。よく公園のようなスキーゲレンデを眼の前に見ることがある。地図の道路網は昭和7年（1932）頃の時代に遡る。毎冬、樹木伐採者が新しい橇道を作るが、たいていはまた消えてしまう。重要なのはしかし、記入されていない自動車道路で、それは定山渓温泉と小樽とを結んでいる。それは定山渓から上流に向かってヘルヴェチアヒュッテに繋がる歩道とおよそ同じ経路を辿る。そしてここから北方へ向かい、朝里川の渓谷を北西に続いていく。

私は既に長いこと、支笏湖に接した活火山の一つ、恵庭岳に惹きつけられていた。それは日本海と太平洋との間の分水界にある。山頂は海岸から約25粁離れているだけである。同様に非常に活発な火山樽前山の上から、支笏湖と広い太平洋とを眺めるのは例えようがないほどのものであるに違いなかった。私の決心はすぐ決まった。私はスキーでそこまで行きたかったのだ。ークマの危険がそこかしこにー、しかし、それはー、二晩野宿するくらいの価値はあるものだった。

昭和3年（1928）の3月に、よく準備された計画を実現する機会が訪れた。豊平川の奥深く、定山渓の8

---

[29] 奥手稲山の家　1930(昭和5)年、札幌鉄道局が建設。戦後、北大に寄贈し、北大椀だ0フォーゲル部が管理している。
[30] 二股ヒュッテ　昭和4年帝室林野局が空沼入沢に建設。
[31] 中山ヒュッテ　昭和3年北海道山岳会が建設、昭和10年頃廃棄
[32] 原書巻末には札幌周辺1/10万のＡ3判地形図が添付され、それに山小屋位置が記されている。

粁ほど南に、大きな樹木伐採組合が冬季の仕事のために施設を整えた。それは川岸に沿った、きちんとした小さな柾葺きの仮小屋の集落だった。橇道が定山渓からずっと林を縫って付けられていた。その道を恐らく100頭ほどの馬が伐採された樹木の幹を曳いていた。私の親友である山崎教授はこれらの素朴な人々に私を紹介してくれていた。そして彼らに如才なく準備し、外国人の特性について何でも伝え、私にごく普通の誤解などに煩わされずにすむようにしてくれていた。冬季の散策の時に、私は豊平川渓谷の上流部から支笏湖に行けるルートがあるかどうかを探ろうと思っていた。いつも寝る時は一つの柾葺きの仮小屋に戻ったが、そこには私のささやかな食糧貯蔵庫が保存されていた。トナカイの寝袋やその他の装備一式もいつも宿舎に置いてあった。

「樵たち」は私を彼らの「地の果て」に心から歓迎してくれた。私はすぐ感じたのだが、彼らには厳しい不文律があって、私はそれに一番よく組み入れられていたのであろう。ある年長の男性がおよそ50人のグループの中で特別尊敬を受けているように見えた。彼は一番よいヒュッテに住んでいた（快適であるかどうかは別である）。彼はあらゆるものを帳簿につけていた。彼はいつでも銘々がどこにいて何をしているかを知っていた。彼はまた小型の社殿（神棚）の世話をしていた（人形の家よりも大きくはない）。それは天井の下に固定されていた。毎朝、彼がその下で祈っているのを見た。私は彼のそばに泊めさせられた。彼は客があれば出来る限り私を食事に招いてくれた。他の場所であれば、そういう招待を軽率に受けることはためらったであろうが、彼が開けっぴろげに親切だったので、すぐ信頼するようになった。私は後悔するものは何もなかった。ほとんど一週間の共同生活はとても快適なものだった。私は本当にこの「共同所帯」の充分な構成員であると感じていた。

朝早く起床して、洗面するために小川のほうに向かったとき、私は一度も樵たちから挨拶を受けなかった。そのことで私は最初、非常に驚いたが、すぐに理由が判った。ここには特別な慣習があったのだ。「お頭」が彼の口をすすぎ、少なくとも形式的に顔を洗うと、すぐ彼は私のそばにマットの上にひざまずき、頭をずっと下にさげ、重々しく「お早うございます」（Guten Morgenの丁寧な形）と言った。次に私が挨拶をできるだけ儀式風に返すと、食事への招きがそれに続いたのだった。まあ多くの場合、米の飯が避けられず、それに肉片の入ったおいしい汁がつく。（よく、ここでも予期せぬユキウサギが突然命を失うことがあった。）概ね、この食事の時間は私の期待以上のものだった。食事の後、私は自分のその日の計画をできる限り正確に知らせた。ここには一、二の丁寧な警告を入れたり、しかしその下にはまたきっと落ち着いた私の散策行のこの地方についての価値ある報告も付けた。

それから私は遠い、未知の、冬の景観の中へ滑走し、二、三の動物の足跡には出会うものの、滅多に人間の足跡には出会わなかった。漁岳からゲレンデを注意深く眺め渡すと、支笏湖へ到達するのは可能だと判った。中山峠の荒廃した郵便小屋から（新しいスキーヒュッテは後になって建てられた）、私ははるか向こうの方にもう一つの大きな北海道の湖、洞爺湖が眺めの端に比類なき蝦夷富士を伴っているのを見た。夕方には私の親切な宿の主人に不必要な心配をかけないように、いつも決まった時刻に戻っていなければならなかった。なぜなら、彼は私に完全に責任を感じているように、私にはよく感じ取れていたからである。－この素晴らしい自然の中で素朴な人々と一緒に過ごした遠い日々のことは、記憶の中にいつもなお特有の輝きを放っている。

私は、3月18日に私の大好きな宿舎を発ち、漁岳を越えて、恵庭岳と支笏湖（丸駒温泉）に向かう決心をした。この旅行は、15年後の今日では、札幌のスキー区域の一つになっているが、当時は新しいもので私にとっては大きな体験だった。

4時間かけて、ゆっくり登りながら漁岳（1318m）の頂上に到達した。まばらな森林を通して、突然新しい眺めが上の方に開けた。頂上には樹木がなく、そこからは太平洋の海岸線全体を自由に眺めることができた。眼の届く限りは人間の痕跡も住宅もなく、ただ森と湖と海と噴煙を上げている山頂だけが見えた。湖の向こう、恵庭岳の後ろに少なからぬ興味をそそる火山、樽前山が聳えていた。この山は明治42年（1909）に一夜で約100mの高さの円頂丘を突き上げたのである。支笏湖自体は火口湖で強烈な火山活動の証拠なのだが、今日では最早ほとんど噴火当時のことを正しくは理解できない。

漁岳の東山稜を下に向かい、それから幾分植生が豊か過ぎる恵庭岳への連絡山稜に辿り着いた。古い硬雪はうっすらと新雪で覆われていた。残念なことに、ここで貴重な時間を潰してしまったので、私は恵庭岳の頂上にはもう登ることはできなかった。（それはしかし後に再挑戦した。最高点の下の最後の100mはその上さらにかなりのよじ登りがある。頂上の北斜面には火山の蒸気の噴出口がある。）

暗くなる前に、昔から知られている斜面を通り、美しい森林内を滑走して湖の岸に着いた。それからたっぷり一時間かけた後に、丸駒温泉のひなびた宿屋の戸を叩いた。驚いた住人は私が漁岳からやってきたということを殆ど信じられない様子だった。主人夫婦は冬中行き来できずに閉じ込められているのだった。客は湖の東側から苫小牧への木材輸送軽便軌道が運転を再開する春になって初めて再び現われるのである。また、白人は毎年やってくるわけではない。しかし私はここではもう常客として扱われた。年とった宿の女将はとりわけ私が気に入ったようであった。この野性状態の中で快適なものとか美味しいものがあったら、彼女はいつも私にこっそりくれた。ある時は珍しい素敵な魚だったり、またある時は「うちのソース」の中のフキタンポポの茎だったり、広い森の中から取ってきた何かだったりした。彼女は宿屋の周りをはっきりと声高に管理していた。夫や息子には黙って狩猟に出かけるほかには、ほとんど何もすることが残されていないように見えた。彼等は実際しょっちゅう狩猟に出かけるように見えた。恵庭岳の周りには本当に野性のものがたくさんあった。そうでなければ私たちの学生がオコタンペの辺り一帯を「クマの踊り場」と名づけたりはしなかったであろう。

丸駒の温泉は、樹木に被われた支笏湖の岸近くから湧出しているが、そこはまだ湖の中なのである。板壁を越えて一跳びすれば、熱い温泉場から直接冷たい水の中に届くのである。こんな素朴な温泉はおそらく日本中どこにもないであろう。

クマの話は今回は何も聴き取るには及びなかった。恐らく私のりっぱな成果のお蔭で、森の中の実際の猟獣総数にどちらかといえば通じているとみなされていたし、問題の猟師の自慢話を感心して聞く聞き手以上のものにはならなかった。

次の日の朝、私はこの愛すべき場所を早々と立ち去った。苫小牧の軽便軌道が動いていないから、湖を渡ることには意味がなかった。それで私は北の方へ、大森林地帯を通って石山に向かわねばならなかった。この地域は私には全く初めての場所だった。向こう側を見通すことができない谷や低い山脈を、いくつも越えていくことになっていた。地図は明らかに不正確だった。期待すべきものとして、私はこう考えた。日没までには森の中にもっと奥深く入っているだろうから、一晩の野宿を気分転換に寝袋もテントもなしに一度やってみるか！　でも私は幸運だった。猟師の足跡だった。私は雪靴の幅広い跡をたどり、まもなくラルマナイ川の、上の岩がきれいに覆いかぶさっているところに出た。大きな枝が二、三本、吹雪への囲いのようになっていた。そこにはほんの数日前に誰かが寝たようだった。薄い掛け布団が一枚と以前はマントであったようなものが何かそこにあった、きちんと巻いて乾いた場所に置き、上には木の枝が若干かぶせてあった。こうした古着も今の私にはありがたいものだった。ほかの場所だったら私はそんなものに触りもしなかっただろうに！

まずこれで我慢できるようになった。私の足はルックザックが空になったので、しっかりと心地よく感

じた。私は願わしくない野獣を避けるために、自分のそばに小さな火を夜中燃やし続けた。

太陽が昇ると私は再びスキーを穿いた。そ して今度は急いで走り、確実に北の方へよりよく知っている地域へ進んだ。最初の人の気配のある小屋が現われた。一軒のまずしい農家で、お湯を王様の飲み物のように美味しく飲んだ。正午頃、定山渓鉄道の石山駅に着き、そこから電車で札幌に向かった。ささやかな問題が解決した。豊平川から支笏湖へのルートが発見されたのだった。

定山渓から札幌にかけてのヒュッテ群については、まだ多くの新しい区域が開拓され得る。疑いなく戦争になるまでに活発な熱心な札幌の学生たちによって、多くの地が探索されたことであろう。札幌からの「日曜日の行動半径」には、例えば小沢（函館本線の急行停車駅）の地域もある。いわゆるワイスホルン、ニセコアンヌプリ、チセヌプリ、イワオヌプリなどは登り甲斐のある山頂で、たいていは火山性のものである。周囲には温泉が豊かに流れている。－余市の南西の地域もまた私たちをいつも強烈に惹きつけた。残念ながら私たちはそこには最初の偵察には届かなかった。－留萌の山（札幌の北方）からは私たちの仲間が忘れがたい春の日々を感激しつつ戻って来た。－それから私たちは大きな火山湖である洞爺湖に接している山頂を歩き回った。確かに夏の洞爺湖地域は魅力がある。しかし第一に魅力に富んでいるのは活火山有珠岳（海抜725米）への冬季の登頂である。噴煙を上げている丸太のような山頂へは一寸したよじ登りが必要である。
室蘭からきた中学生一人と一緒に、私は昭和4年2月10日に最高点に到達した。（スキーの置き場は頂上の西下、標高約680mである。）私たちの登頂は冬季では最初であったそうである。しかし、おそらくホテルではそれをほんのお世辞で私たちに言っただけだと思う。噴火湾の眺めは例えようもないほどだった。－また、登別の上のカルルス温泉は、たとえ雪の量が必ずしも充分ではないにしても、冬に滑れる可能性がある。しかし、日中の疲労に対しては、豊かな温泉があって、その埋め合わせをしてくれるであろう。
札幌周辺のスキー区域は、この章の中ではその豊かなことの輪郭を示すだけに止める。進取の気象に富む乗り手や旅行者のように単純な人は、ここではその発見を内輪に或いは広く語るだけである。一度この広い森林の魅力の中に入り、二つの湖の間の山頂に踏み入ったら、それはいつまでも記憶の中に留まり続けるに違いない。

空沼岳より漁岳（1930年）
撮影　坂本直行

第9章 ヘルヴェチアヒュッテ

運命があるのは書物だけではない。ヒュッテにも運命がある！私たちのヘルヴェチアヒュッテは、今日ではもうかなり歴史的な施設になってしまったが、北海道では、本当に必要があって建設したこの種のヒュッテとしては最初のものだった。少し前にパラダイスヒュッテが建設されたが、それは単なる宣伝行為にすぎないと考えられていた。今日では私たちのヒュッテのすぐ近くを何と、車が通り過ぎて行くのだ！しかし、およそ8～10年の間、朝里岳や余市岳に登る人たちは、この施設を必要としていたのである。

もし広大な密林地帯に入りこもうとするならば、所持品を完璧にするために、重い荷物を背負って行かなくてはならなかった。寝袋、斧、2～3日分の充分な食糧などである。そんなに荷物があったら、冬の休日の大半は楽しみも半減してしまうのは明らかである。私の日本人の友人、とりわけ山崎教授と大野教授は誰よりもこの考えを持ち、札幌周辺の森林地帯に山小屋を帯状に設けようという構想を推進していた。

特に幸運だったのは、ヒンデル氏がこの土地で有能な建築専門家であり、その場所にふさわしい最善の解決策を提供してくれたことだった。彼はスイス山岳クラブなどのヒュッテを数多く知っていたし、北海道でも既に充分な建築実績があったから、建築資材の問題についても的確に言い当てることができた。共通の友人だった山崎教授と一緒に私たちが考えたのは、できるだけスイス様式のヒュッテを、なるべく簡単に、しかも安く建てよう、なおかつそれで目的に叶うものでなければならぬ、ということだった。ヒンデル氏と私は小屋の建設には避けられぬ現金支出を負担することにしていた。しかし山崎教授も実質的に関与した。興味を持った学生たちにも、できるだけ大勢、建築の際に手伝って貰いたいと思っていた。

計画の概要が出来たが、それには「杭の上の丸太小屋」となっており、その材料となる樹木は「小屋の近くで伐採し、加工することができること」とされていた。屋根は「柾葺き」とする予定だった。藁布団付きの木の寝床が十五人分、炊事用の鉄製ストーブが一つ、備え付けの流し、これらが僅かな内部設備として作ることになっていた。さて、私たちは最も熱心な若いスキーヤーたちを対話に招いた。その場でヒンデル氏がこの計画を説明し、同時に「ヒュッテは何よりもまず学生たちに使ってもらうことにしている」と解説した。みんなは「森林労働者」というものをすぐには思い浮かべられなかったのは明らかだったが、この計画は好意的に歓迎されたのだった！結局、みんなはそれをユーモアでもって引き受けたのである。この山小屋の名前は最初から「ヘルヴェチアヒュッテ」とすることになっていた。もちろん日本人は故郷を愛するし、立派な外国人にもそういう感情を期待するものである。

山崎教授が林野担当の役所とよい繋がりがあったので、非常に好都合であった。建築材を安く入手できたし、建設する場で伐採することができた。ある日曜日に場所の問題を解決するため、私たちは現場に行った。ヒュッテは駅（軽川か銭函）から約4～6時間で辿りつく場所になければならない。私たちは朝里岳・余市岳山群の北東部の小樽内川右岸の一支流の谷を慎重に検討した。まもなく、私たちはいろいろな事態に逢いながらも作業を始めることができた。しかし、先ず小樽内川やその支流に橋を架けねばならなかったが、それには1，2週末の労働が必要だった。

ヒュッテの建築の際に、私は学生たちによくない例を示してしまった。というのは、私は昭和2年（1927）シベリア経由でスイスに旅行し、9月になってようやく札幌に戻ったのだった。丸太小屋は既に立ち上がっていた。私のよき友人で福島の学校の後継者でもあるワーゼル博士は「私の責任」を引き継ぎ、彼の休暇を犠牲にして小樽内川で慣れぬ仕事に携わってくれた。そのほか、建築を監督したヒンデル氏は、さらに1～2名の日雇い労働者を雇わなければならなかった。というのは、当初考えていたほど学生たちはそう簡単に建設に参加できなかったのである。彼らは休暇の一部を学業に充てねばならなかったのである。

ヒュッテは締麗なシラカバ林に建っている。数メートル先には渓流が音を立てて流れているが、若干高いところにあるので洪水氾濫の被害は受けない。子供の時に「ヘンゼルとグレーテル」から何か魔女の家のようなものを思い浮かべるが、ここでも森のクマや他の動物たちが最も近い隣人である。

最初の熱心な客人の一人、東京の絵画学校の学生、清水という名前の人だったが（注[33]）、彼もそのようにヒュッテの風景を見たのだった（注[34]）。彼は太陽の沈んだ冬の絵に、ヒュッテの周りに穏やかに楽しい踊りを踊っているように見えるクマたちを書き込んだ。実際には、この地域では、せいぜい一度くらいそういう動物の痕跡をあちこちに見かける程度であるが、彼は冬の間この魅せられた山小屋の周りの雰囲気を魅惑的に捉えたのだった。

ところが、後になって、下部からも、側面からも、まだいろいろと補わねばならなくなった。丸太小屋の造りがやや緩めだったことによる放っておけない問題だった。床板は杭格子の上に張り直し、全体をできるだけスイス式の基礎にしようと、その下におよそ丸2年は過ぎていた「NZZ」（注[35]）を入れて断熱した。また、外側も壁面は結局柾葺きにしなければならなかった。そして最後に、私は扉と鎧戸に赤と白（これらは日本の色でもある）の塗装をした。私はセンチメンタルな誇りのようなもので、この後持ち帰った私の古いルックザックに、今でもまだ赤いシミをつけたままにしている。

昭和2年から3年（1927～8）への冬に、ヒュッテは利用可能になった。山崎教授、ワーゼル博士、1,2の日本の友人（注[36]）と私は正月休みに一両日のんびりと朝里岳一帯をスキーで歩き回り、ヒュッテの落成を祝った。その後熱心な若い人たちが続いて利用し、それからの4冬というものは、ヒュッテは週末おおむね満度に利用された。

ヘルヴェチアヒュッテの短い歴史の中で全く特別な出来事として、天皇の弟、秩父宮殿下のご訪問がある（昭和3年2月末）。殿下は熱心な登山家でスキーヤーとしても知られ、スイスの一連の有名な山頂を極めており、なかでもマッターホルンではイタリア側に横断していた。大野教授と山崎教授は朝里岳や空沼岳一帯を登山の場所として推薦していた。札幌で殿下がお出かけになると、そこはすぐ標準的なコースになるし、また、そのことでヒュッテ群を拵える計画が著しく進むということを教授たちはよく知っていたのだった。それは既述のように、喜ばしい形で実現した。この高貴な客人は「保安警察」を断られ、選り抜きの山岳部、スキー部の学生たちと1、2のスポーツマン（注[37]）だけを同行させた。

殿下がヘルヴェチアヒュッテから札幌へ戻られた時、私は日本の友人の計らいで殿下の宿舎に招かれる機会を得た。私がその時の歓談で一番嬉しかったことは、秩父宮殿下がスイスのことやアルプスへ旅行した時のことを話されるご様子であった。当時は本来の定めとされていた「殿下」と私が呼びかけたとき、決して嬉しい様子を見せなかったので、私はすぐこの尊称を使うことを止めた。殿下は明らかに宮殿よりもスイスのことを想い起こしたいようであった。

殿下は私たちのヒュッテのことを本当に嬉しそうに話され、私たちの計画の実現に力強く前進するようにと、私たちを励まされた。その先の旅行は、模範的な流儀で自ら企画し、読者は既にご承知のように、空沼岳地域の小さな沼の側に素敵なヒュッテを建てられ、私たちの学生に寄贈してくださった。

私はいつもヘルヴェチアヒュッテとその周辺に想いを馳せている。銭函からの登りで遥山の下を通るこ

---

[33] 清水啓三　1904-1946　当時東京美術学校学生、この時描いた画は現在山崎英雄が所蔵、表紙参照
[34] 表紙の画参照
[35] チューリッヒの新聞　「Neue Zuericher Zeitung」、82ページ図参照
[36] 松川五郎、須藤宣之助ほか
[37] 木原均、松川五郎ら

ともできるし、少し遠回りになるが、奥手稲を通る道を選ぶこともできる。でもそれは、雪の状態がよい時の話である。毎冬3～4回ある大雪に直面すると、最短距離でもヒュッテに到達するまで8時間はかかる。この森林地帯では真冬に2～3メートルの積雪は普通である。小川は完全に積雪の下を流れ、川でさえおおむねそうなってしまう。吹雪の中を滑らなければならない苦境に立ったとしたら、そのグループは集結したままでいなければならなかった。よく慣れたゲレンデでも、方向を定めるのは殆ど不可能であった。－残念なことに、ここで白い死の影が愛すべき一人の学生に訪れた。ある海軍高官の前途有望な一人息子がヒュッテからの帰途、恐ろしい嵐に巻き込まれ、銭函の家々に辿り着けば助かるのに、そこからほんの数百メートルまで来た地点で凍死してしまったのである。

私たちが一番よく行ったのは、朝里岳・余市岳・白井岳の頂上で、百松沢山も時々訪れた。この地域の山頂の中で別格なのは天狗岳（1119m）であるが、ここは夏でも稀にしか登られない。私が単独で昭和3年（1928）3月12日に西頂に登ったのは、この素敵な山の冬季初登山だったとするのことはあり得ることである。だから次に少し詳しく述べることとしよう。

私は丸2日ヒュッテの周りで本式に「雪中ワンデリング」をした後、12日の朝7時少し過ぎに出発し、小樽内川沿いに下流に873.3m地点の真東まで進み、方向を変えてその地点に登った。そこで私は西の方に続く山稜上に留まり、標高900mのカーブまで進んだ。常におよそ900mの等高線上を伝って南に進み、1119m地点の山頂岩の下に着いた。そこでは岩のために回避が必要になった。山頂自体は容易で、本格的な登行用具なしで登ることができる。

シラカンバが生えている最も高い場所は、まさにカラスの楽園であった。この黒い烏たちは予期しない人間の出現に声高に騒ぎ立てた。特に南東方向に興味ある眺めが開けていた。足下の白井川の谷、800m下には放棄された銀山の小屋並みが、ぼんやりした広い叢林の中に見えた（原生林の時のトドマツの植生は製錬業経営の際に伐採された）。ずっと遠くには、空沼岳や札幌岳山群の白い山頂が認められた。もちろん、この周囲の展望は決して一度にはできない。山頂は充分には突出していない。ここでは登頂が成功したことに喜びを見出さねばならない。分水嶺のあたりの人跡未踏の冬の森林は、隣接の人間や小屋からは数ｋｍも離れており、私は日本ではいつもそれに魅せられた。そういう高い所にいつも私は自分の祈りの場所を見出した。そこでは外国にいるという感じがなくなっていた。これらの純粋な樹脂の芳香を発散する森林は、人を控えめに、自由になるようにさせる。天狗岳を去る時、私は登りと同じルートをとった。高い望楼を去って3時間半後、私は定山渓に着いた。私はすぐに温泉の大きな浴槽に浸かった。積雪で白い冬の川に面した露天風呂であった。スキーツァーほど楽しみの多い結末は、まず考えることはできない。

ヘルヴェチアヒュッテの領域でのもう一つの大きなツァーは、南西及び南方にあるすべての最高山頂を縦走したことである。朝里岳、余市岳、比丘内岳、ムイネシリ これらから定山渓への下りを含む。この縦走は、しかし、晴れた暖かい春の日、4月か5月の初めにのみ遂行できるが、例えようもない満足さが得られる。この山稜を巡る雑多な偵察行を私は既に終えており、昭和5年（1930）4月28日から29日にかけてやってみようと決心した。私の親友、ベンソン氏がかねて同行したいと申し出ていた。私たちはヒュッテに行くまでに考えられぬほどまだ多くの雪に出あったから、およそ1mの長さの夏山スキーを装備し、シュタイグアイゼンも携行した（しかしこれは一度も使わなかった）。食糧は3日分充分に携行した。私たちは番狂わせのことを考慮に入れたのだ。足りなくなりかけたのは、ムイネシリの露営の時であった。当時そこにはまだヒュッテが建てられていなかった。例年5月1日あたりにはもちろん、もうどこの川にも小川にも雪の橋はかかっていない。だから私たちはできるだけ山稜に留まろうと思った。日本ではそれがいつも正しかったようである。

天候はずっと晴れわたり、あれほど素敵なツアーは願えなかったのではないかと思う。2日間は快晴で、夏のように暖かだった。ヒュッテへの登行は4時間の春の散歩だった。もちろん夏スキーをつけたルック

ザックはいくらか重かったが。雪はまだ少しヒュッテのところにあり、せいぜい30ｃｍくらいだったが、ササを下に押さえ込んでおくには、ちょうど充分だった。

2日目の朝、私たちは6時に起床したが、その日の長い行程表を考えると少し遅かったかもしれない。朝里岳の山稜を越えていく周知のルートを辿り、11時半に余市岳山頂に着いた。私たちのルックザックの中身で登るとすると、ちょうどよい時間だったであろう。眼下の景観は、まだあちこち穴だらけになった冬の衣装をまとってはいたが、既に春に目覚めていた。日本海に面した余市と小樽の湾から、私たちのその日の目的地ムイネシリの広い頂部までに至る全てが、雲ひとつない空の下に横たわっていた。

さて、山稜部の登行が始まった。おおむね1000mの標高を保ちながら進み、大きな4分の1の輪に着いた。まず南へ、それから南東へ、さらに東へ、比丘内岳（1063m）を過ぎ、長尾山（1203m）を越え、ムイネシリの前頂に着いた。難所はどこにもなかった。速度は疑いなく私たちの予想を超えて速かったようである。私たちは、休息時間を除いて、余市岳から長尾山まで4時間と見ていた。私たちは常に慎重に居場所を確認し、中でも比べ物がない眺めを全行程で楽しんだ。ベンソン氏と私は、こんな美しい山歩きは滅多に出来なかろうという点では同じ意見であった。この広い無人の森林のおだやかな雰囲気は、余市岳や比丘内岳で僅かのクマの痕跡があったが、ほとんど妨げにはならなかった。突然南方に富士に似たシルエットで浮かびあがってきた羊蹄山は他の世界からの挨拶のように見えた。いつもスイスでの私の生活への道を考えていたなんて全く不思議だ！

私たちはムイネシリへの登行を中止した。私は既に早くから頂上を知っていたし、その時は5時半で定山渓に下るちょうどよい時刻であった。森の中の夜に驚かされたくはなかったのである。それで私たちはできるだけ速く走行し（雪はどこも少なく、ササ薮はあちらこちらで元通りになりつつあった）、長尾山から東方へ小川の谷に下り、ちょうど夜になる直前に中山峠から定山渓に通ずる国道に出た。8時半には札幌行きの最終電車が出るのだが、ちょうどそれに間に合った。

この縦走は春先に行われたが、今はムイネシリにも中山峠にもヒュッテがあり利用できるから、比類なき山歩きの話は支笏湖や太平洋の方へ繋げよう。およそ5日間で全島を横断できる。第1日：銭函ーヘルヴェチアヒュッテ、第2日：ヘルヴェチアヒュッテ—朝里岳—余市岳—長尾山—ムイネヒュッテ、第3日：ムイネシリ—喜茂別岳—中山ヒュッテ、第4日：漁岳—恵庭岳—丸駒温泉、第5日：支笏湖上を船で湖畔へ、スキーで苫小牧へ。　中山峠からは、山稜もまた南東へそして南へカルルス温泉の方角に赴くことができるのは明らかだが、しかし私には可能かどうかを慎重に検討する必要があった。

ヘルヴェチアヒュッテは本当に素晴らしい冬の遊び場を開拓したが、今日では既に自動車交通が発達し、時代遅れになった。ヒュッテは良い努めを果たした。確かに此処の「森林ツアー」は、自分の技術を身につけていなければならない。木の幹やササ藪をあるきまわれなければならないスキーヤーにとっては、これは「吸引力」を失うことになるかもしれない。私自身の「スキー学校」を作り出さねばならなかったのだった。

第10章 北海道内陸部のスキー適地

北海道本島内陸部で噴煙を上げている2000m級の山々は、スキーヤーたちを惹きつけたに違いない。人口の希薄な、スイスの中程度の大きさの州くらいもある広い区域は、冬の開拓を待ち望んでいた。おそらく無数の温泉の一つ一つには、簡単な旅館があったろうが、しかしそれらはせいぜい夏の間に客が訪れたのみだった。昭和8年（1933）以降、1、2の山小屋が建てられたかもしれない。
我々の学生たちが大雪山群や北見山域に向かって長旅をする場合、非常に慎重に装備したはずである。数

日分の食糧、寝袋、テント、小さな木製の装備品、上等で温かな衣類、これがルックザックの中の非常用装備品であった。

十勝岳（2077m）は活火山であるが、大爆発のあと、もはやその魅力は失われた。この災害は大きな悲劇の元となった。当時（大正15年（1926）5月）、山の上部はまだ真冬だった。噴出物や熱い水蒸気が氷や硬雪を急速に融かして水にした。ものすごい量の泥流がごく短時間に谷に流れ込み、耕地を1mも覆った。家屋は壊され、多くの人が亡くなった。美瑛・上富良野間の鉄路はある区間が泥の中に埋まり、2,3日は運行不能になった。－この山脈の他の山頂も長く落ち着かなかった。噴出は、いつも北方に連なる旭岳（2290m）や大雪山（2230m）区域で起きた。これらの美しい山頂はみな、よく通れる稜線（オプタテシケ）によって互に連なっていた。稜線は1500mから下がることは稀だった。大掛かりな冬季や春季の山歩きの際には、まだ山小屋は整備されていなかった。

昭和2年（1927）の12月末、我々はこの白い楽園に初めて足を踏み入れた。我々4人のグループは、山崎教授、福島のワーゼル博士、学生1人（注[38]）、それと私であった。旭川を通り越して上富良野までの列車に乗った。上富良野では、まだ前年の災害の跡が見えた。ごみはまだ片付けられていず、単に新しい腐植土を上にのせただけだった。我々は雪の積もった平原を東の方角に進んだが、格別興味深いものにはならなかった。その後我々はいつもタクシーを利用した。それは僅かの金で我々を十勝山塊の麓まで連れて行ってくれた。そこからは細い道が吹上温泉の方に向かって森の中に消えていった。はっきりしていたのは、大正15年(1926)の泥流のものすごい跡がまだ見られたことだった。ところどころに100m以上の幅の空白部が、トドマツの森林帯の中に、はるか上部、約1300mの森林限界から、ずっと下の方の平野部まで続いていた。

温泉はまだ森の中、高度1025mのところにあった。それまで温泉の住人は冬季間の眠りを他人に妨げられることは稀であった。ここでも我々は非常に丁寧で宿泊客に親切な主人に当たった。彼は単なる宿泊を快適にするすべを理解していた。温泉の源泉は宿から200m離れたところにあり、小さな小屋に囲まれていた。その裂け目や継ぎ目からあらゆる方角に湯気が夕方の冬景色の中を流れていっていた。不恰好な膝までの高さの藁靴を履いて、客たちは毎晩1mほどの雪の中を不気味な隊列を組んで源泉まで行き来するのだった。すると間もなくこの黄昏てきた小さな谷間に大きな歌声が響き渡るのだった。みんな一緒に楽しげに露天風呂に浸かっていた。だが、気持ちよく温かいお湯にあんまり長く浸かることを唆す人は吹き飛ばせ。彼は翌日その報いを受けるに違いなかった。午前中はこの無思慮のせいで、眠いし、ぐったりするし、疲れた感じが忍び寄るのだ。その後、責任感ははっきりしなくなる。温泉の周りの魔法にかかった森を通るねっとりしたスキーヤーたち。1200m高く十勝岳の頂上の方へ、せめてずる賢さで持って行ってくれればなあ！

昭和2年（1927）に我々のグループが頂上の下から引き返さねばならなかった時は、他の理由もあった。噴火口（1760m）では当時烈しい動きがあった。広い開口部は湧き上がる蒸気のような雲で満たされていた。それは強く吹き上げる谷からの風によって、氷結した雪の積もった山腹を越えて頂上の方へ吹き上げられていた。我々はよく知っていたが、このガスは我々にとって危険なものになる可能性があった。慎重に退避しながら我々はなお2000mの境界に達し、全く無用で目的もなく建てられた石室に着いた。そこで我々は止む無く若いガイド、学生に別れを告げ、山を降り始めねばならなかった。山頂は、全く有毒な隠れ蓑の下にあった。なおも、我々は慰めるような、そして忘れ難い西南の方角にある富良野岳（1912m）の姿（図21）を眺め続けていた。それは何かベルナーオーバーラントを思い起こさせるものがあった。

[38] 学生　氏名不詳

ー翌日（12月31日）残念ながら我々はまた札幌に向けて戻らねばならなかった。新年にはいつも学校での大きな儀式に参列していたのである。

2年後、昭和4年（1929）12月に、我々はもう一度思い切って十勝岳へ登ることにした。この間に私はスイスで結婚していた。今度は家内も参加した。我々は同様に一両日吹上温泉に滞在したが、クリスマスには初めて札幌に戻ることにした。この5，6日間、天候は予定通りとはいかなかった。気温は、まず夜には零度以上になったままだった。一度は雨さえ降った。18日には寒くなり、雪が降った。突然19日には笹が全部雪で覆われなくなった。ーおよそ50ｃｍの雪が覆って欲しいのだがー　次の日には登頂しようと考えていた。まず、我々は馴れるために、多少は森の中を走り回らねばならなかった。それは余計なことではなかった。家内にとっては、日本での最初のスキー旅行だった。スイスでは木の繁った傾斜地を滑ったりはしていなかったのだ。それは非常にうまくいった。家内はそのスキーの腕前を初めて日本人に知らせることにもなった。学生たちは私が地面の凹凸のために転んでいたことを知っていたが、一方家内はあらゆる危険な滑り面も巧みにこなしたのだった。
我々がまた札幌に戻ったとき、私の「恥」と家内の方が上手だということは、当然評判になっていた。

昭和4年（1929）12月20日の登山の際、天候に若干変化が起きた。およそ1800ｍまでは陽が当たっていた。火口からはものすごい煙の雲が高く沸き上がっていたが、今度はそれほど邪魔にならなかった。上に行くと冷気が襲ってきた。雪は硬くなっていた。そこからの登りは喜んでシュタイクアイゼンを使った。スキーは前もって用意していた紐に繋いで上に曳いて登った。十勝岳山頂周囲の荒れ狂う雲を前にしては、スキーを下に置いていく危険は冒したくなかった。かつての冬、我々の学生のあるグループがここでスキーを置いて登ったが、帰りにはもう見つけられなくなってしまった。そうこうしているうちに恐ろしい雪嵐が吹き荒れ、踏み跡をすっかり消してしまった。もはや視界から何もかも消えた。幸い捜索隊が迷っている一同を見つけて、札幌に連れ戻した。ほとんどの人は手足が凍傷にかかっており、すぐに病院での手当てを受けねばならなかった。

沸騰しつつある火口の縁の向こう側を、ガタガタしながら，歯をガチガチ鳴らしながら身の毛もよだつ深い所をちらっと覗き込んだあと、頂上に向かい、まもなくその冷たい灰色の荒れ狂う帽子の下についた。そこからはコンパスと高度計に頼った。その際、我々はちょっとした登攀すら、確かにしようとはしなかった。2、3の岩をよじ登って越えたが、帰り道には簡単に回って通過することができた。高度計が2100ｍを指したとき、我々は停止し（頂上は2077ｍ）早速凍えかけた指でルックザックから何か食べ物を探し出そうとした。一度少し明るくなった。その時、ほとんど10ｍもない前方に頂上の岩塔がちらっと見えた。やはり頂上に到達していたのだった。富良野岳も西南方に少しの間明るく照らされて見えた。しかしそれが、山が我々に見せてくれた全てであった。間もなく下山することを決心した。風が刺すようで、とてもそこには留まっていられなかった。火口の遥か下までシュタイクアイゼンを履いたままで降りた。粉雪の所に着いて初めてスキーに履き替え、トドマツの森の中を少しの間どんどん滑り降りた。途中、驚いたユキウサギを2、3頭狩り出したりして、間もなく吹上温泉に着いた。その10分後には、湯気のたつ温泉に浸かっていた。

十勝岳地域でのこの数日のことは、我々は決して忘れないだろう。願わくは吹上温泉がいまもなお当時のままであって欲しい。ホテル投資家連中が、あの道をもっと長く見つけてくれずに、本当に平和な静かな状態のままでおいてくれると良いのだが！

夏の旅行で知っていたもう一つの地域、阿寒湖畔の火山については、私は以前から冬の衣装をまとった

姿を見たいものだと願っていた。阿寒地域へのスキー行は敬遠していた。当時はそこまで到達するのが難しかったのである。札幌からは一度の登攀に少なくとも3日はかかり、天候も予見し難かった。一番よいのは函館ー札幌ー名寄（ー稚内）間の急行を利用することで、それは野付牛（注[39]）や斜里行きの車両があり、美幌で下りて北見相生に向かう。この終点駅から冬にもよく通れる道（標高620m）を湖まで歩く（5時間）。南（釧路）からも湖には行ける。（以前、夏には自動車も利用できた。）湖の南岸には小さな集落があり、簡素ではあるが非常にしっかりした経営の旅館が一軒ある。何年か前から、この火山景観全体は国立公園に編入されている。

二つの山頂、湖の東の雄阿寒岳（1371m）、西の雌阿寒岳（1503m）が旅行者を惹きつけている。火山活動は雌阿寒岳がとりわけ盛んである。写真にもその様子を載せてある(図22,23)。しかしまた湖には小さな港の近くに、一種の間欠泉のような熱い泥土の噴出口があり、この辺り全体が火山性であることを告げている。阿寒湖の岸辺は絵のように美しく、一、二の小さな島もあり、確かにその起源は二つの火山活動によるものだといえる。火山は互いにそれぞれの溶岩流をここに流し込み、遂には阿寒川を堰き止めてしまったに違いない。湖の南岸には昭和2年（1927）にはまだ小さな興味深いアイヌ集落が見られた。雌阿寒岳には私は既にある夏に登った経験がある。それより以前の冬期の登山については、私には誰も何一つ語ってはくれなかった。

昭和2年（1927）の3月初めに、学校で短い連休があったので、私は試しにやってみようかと考えた。天候は良く、難しいことは何もなかった。3月6日の昼にぎっしり詰まったルックザックを背に札幌を発ち、夜の10時には終点北見相生の集落と駅に着いた。そこでたった一軒の旅館に案内され、夜遅く着いたもう一人の客と相部屋で泊まった。そこではあまり贅沢はいっておられなかったのである！

翌朝、私は南方に向かって小道を辿った。樵たちが作った橇道を約2時間、トドマツの密林を抜けて高い所に着いた。そこからは突然、火山と湖とが直接旅人の前に現れたのだ。湖の西岸へ向かうのは簡単だった。一筋の小道を辿り、とうとう湖畔(港)に到着した。半ダースほどの人家があり、当時、湖畔で一番立派なのが井上旅館だった。

主人はこの常ならぬ時期での再会を喜んだ。宿には他に客は誰もいなかった。ただ一人、若い宮下由三郎という名の縁戚の者が主人を訪ねてきており、彼もスキーを携えていた。旅館の主人は加賀藩の元士族でその血筋が自慢だった。彼は武士の伝統で彼の新しい血縁もまた誇ってよいと考えているように見えた。恐らく雌阿寒岳への登攀に対する彼のとまどいに私が同調しなかったので、私は彼を落胆させていたのだと思う。彼は私を決して単独で登らせようとはせず、甥の宮下君を同伴してはどうかと私に提案した。その若者はその時嬉しそうに見えたので、私は承諾した。それで我々は二人して最後の準備にとりかかった。

翌朝七時半に、我々は森を通って登り始めた。すっかり晴れ上がった、静かな天候であった。風に妨げられることは全くなかった。美しいトドマツの森を抜けて、やすやすと登った。森はおよそ1000mより上で切れていた。突然我々は烈しい火山活動の中にいた。我々の周りや下には5つの温泉が沸き、我々の500m上には雌阿寒岳山頂が噴煙を上げていた。前方、北東方向には、雄阿寒岳がそそり立ち、その頂の1000m下には氷と雪に被われた湖が横たわっていた。(図22) 我々は間もなく一軒の夏小屋（1260m）に着いた。そこでスキーを脱いだ。頂上の周りの雪はひどく固まっていたので、スキーなしの方が安全に感じられた。シュタイクアイゼンなしでも普通に前進できた。我々は硫気坑から出ている臭い蒸気を慎重に避け、幸いにも最高点（1503m）に到達した。

広い凍結した火口（図23）が我々の前方に口を開けていた。底には小さな熱い泥泉があった。雪、氷、水蒸気は急な火口壁に鋭いコントラストを作り出していた。私は冬化粧をまとった活火山が、何か唯一無

[39] 現北見

比の物のままである壮大な火口を、それまで一度も見たことがなかった。この我々の前にある不気味な活動の向こう側、西方の火口縁の向こう側に眼をやると、ずっと下の方には春の景観が見え、またオホーツク海が見えた。我々は2日前に、そこにはまだ氷山が漂っているのを見たのであった。私の同伴者宮下君は登攀の疲労にも拘らず(彼はスキー登山が初めてだった)、この素晴らしい景観を喜んでいるように見えた。身を切るような風が吹いてきたので、我々は下山を考えた。宮下君の犬は勇敢にも頂上まで我々について来たが、我々がスキーの金具を締め、滑り出すと、打ち解けたままでいるのは難しくなった。　約2時間で我々はまた旅館に戻った。ゲレンデの上部では自由に滑られたが、森林を抜ける500mの下りの滑降も容易で快適だった。

だから我々は本当に困難なことには出会わなかった。でもよく考えてみると、鋭い風がこの試みを妨げることになったかもしれない。というのはオホーツク海と太平洋との分水嶺であるし、そこでは気圧の均衡をとるためにしばしば非常に吹き荒れることがあるからである。

下の井上温泉ではまず我々の初登攀を祝って、正式な狩人の夕食が出された。それから私はスイスアルプスと北海道での私の旅のいくつかを説明しなくてはならなかった。翌朝私は本当に雄阿寒岳にも登りたいと思ったが、その企ては慎重に中止した。気圧計が急激に下がり、間違いなく天候が変ることを知らせたからである。それで私は－不満たらたら－西に向かって凍った湖を渡り、北見相生へ出発した。そこから再び汽車で美幌に戻った。－阿寒地域に簡単に行けてしかも充実した旅行などは、まずお勧めすることは出来ない。

北海道の中央部ではなおまだたくさんのことが企画できたはずである。－大雪山、旭岳、石狩岳そして日高といった地域を、私はもっと知りたかった－大部分は（冬のスポーツの意味で）踏み入ったことがない地域である。－しかし計画はみな計画のままで終ってしまった！他の人がここに来て、その発見者の喜びを楽しむなら、北海道の白い山々で体験した忘れることのできない美しい日々への有難い思い出の中で、私は喜んで空想の中でお付き合いしよう。この島は冬の美しさが果てしなく豊かである。そして遠い時間と空間の彼方からなお魔力と魅力とを獲得する。

第11章 家の中の喜びと悲しみ

昭和2年（1927）の夏、私はスイスに突然帰って許婚を吃驚させようと思った。しかし旅行のいろいろな手続きの中で、出発の日まで決まらない点があった。私はロシアのビザ（悪評だったWorowski事件の4年後だった）をモスクワからの長い再質問の後、出発直前になってやっと入手できたのだ。
私が最終講義の日の昼に札幌を出発する時、ドイツ人の同僚が私の許婚からの手紙を1通手渡してくれた。それはその2時間前に彼が守衛から受け取っていたものだった。内容は心を躍らせるようなものではなかった。私の未来の花嫁と一緒に教育を受けていたアメリカ人の娘の家族から、向こうへ1、2ケ月一緒に行かないかと誘われたので明日乗船しようと思っている、というのだった。だから彼女はもうアメリカへ行ってしまっている訳だった。このくだりを読んだ時に私がどんな顔をしたか、思い出したくもない。そうは言っても、旅には出た。－その16日後、ある日曜日の晩、両親の住むヘルマッツウィルの家を前触れもせず訪れた。私が突然現れたので皆は少し驚いたようだった。楽しい休暇の数週間を故郷で過ごした後、私はドイツの貨物船に乗り、インド洋回りで再び日本へ戻った。

2年後、昭和4年（1929）の夏には順調にいった。全ては説明され、予め用意を整えておいた。婚姻のことは、当方にも先方にも事前に予告しておいた。晴れた7月のある日、私の義父は妻の故郷、グレッチン

スのワルトウにある素朴な小さな教会で私たちを結婚させた。日本への旅行の途中、私たちはスマトラに立ち寄り、そこにいた妻の兄を訪れた。義兄はある茶の農場で働いていたのだ。9月になり、私たちは旅の終点、札幌に着いた。私たちが到着する日時は誰にも知らせなかったから、駅頭での公式な出迎えを受けられないという結果になってしまった。次の日、私たちは上司や友人や同僚たちに挨拶回りをした。訪問先は半日で1ダース以上とびっしりだった。私の若い妻は、そのつど苦いお茶をたくさん飲み、甘い餅菓子をたっぷり味わったから、このあと2年間というものは、このおいしい菓子を一度も食べたいとは言わなかった。

私たちの家は間もなく、いくらか故郷らしく見えるようになった。単純な、風土に馴じんだ食事の献立にさえ、私を何年間も世話してくれた古い「オバサン」をとても驚かせたほどの革命が起きた。それで彼女は「オクサン」（妻）をも喜んで教育しようとかかったのだが、家内は柔軟な夫よりも勇敢に抵抗したのだった！日本、スイス両国の特色がかなり激しくぶつかり合った。結局のところ解決策はこうだった。オバサンはしばらく我々の仕事から離れ、週に一日だけ家に通い、庭仕事とかその類のものに従事するというのだった。私たちは彼女が全く必要ないとは思わなかった。彼女の素朴な忠誠心は全く疑いを挟む余地がなかったし、その後もずっとうちに雇われていなければならない人だった。ほぼ一年の間に、二人の若い奉公人についてのおびただしい体験談が集まった。そして機が熟し、オバサンは最終的に再雇用されることになった。妻は日本での生活にすっかり馴れ、落ち着いたようだった。オバサンはそれからというものは、どんな時も私たちの忠実なよい召使のままでいた。荒削りだが、立派な人だった。

私たちが札幌近郊で初めて遠出の遠足をしたのは、もちろんヘルヴェチアヒュッテだった。昭和4年（1929）の10月半ばのことである。ヒュッテに泊まり、翌日は定山渓までの道を歩き通した。あの辺の動物たちが、妻を歓待したかったかのように思われた。彼女は夜中に自分の藁布団の下で何かがごそごそ這い回る音がするので眼を覚ました。一緒に調べてみると、彼女の頭の真下におよそ10匹の仔がいるネズミの巣があった。妻はぶつぶつ言いながら寝場所を替えた。翌日はよく晴れた秋の日だったが、大事件がおきた。定山渓までおよそ2時間のところで、1頭の生きたクマに出遭ったのだ。私たちの前方約100米のところを歩いていた－急いで詳しく話すと－クマはササ薮の中を下の川に向かって真直ぐ、私たちには全く気づくそぶりも見せずに降りていった。この失礼な振舞は私たちをその後不愉快にはしなかった。何もこちらから出てきてくれと「頼んだ」わけではないのだから。鳥の骨が2，3本と2本のスイス製軍用ナイフがその時使えるものの全てだった。前者はクマが食べたいだろうし、後者は食べられそうになる前に私たちを守るためのものだった。5年の間、私は山に入る時には8連発の自動拳銃を携行していなかったし、足跡よりほかにはクマを見たこともなかった。でもいま、その動物が私の目の前を走り過ぎていくのだから、私たちは強い印象を受けた。それ以来というものは、私たちはいつも札幌の「博物館」にいるクマたちを特に注目し、熱心に観察するようになった。

私たちは札幌の美しさを一層知るようになった。初雪が降ったときにはヒュッテに行き、手稲山や朝里岳やその他の山頂に登った。クリスマス前には十勝岳にも挑戦したが、それは私たちにとっていつまでも忘れ難い思い出になっている。幸いなことに、間もなく妻は日本国内で、他にも関わりを持つようになった。彼女はよい友だちをすぐ見つけた。それはとりわけ人種に敏感な合衆国に何年も滞在した後のことだから、全く当然というのではなかった。妻にとっては日本料理の高級趣味の面でさえも、重要なことであったようで、妻はそれを完璧にこなし、生魚その他、私にとってこれはどうかと思うような料理も、本当に美味く食べられるほどだった。妻は日本の生け花を喜び、すぐアメリカ人の同僚の夫人と一緒に、この芸術の少なくとも初歩の段階を学んだ。また、日本の「絞り」の結び染色技法にも興味を持った。山崎教

授夫人と山県夫人（ある山仲間の若い女流画家）（注[40]）が、週に半日この三級のクラスを教える適当な女教師を見つけてきた。稽古の時には締麗な作品がたくさんできた。日本の婦人たちは、外国人の女性たちがこの芸術的で工芸的な活動に興味を示したことを喜んだ。

次には、山崎夫人や山縣夫人たちがヨーロッパの料理を習ってみようと思った。さていよいよ水曜日がやってきた。たいていの人はその「実験」を一日中やった。午前9時に台所で仕事が始まるが、12時半頃夫たちが皆学校から帰宅したあと、男性たちは一緒に食事をした。2時頃のコーヒータイムに学校へ戻らない人は（戻らなければならぬ人は別だが）夕方までおしゃべりしながら残っていた。幸いにも妻は旅立ちの前はダボスの伯父のホテルにいて、有名なFlury「セントラル」コックの学校でその他いろいろなメニューを教えられていた。よその国の民族と暮らさなければならない欧州の奥方に一番よい助言は、その土地の人が働いたり従事しているものを単に表面的だけでなく、積極的に興味を示すことではないかと思う。そうすればすぐ決して退屈などは感じなくなるだろう。新しい言葉はごく自然に覚える。一緒にいるのが本当によいと思う友だちも見つかるだろう。ブリッジのパーティーに入ったり、煙草の煙の漂う中にいたり、いつまでもつまらぬ茶飲み話に座り続けることは必要なくなるだろう。妻は結局とても得をした。彼女は初めての知合の家を訪問する必要がなかったのだ。私の日本人の友人の奥方たち、特に山崎教授夫人は妻を心から歓迎する形で受け入れてくれた。3年いた間に日本人の奥方たちの中にはスキーに出かける人も出てきた。「ファミリーツアー」があり、私たちは本当に故郷にいるという感じになった。

昭和5年（1930）の9月に、私たちの最初の子供が生まれた。日本人の友人たちからの感動するような世話が家内を包んだ。妊娠の危険期になってから、あえて「冒険的な」散歩におおっぴらにでかけた時に、もし知人に出遭ったりすると、次の機会にはその人は私にまず決まって条理を説き、丁寧ではあるが明らかに非難調の訓戒を垂れるのだった。私たちのスキー仲間であり友人でもある大野教授は、何事も起こらないように自ら気を配りたいと考え、実際、彼の庇護の下、大学の産科で出産したのだった。

可愛いレネリは男の子ではなかったが、私たちは日本の言い習わしがあったので、それほど気を落とさずに済んだのではないかと思う。みんなが「一姫、二太郎」と云って私たちを慰めてくれた。それは実際何度も何度も云われた。その快活な小さな女の子は、その生きていた一年半たらずの間、私たちにとって家の中の日光だった。ー私が郵便局にスイスへの電報を出しに行っている間に、この子の世話はできないのではないかという不安な予感がした。私はある親しい学生の死のことを考えていたからかも知れない。

中村君（注[41]）は物静かではあるが熱心な登山家であり、スキーヤーだった。3年間、彼は学校で私の下で熱心に真面目にドイツ語を勉強した。とても慎み深く、彼は自分がどのくらい出来るのかを全く示さなかった。私の友人には彼に何が起きたかを知っている人は誰もいなかった。彼の悩みもまた自分の中に包み込んだままだった。そして夏休みのあと、彼は二度と戻っては来なかった。肺結核に冒され、大学病院で亡くなったのだった。

長いこと私は、一人息子を失わねばならなかった彼の両親について考え続けていたが、とうとうまだ会ったこともない東京にいる父親に手紙を書いた。その後まもなく、中村氏から長い日本語の手紙が届いた。そして彼はまた貴重な贈り物を同封してきた。それは黄褐色の絹布に書いた仏教の経文で、清浦伯爵（かつての日本の首相）（注[42]）直筆のものだった。これには悲しんでいる父親への慰めとして書かれた語句が書かれてあった。この贈り物は私が好きだった故人への思い出の品として保存してほしいということだった。ー諸神の王はこれらの言葉を死者、仏に付き添わせたのだ。「生きているもので不変のものは何もない。それは生成と消失についての法則である。生成と跡形もない消失は調和のある休息と幸多き静寂と

---

[40] 山縣浩（山の会会員）の夫人須磨子、当時浩は工学部学生で夫人・長男と一緒に山崎邸に寄宿していた。
[41] 中村君：人物不詳
[42] 清浦圭吾（1850-1942）　第23代総理大臣　在任は1924年の6ヶ月間のみ

に続く」。（訳者注[43]）後日私の仲間に死者がでると、しばしば、この経文の語句が私を慰めてくれた。

さて、私は私たちのかわいい赤ん坊の誕生に際して、生まれてくる子はみな死という事実を背負っており、この二つの出来事は等しく自然で、同じ大法則に起因するのだということを実に明瞭に感じた。—何か憂鬱な感じで、その時私は両親への電報を打った—。彼らに送った次の電報は、その1年4ヶ月後、かわいいレネリの死を告げるものだった。

子供が私たちと一緒にいた楽しい時期のことについては、あまり述べたくない。日本人も、私たちヨーロッパの友人たちも、またアメリカの友人たちも同様にそれを心の中に封じ込めていた。あの子は、私たち両親をいつも大いに喜ばせてくれたのだった。ある日曜日の朝、恐ろしいことが取り返しのつかない事実となった。レネリはセルロイドの玩具の爆発によって絶望的な火傷を負い、その2時間後に亡くなったのだった。それはとりわけ私の妻にとって恐ろしい出来事だった。私も厳しい時間を体験した。冬の森の中で、小さな雪片の不思議が、ちっぽけな水滴に融け、天の太陽がすぐまたそれに惹きつけられる時、私は自然の移り変わりを感じると何度思ったことだろう。それはしかし単に事柄の物質的な面にすぎない。他の面とは、おそらくただ心深い期待をもってのみ会うことができただろう。

日本の慣例に従い、昼も夜も小さな亡骸のそばで起きていなければならなかった。真夜中の少し前に、大野教授が私のところに来た。彼は言葉少なに愛情深く、この厳粛な事実の中で私に心を通わせようと試みていた。確かに私たちにとっても、もう一度明るくならねばならなかった。ー山崎教授夫妻も私たちが何年も日本に滞在中に体験しなければならなかったこの最も憂鬱な時間に、私たちをしっかり励ましてくれた。若い山縣夫人はまるでいつまでも私たちと一緒に留まるかのように、この死別を本当に心から同情してくれた。

捉え難いものは克服されねばならなかった。翌日の午後、憐れむべき亡骸は火葬されることになった。アメリカの友人は小さな棺の内と外を花で装うように主張した。私たちは神父に、出発前に家で私たちのそばで主の祈りを唱えてくれと願った。私がそれを依頼したのは、実は他宗派の地位の高い方だったのだということは、後になって初めて判った。彼は私に長い時間説明させることもなく、「もちろん行く」と云った。短い葬儀で彼は挨拶をし、子供を祝福し、私たちの感情をそれほど損なわぬよう、カトリックの慣用語だけを述べたりはしなかった。

短い祈りの後、火葬場へ乗り物で行った。日本の慣例では近親者に大きな要求をする。どこでも最後までそばに居続けなければならないのだった。かまどに火を燃やし、かまどを閉じる。鍵は係員が持ち帰る。翌朝、近親者はかまどを開ける時にまたそこに居なければならない。小さな木の棒で長い鉄板片の上にある憐れむべき遺体の残りを自分で集めるのだ。それから灰の入った骨壷を埋葬のために持ち帰るか、教会に託する。ーこの厳しい試練も私たちはとうとう成し遂げた。親しい友人ベンソン夫妻はこの最後の務めを果たすのを手伝ってくれた。レネリの遺骨はその年の夏にスイスに持ち帰ったが、後にPfaeffikon（注[44]）にある私の父の墓に葬った。

私たちの家が今や私たちにとっては快適な滞在場所でありえないことは明白だった。その48時間前には、楽しげなレネリが私たちの生活の真ん中にいたのだった。そしてあの子の可愛いい声やよちよち歩きが、まだその辺至るところで聞き取れたのだ。友人たちは私たちをやさしく脇へ押しやった。ー私たちは少なくとも2日間は定山渓へ、少し違った環境のところにいる方がよいというのだった。私たちは彼らの忠告に従った。そこには殆ど客はいなかった。私たちは森の静けさを独占した。そして再びなんとか気を落ち

---

[43] 訳者注：この部分は涅槃経の中の雪山偈「諸行無常 是生滅法　生滅滅巳 寂滅為楽」かと思う。

[44] チューリッヒ湖畔の地名

着けることができた。ー妻は燃えている小さな寝台から子供を救出する際に多少怪我をし、火傷をしていたので、それを治療しなければならなかった。だから私たちはそれほど長い間札幌を離れて生活する訳にはいかなかったのだ。ーしかし私たちのいない間に、友人は我が家にいて働いていた。中でもベンソン氏は家の中をすっかり片付け、私たちの痛みが不必要にまた強くならないようにあらゆる痕跡を消し去っていた。

私たちは仕事に就いてできるだけ辛さを忘れようと務めた。学校ではすることはたくさんあった。妻もまた以前よりも一層熱心に前にやっていた仕事や生け花や染色や刺繍・・・に打ち込んだ。それで彼女は私たちを取り巻く寂寞を多少とも痛み少なく感じたのだった。

この厳しい昭和7年（1932）の日々が親しい日本人の友人をずっと近くに引きつけたので、この絆を緩められるものは何ひとつない。すべては非常に辛く恐ろしかった。私たちは、彼らが皆私たちの重荷と悲しみとを何も言わず、共に背負ってくれたと感じた。ーレネリが亡くなった頃のある日の朝早く、私たちのオバサンが応接間でかわいい子供の写真の前で手を合わせ、身を屈めて何かお祈りのように呟いているのを見てしまった。なおよく見ると、写真の前には蜜柑や菓子や花やレネリが好きだった玩具などが供えてあった。そのようにしてオバサンは亡くなった子供の魂を日本の供養の仕方で慰めていたのだ。ーそして彼女は本当に間違いなく慰めていたのだーその両親を！

私はある親しい日本の一老人を決して忘れないだろう。その人はこの事故のあと幾日も私を避けていた（彼は自分の同情を証明する形式のせいで、迷っていたのだ。）私たちが偶然出遭った時、彼は日本のお悔やみの言葉を述べたがー同時に微笑んだ。私は彼にお礼を言ったーしかるべく微笑みながら。私はその後、そのように出来たことを殆ど何か誇りのように感じていた。その背後には、一人一人に多くのものを要求し、恐らくまさにそれ故に人間を兄弟として感じさせる古くからの崇高なこの文化についての理解と知識とが、多少あったのだった。

第15章 1940年代の日本の状況についてー帰郷

昭和5年（1930）頃から、日本は極東に関心のある他の列強諸国と破滅的な関係になりつつあると私たちは見ていた。当時は支那あるいはロシアとの戦争があるかも知れないと考えてはいたが、日本が唯一の同盟国であるイギリスやアメリカに攻撃をしかけるなどとは全く想像もしていなかった。その頃、アメリカはフィリピンを自由にすることを考えていたし、またイギリスが中国大陸からの撤退を考えていたことも明らかだった。確かにそれは日本にとって災いを円満に収める点の一つだった。しかし、その後満州と支那で事変が起き、年月が経過するにつれ、公然の戦争状態となっていった。今日の状況になるには一連の原因が繋がっているのだが、最も重要な原因はやはり日本の人口過剰問題なのだった。でもこの問題をごく自然な方法で解決する満足すべき道筋は、これまで示されてこなかった。この点について、少し詳しく述べてみたいと思う。

この問題を扱うと、まず、なぜ日本人が自国の領土内を不均等に利用しているのか、その理由を知りたくなる。北海道の人口密度は平方粁あたり35人程度に過ぎない。それについては、答はすでに暗示されている。日本人は熱帯地方に起源をもつ民族である。北上して寒流と暖流のぶつかり合うあたり（およそ本州の仙台付近）まで到達したが、そこが生活空間の極限だった。隣の大陸（北支や満州）は日本人にとってやはり気候が厳しい所である。前述したように瀬戸内海の周囲が日本人にとっての適温である。しかし、北日本や朝鮮、北支、満州では全く違う。

各地の平均気温			
	一月	七月	平均
大阪	4.2	27.3	15（適温）
京城（朝鮮）	-6	22	7.9
北京（北支）	-4.5	26.4	11.5
奉天	-13	24.7	7.1
ハルピン	-20.4	23.3	3
満州里	-25.8	21	-1.8
大泊（樺太）	-11.2	17.2	3.2

私は日本の中では比較的寒い地域に長年滞在していたが、その間にはっきりしてきたことは、日本人が北方へ移住することはできないのではないかということである。1月の等温線2.5℃が明確な境界線である。日本人がそれを越える場合には抵抗を感じている。この民族（個人ではなく）にとっては、1月の等温線が零下10℃の線の外側では存在不可能だというのが実際的であろう。日本人はこの線を越えては、小移民、例えば畑作農民とか、単純労働者としては移住してくる。別の言い方をすると、カムチャツカ、沿海州、蒙古、北支那、満州などは気候条件の点で日本人の移住にとって非常に不利であるか、あるいはとても無理だと言える。

もう一つ見逃せない重要な点がある。これらすべての地域では、人々（特に支那人と朝鮮人）の生活水準は日本人の約3分の1である。すなわち支那人や朝鮮人の苦力が一日35～40銭の賃金を得るとしたら、同じ労働に対して日本人の賃金は、安くとも1円はなければ生活できないであろうということである。　日本人が古くから熱帯地域に結びついていたことは、今日この民族ではごく普通のこととなっている。何も深く考えなくとも、住居とか食物、衣類などを考えてみただけでもわかる。今日(昭和19年)、日本人は南方に進出しているが、この点は変える必要はない。むしろその風習・慣習・宗教などは、南方では決して異質のものではないのである。

このことを確認すると自動的に言えるのは、日本人が移住しなければならない場合は、南方か東方だということである。これを例えばハワイ・カリフォルニア･ブラジルなどで調べてみると、これらすべての地域では､日本人はすぐに快適で､故郷にいるように感じる。受け入れ官庁もいろいろと面倒をみるが、そうすると日本人が殺到し、次第に望まれなくなり、ついには法律で移住を禁じられるようになる。美しいマレーの島々の為政者オランダ人もまた、彼等の植民地のうち二、三の大きな、あまり人が移住しない島は、場合によっては2人/km²か0人/km²だったにも拘らず(ボルネオ島は4～5人、オランダ領ニューギニアでは約1人/km²)、受け入れにはいつも消極的であった。他のオランダ領の島々或いは南方、西南方地域では既に人口過剰で、こういう点からいって移住は全く不可能である。

日本の人口過剰圧は、もう移住によっては解決できない。この戦争が終わった後についても予言はできない。しかし、遅かれ早かれ日本からみてボルネオやニューギニアの方向は、抵抗が少ない箇所としてマークされねばならないであろう。

しかし、日本の人口過剰問題は何としても移住で解決しなければならないのだろうか。この疑問はースイス人があえて提示するが、理論的には次のようなことが言えるのではなかろうか。工業を発展させることによって日本の経済がよくなれば、足りない食糧を外国から輸入することもできるし、人を減らさずにすむということである。しかし、これには一つの重要な前提がある。日本には絶対必要な工業原材料やエネルギーがそれほど充分にない。日本の重工業は朝鮮や満州から産出される鉄鉱石を使い、石炭は奉天と朝鮮の国境間の地域から出るものを利用している。日本の冶金工業は資源の供給が乏しく、本来の需要さ

えも一度も充足したことはない。過剰な人口の食糧という点では、あまり役立たない。繊維産業についてはまだよい方である。日本の生糸の生産量は世界一である。古い繊維工業が近代的な産業になったという例もある。日本は生糸生産で伸びたばかりではなく、木綿や人造繊維の製造の分野でもそうであった。

1930年代の日本では、よく規律のとれた快進撃が続いた。商船航行と協同して原材料の輸入を管理し、市場政策を注意深く統率した。生産と販売とを手際よく貸出政策や価格政策、あるいは為替管理により調整した。結果はしかし、一時的に続いたのみで本質的な成功には至らなかった。近年もそうだが、日本の輸出はこれまで一度も輸入を上回らなかった。人口はさらに増えつづけ、それは心配なほどであった。毎年百万人もの人が、本来何とかしなければならない場所で増えていったのである。

日本が大陸で朝鮮や満州、またついこの間支那に対してとった行動は、おそらく第一にこれらの地域で産する原料を自由に使えるようにするためだったであろう。しかし、他方、支那はすでに幾千年も自給自足であったが、今日なお日本に対しては日本の願いにそって、自由で穏やかな雰囲気のうちに話し合いをしたとは伝わってこない。また南方諸国の日本との関係もよくはない。強国のどれもが日本との話し合いによって得るものはあまりなく、せいぜい何かを失うだけである。現に進行している恐ろしい戦争もまた、解決策をもたらすことはないであろう。この人口圧分散の問題も、極東でも戦争の勝負の結果の一方によるのではなく、平和を獲得した両者によってのみ解決されると思う。

こういう状況は、たとえ日本国民に理解されなくても、何とか感じとられなくてはならなかった。結果は国家主義の強烈な台頭だった。自動的に敵対的な近隣諸国は、危機的な状況への責任の一端を担わされた。この際、我々欧州人は知らずにいるか見過ごしていることであるが、一、二の点を回顧してみよう。日本は1868年まで、まさに支那と同様、自らが選んだ自給自足の国であった。ところが、列強とりわけアメリカが、国際貿易のために港を開けと力づくで迫った。日本では周知のことである。大正12年（1923）の米国移民法の不手際な制定が、どれほど日本人の感情を逆なでしたかはすでに述べたとおりである。国家主義的な熱が年々高まり、穏健な人にとっても理性的な熟慮に耳を傾けることが益々難しくなっていった。昭和7年（1932）から昭和11年（1936）までの大規模な経済拡大への試みが失敗した後、一、二の電撃的な成功のあと、より広い範囲に、日本はもう一戦という雰囲気をかもしだせるのでは、という解釈が堂々と言われるようになった。

当然のことながら、このように発展していけば、日本人と外国人の勤め人や教員たちとの間の関係はあまりよくなるはずはない。こうした中で、スイス人はまだよい方だった。本質的にやっかいなことは、この際言っておくが、起こらなかった。でも人々は危険なうねりが近づいているなという感じを持ってはいた。外国人教師は日本では給与はよいが、年金生活では違う。だから故郷との連絡を忘れてはいけないのだ。私にとって日本滞在は間もなく10年になるのだし、帰郷を考慮するにはちょうどよい時期でもあった。昭和6年（1931）の夏に、私の契約期間が切れた。普通であれば契約は3年である。でも私はもうそれほど長く滞在すべきではないと思っていた。それで昭和7年（1932）の7月までの1年間の延長ということにした。私たちの赤ん坊の不幸、総体的な日本での雰囲気、支那での事変の発展、すべてが私たちに旅の終りをもたらした。昭和6年（1931）の10月には、私はすでに両親に次のような手紙を出していた。

「・・支那でのいざこざと衝突で私は考え込んでいます。確かに今度は事態を収めるために国際連盟はもう一度バンソウ膏を見つけるかも知れません。しかし腫傷はバンソウ膏では治りません！事件はきっとまた起こります。でも私は、日本人は戦争になったら貧乏くじを引くとも信じていません。日本の全体の雰囲気からみて、概して外国人への反感が以前より悪くなることはありましょう・・・」

昭和7年（1932）の新年と夏に7人の外国人教師のうち4人が大学を辞め、日本を去って故郷に帰った。私たちのよき友人であったベンソン夫妻は札幌を去り、米国で長い休暇をとった後、朝鮮での新しい職場に移るということであった。山縣一家も九州へ引きあげたが、いつまでもよい友人であり続け、別れを難しくした。しかし、昭和7年(1932)の3月に私たちの帰郷が決まり、私たちは国へ帰る旅行を楽しみ始めた。

その年の春、私たちはスキーでヘルヴェチアヒュッテと朝里岳方面への最後のツァーをした。交際の長い友人たちは殆ど参加してくれた。もちろん山崎教授も山縣夫妻も。別れはそう簡単ではなかった。幾度も登っては、すばらしい眺めの中で新たな喜びを味わった。大勢の親しい友人たちと一緒にいて、私は天にも昇る心地だった。でも、これが一最後なんだなあ！もちろん誰もその胸の内を面には出さなかった。

私には学生との別れもまた辛く感じられた。私は医系のクラスに非常に近しくしていた。特に医類の第11期生とは強く結びついていた。これら80人の若人たちはいつも素晴らしい人間だったし、今日でも、10年以上経ったのに、私は時々彼らのことを考えている。学生たちの多くはもちろん海軍軍医か陸軍軍医になり、私がこの文を書いている時には、おそらく戦場に赴いていることであろう。別れの時、彼らは東京にある楠正成像の締麗なブロンズの模型を私に贈ってくれた。楠正成は14世紀に生きていた人である。彼は、日本では天皇に対する絶対的な忠誠を表すものとされている。当時の天皇が正成の正しい意見を聞き入れなかった結果、彼は湊川で敵の大軍と戦う羽目になり、正成の軍勢が負けてしまう。彼は敵に捕らわれの身とならぬよう、その家臣たちとともに切腹してしまうのである。私はこの美しい贈り物を次のように理解するのが正しいと信じている。これらの若人たちは、私がいつも支持していた日本で昔最善とされた思想を忠実に守り続けるだろうということである。この天皇と国に対する絶対的な献身は日本を今日再び救うことであろう。それは疑いもなく日本の最強の面である。一人一人がいつでも最後の犠牲になる用意がある民族は、滅亡するはずがない。

ヘルヴェチアヒュッテの友人たちもまた、別れの贈り物を申し出てくれた。贈り物は私自身で選ぶことになった。私は古い九谷焼の茶碗を選んだ。それには日本の歌人百人が描かれ、締麗な字で彼ら一人一人の歌が添えられていた（注[45]）。この「古典的な詞華集」の起源は13世紀に遡る。この茶碗は私がどういう境遇になっても、絶対に手離さないことにしている本当に僅かの物のうちに入っているが、それははっきり言って私にしてみれば、ある意味で高価とか貴重だとかいう以上のものである。

私たちの別れの際に体験することになった愛着と感謝の思いを、文字で表現することはとても出来ない。この最後の週の日々に、私たちはまさに贈り物攻めにあった。また、昔の学生たちがカメラを持ってやってきては、別れの記念写真を写していった。相次ぐ訪問のため、最後の日のことなどは殆ど思い出すことができないくらいである。私たちの家の中は少しずつ寂しくなっていった。全財産のうち最良のものが入った木箱はスイスに送られていき、家具は次々と買い手やほかの愛好家たちに引き取られていった。

昭和7年7月3日、私たちはとうとう札幌を離れた。私たちはもう一度、駅で私たちの大旅行を気遣って来た友人や同僚たち皆の見送りを受けた。それは日本の風習なのであった。私は自分が「日本的な微笑」をし続けていたかどうか、もう定かではない。私たちが最後に眼にしたのは、もう駅のホームのはずれ近くにいた渡辺、徳永、板橋三君の姿（注[46]）であった。彼らは幾度も一緒に行った素晴らしいスキーツァーや大旅行の信頼できる仲間だった。私たちは、列車の窓から過ぎ去って行く手稲山や近くの山々に、も

---

[45] 百人一首のこと

[46] 渡辺成三（1931年卒）、徳永芳雄（1931年卒）、板橋敬一（1925年卒）　いずれも山岳部員時代にはグブラーと山行を共にし、ヒュッテ建設の手伝いをした。

う一度別れの挨拶をした．さらに二週間かけ、懐かしい日本南部の名高い町々をもう一度訪れた。京都には一両日滞在した。公使館の職員の案内で、御所を拝観することになっていたのだった。琵琶湖の上の比叡山では忘れがたい時間を過ごした。それから、鎌倉と江ノ島に行き、東京と横浜で古い友人にもう一度会った。私たちを故郷へ連れ帰ることになっていた船は、何という偶然であろう？日本郵船の「榛名丸」で、およそ10年前、私はそれに乗って広い世界への旅に出たのだった。名古屋と神戸で、短い滞在の後、7月17日に門司から日本に最後の別れを告げた。

この10年の旅は本当に充実していた。この期間の最も深い体験は？と問われたら、私は次のように答えることにしている。「Es war das Erlebnis der eigenen Heimat in der Fremde!--それはよその国で味わった本当の故郷の体験だった!」と。

1985年のヘルヴェチアヒュッテ改修時に床板の間から出てきた
チューリッヒの新聞”Neue Zuericher Zeitung”、本文68ページ参照

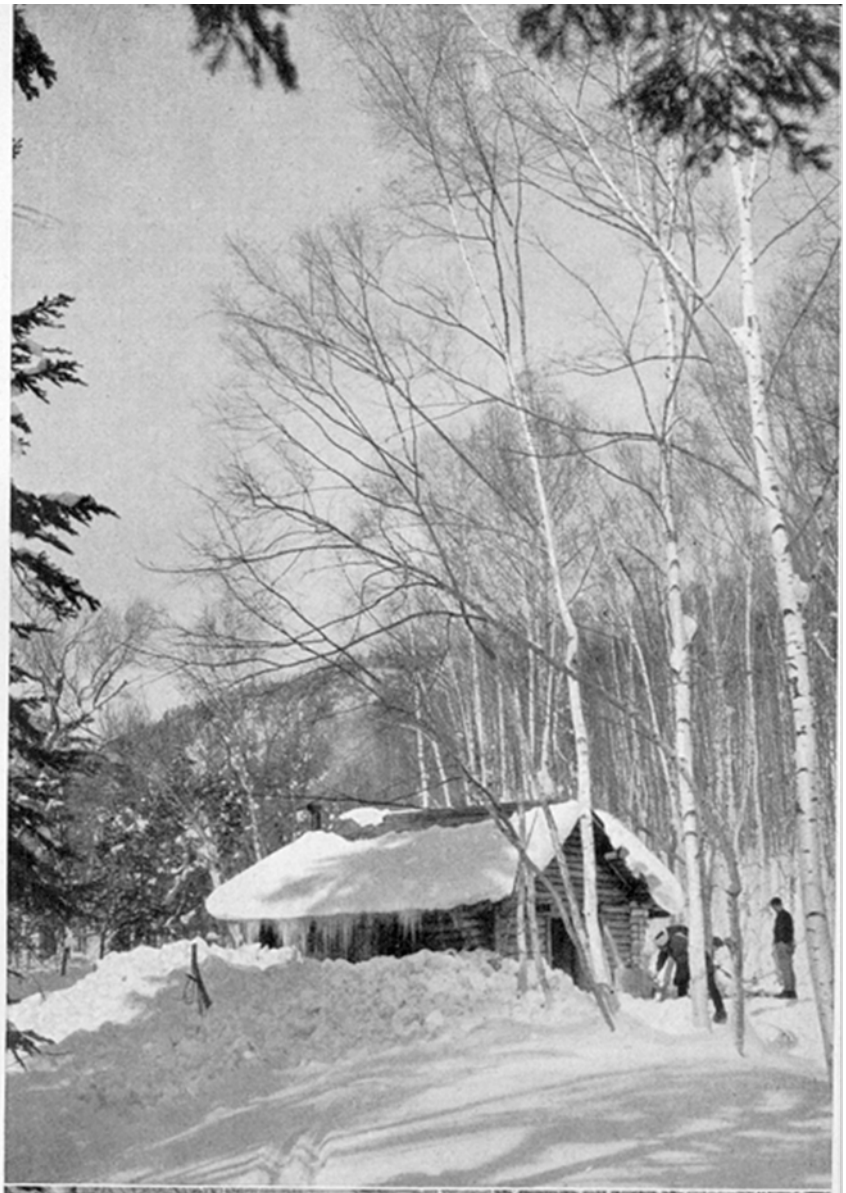


Abb. 17 und 18. «Helvetiahütte» bei Sapporo, in Abb. 18 ist die Hütte bereits verschindelt, da unsere Blockhauskonstruktion sich nicht als winddicht genug erwiesen hatte.

Abb. 19.
Niseko Onsen
(Südwest-Hokkaido).

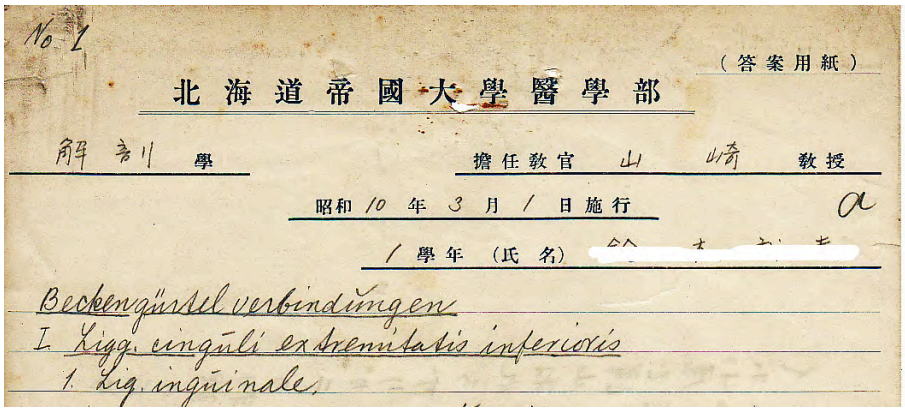
Abb. 20
Grat Furanodake-Tokachidake (ca. 2000 m)
in Mittel-Hokkaido.

Abb. 21.
Furanodake,
der südliche Gipfel
in der Tokachigruppe
(Mittel-Hokkaido).

4. 山小屋の宿帳から　山崎春雄

山崎春雄の遺品に含まれていたこの未発表の原稿は、「北海道帝国大学医学部　答案用紙」(下図)の裏を利用して書かれている。昭和 10 年 3 月 1 日に行われた解剖学山崎教授の 1 学年の試験で、たいていの学生はドイツ語で解答しており、当時の予科の語学教育のレベルの高さに驚かされる。解答者の名前の脇に a,b,c,d などと評点らしきアルファベットが鉛筆で書かれているが、評点のないものもあり、これは落第だったのだろうかなどと学生時代を思い出し同情する。

（答案用紙の 1 部）


No. 1

（答案用紙）

北海道帝國大學醫學部

解剖學　　擔任教官　山崎　教授

昭和 10 年 3 月 1 日施行　　a

1 學年（氏名）

Beckengürtelverbindungen

I. Ligg. cingüli extremitatis inferioris

1. Lig. inguinale,

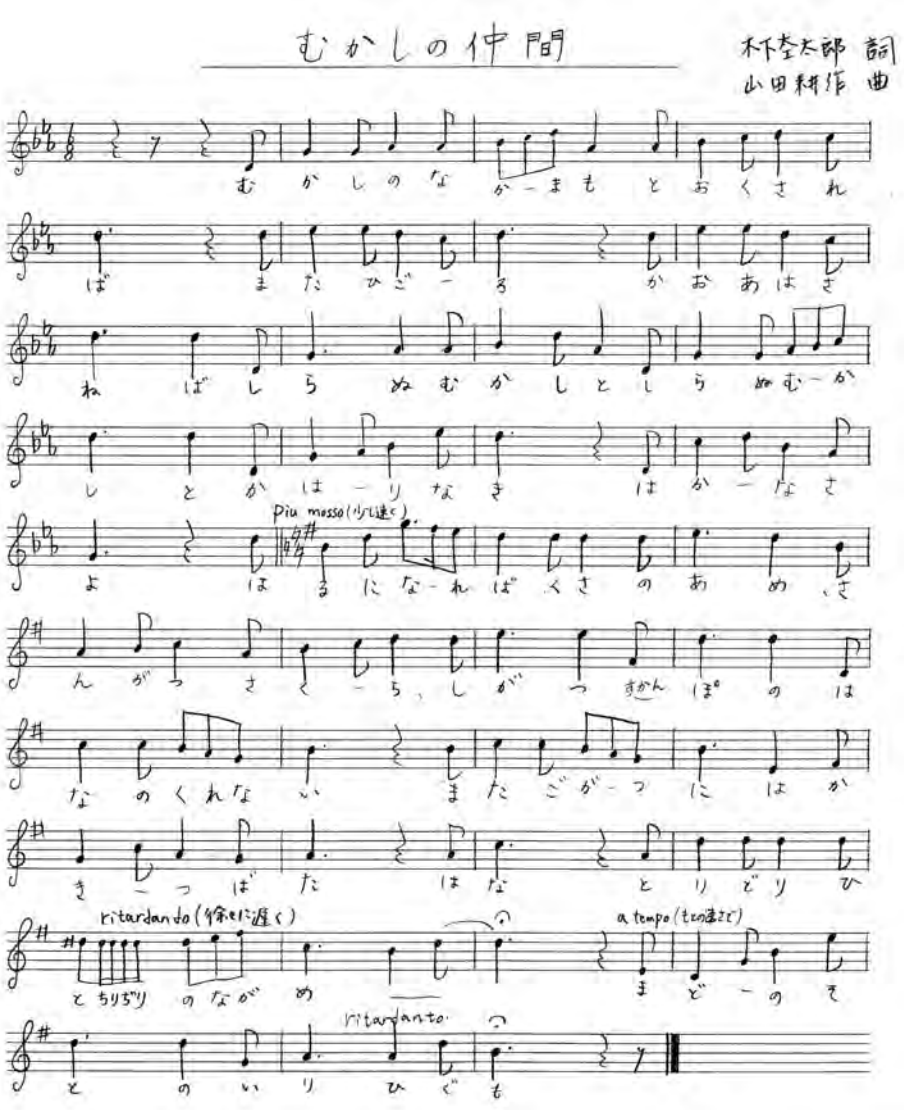
文頭に“その名を聞けばみすず刈る信濃とあるべき所を、私にはまづ「麻布の長坂」という連想を伴う詩人の S さん”から山の話を書けという注文でこの随筆を書いた、と述べている。「詩人の S さん」とは誰か、信州、麻布の長坂、詩人、日本山岳会などをキーワードに調べてみたが、残念ながら分らなかった。依頼原稿であるのに、理由は不明であるがどこにも発表されずに机にしまわれたもののようである。執筆の日付がないが、文脈から 1948（昭和 23）年頃と推定される。

内容はヘルヴェチアヒュッテのヒュッテンブーフ(宿帳)の署名から、その人との関わりを楽しく軽快な文体で述べた随筆である。ここには直筆原稿をスキャニングして掲載したが、御覧のように原稿用紙ではないのに、統一された大きさのやや丸っこい明瞭な文字で、罫線があるかのようにまっすぐ書かれていて読みやすい。手書き文字を書いたり読んだりする機会が現在はほとんど無くなったが、明治期に教育を受け、大正期から昭和期にかけての最高の知識人であった山崎の直筆原稿で、ヘルヴェチアヒュッテの歴史の一駒を楽しんでいただきたい。山崎は獨協中学、一高、東大医学部のいずれでも同期の詩人で劇作家の木下杢太郎 (1885-1945) をはじめとする文学者や画家らと交流があった。自身も画を良く描き、また雑誌“スバル”に数編の戯曲を発表している。この原稿も戯曲を読んでいるように情景の浮かんでくるふくらみのある文章である。

元の原稿は縦書き右綴じのため、スキャニングした原稿を A4 横書き左綴じの本資料集に貼り付けると、頁のつながりがちぐはぐとなり大変に読み辛くなる。そのため、スキャンした原稿を A4 サイズ用紙横に 1 枚づつを貼り付けた。この章のみ長辺左綴じ縦読みになるのはその理由による。

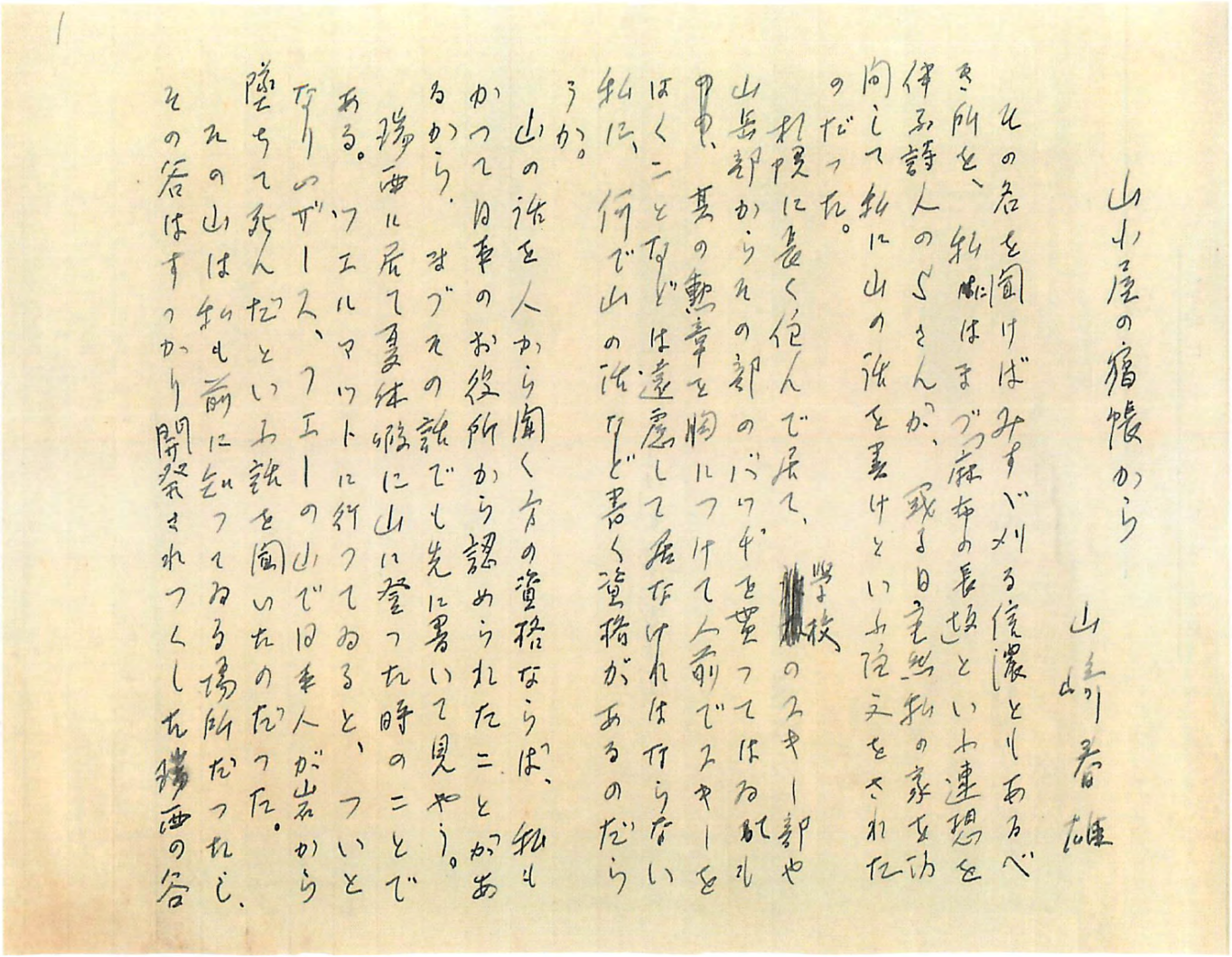
木下杢太郎との交流は、山崎が東大を卒業し、熊本医専に移ったあたりから途切れがちとなったが、大正二年に杢太郎は山崎を懐かしんで次のような詩を書いている。この詩は昭和のはじめにNHKラジオの国民歌謡のために山田耕作が作曲し、放送された。ラジオ歌謡では「古き仲間」が「むかしの仲間」と改められている。

「古き仲間」　木下杢太郎
古き仲間も遠く去れば、また日頃
顔合わせねば、知らぬ昔と変わりなき
はかなさよ。春になれば草の雨。三月、桜。
四月、すかんぽの花のくれない。また五月には
かきつばた。花とりどり、人ちりぢりの
眺め。窓の外の入日雲



CDより採譜　影山祐子（札幌在住ピアノ演奏家、ベルリン音楽大学卒）

山内屋の帳から。



山小屋の宿帳から

山崎春雄

その名を聞けばみすべりする信濃としあるべき所を、私にはまづ麻布の長坂といふ連想を伴ふ詩人のSさんが、或る日突然私の家を訪ねて私に山の話を書けといふ注文をされたのだった。

私は長く伯父で居て、[redacted]学校のスキー部や山岳部からその部のバッヂを貰ってはゐるが、其の勲章を胸につけて人前でスキーをはくことなどは遠慮して居なければならない私に、何で山の話など書く資格があるのだらうか。

山の話を人から聞く方の資格ならば、私もかつて日本のお役所から認められたことがあるから、まづその話でも先に書いて見やう。

瑞西に居て夏休暇に山に登った時のことである。ツエルマットに行ってゐると、ついとなりのヴェーン、ツエーの山で日本人が山から墜ちて死んだといふ話を聞いたのだった。

その山は私も前に知ってゐる場所だったし、その名はすっかり開発されつくした瑞西の名

<注>（3行目）詩人のＳさん：Ｓさんの氏名不詳

（15行目）瑞西に居て夏休暇に：1932（昭和6）年、スイス・チューリッヒ大学に留学

2

の中でも、まだ鐵道や自動車の侵入から免れて居て、英国婦人が昔ながらの騾馬の背で運ばれて居る不便な場所の一つだったから、私は不幸な同朋の遭難のその後の成行きを氣にして居たのだけれども、一夏に百件以上もの山のアクシデントを報道する瑞西の新聞はその事件にも軍商な事務的の數行を割いてゐるばかりであった。

夏休みが終ってベルンの町に出た時、私は日本公使館に立寄って、夏の日本人遭難の顛末を詳しく知り度いと申出た所が、相手の館員が私に、何の資格でそのことを聞くのかと尋ねるのである。

そこで私は、かう云ふ場所では山の話を聞くには何かの資格といふものが必要だといふことをはじめて知って、私が日本山岳會と瑞西山岳會の會員であること（僅に瑞西山岳會にはいってゐる。あれに入ってゐるとユングフラウの電車が半額になる――と或るやんごとなきプリンスが私に仰せられたことがあ

<注>（19行～最終行）或るやんごとなきプリンス：秩父宮雍仁親王のこと。秩父宮は英国留学中、槇有恒らとマッターホルンなどに登頂した。

3

つた）を発見したのであつた。そしてアルプスで外国人が遭難した場合に、捜索隊や救護の費用の問題のために、往々山岳会の間の交渉が起り得ること、私の所属してゐるチューリヒの支部がその時、瑞西山岳会の中央委員会を捨者してゐたから、これからチューリヒに帰る私は、事件の詳細を一應知つて置きたいと思ふなどい、最初は考へもしなかつた事まで少々のぼせて述べ立てたのだつた。

すると最初の役人に代つて現れたもつと上役らしい紳士が、その事件は私が處理しなしたからと云つて丁寧に應待して呉れて、その山の犠牲者は軍隊で出かけて崖から墜落したこと、遺骸は無事収容を終つて、ロンドンから人が来て火葬場のない加特力のつり人の名から、北方の新教の所に送つて茶毘に付したことを詳細に聞かせてくれた。

それから私はこの紳士から、今度は何の資格によるのか公使館の午後のお茶に招待されて、伝使や他の紳士等と共に、久しぶりの日

＜注＞（14行目）加特力：カソリックのこと。

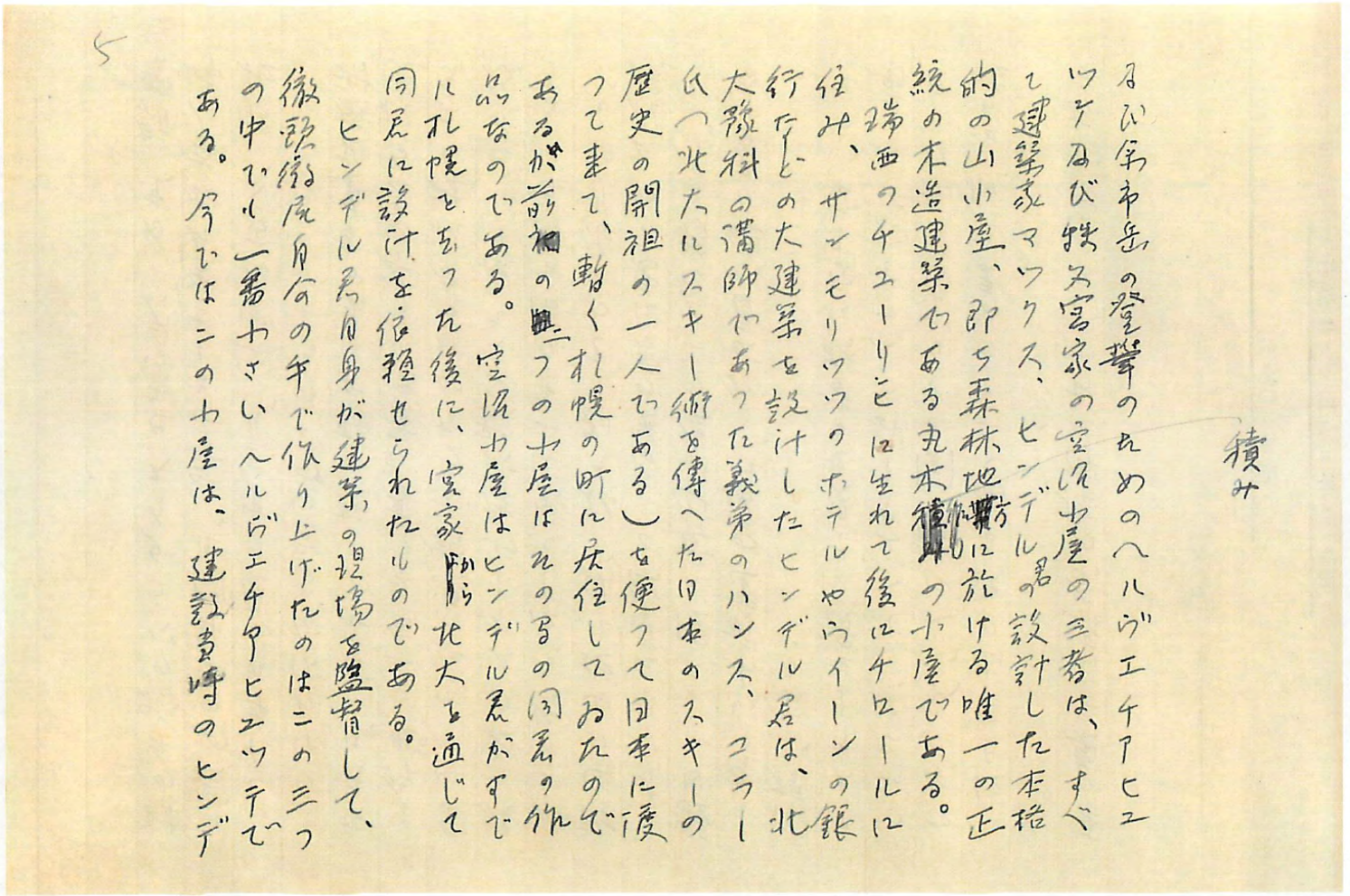
菓子と緑茶の接待にあづかつたのであつた。

以上は山の話を聞くことの出来た私の資格であつて、人に話を聞かせるための出れていないことは、北大スキー部のパワーが、人の前でスキーを滑つて見せる資格にならないのと同様である。

かういふ前置の後に、私が良心的に書ける題目として撰んだ山小屋のことに移らう。

すぐれた自然と、良質の雪に恵まれた札幌附近の山地には、私の知つてゐる限りでも、西年の間に一年の間を折りつくす程の数のスキー小屋が散在して居て、この数多くの小屋の連鎖でつながれる原始林のスキー行程、安全且つ甚だ廉価に享楽出来る札幌市民は、世界でも数の財ない甚の幸運を感謝しなければならないのである。

これ等の小屋の中でも、一番古く、昭和の最初の三年間に、年子として生れた三人姉妹の年齢のバランスもよつて、白井、朝里



積み

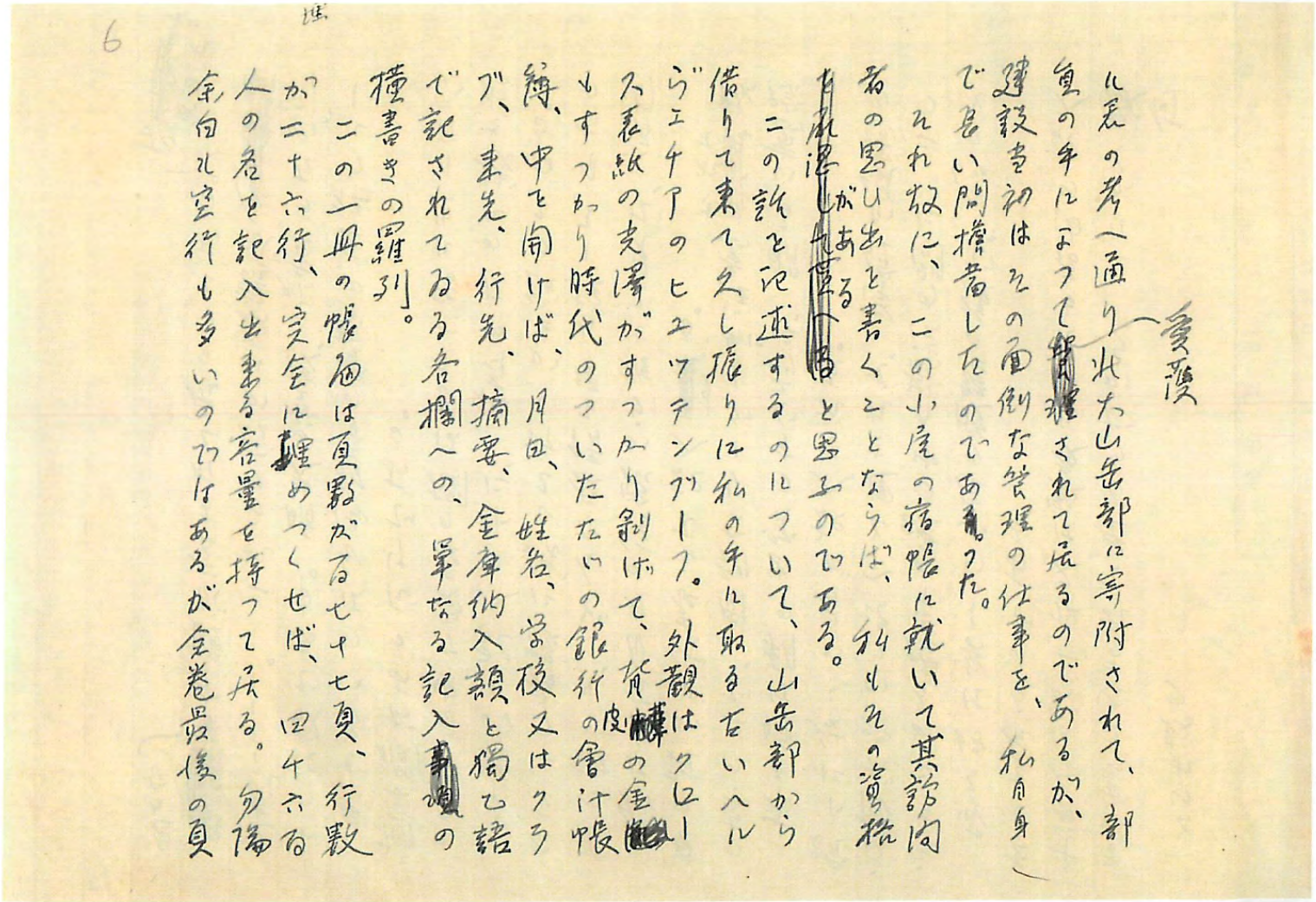
5

ヌビ岳の登攀のためのヘルゲエチアヒュッテ及び妹又宮家の宮沢小屋の三者は、すべて建築家マックス、ヒンデル君の設計した本格的の山小屋、即ち森林地帯に於ける唯一の正統の木造建築である丸木積みの小屋である。

瑞西のチューリヒに生れて後にチロールに住み、サンモリッツのホテルやらイレンの銀行などの大建築を設計したヒンデル君は、北大豫科の講師であった義弟のハンス、コラー氏（北大にスキー術を傳へた日本のスキーの歴史の開祖の一人である）を使って日本に渡って来て、暫く札幌の町に居住していたのであるが前述の二つの小屋はその頃の同君の作品なのである。宮沢小屋はヒンデル君がすでに札幌を去った後に、宮家から北大を通じて同君に設計を依頼せられたものである。

ヒンデル君自身が建築の現場を監督して、徹頭徹尾自分の手で作り上げたのはこの三つの中でも一番わさいヘルゲエチアヒュッテである。今ではこの小屋は、建設者時のヒンデ

＜注＞（9行目）ハンス・コラー氏：スイス・チューリッヒ生れ。明治41年～大正14年の17年間、北大予科ドイツ語教師を勤めた。授業でスキーの紹介したところ、学生たちにせがまれてスキーと教本を輸入、この時これを使って練習した学生たちが、明治45年、北大スキー部を創設した。コラーの妻アニーはマックス・ヒンデルの妹。アーノルド・グブラーはコラーが大正14年札幌で死去後に後任として赴任。



6

貴重

れ者の者一面より北の山岳部に寄附されて、部員の手によって管理されて居るのであるが、建設当初はその面倒な管理の仕事を、私自身でさい問擔当したのであった。

それ故に、この小屋の宿帳に就いて其訪問者の思い出を書くことならば、私はその資格があると思ふのである。

この話を記述するのについて、山岳部から借りて来て久しぶりに私の手に取るたいへんぼろ二千アのヒュッテンブーフ。外觀はクロース表紙の皮革がすっかり剥げて、貧の金もすっかり時代のついたたいの銀行の會計帳簿、中を開けば、月日、姓名、学校又はクラブ、来先、行先、摘要、金庫納入額と獨乙語で記されてゐる各欄への、單なる記入事項の横書きの羅列。

この一冊の帳面は頁數が百七十七頁、行數が二十六行、完全に埋めつくせば、四千六百人の名を記入出来る容量を持って居る。勿論金白北空行も多いのではあるが全巻最後の頁

＜注＞（9行目）ヒュッテン・ブーフ：Hütten Buch、訪問者が日付、氏名、行程などを記帳する備え付けのノート（7ページ写真(9)～(13)参照）。

7

といふ数の

まで書き込まれて居るのだから、とにかく何

千の人々が一夜又は数夜にわたる宿泊の記入

をして居るのである。

或る時は楽しい小屋の晩餐の後で、淡々と

立ちこめる煙草の煙の中の歓談の間に、この

宿帳が次から次へと廻されて、洋燈か蝋燭の

燈下に各この名が記入される。

或る時は朝の出発のすぐ前に、明るい意際

の卓の上で、周到なりし知に注意されて

皇の誰かが代表して記入する。

私は自分自身の経験から推して見て、訪問

者の誰でも、どんな感情を筆に托して自分の

名をこの宿帳に残して行くかを知つてゐる。

事務的の記入の外に、後年のために残され

て居る自由な発表の欄は長さ一指も足りない

摘要欄があるだけである。

最も多いのは多倫諾爾等の登攀や来往のルー

トの記載である。晴天の登頂、吹雪のための引

返し――――。これらの短かい数語に

[redacted]余韻が含まれて居るのである。

私が思れば

色々な

8

「ビュッチャルバイト」と乾燥に書かれた一語には、労作の[redacted]「珍り」が感ぜられる。「学校を休んで、山の涼しい声を聞きに」といふ告白がある。「創作のために、詩のために」といふ句がある。

「幸福」といふ重大な[redacted]形容詞が、ゼーア「喜び」といふ副詞で強められて所々に[redacted]記されて居る。[redacted]ラユーニックな表現である。

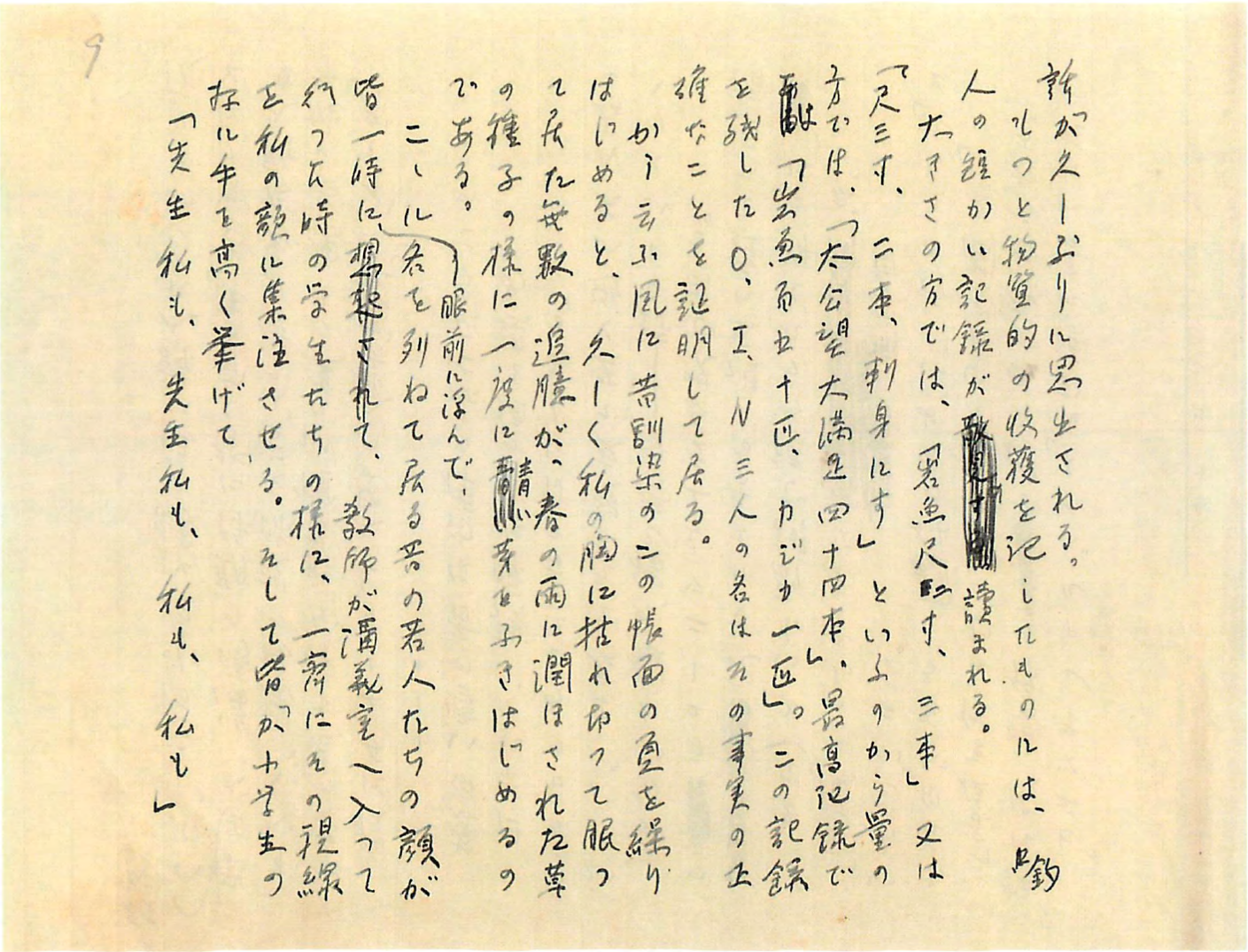
多分が手製の、獨乙語の――詩らしいもの、初行が、I君とその親友で若く逝いたN君との署名のあとに書き付けてある。

日暮れて、残暉は山の頂を染め
蒼白い雪の香は白樺の森に立ちこめ……
――――――。

後にチューリヒ大學の入學式に、「イーダ」と其の名を呼ばれて慣例に違って總長と握手すべく、満場の視線を浴びて歩み出た新入學生が、満場の期待に背く「異性」であったといふ、この小屋と縁の深い詩人れついての挿

の彼が

＜注＞（10~15 行目）I 君と N 君：I 君―井田清、山岳部創設時の部員、昭和 6 年 3 月農学部生物学科卒業、昭和 7 年チューリッヒ大学留学、留学中はガイドのサミュエル・ブラバンドとメンヒ、ユングフラウ、アイガーなどの山々を登った。詩を良く書き、1931（昭和 6）年詩集「山」を山と雪の会から発刊した。N 君―宿帳のサインは、Naohide(?) Takeda



誰が久しぶりに思出される。
もっと物質的の收穫を記したものには、鮎
人の細かい記錄が[redacted]讀まれる。
大きさの方では、「君魚尺[illegible]す、三本」又は
「尺三寸、二本、刺身にす」といふのから量の
方では、「太公望大滿足四十四本、最高記錄で
[redacted]は「岩魚百七十匹、かじか一匹」。この記錄
を誇した O、I、N 三人の名はその事実の正
確なことを証明して居る。
かうゝふ風に苦訓染のこの帳面の頁を繰り
はじめると、久しく私の胸に拘れ卸つて眠つ
て居た無數の追憶が、春の雨に潤ほされた草
の種子の様に一度に[illegible]芽をふきはじめるの
である。
眼前に浮んで、
こゝに名を列ねて居る若人たちの顔が
皆一時に[redacted]して、教師が講義室へ入つて
行つた時の学生たちの様に、一斉にその視線
を私の顔に集注させる。そして皆が十字生の
ほゝ手を高く挙げて
「先生 私も、先生 私も、私も、私も」

＜注＞（8 行目）O、I、N 三人の名：宿帳のサインは、J.Nishioka, Mitsuo Osada, 長田誠

囁

といふ仲間が風の様に[illegible]耳を[illegible]のである。

私は困惑した女の先生の傍に、誰と云ってその中の一人を指さすことが出来ないで教壇の上で立往生する。

「もういい、もういい、皆同なしに面白かったんだから」

昔、中学の頃と話の時間に、未来は持って居て、過去のない私たちは文法上の過去と過去完了の使い分けが分らなくて、「ありし」と「あったりき」と云ふ不思議な言葉で読本を譯読させられて居た。その「ったる過去」の日本語云ふならば、

「そこでは世等が[illegible]すべて同様に幸福であったりき。すべてが、すべてが」

Ihr waret alle gleich glücklich gewesen, alle, alle.

さて私はいよ〳〵、完了した過去の追憶から現在に立ち帰って、録音に約束した記憶の筆を進めなければならない。

だが私は、文字で記録された歴史以前の

屋の完成民の事蹟を、年代順に記述しやうとする私の意図から云へば省略するわけには行かないだらう。

ヘルゲエ・アヒュッテの棟木の下向きの面にヒンデル爺が自ら彫つた一九二七の年、即ち昭和二年の夏に[illegible]小屋が作られたのであるが、その九月初旬に、完成した小屋の最初の、しかも婦人の客として、ヒンデル夫人外一名の夫人が行つたのである。

九月と云へば白樺の黄葉が、風も無い林の中で雨のおと散るころである。小屋にはまだ寝具の用意がないので、白樺の香気を発散する柔かい絨毯を厚く敷いて、夜の眠り場所が用意された。

ともかく、山小屋の夜は生れてはじめての経験である。日本の夫人は、終夜秋に響く雨の静かな渓流の水声と、うすいエユラーツザンリッヒを透す初秋の冷気とに、子孫で夢を結ぶことが出来なかつたと云つて居た。

うちにある古いアルバムの写真を見ると、

注＞（4行目）棟木の下向きの面：6ページ写真（7）参照

12

河岸に二人の夫人が食後の洗ひ物をして居て、バツクリになつてゐる小屋の丸太積みの壁には受難の神の子の様な恰好をした人物が、何か むきに釘づけになつて居る。これは、[illegible]宿 帳の詩及び詩集「山」の著者 イーダ[illegible]が、 夫人たちが林内から集めて来た苔を、丸太の 間隙に充填してゐる図なのである。

ヒンデル君はこの山行のすぐあとで、あはただしく札幌を去つて樺演に移り、海と富士の見える丘の上に居心地のいゝ住宅を建てゝ住んだのである。そしてそこで函館のトラピスト修道院、秋田新潟の加特力の教會、東京の上智大学、聖母病院等の設計がつぎ〳〵になされたのであつた。

この秋の間に、残されたヘルゲエケアヒユツテでは、その歳末にヒユツテンブーツが備えられるまで[illegible]小屋の整備のために、多くの北大山岳部員が無名の奉仕をしたのである。

宿帳の第一行に記されて居るのは、瑞西人

＜注＞（1行目）河岸に二人の夫人が――：4頁写真（3）参照

13

アーノルド、グブラー君の名である。所属団体の欄にはいつもSAC、バハテル支部と記してある氏は、小屋の建設者の一人であり、北大獣科の講師であった。氏の名はそれから後には殆ど毎週末に記入されて居る。後に端西から新夫人を迎へてからは、始めは夏に、後の冬期には、夫人同伴の記名がなされる様になった。

この最初の署名は、十二月の末に氏と私とで小屋に行って、私が狸小路の専門店で買入れた軍隊毛布のふとんの上にわらを詰める作業をした。その時のものである。小屋の毛布も同じ店の品物で、後に至って小屋の経済が苦しかった時には、その補充の品には、兵隊の名でなくて軍馬の名が記されてゐる様なこともあったのだった。

・小屋開きの式。その年の暮から新年にかけて、「友人たちの圏内での小屋開き式」と註せられてゐる署名の日が、スキー小屋と

＜注＞(1行目)アーノルド・グブラー君の名である：7ページ写真(9)、(10)参照

(19行目)「友人達の圏内で小屋開き式」：同上参照

14

してのわ屋の公の発足であった。
二十余年前の事だから、新鮮な感覚の記憶は稀薄になってゐるけれども、自分たちの手で作られわ屋開きの日の喜びは最大のものであったにちがひない。ゴブウシ君、その友人の福島高等のつしぜル君、れもくしこの山地の美を私に教へてくれた杉川君、その他数名の仲間の名がならんでゐる。
最初の冬が来て、林内の下生えを雪が埋めつくした時の小屋の[illegible]は夏の間のあらゆる想像を超越する美しさであった。情景
雪がはすくれた芸術家であることは周知の通りであるが、数多い作品のなかでもヒンデル君が自分の一番愛好する作品だと云ってゐたこの小屋が、さういふ洗錬された協力者の仕上げによって又格段の効果を挙げたのである。
白配のゆるい屋根の上に厚い軟かい雪の帽子をのせ、深く突出た軒端からは日に輝く氷柱の總飾りを下げ、起伏に富んだ壁面が深い雪に埋かく埋まってゐる小屋の様子には、よ

の形態の

一段

<注>（11 行目）最初の冬が来て：9 ページ写真(14)参照

15

く云はれる純瑞西風と云つた様な
は感ぜられずに、其の調和と情趣に於て、異物の感じ
この森林の中に自然に生育つた人の住居である
様な落付いた土着的のものが感ぜられたのである。

その年の私の丸善の月報千円帳には、小屋開きのための献立の材料が書付けてある。その頃の自由な選擇で行はれた豊富な買物と、松山君の指導のもとにうちの菜園で收穫した色々の蔬菜、子持甘藍とか花椰菜とかその他の水分の多い食料が皆のルックを無慈悲に重くしたのであつた。

瑞西名物の馬鈴薯料理に「リヨスチイ」（これは鶏外式の假名書きである）といふのがあつて我々がやつて見ても中々うまく行かない代物だつたが、小屋開きの晩のコツクを長をつとめたチユーリヒ生れのワーゼル君の作品は、約束通り金と褐色との階調を持つた本格的のリヨスチイであつた。これは長身の氏が背をかがめて低いストーブの上でフライパンを

保存してある姿のスケッチが私の手帳にあるのでこれだけは思浮べることが出来るのである。

同じこの最初のスキーシーズンに、私たちの小屋は思掛けない高貴の賓客を御迎へすることになつたのである。

月日の記入は一九二八年二月二七―二六日となつてゐる。

姓名欄の筆頭は、姓のないヤスヒトというローマ字のサインがまづ読まれる。あとはこの隊のリーダーの松川君、此たびスキー部及山岳部の学生たち、北大の大野教授、京大の木原教授、前田伯爵、渡辺氏等総計十二人の山伏の名が同じくローマ字で記入されてゐる。

当時はパウダースノウチェック、舗路は銀色へ、積雪欄には、手稲、奥手稲、朝里一〇九七米、はるか山、金庫納入額は一円二十銭、その頃御一人一泊金五銭也の規定であつたから、百パーセントの御奉仕を頂いたこと

＜注＞（8~14 行目）姓のないヤスヒトというローマ字のサイン：秩父宮、8 ページ写真(11)参照

松川君：松川五郎、大野教授：大野精七医学部教授、木原教授：木原均京都大学農学部教授。前田伯爵：前田利男秩父宮家事務官（加賀藩前田家 14 代当主）、

となつて居る。
私はこの宿舎のスキー行に関しては、私がその隊のために用意した所謂「ルックザック」からのメニューしいに就いてのみ記述することとしやうと思ふ。
山と町では色々な觀念が反對になるのだから、山小屋では庖厨に達さかることは君子の徳を意味せずして、小人の徳を意味することを銘記しなければならない。
又小屋の晩餐や、文字通り雪白の針葉樹下のテーブルクロスの上にたゝられる「雪上の晩食」の「静物」の材料と組合せを考案工夫することは、「時代」を超越する永遠の問題なのだから。
まづ第一はパンの問題である。
札幌生れの森田たま子さんの隨筆によつて按ずるに、女史が札幌をおつてから、札幌のパンはひどく品質が低下したにちがいないのである。どこのパン屋のでも、外皮の色からして不健全な生焼け色をして居て、夏山にゆ

（16 行目）森田たま子さん：森田たま（1894-1970）、札幌高女中退、随筆家、昭和 37 年参議院議員

18

く山岳部員の談によると、一回向で七色のかびが生じるといふことである。

札幌で唯一のパンを焼く所は、創生川の東にあるヒンデル君の建てたフランシスカンの修道院だけであつた。それで私は修道院に出掛けて、院長のキノルド主教からパンを分けて貰ふことを決心したのであつた。

加特力の修道院は、俗人が一歩もその閾を跨んで中に入ることを許されない別天地である。シエツフエルのエツケハルトの中に、驕慢な美しい公妃が、領内の修道院を訪れて入場を強要する。若い修道僧エツケハルトが自ら公妃を抱き上げて、閾を跨むことなく院内に入らせるといふ場面があるが、平一般人民。

私は札幌の修道院の中庭に、専門のパン屋にも負いだらうと思はれる大きな立派なパン焼きの竈があることを、この私の眼で見て知つてゐるのだつた。

それは私が院の閾を突破したのではなくて、ヒンデル君が、そのクラウズール（俗界から

＜注＞（4行目）フランシスカンの修道院：聖フランシスコ修道院、ヒンデルの設計・建築で1925年11月落成、北11条東2丁目に1981年まで現存した。

19

の遮断の前に、私を伴って限なく陵内を見せてくれたからであった。

パンを恵んで貰ふために宣教に面会したのは、湯宿道陵の方ではなくて、別の建物であった。加特力の高僧にしては少しくメフィストフェレス型の顔をしたキノルド主教は、私の願を快く聞届けてくれて、あとは雑談に移ったのだったが、その時私の家の菜園の話を聞いて、それは羅馬の文化人が好んで従事した古典的の趣味だと云って賞めてくれたのだった。

後に私の家に、或る新教の牧師が訪れ、私の家の菜園の「空地」を指摘して、

「此ばせて置かれる様ですが、若し借家を師建てになるのなら、見晴に濃美歌を唱ふ以外は全然迷邪慾にならない教會の建設に貸して頂けないでせうか」と申出

敷地として

といふ天啓的提案をしたのだ。

私は憤然として、私はこの土地を自らの汗で耕して、高い野菜を作り、それによって

価値

貴君の言葉で云へば神様の御恵みを味はつて居るのですと云つて拒絶した。客は何事も神様の思召ですからと云つて辞去して行つたのであつたが、私はキノルド主教から責められたことゝ、この意外な解釈とをくらべて、新旧両教の僧の教養は知らず、品格の差の著しいのに感心したのであつた。

閑話休題、かくて私は遅くまで居た旅中の色の種々な、或はもつと文化的な札幌の諸者のための表現を使わなゝ、セザンヌのパンの様な色をした、人頭大のパンをいくつか手に入れることが出来たのである。

次はパンの附属物の肉類である。瑞西や信州の山で宮様といつし同伴したヘルマキから通報では、バタパンは御嫌ひで、よく鑑詰の肉の練物が使はれたといふことだつた。

然るに札幌市販のさういふ類のものはどれも肉塊にならないし、パンを使ふとすれば

これ又長田[illegible]士史が経験した様な心配が[illegible]

恐縮して

恐るべき可

＜注＞（15行目）ヘルマキ：槇有恒（1894-1989）、1921年アイガー東山稜初登攀、1926年秩父宮の供奉でアルプス各地登山、1956年マナスル登山隊長、第4代、7代日本山岳会会長。

21

能性
酷が再び考へられるのである。

そこで私は、その以前から私の家では雁が
ふく年に入つたのでそれの肝臓で作つて居た
ゲンゼレーベルパステーテ（鵞肝のパイ）の
製造を計畫したのであつた。
すべく余儀なくされたのであつた。
たゞ季節が早すぎて、雁はその避寒地である
亜細亜大陸の南方から、まだ日本の土地へ
は歸つて来て居ない。私が白羽の箭を立てた
のは、もつと手近の北方の植物園の池に棲
息してゐる鵞鳥であつた。
博物館長としてK、植物園の中のわさな事務
所に住んで居た八田教授に鵞鳥の話をすると
これも一寸どぎまぎしてメフィスト型の風采をした
Hさんは快く承知をしてくれたのであるが、
なぜこの鳥は大学の帳面に載つてる標本なの
だから、実験用に使ふといふ一札を入れてほ
しいといふ話だつた。ぜんたうのメフィスト
に書いて渡す一札には「特別の液、血
のサインが要求される所であるが、こゝでは
日本のお役所流に無い敬伸をべタ〳〵と捺し

て、無事に取引がすんだのだった。

目的の獲物が手に入ったので、うちの[illegible]では係りの員が精進潔斎に乃んで、この高級食品の製造を開始したのであるが、本来ならばフオア、グラ、即ち肥育した鵞鳥の肝臓、[illegible]で作られるべきものであるが、植物園の池の鳥々は、フオア、メエグルとも云ふべきもの[illegible]の肝臓だったのだらうと思ふ。

その夜の我家の台所では夜半まですり鉢の音が絶えず遠雷の様に聞えて来て、婦人者はあと数日し脚の痛みを訴へたのであった。

美味に出来上った[illegible]ペーストは、厳重な係員の監視のもとに、新らしい曲物に詰められて、倍達産のパンと共にクリーム状の松川君のルックサックに納まり、その貴い使命を果したのであった。

23

次には小屋の晩餐の献立に移ろう。
メニューの第一は えぞやまどりの燻肉。
こゝで私は読者に、私の親しい友、恵庭の猟師水本を紹介しなければならない。
プリンス御一行の記入のすぐ前の頁に、水本小判治と記され、摘要欄に「プリンツの属の松雞猟、(ハーゼルフーンヤーグト)」と註がしてあるのが、ヒュッテを建設するに就いて私の依頼に快く應じて、二人の仲間と共に不便な山中に五十五日間の長い[illegible]労作を終えて、面倒な白樺材の丸木小屋を設計通り完成させてくれた誠意な彼の名である。
千歳川の獨木舟作りにかけては上流下流にかけて彼[illegible]及ぶものがないと云はれた恵庭の水本、その造船術の應用が、小屋を訪れるとの猟婦の喜びも、一様に羨望の声を放つ、絶対に水の洩らないたくさんな流しである。
(落り抜きの)
小屋を根據として彼の獲物は、小屋の入口の天井にかけられて、それ

＜注＞（3行目）恵庭の水本：水本小判治

にわさはしい貴賓の来泊を待受けたのであつた。リンネに果この島の持つ「美味なるしといふ意味の学名」は、この島が正しく王侯の宮殿のものであることを示すのである。

小屋の夜食には、水車小屋が御召を受けて近くの造材小屋から伺候して、彼の豊富な談話、独乙人の所謂「猟師のラテン語」の範疇に属する「會話」が中心となつて賑つたことを、同じく彼と親しい松川君が、心から喜んで私に話してくれたのだつた。

水本は又後に、ひそかに書夜の感想を私に洩らして云つた。

「自分たちは、昔はあゝ云ふえらい人のことはトノサマと云つたものだが、今ではみんなテンカと云ふ様だね」と。

猟者として、火縄銃から、[illegible]銃、[illegible]銃を経て、ついにシンガル動銃までの[illegible]武器の変遷を自ら経験した彼は、[illegible]國土に君臨する大に経砲の変遷をも、身自ら体験したのである。

紀念されるべき

今は彼の墓の上に建てられてあるであらうが、水本の名は、ヒンデル君の魅れと共にヘルゴニアヒュッテの建つかぎり、[illegible]

最後まで[illegible]名なのである。

彼自身の霊魂は祖先の國に神となって立帰って、猟期もなく、鮭の監視小屋もない自由な[illegible]山野に猟りくらして居るのであらう。

彼が愛して、小屋の建設中山中に連れて来てゐた彼の子は、今では農村恵庭の第一流の人物となって村民の嘱望を担ふてゐる。かねて孝心深い子であったから、現世で[illegible]営まれる供養の品々も豊富に捧げられ、天上の父も肩身広く、この世でもさうであった様に仲間の神にからも好感を持たれて楽しく暮らして居るにちがひない。

25

既聲の献立の第二のコースは、鵞肝のパステートと同じく、ヒンデル夫人から我家の[illegible]所[illegible]に傳承したグーラシュである。

これはパプリカ（辛味のない唐辛子の粉）

26

主調とする
を[illegible]牛肉の煮込みで、本来ハンガリーの料理である。

チロールに生れてウイーンに住んだヒンデル夫人は、この外国色の濃た利風の食物を私の家に傳へてくれたのである。

お菓子では、先張りこの時の人キャー行のためにうちで用意したりンツエルトルテとか、或は有名なウイーンの「林檎巻」、アップエルストルーデルまでも、おかげで私のうちの誕生日のお菓子になつたのだつた。

ウイーンに行く旅客はベートーヴェンやシューベルトの田舎は[illegible]なくとも必ず味はされるこの代表的菓子、その薄い皮の伸展の技術の困難さも増しく、その名の発音がむずかしいとお答古の度に生徒が嘆声を発したのだつた。

かくしてグーラシュは私の家の誕生日には必ず登場する献立の一つ（今一つはお定まりのチロールのクヌーデル）であつたから、うちに来る学生たちの間にも多サポピュ

27

ラーに成つてゐたので、私の家に学生たちが集つてゐたのための献立會議を開いた時に、満場一致でこれが採用されて、それからうちの台所で、指導教官の指導の下に実習が行はれたのだつた。

グーラシュに就ては一場の笑ひ話もある。私がこの話よりも後でベルリンに行つた時、菩提樹下街の昔馴染の食堂でこの料理を注文したら、同じ卓についてゐた一人の世話焼きのおいさんがそんなものはブタペストに行つて食へと私に云ふのである。

私はそこで、「それは私も知つてゐるが、これは私のうちのハウスデリヒト（お惣菜）なのだからベルリンのものを食べて見るのだ」と云ふとその老人が呟いて

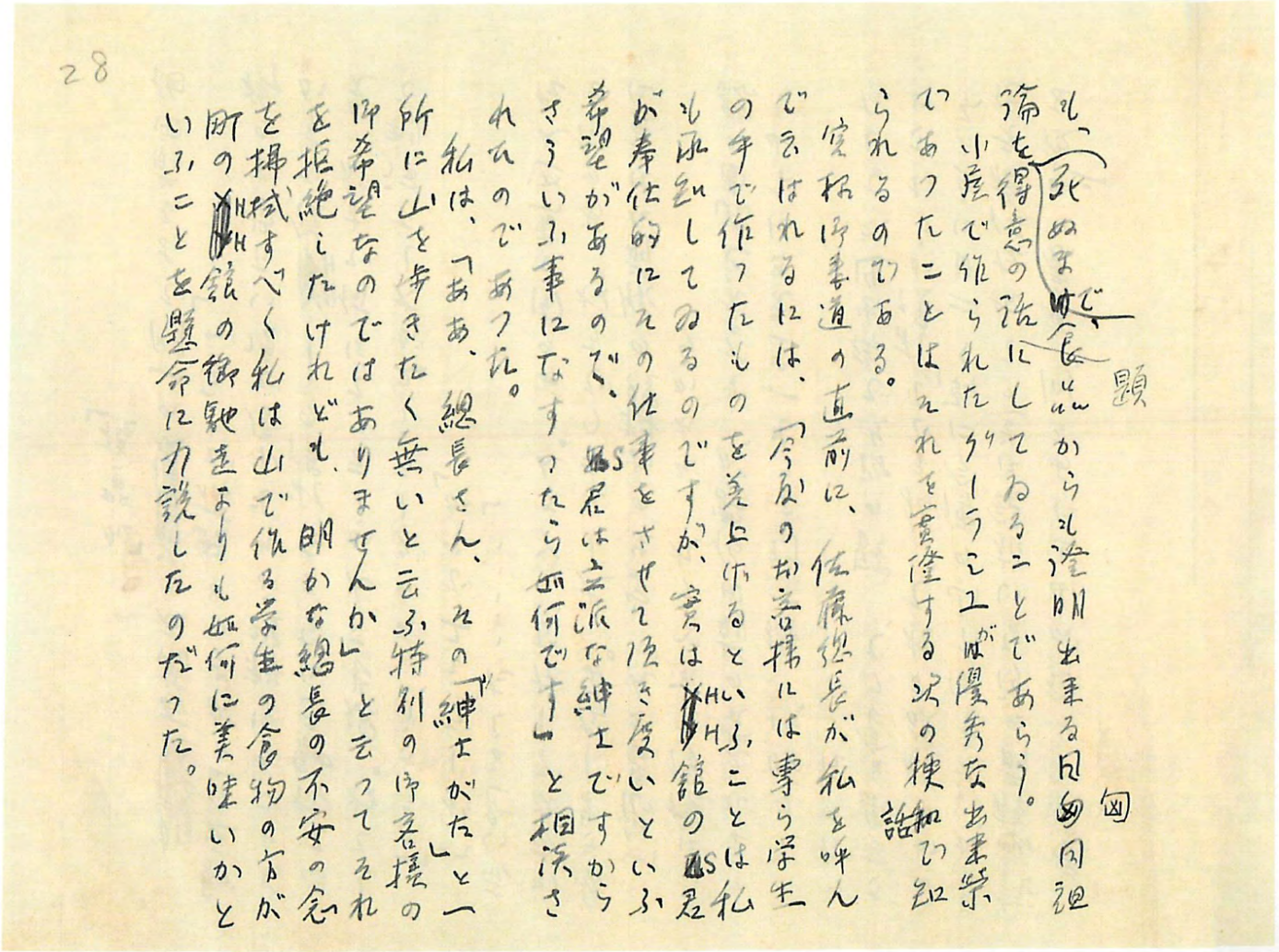
「自分はハンガリー人とドイツ人とが同祖だと云ふことは聞いて居たが、グーラシュが日本にあるといふことは知らなかつたと云つてほとほと感に打たれてゐるのであつた。

私がこの話をどこでもする様に、あの老人

＜注

＞（8行目）菩提樹下街：Unter den Linden ドイツ・ベルリンの大通りの１つ。通りの中央に散策路があり、散策者は菩提樹の並木道を満喫できる。ブランデルブルグ門からプロイセン王宮までの通りで、多くの

歴史的建造物がある。第二次大戦で街並みは廃墟と化したが、数十年間に亘る復旧作業によってほぼ原状回復された。



28

も、死ぬまで、長いあいだから、塗り出来る限り迫
弾を得意の話にしてゐることであらう。
小屋で作られたクリスマスの装飾が優秀な出来栄
であつたことはそれを賞讃する次の挿話から知
られるのである。
佐藤総長道の直前に、佐藤総長が私を呼ん
で言はれるには、「今度のお客様には寒い学生
の手で作つたものを差上げるといふ、ことは私
も承知してゐるのですが、実は館の君
が奉仕的にその仕事をさせて頂きたいといふ
希望があるので、君は立派な紳士ですから
さういふ事になすつたら如何です」と相談さ
れたのであつた。
私は、「ああ、総長さん、その「紳士がた」と一
所に山を歩きたく無いと云ふ特別の客様の
希望なのではありませんか」と云つてそれ
を拒絶したけれども、明かな総長の不安の念
を掃拭すべく私は山で作る学生の食物の方が
所の御馳走よりも如何に美味いかと
いふことを懸命に力説したのだつた。

＜注＞（6行目）佐藤総長：佐藤昌介（1856-1939）男爵。農業経済学者　札幌農学校１期生でクラーク博士の教えを直接受けた。

札幌農学校校長を経て、大正７年北海道帝国大学初代学長。

29

貴賓の一行が山上にある間、憂慮の二夜を
銭函駅前の汚ない旅館に送った佐藤老總
長が、無事御下山の傳令に漸く二日目の不
安から解放されて、札幌からわざわ
ざ名菓を食って、駅の附近で御出迎へをした
のだった。

その時に、御一行よりも一足先きに下山し
て来た先発の前田伯爵が、まっ青な顔色満面の總
長に恰度を述べられ、それから

「總長さん、学生のお料理の豚前には実に
驚きましたよ。大したものですね。あの何と
か云ひましたな、Yさん。あの肉を煮込んだ
赤い色をした……」

「ゲーラシュですか」

「さうさう、そのゲーラシュが大した評判で
してね。總長さんかう云っては何ですが、先
達て伯爵になった札幌の――HH館ですか
あれこの伯爵料理よりも小度で強いた学生の御
馳走の方がずっと結構でしたこと」

加賀様

加賀百萬石の前田家の一門である前田伯

爵が、私と総長の顔を半分づゝ見ながらかう話された時の老総長の、複雑な顔の表情！

老伯爵はとうに地下の人となってしまったが、私の料理の養育のために、そして私の饌客の辯解のために一言蛇足を添えるなら、私とても私の家のそれで俄仕込の腕前に大変信用をおいてゐるわけではなかった。

私が会幅の信頼をかけて、水平の変移と一所に小屋に待機させておいた料理番は別にあったのである。

それは庭下の手腕にかけては全東西無比ない名誉のコック で、月給も祝儀も取らない一種のアマチュア的存在であるが、なぜ国ったことにあまりに散文的な名を持ってゐるのでこしらへは氏といふことにしておかう。

山小屋にはいつでも気軽に来てくれる氏の腕前を、町で大臣や、総長や、社長といふ様な人たちの宴会で味はうといふのは殆どの不能なことなのである。

私の「長浜の「教訓」はこゝに帰結する。

完

31

昭和四年八月には、横濱のヒンデル夫妻と同行して、パウル、フランクと云ふシレメンスの技師長が一所に暫く小屋の客となつて居る。

此の人は東洋第一の月給取りだといふ、肥満つた代表的獨乙型の老人であつた。富濱在住の獨乙人は、この獨身の老人の大森の邸宅に食事に招待されることを最大の樂しみにしてゐるといふ話であつたが、この時の旅行にも吳さんといふ中國人のコックをつれて來てゐた。

フランク氏は小屋で一週間を、ヒンデル夫妻は更にその後の一週間をも山上で暮したのであつた。

外觀

一体北海道の原始林は、その濃淡は四季を通じて驚いつも美しいけれども、一歩林内に足を踏み込むと、冬の根雪のお化粧がすむとあんなにも奇怪な実感なその林内が、夏には見違へる様に、――正直に云つて住宗はう――汚ならしくなるのである。

それは緑の色濃い生命の營みと平行して、行

<注>（1行目）パウル・フランク：8ページ.写真(12)参照

はれて居る死と朽廃の作用の細條の一つ一物つが、あまりに我々の眼につきすぎるからである。

かう云ふ夏の林間で、ラウンク老人とその伴侶とは、楽しさうにその豊重な休暇を送つたのであつた。

コツクの吳さん、（発音はれて）はゆしさんと呼ばれて居たはあまり口数をきかない男で、たゞ黙々として主人のために食卓の用意に没頭しておるのだつた。或る時吳さんは私たちに西瓜の鍋を伸渡しして、これを伸びし呉れと頼んだことがあつた。

私はそれを受取つて河原に火を焚いて鍋を掛けたまではよかつたのだが、その内に外の連中の面白さうなざわめきに誘惑されてしまつて、バケツ一杯の獲物を下げて焚火の所に帰つて来た時には、鍋の中の米は真黒にくすぶつた炭素球に変化してゐたのだつた。

私が恐る〳〵鍋を吳さんの所に持つて行くと、吳大人は素然自若として驚く色もなく

丁寧に表面の炭素層をむいて、思掛けなくも上等に蒸焼された豆白な芋に還元させて、そしてあまり利口でない顔つきをして見てゐたに違ひない私に、珍らしく嬉しさうな笑顔を見せて、ビシアー、グーートと云つたのだつた。

そこで私はすつかり田舎親善的気分になつてしまつて、バケツのザリガニを大人に呈供して何か料理を使ふことを勧めたのだつた。

呉さんは大きな奴を拾ひつまみ上げて、寺門家らしく見て居たが、やがてそれをバケツに返してつこれには白葡萄酒をつかふのだが――――一と云つたきり、この清流の珍味は遂に洋食の方の献立には採用されずに、醤油の付焼きで日本人の腹の中に納まつてしまつたのであつた。

フランク老人は、かういふ方法で命の西洋洗濯をした後、呉さんをつれて白老を経て帰京したのであるが、その後同氏から一通の葡萄酒が私の家に送り届けられて来た。長い頸をした瓶の、傷ての白葡萄酒であつた。呉さ

イガ小屋で湯山取れるザリガニの料理のために主人に進言したものであらうか。
それにしては上等な、黄金色のラインワインであつたと記憶してゐる。
フランク老人の色々な物語りの中で今記憶してゐるのは、日本の工場では、技師と職工とは優劣で、中間の事務側の人間が一番いけないと云つてゐたことである。
この時の宿帳には、ヒンデル夫人の筆跡で、ラッテン、フレエエ、ランド、フリーデン、ハッテン、ミヒ、バイナーエ、フエルトリーベン
蚊と、蚤と、そして蠅が
あぶなく私を逃れ出すとこだつた
と押韻の句が記されて居る。
蚤は別問題として、蚊と蠅とは、北大の山岳部の先輩の模、たしかにヒュッテの創設この方の御定連に違いないのであるが、ヒュッテンがフルヒの名が記入されたのはこれを以て嚆矢とするのである。
六脚無翅の小ジャン。パーの方は、小屋で

35

実際はあまり問題にされない

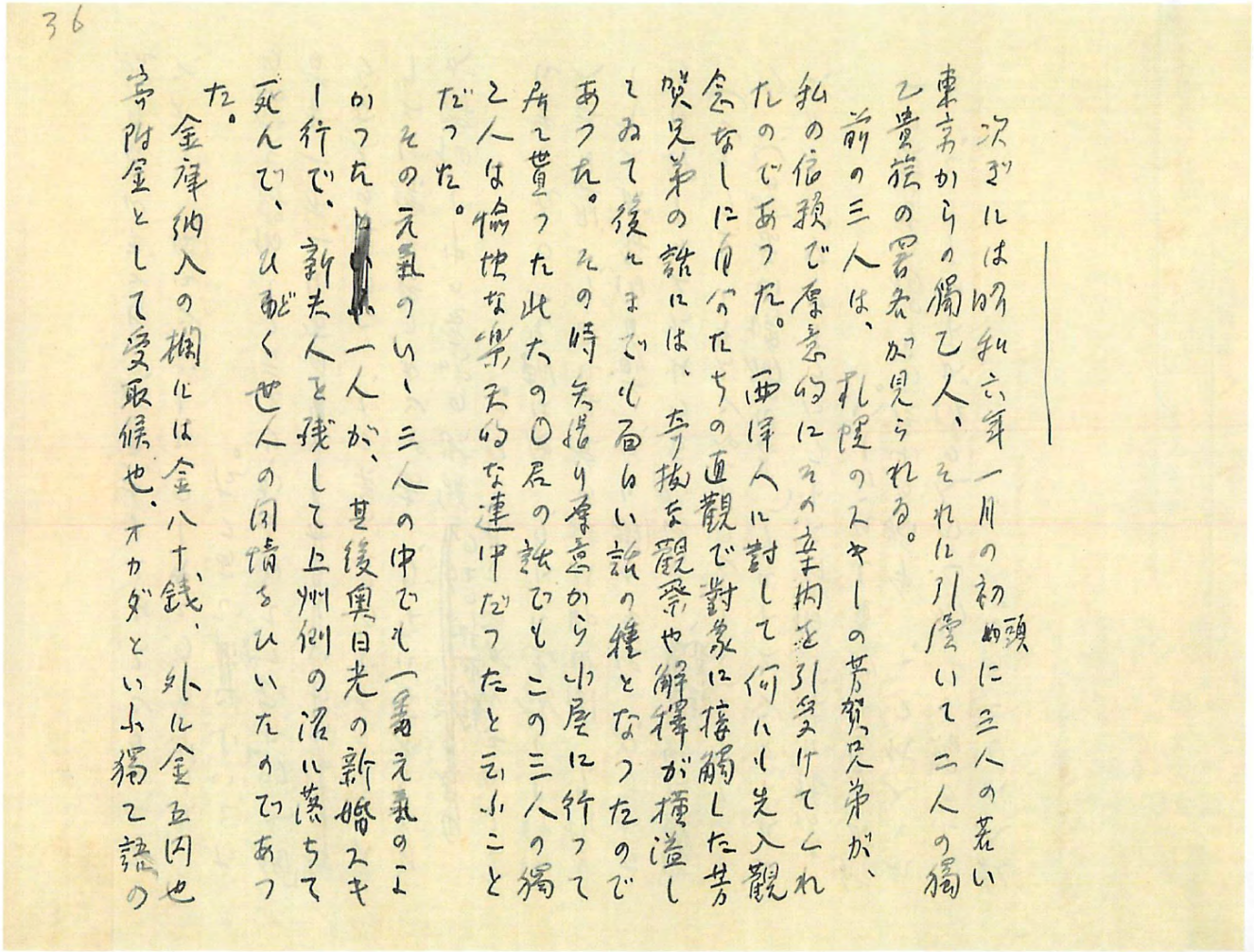
[illegible]動物であることは、大体二脚の大ごヤンパーが小屋と沒交渉であるのと同様なのである。

これに反してアルプスの登山文献の古典では、「黄金時代」の勇敢な開拓者たちは、雪崩や墜石の危険と同じ重要性をもって往来の夜の宿泊所に於ける不可避の共棲者である「さる褐色の、敏捷な小動物」の脅威について必ず引用することを忘れなかったのである。

この小動物は、山岳會のクラブ小屋が登山者の新らしい家として登場し、そのために牧人小屋や岩小屋が利用されなくなったのと同時に、その古い宿泊所の牧歌的情趣と共に永久に山岳文學から尊重される機會を失ってしまった古典的動物なのである。

ヒンデル夫人以後、婦人の小屋の客は次第に増加して近頃のヒュッテンブックには少しも珍らしい記入では無くなったにも係らず、ちと〻散文的にでも、この小動物[illegible]書いて[illegible]人は一人も無い[illegible]のである。

不朽の書入れを残した



36

次ぎには昭和六年一月の初頭に三人の若い
東京からの獨乙人、それに引續いて二人の獨
乙貴族の署名が見られる。
前の三人は、札幌のスキーの芳賀兄弟が、
私の信頼で厚意的にその幸運を引受けてくれ
たのであつた。西洋人に對して何にも見入觀
念なしに自分たちの直觀で對象に接觸した芳
賀兄弟の話には、奇拔な觀察や解釋が横溢し
てゐて後にまでも面白い話の種となつたので
あつた。その時矢張り厚意から小屋に行つて
居て貰つた此たの○君の話でもこの三人の獨
乙人は倫快な樂天的な連中だつたと云ふこと
だつた。
その元氣のいい三人の中でも一番元氣のよ
かつた[redacted]一人が、其後奥日光の新婚スキ
ー行で、新夫人を殘して上州側の沼に落ちて
死んで、ひどく世人の同情をひいたのであつ
た。
金庫納入の樹には金八十錢、外に金五円也
寄附金として受取候也、オカダといふ獨乙語の

＜注＞(2行目)三人の若い東京からの独逸人：8ページ写真(13)参照

（5行目）札幌のスキーの芳賀兄弟：芳賀恒太郎、藤左衛門。芳賀スキーの創業は東倶知安であるが、この年札幌へ移転、ヒッコリースキーの製作を始めた。当時、藤左衛門は距離競技の選手で、上位入賞の常連であった。

記入がしてある。

この頃から獨乙商人の隊が下山すると、それと入代つて、手稲の小屋から獨乙貴族の一行がお屋に到着したらしい。

宿帳には、伯爵ストラハウイツツ、フオン、エルドマンスドルフ（芸に獨墺山岳會）、ウインフラー（ウイーンのアルペンスキーフエライン）

[illegible]部長、其他數名の北海スキー部員の名がある。記事の欄には、前日伯爵がスキーを折り、同日助教授の承認により、聖日二人同行して銃出に下り、他は翌日一〇九七米に登つたことが記されてゐる。

[illegible]の吹雪の中で伯爵がひとく不安になり、赤ペンキの指導標ばかり気にするうちに日が暮つて、この辺の木なら指導標がいくらあるとも分らぬ。今は一本一本皆「個人的に知つてゐるから」と云つて伯爵を慰めたといふことであつた。

その聖年のスキーのシーズンには、フオン、エルドマンスドルフ夫妻が、ヒンヂル居の紹

＜注

＞(3 行目)独逸貴族の一行：8 ページ写真(13)参照

妙で、こんどは私の賓客として札幌にやって来れのだった。白皙長身の、いかにも北歐貴族の風采を持った好紳士であった。夫人は日本婦人でもいい位の小柄の人であったが、スキーの技は、夫人の方が重心が低いだけより安定してゐる程度であった。スキー部の者となって昨年来かされたパラダイス――ヘルゲエテアといふルートは少し無理だったのであらう。

私はこの夫妻と無意根小屋に同行して、我々だけの静かな一夜を小屋に送り、札幌では私の家に来て、一時に山の灯燈を見たりしたのであった。

青竹東京の留学大使館の書記官であった此の人の名は、後には風雲黯黯たる歐州者国を歴任する獨乙大使として、時々の新聞通信に見られたから、私たちは夏の都度、あの夫妻が極東の私たちのことを思ひ浮べる時があるだらうかと遥に噂をするのであった。

ヒュッテンブーフ

[redacted]の回想はまだ〳〵書きることを知らないのであるが、私のあまりに個人的にすぎる昔語りはそろ〳〵筆をつけねばならないだらう。

たゞ私は私の最後の小屋の客としてのヒンデル君のことゝ、私が、[redacted]招待された客としてこの小屋に行つたことゝだけを記述して私の追憶の筆をおくことゝとし[redacted]と思ふ。

ヒンデル君は前記のごとく昭和四年の夏に夫人同伴で小屋に来てより、丁度十年間は一毎び北海道を訪れることがなかつたのである。

その間に私は一度、同君とはヨアルプスの旅行を共にしたことがあつた。

上高地から穂高に登るまでを同行したのであつたが、途中で、梓川の渓谷に沿ふ部落の家々を見て、ヒンデル君は非常に喜んで、これらの家々の窓の紙障子の代りにガラスがはまつてさへ居れば、建築は所てすべて全く瑞西アルペンと同なじだと云つてヨアルプスの名を肯定して居た。

<注> （14 行目）梓川の渓谷に沿う部落：1 頁ヒンデル画参照

穂高小屋では小屋の空氣が――象徴的の
失れでなく理學的の空氣が――自分の脳藏
に合はないと云つてわざ〳〵槍尾の岩小屋に
宿りに行つたのであつた。
ヒンデル君はそれに来、すつかり日本アル
プスが好きになつて殆ど毎年の夏にそこに出
かけたと云つて居た。
十年後の札幌旅行は、獨乙大使館の計畫し
た獨乙展覽会の仕事について、その実施のた
めに北海道に来たのである。同居は生れは瑞
西びと、埃國に国籍があるので、その後の獨
墺合邦で自動的に獨乙人になつてゐたのであ
つた。
この旅行は同居に取つては、非常に
多忙なものであつたにも係らず、ヘルゲ工ケ
アと二つテントを私の家族全部が同伴して、
乙しぶりの小屋の一夜を過したのであつた。
それから後の、悪夢の如き戦爭の煙幕をへ
だてた今日、その時の追想は、アルバムに残
つてゐる寫真の寫真があるのに過ぎない。

41

大体がこの小屋行がすでに懐古的動機からなされたのだから、その記憶が更に稀薄なのも当然なのであらう。

小屋の前に立って貰って撮影したヒンデル君の肖像も、頭は真白になり、顔には深い陰影が刻まれて、後はパックリなってゐる小屋が二十余年の雨雪の侵蝕に侵されずに昔のまゝに写ってゐるのにくらべて、墨境の風霜に晒された痕を現はして居るのである。

それにその日の低く垂れた陰雲のために夏の林間はひどく夫保が不足してゐれと見えて、新緑の山岳部の愚人の面影を頼に仕立てて、部員のためにこの小屋に飾らうと、注意深く写したつもりの写真が遂にものにならずにしまったのだった。

この雲出る迄の色の黒いアルバムの旧友の写真に対してゐると、自分のことは忘れて無恨の心が疼くのを禁じ得ないのである。

この時は強きは定山渓から自動車で、帰路は銭函峠を越えたのだったが、一台車子一引

＜注＞（4行目）小屋の前に立って貰って撮影したヒンデル君の肖像：13ページ写真(21)、(22) 参照

迫す[redacted]月と銭函駅で別れたのだった。

その八月の中旬に、再び来道、函館、札幌小樽で展覧会が開かれたのであったが、九月一日、獨英開戦の報を聞き、ヒンデル君は悲壮な面持で私の家を訪ねてくれた。

ヒンデル君の考へでは多分独乙に帰ることになるから、私等に別れを告げて、そして今一度小屋を見て行くために定山渓から小樽へ出て帰京するといふのであった。

その夜は[redacted]同君が没収して連てゝくれたに私の家に泊って、翌朝早く定山渓に向って出発した。それが私達と「ヒンデルさん」との相見た最後であった。

人の手で書かれたどんな悲劇にも、どこか道化役が出て来て観衆の緊張を緩和させる役をつとめるのであるが、現実の世間にもさう云ふ道化「役人」が現はれて、多少劇的の感傷に溺れかけて居た私の気持を轉換させる役を演じたのだった。

すでに書いたから、外国人の来往に對する軍や警察の神経質が病的になってゐて、外人に交渉を持つと見られた者は、相手が獨乙人であらうが何であらうが、晝夜を論ぜずに、電話に直接に、その外人の動靜の[illegible]に[illegible]うるさくつきまとはれるのであった。

ヒンデル君が出發したあとで、前から私の家に電話で「連絡」してゐた相手の男が、[illegible]同君がもう出發したと聞いて大に周章て、何時の汽車かと云ふので私が定山溪から東京に歸つたと答へると、相手は私が何かを隠匿してゐると思つたのか、電話の向ふでひどく獨りで興奮して大きな声を立てるのであった。丁度鼻の利かない獵犬が跡をつけた獲物の臭を失つて脱線しはじめるのと同じ樣子が私に想像されたのだった。

同君と二人で私は二の見えざる相手に向つて、愛[illegible]者と信ぜられる日本人ふりをもつとも日本の風土を愛するが故に、御料の山に初めての山小屋を運設して、これを日本の青年学徒の心身

44

練磨の道場として贈ってくれた瑞西の建築家マッリス、ヒンデル君が、郭国の途中、今年一月、自分の愛する小屋に別れを告げるために定山渓から小樽に向ったのだといふことを、諄諄として談明したのだった。

「どうです、分りましたか」

見えざる相手は分ったか分らないのか、諾は遂に平行線的に終ったのかも知れなかったけれども、私の憂鬱はこれで猶解消したのであった。

最後は昭和二十一年の秋のことである。北大山岳部が小屋の二十周年記念祭を催すについて、はじめて私は賓客の資格で小屋に出かけたのだった。折よく札幌に来合せた日本山岳会の長の松方君――瑞西でヘルマッタと共に宮様との山行を共にした――を誘って同行したのである。

私の手帳へのお定まりの意地の汚ない記入には、夜の御馳走は、カボチャ、芋、牛乳、

45

山羊の肉、前のトマトと記されて居る。
JACの前の會長會長である木暮理太郎氏は、
北アルプス山岳部の創立十年祭に招待され、私の家の
客となり、北アの中央講堂で山の話を講演さ
れた。今の松方会長はヘルゲ工ヤアの二十
年祭で小屋に客となって、部員のために短か
いしかし力強い登山家の言葉をきかせてくれた
のだった。私も若い部員のために小屋の昔話
をさせられたのである。
私は、ヒュッテンブーフとは別に備え
られて居る部員の感想録の一頁に、翌朝の朝
の夫のさす窓際の卓で次のやうなことを書き
残したのだった。
「小屋の後の、柳の中洲の芽生がすっか
り成長して中洲を安全な大地としてしま
った様に、又林内に休れ眠す若むす老樹
の残骸のそばから、緑葉の色濃い雑樹の
群が蘇生する様に、山岳部もあとからあ
とから若い逞しい後継者が[illegible]、
この小屋を守護し、利用してゐるのを見
て嬉しく思ふ。

<注>（2行目）JACの前の会長である木暮理太郎氏：木暮理太郎（1873-1944）　日本登山界の大先達。日本アルプス、秩父、上越などで開拓者的登山を行なった。日本山岳会第三代会長。

46

2

るのはけんたうに嬉しい。あと私の願ふ所は、どこか静かなこの近くの林内の大樹の下で、誰も朝起しに来ない一青苔のこゝろゆくまでぐつすり眠りたいことだ。と。

朝里峠付近より白井岳、朝里岳（1926年）　撮影　坂本直行

5．ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下

1928 年 2 月、昭和天皇の弟宮、秩父宮雍仁殿下が 2 週間の予定で視察のために来道された。その間、1 週間をスキーツアーに充てられることになり、日程の前半に札幌近郊の山々、後半に青山温泉を中心とするニセコアンヌプリが選ばれた。札幌付近の山々では、パラダイスヒュッテとヘルヴェチアヒュッテに各 1 泊された。このツアーの案内を松川五郎をリーダーに、主に山岳部、スキー部の学生が行なった。ヘルヴェチアでの御一行を気遣う山崎のメモと、「山岳」に投稿した山崎の文章を紹介する。

(1)松川五郎宛山崎春雄メモ　-お迎えの準備について-

松川五郎宛山崎春雄メモは松川遺品に含まれていたもので、殿下のヘルヴェチアヒュッテ御宿泊に際して、ヒュッテ所有者の山崎がリーダーの松川五郎へ宛てた細々とした指示である。山崎は一行到着の前にヒュッテでのお迎えの準備を済ませて、このメモを残して下山した。殿下への山崎の暖かい心配りが感じられる。

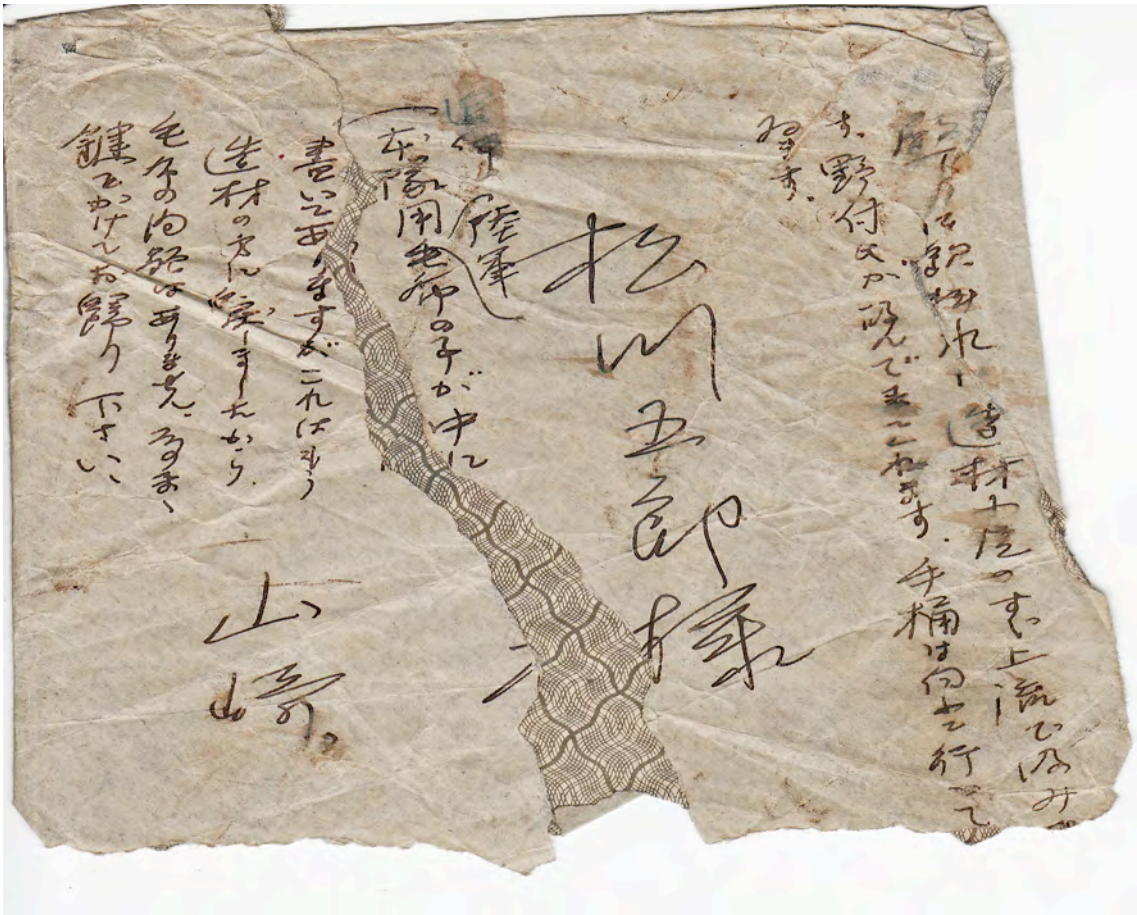
(2)ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下　山崎春雄　(山岳 48 年より)

“ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下”は、山岳四十八年に掲載された殿下のヒュッテ宿泊に際してのエピソードである。ヒュッテは昭和９年に北大へ寄贈されるまでは、建築主３人(ヒンデル、グブラー、山崎)の私有物であり、管理は専ら山崎が行なっていた。そのために秩父宮御宿泊について、小屋主の山崎が全ての段取りを取り仕切った。

ムイネシリ、人物はムシャこと渡辺成三（1929 年）

撮影　坂本直行

（1）山崎春雄メモ　－お迎えの準備について－



松山さん、
天皇陛下に歩いて頂くことを決定致します。時間は
七時半ごろ、ずーっとかかります。
お見舞おう
○私は今朝九時半までに小屋を整理して、一先づ堤に
帰ります。明晩、うちで待ちます。青山までのこと
再びこゝへ来れば結構です。
○水本はやはり九時頃に上ってから造材小屋に移ります
す。昼は大島の小屋に寄っておきます。
紙は道の表境として山鳥打ちに出かけます。私は
少しいや紙のお見やまつりを陛下へお見かけることが
出来ないは残念ですが仕方ないことです
○やまつりの一行はそのまゝ賢所に残されることになりました、
東京へは帰りとなりますから、水本に膳をぬかして
下さいて今ぬいておくと鳥の見た目が宜敷ありますから、
○拝礼した方は、山すそ路下に、土堤外の石外ゝ方に上げて
下さい

○鴨もおつかいください。

○大変おいしいとりゆ羊かんとおもうこの材料のつぶしあんもあります、餅も（流しの上）

○それからリンツエルトルテをどうぞ味はせでおつかいください。

○高級野菜は玄関にあります。（みつば見当らず残念！）

○石油は柿の下です、ポンプがついてゐます、替芯や一箱流しの上にぶらさげてあります、いくら皆が上手でも一度に一つ位おやをこわす子はないでせう、ランプは石油が一杯いれてあります。

◎私事にわかるのは例の不可避のロクスル問題ですお便所はわるくすとスカセりがしますから毎日のために むろを一杯かけておきます、夜とで取て下さい。

◎白いエルトの洗面所用のしき物を油紙に包んで、右側下の二人床の板壁にかけてあります、

夜の洗面器 白木箱八は柿の下にあります、

お便所にはカメがかいてあります、

これらのかずかずの子はどうぞ洗面掛りかつ給仕に前以て注意の上、洗面をねがひます

2

◎陸軍毛布（京新品）出放、これは造材小屋に沢山おいてあるもの、一部分、衣類用としてヒツタン分のけたものです、これさへなければ大島の方に来てみるが不便な会計の役人と全く像がかれるのです、それ故この毛布出放は、使用ずみ、即ち翌朝は出発前に、残りかんすぐ造材小屋の方に大部分の人、会計の人丁は山理、本間、の二人ぢ、に返して下さい。（わしら林局に殺人で）

そしてヒツタンは鍵をかけて出発を願います。誰も居ないそのまゝ閉じて置くと盗難は無い筈です、

○万一、雪を踏てはいれば床下からはいれますが、床下にたりる扉に釘をさして止める仕掛にまた、出発の節は二人は注意の上、釘をさして下さい、

○大工用、釘函は玄関上の板の間においてあります、

○今朝六時の気温 七度十三分

3

○ 屋根は、四十度の勾配に近い上流、対岸に赤い岩が連続しる所で割に巧みに木の平を通しております。それが四棟林立のこぶに立て斜めに大島のヒユウテに行ってみます。

第一は駅の都会で、屋根をゆるずに七るーの三角長が大きく八ルカ山にねまりの節は大島十度の上流までは白樺林に上らないで下さい、

○ 右流ひは長いわるくなりました、勾下のルートとしん低ねならば全然問題ありません、（低い峠まだ先きまで一寸まちがいの用すで行ってきました）、

○ 奥の方に大なる雪崩れかけた所があります、朝室の左、白丹のそむガンケがまっくろ見えるうは木ではないでせん、

○ ぜんぱい高砂の雪崩場所、雪底がずいぶん大きくなるそうです、

○ 十万時に一番近い石の落ちる沢に石ころがたくさんおちてるそうです、最近おちたものです、

○ 一カ所低の雪でかしばくちゃんでいます、元気さえ、これば低い山や峠の眺望は勾下の山道路としてやっぱりわっち

はあると思います、

北陸では低い何ものと長大の要塞ルートとなります、

水蒸し川沿ぞいでは家に居ては低きくことにしんみります、

山では用とかこれは接合ですが、でもるべけ山を静かにーなとなれは自分で下ます外仕方ありません、

とにかく色とのぞやまおるがあって勾下はキリトは満足のことと思います

さよなら

山　若生、

山とスキー　多ありました、向う会えるかな、

伊藤君にもよろしく、

山の法のはづむことといのそみます、

(2)ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下　山崎春雄
山岳四十八年より

ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下

山崎春雄

ヘルヴェチア・ヒュッテに秩父宮殿下が宿泊された頃は、小屋はまだ北大に寄附される以前のことで、建築家ヒンデル君、北大獣科のグブラー君及び私と三人名儀の私有物の狀態にあつたから、小屋の管理の仕事は專ら私がこれを擔當して居たのである。

古色蒼然たる第一冊目のヒュッテン・ブーフの初めの方に近く、殿下の御一行の宿泊の記入があるが、特に示されなければ誰も氣付かない一頁にすぎない。

その頃の皆の習慣で、姓名はローマ字で、他の記事は獨乙語でなされて居た頃だから、殿下の御名もヤスヒトとローマ字で記されて居る。この一隊の皆の署名は、それが殿下のであろうと、同行の京大の木原教授や北大の大野教授、又は當時學生の伊藤秀五郎君等の御歴々の大學人種の夫れであろうと、皆小學生の書いた字の樣なたどたどしい稚拙性を以てなされて居て、時に不敬な批評の原因となつたのである。か樣な不敬漢に對して私は安萬年筆や鋼ペンで書く手を以て、眞正の鷲鳥の羽からペンナイフを以てペンを自ら作つて字を書けとすゝめた。ヘルヴェチア宿帳の王子と大學教授の筆蹟は、私が高貴なお客樣のためにわざ〳〵用意した、鷲ペンの尖から出たものであつた。

昭和三年の冬に、最高位の皇族が北大のスキーの賓客として渡道されるという事は、ことにお客樣が學生だけと一緒に行動したいという、特別の御希望が併せ傳えられただけに、主人側の當局の人達に、多大の衝動と若干の困惑とを與えた出來事であつた。

我々の仲間や學生たちに取つては、無論この御希望は當然ともいうべき自然な事柄であつた。恐らく日本內地のスキーや山地の御旅行に於て、多くの好ましからざる、招かざる要素の爲に邪魔されるという事が知られて居るので、折角北海道の自然に望みをかけて、御自身の領地である御料林のスキー旅行を試みられる高貴な御客樣が、最も滿足される樣なサービスとは、即ち瑞西の山地をかつて旅行された時の如く、全く自由に一般登山者と同樣の生活を樂しむという御希望を、そのまゝ實現する樣に萬全の措置を取ることに外ならないとは、我々の一致した信念であつた。

殿下のスキー行の御日程は前後二つに分たれ、前半は手稻山腹の北大スキー部のパラダイス・ヒュッテに一泊、次の日に奥手稻山を越えてヘルヴェチア・ヒュッテに一泊、翌日錢函に下

る二泊の山行、後半は青山溫泉を基地として、周圍のスキー地を見るということに定められてあつた。

北大總長、後の佐藤男爵の最大の不安は、この前半の計畫にある二日間の殿下の安全にかけられ、最高貴の宮樣を學生だけに任せ切つて、雪に埋もれた山小屋に送ると云うことは、老總長の心事にすれば、我々の想像を絶した危惧と憂慮の原因となつたにちがいなかつた。

しかし、すべての無知から來る俗慮の介入を拒否して、殿下と學生だけの隊を編制するという最高原則は、あらゆる障害を强力に排除してその目的を達した。

この前半の山小屋宿泊のスキー行の隊長には、かつて板倉、加納氏等と共に多くの北海道冬山初登攀のパイオニーアである松川五郎君が選ばれ、その下に北大スキー部及び山岳部から數名づゝの部員が參加し、大野教授がスキー部長として隨行することゝなつた。

私自身は佐藤總長から、殿下スキー行の爲の一切の準備委員長を仰附かり、私が平素交渉を持たなかつた、大學本部と云う名の、あまり神經が敏感でない一大有機體の腹の眞正面にぶつかる、有難くない任務を引受けさせられたのである。

私は「山岳」のどの部分に載るのかも知らない此の一文では、私が職務上、殿下のために小屋に用意した食料のことのみに就いて、記述しようと思うのである。一體飲食のことを文章に細敍するということは、高級人種の憚かる所らしい。然るに近來の登山計畫の重要な一項目として、食物のことが堂々と取上げられて來たのだから、私も意を安んじて、二十五年間も私の記憶の中だけに生きて居た事實を、記錄しようと思うのである。

第一。お辨當のこと。私の聞かされた所では、宮樣のお嫌いなものとして擧げられた數項目の最後に、バタと蜜柑が含まれて居た。

バタを使わないこと位は、他の數項目のお好きでないものゝ排除の重大性にくらべれば、結局は小さな事柄であつた。北大農場自慢の、ゲルンジ種の乳牛から生產したバタをやめるからには、月並の肉製品等を以て代えるのも殘念と云うので、鵞鳥の肝のペーストを作ることとなつた。

フォア・グラ卽ち肥育した鵞鳥の脂肪の乘つた肝臟の製品は、この種食品中の最高峯である。ヘルヴェチア・ヒュッテの建築家ヒンデル君の夫人が、料理の弟子である私の家內に敎えて、獵期中はよく雁の肝でこれを作つた。脂肪に於て足りない所のものは、獵鳥の香氣がこれを補つて餘りある所の製品であつた。

然るに、殿下の御來道は二月から三月初めまでであつて、氷に閉された北地の水鄉ではまだ歸雁の渡來は見られない。幸に私は札幌の植物園の、冬も開いて居る池に鵞鳥が放たれ

て居ることを思い出して、動物教室の八田教授に一羽の鷲鳥を所望し、標本用として解剖する旨の一札を納れて、これを入手することが出來た。肥育の鳥とちがつて、北海道大學の帳簿に登錄されて居ると云う大學植物園の池の鷲鳥は、いた〳〵しくやせた動物ではあつたが、流石にその肝臓は相當の大きさがあつて、所要の香料が添加されて、チョコレート色をしたゲンゼレーベルバステーテが、新しい用意の容器に一杯出來上つたのであつた。

この製品は、直ちに嚴重にパッキングが施こされて、松川隊長のルックサックの底深く秘められたから、平民共には試食の光榮も與えられなかつた樣に記憶して居る。

次の問題はパンである。札幌市販のパンは二十五年を經過した今日でも、少しも進歩改良の形跡を示さないものである。私は昔の東京では、小石川關口の加特力の僧院のパンが優秀だつたことを知つて居た。私は札幌でも、修道院のものが一ばん良いことを知つて居たから、フランシスカン修道院のキノルド司教に面會して、殿下のためにパンの分與を請い、人頭大の大塊のいくつかを貰つて來た。

札幌市販のパンは、北海道の夏山でも一週間立つと七色のかびと化するのに、この修道院のパンは最後までパンであり、ボロ〳〵にもならないものである。

我々の準備がか樣に進捗して居る或る日のこと、總長は私を本部に招いて、やゝ遠慮勝ちに次の樣な申出でをなした。

「殿下が山小屋で、學生の調理したものを召上るということを聞いては居りますが、今回札幌の豐平館の主人が是非小屋にお供をして、自分の手で料理を調理したいと申出て居ります。豐平館のS君はコックではなくて立派な紳士でありますから、そう云う事になされては如何ですか。」

私は、今にして思えば冷靜を缺いたと思う樣な語氣で、總長の言葉をさえぎり、凡そ紳士の階級に屬する人間は、一切原則的に拒否すべきだと云う樣なことを述べ立てた。私は更に老總長を安心させる爲に、總長はじめ大學の最高幹部が、山小屋の學生料理と豐平館の夫れとに就いて抱いて居る、差別的先入觀を訂正すべく無益な骨折をしたのであつた。

第二。ヘルヴェチア食卓の献立。

第一のコース。えぞやまどり。

北海道はさておき、歐洲に於ても王侯の食卓に上せて恥かしからぬ第一の獵鳥は、この松雞であるという。此の鳥のラテン學名について居るボナシアとは、良い燒肉の義である。

私はヘルヴェチアを建てた獵師水本小判治を村から呼んで、豫かじめ山に上つて周邊の山林から相當の數の松雞を集めて、これを小屋の玄關の天井から釣下げておくことゝしたのだつた。此の鳥特有の上品な彩色の羽毛、コケットな赤い雞冠で飾られた頭、私はこの一群の獲物の集束を見た時に、これだけで

すでに皇子を迎える用意は整つたと思つたのであつた。

第二のコース。ウンガリッシェ・グーラシュ。

これは又前のものと異なり、甚だ平民的な献立である。ことに地域との關連性もなく選ばれたので、要するに學生が小屋で作れると云うことが主なる理由であつた。單なる牛肉の煮込みが、ハンガリーの地方的特色としてパプリカと唱えられる、赤いとうがらしの粉末を以て處理されてあるだけのものに過ぎない。

私が其後にベルリンの或る家で注文したときに、同卓の老人が、それはブタペストで食べるものだと口を入れた。私はその事を知つて居るが、これは私の家の物菜だから比較のために食べるのだと答えると、その老人は大に驚ろいて、自分は日本人とハンガリー人と同祖先ということは聞いて居るが、グーラシュが日本の食べ物とは知らなかつたと云つて、殆ど感に打たれて居た。

このグーラシュ採用が決定すると、殿下の隊員の學生數名が私の家に來て、フラウの指導の下に蒸發皿やビーカーを持つ手で實習を開始したのであつた。學生側の主任は後に大野教授及びスキー部長の後任となつた小川君、主任に選ばれたのは、彼が「山とスキー」編輯所で自炊をした經驗者ということからだということは、二十數年を經た後に小川教授の自ら語る所によつて判明した。しかしこの學生料理が如何に成功したかに就いては、動かすべからざる證明があるのである。

錢函驛に、殿下の一行よりも一足先きに下山した宮家の事務官の前田伯爵が、まず出迎えの總長に丁寧に感謝の挨拶をされ、殿下が非常な御滿足であつたことを述べられた後に、總長の側に居た私に氣付いた伯爵は、今度は私に向つて、

「山崎さん、今度は大へん御世話になりました。學生の料理の上手なのには全く感心しました。總長さんに先日札幌で御馳走になつた豐平館の料理なんぞは、そう申しては何ですが學生の腕前には到底及びません。あの赤い色をした肉の料理……何とか申しましたな。」

「グーラシュです。」

「そう、そう、そのグーラシュが大へんな結構なものでした。」

と云つて加賀百萬石の一門なる伯爵が、錢函峠の向うの山小屋の一夜を、戀うる樣な眼付きと西洋風に云えば、口一杯水がたまる樣な表情をされたのである。

勢込んで話かける貴公子の顏と私の顏とを半々に、ぼう然と立ちつくした總長の顏を眺めた私も、旬日の苦心が一ぺんに吹飛んだ感じを受けたのだつた。

第三のコース。リンツェルトルテ。二品の料理のあとはデザートである。これは東アルペンの山地からウィーン地方の旅行者に取つては、有名なウィーンの林檎卷と共に代表的のお菓子

である。

最近になつて、札幌の私の家の近くの小さな教會に住んで居る獨乙人の神父さんが、リンツの生れで二十數年札幌に住んで、傳道に從事して居る人だという事を新聞で知つたうちの老妻が、この圓菓子を燒いて、この未知の異國人への贈物とした。私が神父住宅の玄關に立つて神父がリンツの生れであることを確めてこの贈物を差出すと、包みから現れた金色の塊りを見た加特力の老僧が、少年の樣な聲をして、

おゝ、リンツェルトルテ！　と叫んだ。

そしてどこでこの珍らしい物を手に入れたかとの問に對して、これは神父さんの爲に、うちの老いたフラウが特に燒いたものですと私が答えると、彼の童顏は法悅の光輝の樣に眩しくかがやいたのであつた。

そういふ因緣のあるデザートコースの挿話を以て、私の外道的な食慾の物語りを終ることとする。

私の職務の中の物語りは以上を以て盡きるのであるが、殿下御來道に關連して私の記憶に殘つて居る他の事件は、それが趣味の事柄の範圍を越えて居て、今日に至るまで何時でも、隨所に頭を出す社會的現實の問題であつた。

前に述べた樣に、御客樣の御嫌いなものとしてバタ以外の數項目が傳えられ、當時の若い學生は御客樣の最高の御滿足という原則からして、單純にこれを排除すべく實行に移したのであつた。

殿下が東京に歸られた後に、その事が地方のプレッセの問題となつて、大學の當局者が狼狽して遂に大學最高のセナートの會議が開かれることゝなつた。一言で云えば「責任者」大野スキー部長の査問會が開かれたのである。

この會議の前半は、往年私がベルリンで見たウェデキンドの「春の目ざめ」の教員會議の舞臺にやゝ似て居り、結末は、日本の歌舞伎芝居に用いられる、大權力の象徵の出現の前に、今迄威張つて居た小權力者等が平伏するという場合に甚だよく似て居たが、全體としては一の喜劇に外ならなかつた。

「春のめざめ」の教員の樣な話が終つて、大野スキー部長の陳述の段階に入るや、彼はそれまで大切そうに持つて居た、紫色の風呂敷包みからして昔の教育勅語をふくさから取出す人の手付きで恐ろしく大きな白色の封筒を取出した。彼はわざ〳〵總長に對して、最近宮家から到着したこの御手紙をこゝで讀んでいゝかと云う許可を、馬鹿丁寧な口調で求めた。

事件の曲線の上昇は勿論こゝが山で、あとは尊大な大學の評議會が、あまり大きくないスキー部長の前に屈伏した樣な形で、カーヴは急激に下降して行つた。

大野君は、たとえこの宮家の救助の手紙が前日の夜に屆いたにもせよ、會議にはゆう〳〵たる勝利の豫感を以て臨んだことは、その樣子にも現われて居たのであつたが、私は査問會の席

に居ながら、本質的には同罪の意識を持つて居たから、この喜劇の幸福な展開には最も助かつたと感じた一人の人間であつた。

× ×

要するに北海道の田舎大學に起つた以上の事件は、或る最高の意志が正直な純眞な感情に依つて尊重されて、磨擦を敢えてして實行に移された過去の一挿話である。

雲上と地上の大きなへだたりは、一つの趣味で結合されて失われて居た。多分この大きな宿命的の距離を賢明に縮小する、他の視界の廣い存在が、最後の惡質なトラブルを幸福な終末へと針路を導いてくれたのであろう。

當時の私たちの智慧では、そういうことは理解の外のことであつたけれども……。

會員名簿 新刊

戰後はじめての會員名簿が出來ました。

A5判五〇頁。頒價一〇〇圓。

山岳 第四六・四七年

（一九五二年十月刊行）

内容

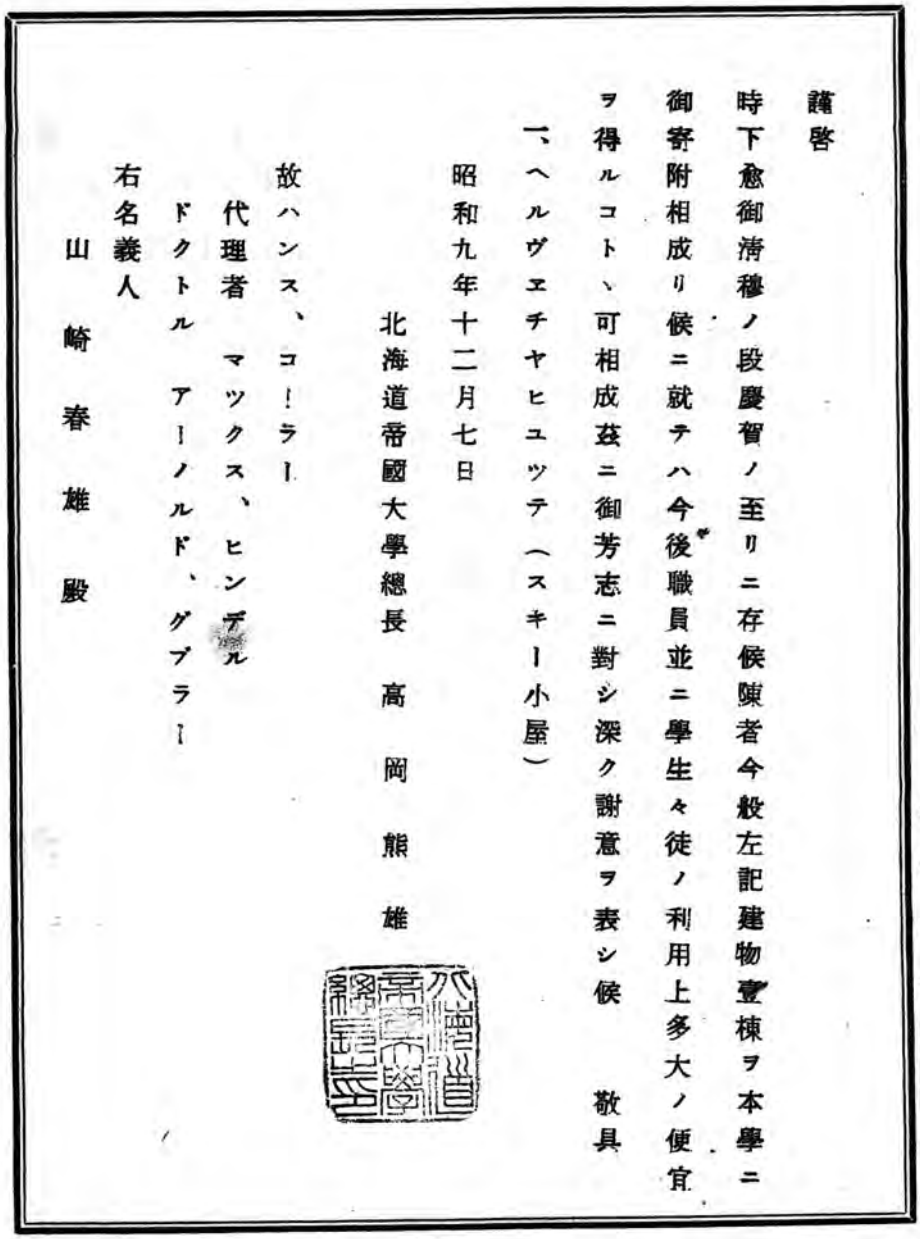
ネパール紀行　西堀榮三郎
冬の十勝岳・大雪山縱走　北大山岳部
ギド・レイのこと　日高信六郎
明神五峯東壁と前穂高四峰正面岩壁　石岡繁雄
春の白馬岳以北の縱走　岸田權二
赤石南半の覺え書　沼井鐵太郎
山の周邊・歐米とところ〴〵　松方三郎
白馬岳志雜攷（下）　中島正文
追悼　八木貞助氏（辻村）・百瀬慎太郎氏（槇・石川）・美木富士哉氏（名取）・入江保太氏（前田）
ヒマラヤン・ノーツ　エヴェレスト一九五一年・アンナプルナの初登頂・スコットランド隊のガルワール

A5版　二一六頁・寫眞　二十一葉・地圖　十四面
定價　四〇〇圓（會員割引　三五〇圓）
御希望の方は事務所でお求め下さい

６．ヒュッテ寄贈感謝状

昭和９年 12 月、ヘルヴェチアヒュッテは所有者より北大へ寄贈された。昭和２年の建設以来、マックス・ヒンデル、アーノルド・グブラー、山崎春雄の３氏の所有物であったが、これをもってヒンデル、グブラー両氏の当初の構想どおり北大の財産となり、山岳部が管理を委託され、今日まで健全に維持されてきた。

昭和九年十二月九日付の北大高岡熊雄総長よりのこの感謝状は、寄贈してくれた所有者らへ宛てたものである。宛先が故ハンス・コーラーの代理者マックス・ヒンデルとアーノルド・グブラー、それに右名義人山崎春雄となっている。ヒンデルが建設に関係のない故人のコーラーの代理者となっているが、理由は分らない。また、山崎がヒンデル、グブラーの名義人となっているが、山崎は所有者はあくまでも資金を出した前２者ということで筋を通したのかもしれない。



謹啓

時下愈御清穆ノ段慶賀ノ至リニ存候陳者今般左記建物壹棟ヲ本學ニ御寄附相成リ候ニ就テハ今後職員並ニ學生々徒ノ利用上多大ノ便宜ヲ得ルコト、可相成茲ニ御芳志ニ對シ深ク謝意ヲ表シ候　敬具

一、ヘルヴェチヤヒュッテ（スキー小屋）

昭和九年十二月七日

北海道帝國大學總長　高岡熊雄

故ハンス、コーラー
代理者　マックス、ヒンデル
ドクトル　アーノルド、グブラー
右名義人
山崎春雄殿

北海道帝國大學

7.ヘルヴェチアヒュッテを建設した人々

85 年の永きに亘って親しまれて来たヘルヴェチアヒュッテを建設してくれたアーノルド・グブラー、マックス・ヒンデル、山崎春雄の生涯を、入手できた資料から分った範囲で紹介する。

(1)アーノルド・グブラー

アーノルド・グブラーは、ヒュッテを建ててくれたばかりではなく、北大山岳部にとって特別な人であった。学生たちと山行を共にし、1926(大正 15)年の山岳部創立に立会い、山岳部の呼称であるAACH(Academic Alpine Club of Hokkaido)の選定にアドヴァイスをし、現在に歌い継がれるアルプスの山の唄を学生達に教えた。グブラーと親しく交わったその当時の学生達は、帰国後も交流を続け、欧州に旅行した際にはスイスのグブラー邸を訪問し、その内の幾人かは山の会会報に訪問記を寄稿している。その中から帰国後のグブラーを知ることのできる記事 3 編から関係部分を転載した。

1971(昭和 41)年には北大山の会特別会員に推挙された。

(2) マックス・ヒンデル

ここに掲載したヒンデルの経歴及び図面は、ヒンデルの研究家である角幸博名誉教授（北大大学院工学研究院建築史意匠学研究室）から提供いただいた。

ヒンデルは妹アニーとその夫ハンス・コラーの薦めで札幌に建築設計事務所を開き、数々の建築を手がけた。永住する決意で札幌に拠点を設けたが、コラーが 1925 年 1 月、43 歳の若さで札幌で死去、アニーのスイス帰国などにより札幌永住を諦めて、1927 年 10 月、横浜に事務所を移した。横浜移住後も山崎との交流は続き、1930 年には北アルプスを一緒に登っている(1 ページヒンデル画参照)。1939 年にヒンデルはヘルヴェチアを訪問し、翌 1940 年にドイツ・レーゲンに帰国した。このヒュッテ再訪について山崎は「4.. 山小屋の宿帳から」の中で詳しく述べている。角幸博名誉教授はヒンデルのドイツ帰国後の足跡を尋ねてレーゲンを 2 度訪問し、帰国から死去までの生涯を明らかにした。ヒンデルの設計した北大が所有する歴史的価値の極めて高い三棟の山小屋の立面、断面、平面図を掲載したが、これらは角教授が現地で寸法を取り、作図したものである。

(3)山崎春雄

山崎春雄について、医学部の教え子で多くの山行に山崎の傍にあった中野征紀の追悼、日本山岳会の長老で山崎を知る藤島敏男（1896-1976、「山に忘れたパイプ」の著者）の追悼、昨年秋（2011 年）に焼失した「白井小屋」について建設にかかわった当時の山崎英雄による思い出の三編を掲載した。

北大山岳部部報 9 号に掲載の中野の追悼文からは若者を温かく見守る、そして彼らから深く尊敬された山崎の姿が見えてくる。藤島の日本山岳会会報 220 号の追悼文からは、若い頃の芸術に抜きん出た才能を認められていた学生時代、その付合いから離れて北大医学部教授として札幌へ来た青年時代、中年以降の登山とスキーを愛し、松方三郎、槇有恒を始めとする山岳人との幅広い交際をした時代のそれぞれを知ることができる。「白井小屋」は札幌周辺のスキー小屋が老朽化で数を減らしていく中で、貴重な文化遺産の焼失に哀悼を込めて思い出を綴った一文である。

（1）アーノルド・グブラー　Dr. Arnold Gubler（1897-1983）

①誕生～大学卒業

1897 年 7 月 25 日、スイス・チューリッヒ州ベヒコン郡ヘルマッツウィル村に生まれる。

1904 年~1913 年、ヘルマッツウィル小学校に在学。

1913 年、ウィンテルチュール高等学校に入学、1917 年 10 月、卒業試験に合格、卒業。

1917 年 10 月、チューリッヒ大学哲学科に入学、ドイツ言語学、歴史・地理学人類学、ドイツ美術史を学ぶ。

1920 年と 1921 年春期休暇中、イタリアおよびチュニジア旅行。

1921 年 9 月~1922 年復活祭まで、ロルシャッハ市のヘルレス学校で教師を勤める。

1923 年夏、高等教官の免許状取得。論文を提出し、学位を取得する。

②日本滞在

1923（大正 12）年 6 月～7 月、日本郵船「榛名丸」でインド経由日本へ。大阪高等学校で代用教員。夏休み：北海道旅行。9 月 1 日、関東大震災に遭遇する。大正 12 年 9 月から福島高等商業学校教員となり、大正 14 年まで勤務した。

1924(大正 13)年　夏休み：ジャワとバリ島へ旅行。冬休み：北海道日高アイヌ部落滞在。

1925(大正 14)年　新年：スイス旅行、青島、マニラ、ベラワン、サバン、スーダンなどに寄航。秋、アメリカ経由日本へ。日本郵船「シベリア丸」でホノルル経由横浜へ。大正 14(1925)年 9 月、北海道帝国大学予科独逸語講師となる（当初 3 ヶ年の手当は月給 425 円、住宅手当 42 円/月、帰国旅費 1930 円/回であった）。

1926(大正 15)年　春：雌阿寒岳に登頂、その後東京滞在。夏休み：南、北日本アルプス及び日高アイヌ部落へ。冬休み：福島県会津地方をスキー旅行。

1927(昭和 2)年　春：東京、京都滞在。7 月初旬、シベリア、モスクワ経由スイスへ。秋、インド経由日本へ、ペリム、サバン、ペナンなどに寄航。ヘルヴェチアヒュッテ建設、12 月末十勝岳。

1928(昭和 3)年　3 月、豊平川から支笏湖へ、その後吾妻地方をスキー旅行。その後、東京。夏休み：南千島(色丹島)へ旅行。その後、東北北海道(羅臼、斜里)旅行。さらにその後、北アルプス(穂高)。冬休み：台湾旅行、次高山登山。

1929（昭和 4）年　2 月、有珠岳へ、春休み：東京、京都旅行。夏休み：シベリア経由スイスへ。マドレーヌと結婚。新妻を伴いインド経由日本へ。冬休み：十勝岳。

1930（昭和 5）年　春休み：朝里岳～無意根山縦走、その後東京。夏休み：南、北千島列島、国後島、パラムシリ島、アライト島（アライト 2339m 登山）、占守島。9 月、長女レネリー誕生。

1931(昭和 6)年　春休み：奈良、乗鞍岳スキー旅行。夏休み：利尻島、礼文島、高山、松山。

1932(昭和 7)年　1 月長女レネリー事故で死亡。契約を更新せず帰国を決める。春、ヘルヴェチアで友人たちと最後のツアー。7 月 3 日札幌発、日本郵船「榛名丸」で横浜出港、ジブチ、アジスアベバに立ち寄りアデンへ。9 月、日本郵船「鹿島丸」でアデン出港、スエズ運河、ナポリに寄航し、9 月 18 日故郷へ帰る。

③帰国後の山の会会員との交流

「グブラー先生のことども」渡辺千尚（山の会会報第 30 号　1960（昭和 35）年 11 月発行）

（前略）また山岳部の呼称である A.A.C.H.（Academic Alpine Club Hokkaido）の選定は同氏の助言によるものである。

北大を辞してからは母国へ帰り、チュウリッヒ郊外に居を構え、専門学校の地理学の教師の職に就かれ、またチュウリッヒ大学でも講義をされ、六十の坂を越えられた現在、なほかくしゃくとして活躍されている。二度スイス観光団のリーダーとして日本を訪れられたが、時間に余裕がなく残念ながら来札の機会は未だない。

いささか旧聞であるが、私は四年前にチュウリッヒでお目に掛ることが出来たのでここに報告する。1956 年 6 月ハワイを振り出しに欧米諸国歴訪の旅も終わりに近づき、素晴らしいアルプスの山々の夕日を眺めながらチュウリッヒ空港に到着したのは 11 月 7 日のことである。そこには札幌当時と少しも変わらぬグブラー先生の出迎えを受けた。とても喜ばれ、日曜日には一緒にリギに登った。もっとも登山電車で頂上の直ぐ近くまで行けるのだから、藻岩山へロープウェイで登るようなものだが、すでに初雪を見たアルプスの山々を心ゆくまで眺めることが出来たのは幸運だった。帰途お宅を訪れたが、庭には日本の樹木が植えてあったし、また日本の大根も作っていた。しかし余程北海道の「ブッシュ漕ぎ」には悩まされたと見えてクマササは植える気がしないと苦笑いされていた。札幌での生活をなつかしがられ、大学のこと、山友達のことなどの話で夜の更けるのも忘れて話し込み、再会を約してお宅を辞した。

「グブラー先生を憶う」小平俊平（山の会会報 55 号　1983（昭和 58）年 8 月発行）

（前略）先生は極東方面を旅行するスイスの団体をひきいて 4 回ほど日本に来られた。その都度在京の旧知集まり楽しく夕食を共にした。昭和 50 年、私は再度先生のお宅を訪問する機会があった。先生は庭に桜など日本の樹を植え奥様と 2 人で静かに暮らしておられた。奥様はお孫さんのために刺繍をしておられ、先生は札幌時代のステッキを手にして日本をなつかしんでおられた。そのステッキというのは、ヘルヴェチアヒュッテ建設に活躍したアイヌで、丸太を組み、丸木船の技術による炊事用の流しを作った人の制作になるもので、美しい彫刻のあるものであった。

「グブラー先生の思い出」和久田弘一（山の会会報 55 号　1983（昭和 58）年 8 月発行）

（前略）昨年 5 月、スイスに行く前に、東京在住の山岳部 OB の面々に相談して、何か先生に日本を思い出すようなものをお贈りしようと言う事で、私に適当なものを選んでくれという事になりましたのです。丹頂鶴 2 羽が空を翔んでいる美しい姿が描かれている七宝焼の皿を探し出し、それを持って、キュストナハトのお宅をお訪ねしました。耳も良く聞こえなくなり、言葉の方もたどたどしく、奥様に先生が何を言っているかということをいい直していただく有様でした。七宝の皿は大変喜ばれ、手に持ってしげしげと眺め、目尻に涙をにじませておられました。先生、日本では亀は万年、鶴は千年と言って長寿のシンボルです。どうか鶴のように長くお元気でいてくださいとお別れの握手をいたしましたが、残念ながらそれが最後になりました。もうチュウリッヒに行っても先生の温顔を拝見することが出来ないのですから残念です。（中略）

(2) マックス・ヒンデル　Max Hinder　(1887-1963)

(「マックス・ヒンデルと田上義也」角幸博（北大大学院工学研究院建築史意匠研究室教授）を参考にした)

1887 年 1 月 20 日、スイス・フルンテルン（Fluntern）自治区に生まれる。1893 年、チューリッヒ小学校入学、1903 年、下級ギムナジュウム卒業

1903 年～1914 年、チューリッヒの建築設計事務所で製図訓練、のちヨーロッパ各地の設計事務所で修業。1914 年より 2 年間、第 1 次大戦中スイス技術将校として兵役

1916 年、チューリッヒに設計事務所開設　1917 年～4 年間、ウィーンで銀行などを設計

1921 年～2 年間、オーストリア・チロル地方に滞在し、銀行などの設計を手がけた

1924 年 1 月、北大予科ドイツ語教師ハンス・コラー夫婦の勧めで北海道に永住する決心でアニー夫人を伴いマルセイユを出港。(コラー夫人はヒンデルの妹)

札幌市北 11 条東 1 丁目に自邸「東光園円い家」と呼ぶ 16 角形平面の木造 2 階建て住宅を建設し、事務所を併設した。(後にこの家はグブラーに売却し、すぐ隣に新たに自邸を建てた。)

札幌では柳壮一、山崎春雄、大野精七ら北大教授連と交わり、彼らのパトロネージを受けながら精力的に設計活動を行なった。北星女学校女教師館、ヘルヴェチアヒュッテなどの現存作品を始め、札幌藤高等女学校、同寄宿舎、パラダイス・ヒュッテ、北星女学校寄宿舎、聖フランシスコ修道院、フランシスコ会神学校、住宅 7 棟、函館聖母トラピスチヌス修道院、新潟カトリック教会、日本キリスト教会札幌教会(案)、上智大学(案)などを手がけた。

1926 年、スキー部創立 15 周年記念事業として計画されたパラダイス・ヒュッテの設計を無償で協力、建具を寄附。日本初のスイス式山小屋である（1994 年倒壊)。

1927 年、2 月頃からヘルヴェチアヒュッテ建設を構想、現在の位置に敷地を選定、7 月 13 日着工、9 月 13 日竣工。工事中はヒンデルも共に山で暮らした。札幌時代の最後を飾る作品である。

1927 年 10 月、北海道永住の志を捨て横浜に転居し、設計事務所を開設(建物は横浜に現存)。ハンス・コラーの死去、同年 3 月のコラー夫人スイス帰国などが動機と考えられるが、より広い活動領域を求めての転出とも考えられる。横浜では上智大学を含む多くの教会系建築を手がけた。

1928 年 9 月 10 日、空沼小屋建設地検分のため来札。

1935 年 5 月 31 日、横浜事務所解散、東京へ本拠を移したと考えられる。1939 年、最後のヘルヴェチア訪問

1940 年、第 2 次大戦真っただ中のドイツへ出発。　1941-45 年、ベルリンに滞在。1945 年、ドイツからスイスに帰国途中で Zwiesel 近辺で空襲にあい、7 月 9 日、2 番目夫人 Leni Hinder 死去。

1945 年、ドイツ・バイエルン地方レーゲン（Regen）を最後の郷里と決める。赤十字の会員として、また Regen の Sclaraffia(1895 年にプラハで設立されたドイツ語圏の音楽・芸術・文化グループ)の設立に奔走した。

1950～52 年、レーゲン職業学校（1948 年設立）校長

1959 年 12 月 28 日、Margareta(1908 年 7 月 5 日 Regen 郡 Soelden 生れ)と結婚、Margareta 夫人は 2003 年 9 月 23 日死去)

1963 年 1 月 27 日、重い喉頭癌で 76 歳の生涯を閉じた。

写真はヒンデル墓碑(角教授提供)

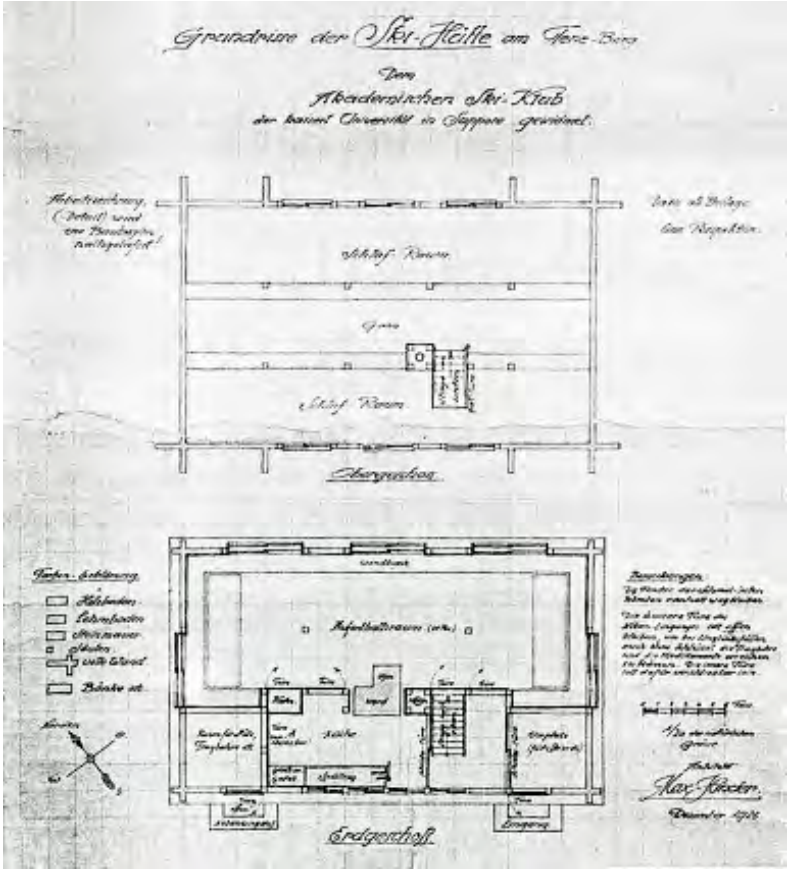
マックス・ヒンデル設計　北大の山小屋三部作

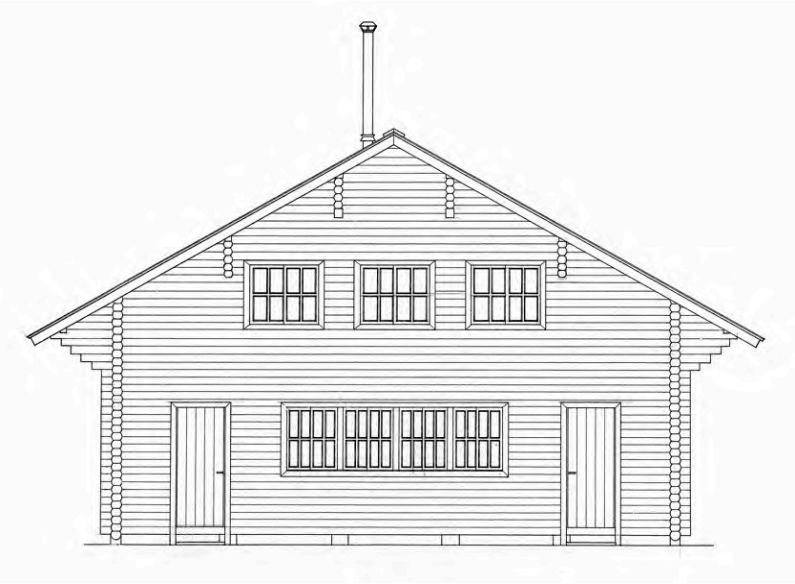
（提供：角幸博名誉教授　北大大学院工学研究院建築史意匠学研究室）

パラダイス・ヒュッテ(1926 年建設、1994 年倒壊廃棄)

5 間 x3 間、校倉作り 2 階建て、30 名収容

ヒンデル基本設計図(札幌ウィンターミュージアム所蔵)

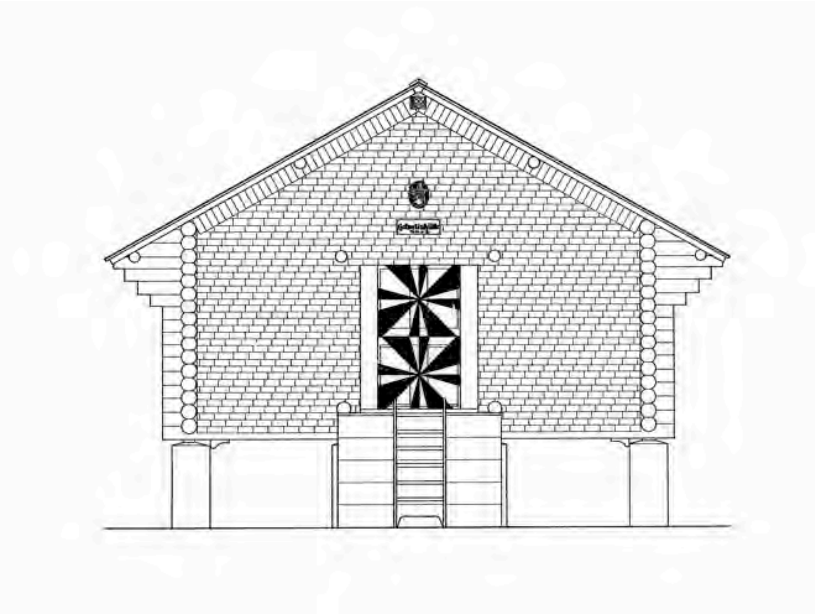




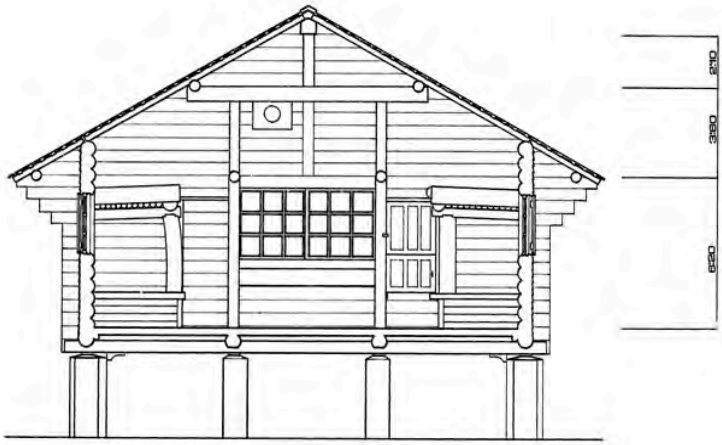
正面図

ヘルヴェチアヒュッテ（1927 年建設、1985 年改修）

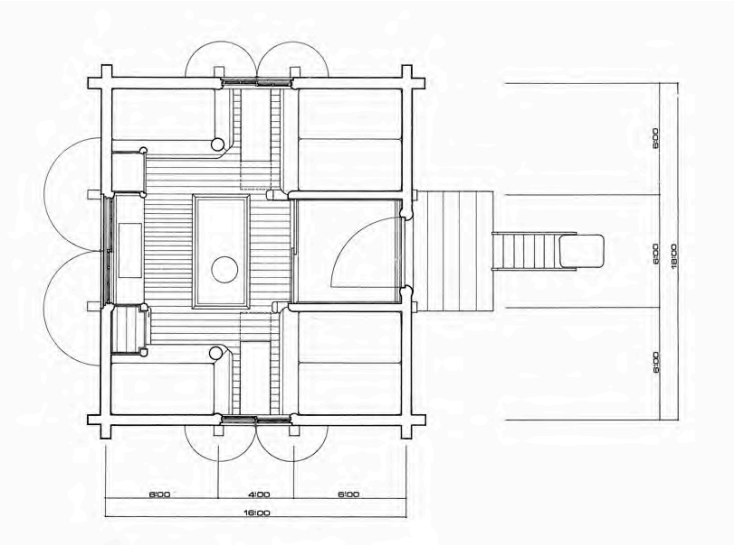
3 間 x 2 間 4 尺、平屋建て約 8 坪、12 人程度収容



正面図



断面図

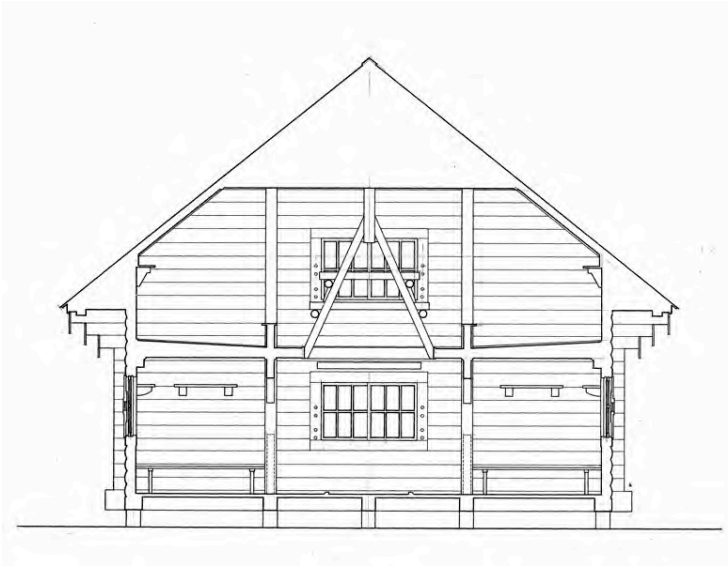


平面図

秩父宮殿下ヒュッテ（空沼小屋　1928 年建設）

主屋 4 間 x3.5 間、下屋奥行 4 尺、校倉造り 2 階建て、30 名収容

北立面図



断面図

南立面図

(3)山崎春雄（1886-1961）

1886(明治 19)年 2 月 4 日、群馬県前橋市において医師山崎泰助の長男として出生。前橋にて小学校卒業後、上京、独逸協会中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学医学部入学。中学から大学を通じて木下杢太郎ら文学者、画家らと親交を結ぶ。三宅克己画塾にて児島喜久雄を知る。

1910(明治 43)年 12 月、卒業し解剖学教室に入局

1913(大正 2)年、熊本医学専門学校教授に就任、狩猟を始める。

1919(大正 8)年 1 月～1921(大正 10)年 6 月、欧州留学、独逸に入国できず、瑞西ベルンに滞在

1921(大正 10)年、北海道帝国大学医学部創設に当り、最初の解剖学教授として赴任。この冬から北大スキー部松川五郎らの指導を受けスキーを始める。若者達と積雪期登山を行なう。

1927(昭和 2)年、マックス・ヒンデル、アーノルド・グブラーとヘルヴェチアヒュッテ建設

1928(昭和 3)年 2 月、秩父宮殿下ヘルヴェチアヒュッテ宿泊。空沼小屋建設

1930(昭和 5)年、ヒンデルや学生らと北アルプス登山

1931（昭和 6）年 2 月、槇有恒、松方三郎、伊藤秀五郎の紹介で日本山岳会入会

1931(昭和 6)年 4 月～同年 12 月、欧米出張、マッターホルン、メンヒ、モンテローザ、ウェッテルホルンなどをガイドのサミュエル・ブラバンドらと登る。

1932(昭和 7)年～1934(昭和 9)年、医学部長

1935(昭和 10)年～1938(昭和 13)年、部員、OB らと積雪期北日高の旅。部報 6 号に「北部日高山脈の旅」寄稿

1939(昭和 14)年～1941(昭和 16)年、医学部長

1940(昭和 15)年 1 月、コイカクシュサツナイ沢遭難、現地で救援に当る。

1948(昭和 23)年 3 月、北大を定年退職、創設間もない札幌医科大学教授に就任

1949(昭和 24)年～1953(昭和 28)年、日本山岳会北海道支部長、戦後の低迷する北海道山岳界の復活と発展に尽くした。

1951(昭和 26)年、道庁の依頼により白井小屋(旧称右股小屋)建設

1957(昭和 32)年 4 月、スイスからブラバンドが来日、共にアルプスの峰々を歩いた面々が集まり旧交を温めた。山崎は 26 年ぶりの再会であった。

1958(昭和 33)年 3 月、病を得て札幌医大を退職

1961(昭和 36)年 10 月 21 日、逝去、75 歳

1937(昭和 12)年 5 月、
ルベシベ山付近のキャンプにて
左から渡辺盛達、有馬洋、
中野征紀、山崎春雄、鈴木限三

北大山岳部部報 9 号（1959）

山　崎　先　生　と　私

中　野　征　紀

山崎先生の弟子達――正しくは北大医学部第1解剖学教室員――の中で私が最も永い間お世話になり，山のお供をしたのも一番多かったので先生に就いて詳しく知っていていい筈だけれども，山のように高い学識，海のように豊かな知性はまことに鋭く深いものがあって，不肖の私にはとうてい洞察するすべはないのである。

初めて先生のお宅にお伺いしたのは，確か井田清に連れられて行った大正の終り頃であったろう。前兆はすでにほのみえていたが，頭髪も房々と黒かった先生の40才前後の事だったろうか。

緑の屋根や褐色の柾壁はスイスの民家風で札幌にも珍らしいお家であった。庭の東側を岸にサビタや楡の灌木がおいしげった小川がさらさらと流れていた。あたりには人家も少なく，手稲や三角山まで見渡すことが出来た。

私は子供の頃から人みしりする性で，先生の鋭い強度の近眼鏡の前にただ，だまって木彫の椅子に腰かけていた。ませていたダッチョは盛んにヨーロッパの登山家の事やヒマラヤのことに就いて談じた。先生がラスキンの「モダン・ペィンター」の話で「油棒のぼり」のことに及んで二人は岩登りに熱をあげている時だったので内心閉口したのを思い出す。そして帰りは新川通りで興奮していたうえに，酒をのんだので二人ともひどく酔っぱらった。

お宅には医学部の学生よりも，むしろ農学部，スキー部，予科旅行部のものが多く押しかけ，この事は創成期の山岳部の伝統形成に六鹿，福地，板倉，加納，松川，板橋など優秀な先輩の精神と共に先生からの大きな影響をうけたと思われる。

昭和3年，先生がヘルベチヤ・ヒュッテ建設を計画された時はこれらの学生は手伝いをした。徳永，渡部ムシヤ，原チュウベエ，渡辺ダブサンなどと共に私も白樺材の運搬，恵庭のアイヌ水本大工の助手などをして大いに働いた。秋も深まり雪がチラツク頃，日本では最も感じのよい，スイス風な素朴な山小屋ヘルベチヤ・ヒュッテは美しい白樺林の中に出来あがった。先生は奥様やお嬢さん達と学生も混えてヒュッテン・レーベンを楽しまれた。

昭和5年，先生のお供をして寛や俊平と上高地から穂高，槍と歩いた。一緒だったヒンダーさんは「私のヘルツには3000米は高すぎます」と云って涸沢小屋から帰られた。薬師，立山，劔と巡る事にしていたが案内人の今田重太郎にそそのかされて，双六，笠岳から蒲田にくだってしまった。蒲田温泉とは名ばかりで川原の砂礫を掘った，あさいぬるい湯でがっかりした。重太郎は自分の旅舎に泊らせるのが目的だったらしい。

この年，先生は2回目の欧州遊学をされ，ベルンの人類学会で「アイヌの生態」に就いて講演をされ，余暇の殆んど全てはスイス，アルプスに過された。ブラバンドなどと共に，フインステラルホルン，シュレックホルン，マッターホルン等を登って沢山の写真を持ち帰えられた。日本山岳会に入会されたのもその頃のことであった。先生の岳友，藤島敏男，松方三郎な

どと云う口の悪い人達がこの頃の先生の登山熱を「中年の恋」だなどと評された。先生は一高，東大時代から児島規久男，長田秀雄，木下杢太郎などと親交があり，文学，美術などへ示向され，美しい作品を残されている。

先生は若い時からいわば「美の探求者」で，自然界に於て最も美しい山岳にはことに目をつけ，登山も中年になって初まったのではなかった。この頃「昔の仲間」と云う国民歌謡が流行したが，これは杢太郎が山崎春雄に呈した詩だと云う事であった。

私が解剖学教室にはいる時，先生は「勉強はあまりしなくても山へは行ってよい」と云われた。私も自分の適性を知っていたので解剖学者になろうなどとは決して思っていなかった。でも教室の学究生活はまことにコンファタブルなもので，1，2年過ぎたらすっかり人類学に熱中する様になった。「スタイン・フイバーといって誰でも初めはかかるものだ」と先生に云われた。

山岳部出身で教室にはいった板橋卓，豊田春満の二人は先生も多いに望みをかけておられた様だが，残念にも教室を去ってしまって先生をひどく淋しがらせた。これも彼等が登山家らしい純粋さのためだったのである。

先生との山行は数多くあるが，或る年の秋，札幌市内一の沢を歩いていた。突然，子連れの熊に出逢ってしまった。とっさに先生を引き留めて，先にでて，ザイテンタッセのナタを引き出し，及ばすながらも一大刀報ひんものと身がまえた。熊は十数米先をうなっていたがくるりと向きを変へて尾根を越えて姿を消してしまった。「何をあわてるのだ」と熊にも先生にも思われた様で一寸てれたがその瞬間はまったく緊張した。

ある時の5月，芦別岳の頂上附近で雪の上にテントを張っていたら，夜に入り暴風雪となって，ままよとぐっすり寝てしまった。先生はテントが吹き飛ばされるのではないかと一晩中見張っておられたそうで翌朝「よく睡るものだ」と笑われたのには山案内人として面目ない事であった。

先生にとっても一番印象に残った快適な山旅は3年つづけて行なった北日高山脈のそれではなかったかと思う。部報6号に「北部日高山脈の旅」として先生の美しい文章がのっている。

私の思い出として忘れられないのは，樺太のオホーック海岸，タライカ湖，幌内川流域のツンドラ地帯などのアイヌ，ギリヤク等の学術調査旅行であった。帰路は，多くの学者達はアイヌのいない海豹島に発情期のオットセイを見に行ってしまった。私達の教室では豊原市の東に聳えている鈴谷岳を越えて，落帆という湖沼の多いアイヌ部落に行った。そこで自然の中にとけ込んで喜々として生活している飾けのない人々とまったくうちとけて数日を過した。今でもあの素朴なアイヌの男女，そして子供達の顔々と共に樺太の清烈な山や原野，そして淋々しい海浜が瞼にうかんでくるのである。

昭和15年1月，ペテガリのアクシデントは部の俊秀8名の若い生命を一瞬のうちに奪ってしまった。先生は真先に駆けつけられ，厳冬の十勝原野を南札内小学校まで雪路を歩かれた。若々しい彼等はまるで大理石の彫刻の様に横たわっていた。先生は吾子の如く愛撫され涙をとめどもなく流された。爾来幾春秋，先生は部の生長を暖い瞳で見守られていたのである。念願かなって37年初めてヒマラヤ遠征隊を送った。 そしてチャムランの初登頂にも成功した。この喜びも最早，先生の墓前しか報告するすべはないのである。

山崎春雄氏

藤島敏男

ながい病臥のすえ、昨年（一九六一年）十月、山崎さんの逝かれたことは、北大の山仲間にとって慈父を失ったような大きな悲しみであったに違いない。東京の知友たちにも大きなショックであったし、会としては在籍三十年のふるい先輩会員を失った損失は取返しがつかない。

山崎さんの入会は昭和六年二月紹介者は伊藤秀五郎、槇有恒、松方三郎の三名、四十五才のときである。これはその三月欧米出張に出かけるに当って、JACのメンバーシップをもっていた方が、都合よいと考へられたようにも推察される。渡欧後は、はたして「一寸シベリア旅行の疲れを休めるとの口実でグリンデルワルトにやって来たのですが、すっかり根が生えて一ケ月以上も暮してしまいました」ということになり、槇さん以来のガイド、サミュエル・ブラヴァンドと、アルプスの峰々を、貪欲なほど登られたのだ。会報第十号の「瑞西だより」は、槇氏宛の通信から私が書抜いたものだが、山崎さんの張りきり方が、よく出ている。帰国歓迎の席で「老いらくの山恋い」と言われて、御本人は嬉しさうだったのを思出す。

たしかに山崎さんの山は、老いらくと言わないまでも、中年からの山であった。学生時代から若い頃は文学芸術を愛する青年であったことは、木下李太郎、児島喜久雄の両氏が終生の心友であったのからも窺われる。

「木下李太郎（太田正雄）とは中学、一高、東大を通じての同窓であり、親友であった。山崎は中学以来造形芸術を理解する点では太田正雄の尊敬する友であり、彩管に於ては彼をぬきんでるものがあった。太田正雄が画家になることを断念するに至った理由には、山崎が彼よりも画が上手であったにもかゝわらず画家にもならずに医学を志した事がふくまれていた程である。山崎は又、北原白秋や吉井勇や長田秀雄等にとっても画才の所有者として多くの影響を与えたようである。山崎春雄は彼等詩人のよりよき理解者ではあったが、文学の同志ではなかった。―李太郎白秋秀雄によるパンの会詩人の部会趣味的機関誌ともいうべき「屋上庭園」二号に山崎春雄が、美術に対するすぐれた批評眼を示した「形式の芸術批評に就て論ぜる書」という通信風の美術論の筆をとっている。」

これは「日本耽美派の誕生・野田宇太郎著・昭和二十六年一月・河出書房刊」からの引用であるが若い頃の山崎さんを想見させるものである。その山崎さんがスキーや山登りに熱を上げるようなことになったのは、大正十年（三十五才）熊本から札幌へ転じたのが動機で、北大文武会スキー部の山班の人々（松川五郎、槙田守、井田清、伊藤秀五郎等）からスキーを吹込まれ、札幌附近、中央高地、日高の山などを、主として積雪期に、頼もしい、よい若者達と大いに歩かれた。俗化しない自然の姿をまだ多分に保っていた北海道の山が、ホームグラウンドにあったからであろう、本土の山へはあまり足が向かなかったらしく、槍穂高縦走、スキーでの白馬岳といったところにとゞまったようである。

私は昭和九年一月十勝吹上温泉から上ホロカメトック、フラノ、十勝の三山、十年一月ヘルヴェチア・ヒュッテの生活を、山崎さんと共にした。芯からの山好きだったただけでなく、広い深い教養の持主だった山崎さんの、含蓄のある話の数々は、いま思出してもたのしいものがあった。戦後、学会（また楽・会に通ずと、よく私はいったものだ）に上京の山崎さんを、JACのルームに迎えて、談笑の数刻を過ごした楽しい想出をもつのは、私のほかにも会員の中にすくなくないであろう。

本会々報、「山岳」への寄稿は昭和六年十一月会報第十号「瑞西だより」と昭和二十七年一月、会報第一五九号に「ヘルヴェチァ・ヒュッテの二十五年祭」、「山岳」第四十八号に「ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下」の三稿がある。「瑞西だより」は断片的ながらアルプスの風物がイキイキと描かれており、「廿五年祭」は、あの粗朴な可愛らしさをもつヒュッテのことがよく描かれ、「山岳」の稿は極めて謹厳な文章でありながら、痛烈な皮肉や諷刺がタップリと織込まれ、汲めどもつきない滋味あふれる一文である。

一九五七年四月スイスからブラヴァンド来朝、ともにアルプスを歩いた面々が喜んだのはいうまでもないが、二十六年ぶりの再会に山崎さんの嬉しそうだったことは傍にいた私まで眼がしらがあつくなるほどだった。そのあと軽るい発作を起こされ、東京で休養後帰札されたきり、山崎さんは東京でわれわれの仲間に加わる機会なくして逝かれた。いつも遠くに離れていたせいであろうか、私には山崎さんがまた学会――楽会にいつか上京して来られるような気がしてならない。

・略　年　譜・

明治十九年二月四日　前橋に生る
明治十三年二月のもので、一昨年（三四、六、二五）冬至書房から一号と共に復刻本を刊行しわたくしの書いた解説もそれにはいってゐます。
・明治四十二年三月号の「昂一（スバル）」にも李太郎の文に山崎氏が挿画した「旅行記念」があります。大体山崎氏はいろいろな雑誌にはあまり書かれず、ただ李太郎との交りの範囲ですゝめられるまゝに書かれたものが大部分のやうです。
・木下李太郎全集（岩波）の書簡にも少しあります。たゞし山崎氏が保存された李太郎のもので、山崎氏自身のものではありません。山崎氏の文芸的一面については今のところ李太郎の書いたものがほとんどすべてのやうです。あとは明星やスバルなど又屋上庭園などによって、若き日の山崎氏の動向を知るより他はありますまい。野田宇太郎」以上

山崎春雄氏の文芸関係について

右について詩人野田宇太郎氏よりつぎの通りのご教示をいただいた。

「わたくしも一度はお目にかかり度いと思ひながらつひに拝眉を得ず後悔してゐる一人です。山崎氏は少年の頃から美術的素質にもめぐまれた方らしく、その中学時代などは独協に記録があると思ひます。太田正雄（木下李太郎）とは交遊、ことに文芸的な交遊は大学をはなれるまでずっとつづいたやうです。わたくしは木下李太郎の伝記をしらべるために山崎氏に紙上でめぐりあった者にすぎませんが、山崎氏は明治四十年の「明星」にもすでに絵を（九州の旅のスケッチ）寄せてゐます。

その頃はまた石井柏亭などとも親交があったやうです。

・「屋上庭園」二号（二号は発禁で終る）は明治四十三年二月のもの

白井小屋

山崎英雄

山崎春雄は、ヘルヴェチアヒュッテの外に白井小屋(札幌医大所属)の設計と建設に熱心に関わっていた。私が白井小屋について過日書きとどめたものがあるので、参考までにその一部を書かせていただく。この小屋は平成 23 年 10 月末に学生の薪運びのあとで焼失してしまったことは慙愧に耐えない。

戦争末期から敗戦後にかけて、白井川流域の森はものの見事に伐採され、第一の橋から上流の森はすっかりなくなってしまった。その頃、道庁と造材会社の方から「もし小屋を作るなら何とかする」という話が私の父で当時、札幌医科大学解剖学教授の山崎春雄にもあったらしい。

この話があってから北大山の会の中野征紀氏、橋本誠二氏、会員数名と私、道庁から羽田氏ともう一人が同行し、白井川へ場所の選定に出かけた。下流の荒れた森を見ながら少しずつ上流に向かったが、下流には森はなく、今の小屋のある丘を回ったところから上流は見事な森で、小屋を作るならここしかないということになった。当時は、定山渓の一つ手前の「錦橋」よりオンコの沢まで豊羽鉱山のために鉄道が入っていたが、後は歩いたものであった。小屋の場所が決り、山崎春雄がスイスの山小屋をモデルにしていくつかの案を作り、当時解剖学教室の奥にあった組織実習室の床に、実物大の図をチョークで書き私も一緒に付き合った（編者注：次ページの立面設計図参照)。

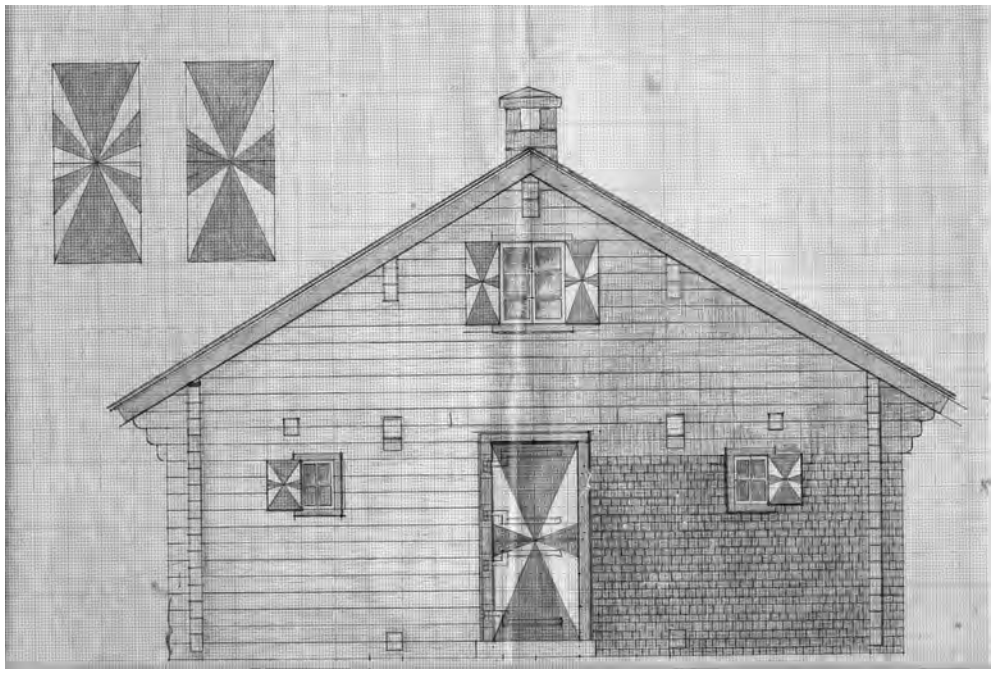
小屋を作った頃は途中の橋は全て木製で、それらがしばしば崩れていることがあった。途中の函の上は「かけ橋」で、下の函の中にはトラックの残骸が残っていた。冬には「かけ橋」の上を渡ったが、後年、函の上を大きく削ったために、崖が崩れて教育大の学生が亡くなったという(しばらくケルンが建っていた)。この大きく崩れた場所は、今でもくれぐれも注意すべき場所だと思う。小屋建築当時、材料の運搬は道のある所は道を、それがない所はトラック、ジープで川床を通って運んだが、良く行けたものだと思う。小屋の作業の途中で父と私たち兄弟は、2 日がかりで定山渓から徒歩で棟上げに参加した(飯場泊まり)。帰りはオンコの沢まで歩き、全員疲れ果てたと日記に書いてある。小屋は 1951（昭和 26）年に完成し、北海道庁から医大の所有となり、管理は山岳部が行なった(のち、ワンダーフォーゲル部)。また、建築費は 50 万円で、最初の頃は右股小屋と呼んでいた。後に余市岳にルートが作られたが、その道はササで覆われて、今は使用されていない(昭和 59 年地形図にはこの道が残っていた)。現在の森を見ると 60 年の歳月で森はかなり育ち、小屋の位置はもっと下でも良かったとも思っている。

以上が白井小屋が現在に至るまでの経緯である。

この小屋は山崎春雄がかなりの時間をかけて設計したものであるが、建設から 60 年でついに失ってしまい、故人もさぞがっかりしたであろう。ヘルヴェチアヒュッテも火の始末にはくれぐれも注意して、このようなことにならないことを心から願うものである。

白井小屋(札幌医大所有、1951 年建設、2011 年焼失)
(20 尺 x 20 尺、2 階建て)

設計立面図　（山崎春雄“右股小屋設計ノート”から転載）



白井小屋(撮影山崎英雄、撮影年月不詳)

8．ヘルヴェチアヒュッテ資料リスト

以下は北大山岳館が所有する資料である。

1．山崎春雄、松川五郎の遺品

(1) 山崎春雄の経歴

追悼　松川五郎が作成した冊子

故山崎春雄先生(解剖学雑誌)　北大教授伊藤昌一

(2) マックス・ヒンデルの経歴

角幸博教授論文

(3) アーノルド・グブラーの経歴

Arnold Gubler 著 Erlebnisse und Gedanken eines Japanfahrers(1944)

同上一部　吉田恵治訳

北海道帝大履歴書（北大北方資料室）

(4) ヘルヴェチアヒュッテ設計図

建設時ヒンデル作成（角幸博教授研究室所蔵）

SKIZZE FÜR Die HELVETIA HÜTTE AM Shirai DAKE Bei SAPPORO

改修時作成図面(映像アーカイブス写真 01069)

(5) ヒュッテ寄贈感謝状

昭和 9 年 12 月 7 日付　北大総長より故ハンス・コーラー、代理者マックス・ヒンデル、ドクトル・アーノルド・グブラー、右名義人山崎春雄宛

(6) 「ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下」山崎春雄

山岳 48 年(1953 年)別刷

(7) 山崎春雄の随筆“山小屋の宿帳から”

ヒュッテ宿帳の署名から、その人との思い出を綴った随筆。46 頁からなり、学生の答案用紙の裏に書かれている。1948 年頃執筆

(8) 書簡

－山崎春雄から松川五郎へ

昭和 2 年 3 月 8 日付：ヒンダーさんとグブラーさんが金を出し合ってヒュッテを建てようと相談しています。場所について意見を聞かせてください。

昭和 2 年 3 月 24 日付：ヒンダーさんとグブラーさんが金主で、貸地願いの名義人は私

昭和 3 年夏：空沼岳の小屋はいよいよ宮家から決定の御通知が来ました。

昭和 3 年 11 月 26 日付：ヒュッテの建設は着々進行しています。

－グブラーから松川五郎へ

昭和 2 年 6 月 4 日付(ドイツ語)：私達はいつも山小屋の建設のことを考えています。山崎先生が協力してくれています。----グリンデル・ワルドリードの楽譜と歌詞を同封します。

昭和 3 年 4 月 13 日付(ドイツ語)：明日、山崎、大野先生と空沼へ小屋の位置を決めに行きます。-----

－ヒンデルから松川五郎へ

昭和 2 年 1 月 10 日付(日本語)：挨拶と近況

－グブラーからヒンデルへ

昭和 3 年 3 月 3 日付(ドイツ語)：

(9) ヒンデルから山崎春雄へ送った自筆の鉛筆画　2 号

「裏書：共に登った山を偲んで」　昭和初期の信州の山里を描いたもの。山岳館に掲示

(付)空沼小屋

秩父宮(別当山辺知春)から山崎春雄へ、昭和 4 年 12 月 20 日付：空沼小屋竣工の感謝状

空沼小屋設計図　ヒンデル作成の青焼き図

２．ヒュッテン・ブーフ(1927 年～現在)
小屋幹事日誌（1934 年～1959 年）

3．写真

1926 年春　グブラー先生と予科生たち、植物園にて

1927 年秋　山崎夫人とヒンダー夫人、後ろの壁に井田清

1927 年秋　焚き火を囲んで、山崎、ヒンデル、ワーゼル、水本

1927 年秋　完成なったヘルヴェチアヒュッテ

1927 年秋　完成直後のヘルヴェチアヒュッテ

1928 年秋　グブラー先生と学生達、

1928 年冬　最初の冬、Dr.ワーゼル撮影

1930 年(?) 冬　ヘルヴェチアと白樺

1928年　　道標

1932 年　　離日前のグブラー夫婦

1937 年 10 月　第 10 回ヘルヴェチア祭り

1937 年　　ヘルヴェチアの夜、岡、岩間、有馬、戸倉

1939 年 8 月　マックス・ヒンデル最後のヒュッテ訪問

1939 年 8 月　ヒンデル最後の訪問、山崎一家と

1947 年 10 月　山崎先生ご夫婦

1951 年 10 月　25 周年ヘルヴェチア祭り

1951 年冬　冬のヒュッテ

1956 年冬　雪に埋れたヒュッテ

1965 年 10 月　40 周年ヘルヴェチア祭り

1966 年　　グブラー夫婦と山崎春雄夫人

1985 年 6 月　改修前のヒュッテ

1985 年　　ヒュッテ改修、柾を剥がしたところ

1985 年　　お化粧直しした部員賞とヒュッテ表札

1985 年　　お化粧直しした棟木の彫刻

1985 年　　お化粧直しした棟木の彫刻、1927
1985 年 9 月　　改修工事中のヒュッテ
1986 年 7 月　　改修記念会の記念写真
2006 年　　ヒュッテン・ブーフ 1 号
2010 年　　第 2 のヘルヴェチアヒュッテ(グブラー一家)
2010 年　　グブラーさん晩年
2002 年　　75 周年記念ヘルヴェチア祭り
2007 年　　80 周年記念ヘルヴェチア祭り
その他多数

4. 山の会会報記事

Helvetia Huette　豊田春満　（1 号）
ヘルヴェチアヒュッテ 10 周年記念祭　西村正　（6 号）
ヘルヴェチアヒュッテの 25 年　山崎春雄　（25 号）
ヒュッテ建設の思い出　渡辺千尚　（25 号）
白樺の秋　－この林の中にヘルヴェチアの小屋はありき　伊藤秀五郎　(28 号)
グブラー先生のことども　渡辺千尚　（30 号）
ヘルヴェチアの昨今　川道武雄　（35 号）
ヘルヴェチア植樹祭　橋本誠二　（38 号）
特別会員について　(39 号)
グブラーさんからの手紙　（41 号）
グブラー先生の近況　（52 号）
アライトの氷－グブラーさんの思い出　佐々保雄　(55 号)
グブラー先生の思い出　和久田弘一　（55 号）
グブラー先生を憶う　小平俊平　（55 号）
ヘルヴェチアヒュッテの改修　(57､59、号外、60、61)
グブラー夫人からの礼状(61 号)
ヘルヴェチアヒュッテ危機に瀕した周辺の環境　杉野目浩　(79 号)
会務報告：ヘルヴェチアヒュッテについて　杉野目浩　(80 号)
ヘルヴェチアヒュッテ周辺の環境整備について　杉野目浩　(82 号)
ヘルヴェチアヒュッテについて　杉野目浩　(87 号)
ヘルヴェチアヒュッテ修理資金カンパお願い　杉野目浩　(90 号)
ヘルヴェチアヒュッテ御醵金御礼と修復完了ご報告　杉野目浩　(91 号)
ヘルヴェチアヒュッテの永久保存に関する懇談会　(91 号)
ヘルヴェチアヒュッテの覚え書　－思い出すままに－　山崎英雄　(92 号)
ヘルヴェチアヒュッテの運営・管理について　高篠和憲　(92 号)
ヘルヴェチアヒュッテとピクニック　高篠和憲　(92 号)
ヘルヴェチアヒュッテ覚え書　－思い出すままに(承前)－　山崎英雄　(93 号)
ヘルヴェチアヒュッテを語る　相川修　(94 号)

ヘルヴェチアあれこれ　三角亨　(94 号)
回想：ヘルヴェチアヒュッテ　アーノルド・グブラー、吉田恵治訳　（97 号）
北大の山小屋展開催について　中村晴彦　(99 号)
ヘルヴェチアヒュッテ 80 年の歩み　－大正 15 年より平成 19 年まで　山崎英雄　(101 号)
ヒンデル自作の KASSE の復元　山崎英雄　(102 号)
ヘルヴェチア小屋幹事の日記　山崎英雄　(104 号)
ヘルヴェチア・委員会の設立について　高篠和憲　(105 号)

5. 山岳部関連記事

部報 6 号　北部日高山脈の旅　山崎春雄
部報 9 号　追悼　山崎先生と私　中野征紀
部報 12 号　ヘルヴェチアヒュッテ　河合範雄
部報 13 号　ヘルヴェチアヒュッテの 6 年
　ヘルヴェチアヒュッテとグブラー氏
　ヘルヴェチアヒュッテの改修について
　グブラー博士を偲ぶ　渡辺千尚
　グブラー先生の思い出　和久田弘一
五十周年記念誌
　ヘルヴェチアヒュッテの 25 年　山崎英雄
　ヘルヴェチアヒュッテ建設の覚え書　アーノルド・グブラー
八十周年記念写真集

6.　その他

ヘルヴェチアヒュッテの建設　山崎春雄　山とスキー78,79 号　1928 年 1,2 月
ヘルヴェチアヒュッテと秩父宮殿下　山崎春雄　山岳 48 年　1953 年
瑞西山岳会の登山小屋　グスタフ・クルック/山崎春雄訳　山と雪 2～8 号
マックス・ヒンデルと田上義也　－大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究
　角幸博
ヘルヴェチアヒュッテを語る　アルプ第 50 号　相川修　1962 年 4 月

正誤表

頁/行	誤	正
扉 由来銘板	ヘルヴェチアヒュッテ由来銘板	ヘルヴェチアヒュッテに掲示されている建設由来銘板
2	島々と上高地の間にて	島々と上高地の間の谷あいにて
19/5	松川に宛てた中のヒュッテ建設に	松川に宛てた書簡の中からヒュッテ建設に
19/21	急転直下降	急転直滑降
21/3	あまり理解出来ない	あまり領解できない
23/6	阿寒湖へ行って	阿寒へ行って
24/3	今度の日曜	今度の土曜日曜
26/15	気持ちの場所	気持ちの良い場所
61/注 23	黒田清輝	黒田清隆
63/注 29	北大椀だ 0 フォーゲル部	北大ワンダーフォーゲル部
85/16	獨協中学	獨逸学協会学校中等部（現獨協中学校・高等学校）
88/注	1932	1931
146/21	三棟の山小屋の	ヘルヴェチア・ヒュッテ、空沼小屋、倒壊し現存しないパラダイス・ヒュッテの
153/2	独逸協会中学校	独逸学協会学校中等部
153/6	独逸に入国できず	第 1 次大戦後の混乱のため独逸に入国できず